
覚醒都市

ムクイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覚醒都市

【Nコード】

N8519G

【作者名】

ムクイ

【あらすじ】

終わるために始まるのか。始まるが故に終わるのか。世界の輪郭は複雑なようで明確。今よりも少しだけ進んだ未来で、一人の少年がただ生きていた。そんなセカイは胸に文字を刻した青年の遺体を皮切りにどうしようもなく反転し、少年が見ようとしなかった何かが脈動を始める。「無から有は生まれない。」空白の果てに見えるのは、生あるが故の始まりか——死さえ凌駕する終わりなのか。

00・＜ 始まりの終わり ＞

爆音。

振動。

建物全体が揺れていた。

「どうやらここもそう長くは持たないみたいですね」

彼は言う。

足を組んで椅子に腰掛ける様子は、遠くの雷鳴を聞いているかのよう
に涼やか。

四方を分厚いコンクリートで囲まれた無機質な部屋。

ただ広いだけの空間にあるのは中央に置かれた二脚の椅子のみ。

そんな場所に僕と彼はいた。

何かの象徴のように時間だけが緩慢に過ぎていく。

崩壊は止まらない。

天井からはらはらと破片が落ちて、音もなく床に積もった。

そんな中、僕は彼と向き合っている。

「いつまでそこに立ち尽くしているつもりなのです」

彼は笑う。

あの子が死んだ日と同じ笑顔。

罪も罰も責をも超越した位置に彼はいる。

彼こそはこの部屋の主であり王様で、僕はただの闖入者であり傍観者だ。

あの子が死んだ日もただ全てを眺めていることしかできなかった。惨劇を止める力が僕にはない。

「まさかあの少女の仇をとりに来たとでもいうのですか？」

僕は無言でそれを否定した。

ならば、いったい僕は何をするためにここへ赴いたのだろう。

自分で問うておきながら答えが見つからなかった。

答えは、どこにもなかった。

「——それが何故だかわかりますか？」

一瞬の隙。

彼にとってそれは十分すぎるほどの時間だった。

「残念でしたね」

耳元で囁かれる優しい声。

完全に背後へ回りこまれていた。目を離すべきではないとわかっていたはずなのに。

しかしそのことに対して不思議と焦りは感じなかった。

最初からこうなることが定まっていたかのように、心は凪いだ海よりも平穏だった。

「こころ？あなたはまだそんなものが自分にあると思っているのですか？」

がくん。

体を芯から揺さぶられる感覚。

彼の言葉が沈んだ記憶の奥の奥まで侵食していく。
拒もつとすればするほど深く進入される。
隠そつとすればするほど全てが曝されていく。

僕が――開かれて行く。

「ほら」

勝ち誇った声。

僕はゆっくりと振り返って彼を見る。

子供の顔をした彼は子供の声で笑っている。

その映像は砂のようにさらさらと僕の目の前で流れつつあった。
自己を保つことが、ひどく難しい。

「わたしたちが何の為に創られたか知っていますか？」

透き通った声。

「わたしたちは新しい世界の礎になるために創造されたのですよ」

どこで間違ってしまったのか。どこから狂ってしまったのか。
今ではそれすら解らない。

ならばいつそ、最初から創めてしまえばいい。
それだけの素材が集められているのだから。
最初からやり直すための全てが。

「わたしたちは皆、役割をもっていた。
搾取される者、使われる者、必要とされる者、廃棄された者、そして人を超越した者

—— 人が神と呼び、恐れ崇め敬い導きを求める存在」

それが彼であり、遠い日の『彼女』であり、目覚めるであろう『彼』である。

では僕は何なのだろう。

搾取する意味もなく、使える要素もなく、必要とされもせず、廃棄する価値もない。

神様以前に人にも成り切れなかった僕。

「あなたは初めから望まれていなかった」

脳を掌握する声。

彼に抗うことがいかに無意味な行為であるかを理解する。

そして、ぼくは誰にも気づかれないうまま、彼にも覺られないまま、静かに壊れ始める。

「
」が始まる。

「あなたは、空白だ」

たとえばそれは

ページとページの間に現れた突然の白紙。

映画のコマとコマの隙間に見える数秒の余白。

誰の心にもあるからつばで何も無い砂漠のような —— 空白。

「それがあなたのすべて。空想の果てにある虚無。世界が宿した無

と無の集大成」

ぼく、は

そう。ぼくは、これを知っていたのかもしれない。
時々考えてはいた。

あらゆる意味でだれともつながれないぼくは、目的も未来も可能性も持たないぼくは。

ぼくこそが、終わり、なのではないか、と。

だから『彼女』はぼくを生かし、『彼』がぼくを選んだのだ。

亀裂が走る。

何かがどこかで決壊する。

ぼくのなかの、ぼくのなかに、ぼくのなかで。

「さて、そろそろ —— 御終いにしましょうか」

膝をつく。

両手は望んでもいないのに開かれ、まるで懺悔のよう。

左手に握っていた拳銃は当たり前のように彼の手に。

さらに当然の如くその銃口はぼくに向けられていた。

「あなたは長く生き過ぎた。無駄に長く不毛な時を」

きりきり、と。

引き金に掛けられた彼の指が動いてく。

物理の原理が歪められたかのように、ゆっくりと。

ただ、ゆっくりと。

それをぼくは見ていた。

ぼくが、それを見ていた。

「わたしは生きる。あなたは死ね」

刹那

意識が反転し、

自己は完結し、

有が無へと変換する。

ぼくが白紙。

ぼくは空白。

なにもない、ぼく。

「無から有は生まれない」

彼は言う。

それは違う、と ぼくは 思った。

それが ぼくの さいご だった。

そして

ぼくが

——
おわった

01・＜ 何かの始まり、あるいは終わり、または全ての通過点 ＞

01・＜ 何かの始まり、あるいは終わり、または全ての通過点
>

終わるために始まるのか。
始まるが故に終わるのか。

その違いは些細な事のように、この世の真理であるかのような。

七時四十五分。

今日もまたアラームが鳴る前に目が覚めた。
薄い眠りの膜に包まれたままの脳が、昨日の夢の場景をプレイバックする。

ビルとビルの隙間のような場所に僕は立っていた。
そこがどこだったのかは分からない。

それぞれの建物が空に突き抜けるように高かった。
どんよりと色のない景色に急かされるように、僕はどこかへ走り出す。

走っても走っても、逃げられなかった。
何から逃れたいのかすら分かっていなかった。

もうこれ以上は走れないと立ち止まると、いつのまにか自分の体が小さくなっていることに気付く。

幼い子供の両手で途方に暮れていると、空にはぼっかりと白銀の月が浮かんでいた。

誰も分け隔てることなく無慈悲に光を注ぎ続ける月。

見上げている僕の両目からはただ決壊したように涙が溢れ出て、気づけば僕は四つ這いになって獣のように啼いていた。

何か叫びたいのに、名前を呼びたいのに、僕の中には何も無かった。

何ひとつ残っていないかった。

それを悟った僕は泣くことを止めた。

そもそも泣いたことなんて今まで一度もなかったのだ。

月が僕を見ていた。

僕はどこにもいなかった。

僕は——僕ですらなくなった、

遠くで警報が鳴っていた。

とつさに右腕が伸び、時計の突起を叩いた。

けれどその音は目覚まし時計から発せられていたわけではないので、当然ながら止まらない。

目覚め始めた意識がそれを警報ではなく、携帯電話の着信音だという回答を導き出す。

僕は体を倒して頭上付近を探してみた。

ベッドサイドテーブルには薄型のデジタル時計と水の入ったグラスだけ。

充電中のそれをキッチンに置いたままだったことを思い出す頃には、

既に電子音は鳴り止んでいた。
再び部屋中を静けさが覆い尽くす。

中途半端に起床を促された僕は、とりあえず起き上がることにした。
さつきまで鮮明に描けた夢の内容は、もうほとんど思い出せなかった。

シャツを羽織り、厚手のカーテンを開ける。

窓の外に広がっていたのは見慣れた灰色の街だった。

大気汚染が生み出した分厚い雲。時折思い出したように降り注ぐ酸性の雨。

環境問題を訴え続けてきた活動家の訴えもむなしく、それが今ここにある現実だった。

しかし、その代わりに得た物もある。

青空が見たければ都心のショッピングモールにいけない。

シェルターの中で買物に勤しむ人々の頭上には、模造の空に落ちる事の無い太陽が燦然と輝き続けている。

人工芝が生い茂る公園ではいつでも春の陽気の中でピクニックを楽しむことだってできる。

外に出るのが億劫なら電脳ネットで全てを取り揃えればいい。ホログラムの実用を組み込んだ最新式の電脳端末を使えば、どんな商品もまさに手に取るように感じられるし、何万キロも離れた相手と握手をすることだって可能だ。

何もかもが小型化し、飛躍的な進化を遂げた世界。

そんな理想的な現代いまのために犠牲となったのが、森や四季や清んだ空気だったのなら、それは安い代価だったのかも知れない。

僕にはよく分からなかった。

人間が二足歩行する生き物であることに感傷を抱く人がいないように、生まれたときからそこにあった緩やかな荒廃を嘆くこともできなかった。

眼下では枯れ細った木が頼りなく風に揺れていた。

東京にはここ数十年で鳥の数も激減していく一方だと聞いている。昔からあったものが新しいものとすり替わり、そのうちその存在すら忘却の彼方へと消えて行く。

もはや悲しいとも虚しいともすら思わない。

それが人々にとって当たり前前の世界となっていた。

インスタントコーヒーと白いままの食パン。

毎朝の定番メニューを頼張りながら、ニュースを流し見る。

液晶スクリーンには終わりの見えない不況の波と、紛争が頻発する国々の風景が映し出されていた。

ローカルニュースでは近日中にオープンする新しいアミューズメントパークについて大々的に報じられている。

マスコットの着ぐるみと女性レポーターの笑顔。

規定速度限界まで加速するライドや、最新型の機械人形のみで構成されたメインパレード。アンドロイド

地平線の向こう側では幼さを残す少年が装甲銃を片手に戦場を駆け抜け、この街では同じ年頃の子供たちが遊園地の映像を見ては目を輝かせる。

何も間違っていない。

温くなったコーヒーが喉の奥に絡みつく。

外観だけを見れば、東京はとても安全で皮肉なほどに平和だった。

しかし人が人としてその営みを続けていく限り、そこがどこであるうと綻びは生じるもの。

映像が一転して、硬い表情の若い男性レポーターがカメラの前に立っていた。

背後に見える一戸建て住宅の玄関口には、黄色に黒字の封鎖テープが幾重にも張られている。

緊張しているのかレポーターの口調はやけに芝居じみていた。

彼が語るところによると、昨日の晩から今朝方にかけて江戸川区に

住む一家が惨殺死体となつて発見されたのだそうだ。

被害者は夫婦とその息子、夫の両親の五名。

犯人は未だ見つかつておらず、荒らされた痕跡が残っていたことから他殺と見て間違いはないそうだ。

この事件を説明するに際、レポーターは被害者全員の首が現場からなくなっていたことを殊更に強調していた。

――首なし死体

それを聞いて目黒区の首なしホステス殺害事件を思い出したのは、きっと僕だけでは無かつたはずだ。

先々週の土曜日、浴槽で頭部を切断された状態で女の死体が発見された。

第一発見者は三歳になる彼女の息子だったのだが、実際に通報したのは出勤してこない彼女を不審に思つて訪ねてきた同僚だった。

久しぶりに起きた猟奇的な事件に、マスコミはハエのように集つたテレビでは連日のように特集番組が生まれ、過去の恋人関係や生い立ち、働いていたクラブを仕切っている右翼団体に至るまで周到に調べ上げられ、聴衆の前に曝された。

特に話題となつたのが持ち去られた頭の行方だった。

司法解剖の結果から、被害者はまだ生きているうちに首を切断されていたことが判明している。

三週間経つても未だ進展はなく、容疑者らしき人物も特定できていない。ここ数日ですっかり報道されることもなくなっていた。

世間がその事件自体を忘れかけていたタイミングで、今度は一家全員の首なし殺人が起きた。

浅薄な考えだとはいえるけれど、やはり双方の関係性を強く感じてしまうのが一般的な意見だろう。

慌しく出入りを繰り返す警官に追い出される形でレポーターとの中継が途切れた。

スタジオではベテランのアナウンサーが沈鬱な顔で犯罪心理学の権威に何かを問いかけていた。

有名大学で教授の肩書きを持つ男のもっともらしい見解を小耳に挟みながら、僕はカップの淵を傾けた。

いつの間にか番組はコマーシャルに切り替わっていた。

見たことも無い女優が、美容整形について声高々に宣伝している。

リモコンで電源を切った。

そして空のマグカップを流しに置くと、カバンをつかんで静かな部屋を後にした。

エレベーターまでの廊下を歩きながら携帯電話を忘れてきた事と、今朝の電話が誰からのものだったかを確認していなかった事に気がついた。

一瞬だけ足が止まる。

けれど、いまさら取りに戻るのも面倒だったので、結局そのまま昇ってきたエレベーターに乗り込んだ。

音もなく下降していく箱の中で、僕はほんの少しだけ失くなった首のことを想った。

僕の住むマンションは過剰なまでのセキュリティによって守られている。

暗証番号入力式の玄関口を筆頭として、警備員による見回り、三重のオートロックと指紋照合による施錠、そして各フロアの廊下に配置された監視カメラ。

防犯と呼ぶにはあまりにも物々しい警備体制だった。

もしかすると、どこかの国の要人が屋上のペントハウスを隠れ家としているのかもしれない。

この場所に一人で暮らすようになってから二年近くが経っていたにも関わらず、僕は自分以外の住居者を見かけたことがなかった。

隣に誰が住んでいたのかも分からない。入り口ですれ違ったことすらない。

マンションは二十五階建てで、僕はその十三階に住んでいる。ほんの数秒でエレベーターは一階に到達し、セラミックの扉が仰々しく開いた。

誰も居ないラウンジを横手に自動ドアから外へと抜ける。

大通りは目と鼻の先にあり、平日の深夜を過ぎても常に騒がしい。この一帯がしんとした朝の清澄な空気を保っていたのは、広範囲用消音システムの恩恵を受けているからだった。

そのシステムの境目から一步踏み出すと、途端に高層ビルが立ち並び通りに出る。

清掃ロボットによって滅菌消毒された道路。

少し先のオフィス街へと早足で急ぐ疲れた顔の会社員たち。

高いフェンスで隔離されたような小学校では、校庭で長い朝礼が始まろうとしていた。

去年開通したばかりの幅広な道路には、今日も渋滞の長い列ができている。

中には最近実用化可能となった浮遊車もちらほらと並んで見えた。現状では車を浮遊させることに意味はない。それどころか通常者よりもエネルギー消費が激しく、おまけに単純な故障や事故も頻発しやすいかった。

金額面から見ても、購入できるのは資産を持て余す特権階級の間か、余程の車好きのみだろう。

そんな事を考えている内に肝心の入り口を通り過ぎていた。建物全体に老朽化が進んでいるビル。側面に設置された看板に「加納建設本社ビル」と表記されているこの建造物が僕の目的地だった。両脇に観葉植物がある受付を過ぎ、こじんまりとしたホールの先にあるエレベーターのコールボタンを押す。

周りには正社員らしいスーツ姿の中年男性が眠そうな目を擦ってい

た。

二つあるエレベーターの一つが開いて彼が乗り込む。

少しかだけ問いかけるような視線を送られたので、僕は首を振って閉まる扉を見送った。

この場所に通う事になって最初に言われたことは、なるべく誰かとの同乗は控えるようにということだった。

上の階から下降してきたもう片方に乗り、閉まると同時にカバンの中に常備してあるパスカードを認識画面に軽く触れさせ、階数を入力する。

フロア：00。

エレベーターは不自然ではない程度にがくんと揺れて、ゆっくりと動き始めた。

*

正直なところ、僕はここが何のために存在しているのかを未だに理解していなかった。

正式な名称すらないこの場所。

僕がここで働くようになったのは、今のマンションに住み始めた時期と同じ頃だった。

二年前。

まだ実家から高校に通っていた僕は、その日も身支度を整えて家を出た。

いつもの通学路を歩いている途中。

唐突に、本当に何の前触れもなく、僕は高校に行くことを止めた。そしてそのままの足取りで元来た道を引き返すと、少ない私物をま

とめて家を出た。

どこに行くのか、何をしたいのか。
自分でも分からないまましばらく街をうろついた。

決めていたことと言えば、もうあの家には帰らないということだけだった。

それから一度だけ掛かってきた父親からの電話でもそう答えた。

特に何の関心も示されなかったことを憶えている。多分、本当に興味がなかったんだと思う。

ろくに持ち合わせも無かった僕には行く場所がなかった。

友達は何だか誰かに頼るという選択肢は不思議と思いつかなかった。

叶^{かのう}さんと出会ったのは、どうするのかを決めかねていた公園のベンチだった。

気がついた時にはもう叶さんは僕の横に腰掛けていた。

初めは特に気にも留めなかった。

皺の刻まれた顔に薄くなった白い髪。両手を木製の杖に添える腰の曲がった姿は、どこから見ても普通の老人だったのだ。

昼時ということもあって、公園には僕のほかにも様々な格好の人たちが昼食をとっていた。

だから彼の呟いた一言は、にぎやかなざわめきと近くで湧き上がった噴水の音でかき消され、僕に届かなかった。

改めてその老人を見ると、彼の視線もまた僕に向けられていた。

—— 私の下で働きませんか？

ぽつりと漏らすように問いかけられた為、一瞬聞き間違いかとも思った。

そんな思考とは裏腹に、僕は迷うことなく同意の言葉を返した。
今まで面識すらない他人の誘いに即答するような人間は、よっぽど切羽詰っているか底抜けの世間知らずに違いない。

それを理解していながら、そのどちらにも当てはまっていた僕は老人の誘いを受けることにしたのだ。

結果、僕は老人の名前を知り、彼は僕に住居と仕事を提供した。

仕事といっても僕は調べ物をしたり書類を作成したりするだけだ。
高校を中退し、特にこれといった技術もない十七歳の僕でも苦もな
くやりくりできる内容だった。

そんな僕が雇われたのにも理由があった。

叶さんがそういった経由で『それ』を知ったのかは定かではなかつた。

自分から他言したことはなかったけれど、特に隠していたわけでも
なかったのできっと誰かから聞き出したのだろう。

叶さんの力をもってすれば十分考えられた。

一体何を成して得たものなのか訊ねたことはなかったけれど、叶さ
んは莫大な財とそしてあらゆる方面に繋がりがあった。僕が通つて
いるこのビルも例外なく彼の所有物だ。

とにかく、僕は叶さんに雇われ働いている。

僕のほかに何名かが同僚として同じ仕事、あるいは別の件で叶さ
んのために動いていた。

僕たちを彼は総じて アウトサイダーズ <傍観者> と呼んでいた。

*

チン。

小さな音がして、扉が左右に開かれる。

降りてすぐに見えるのは作業用デスクと平凡な書類保管用キャビネット。

デスクのいくつかには市販の電脳パソコンが置かれている。

その点だけに着目すればそれは一般的なオフィスの風景と何ら変わりはない。

しかしそこから然程離れていない場所にある赤革のソファと、その正面の壁に設置された無数のモニターは明らかに普通のオフィスの状況から逸脱していた。

デスクエリアのすぐ後ろにはフロアの奥に続く通路があり、その向こう側にはいくつかの小部屋がある。

僕はトイレと給湯室にしか用がなかったけれど、トレーニングマシンを内蔵したジムのような施設や特定のある人物が個人的に所有する研究室なども設備されていた。

電気が点いていたので、誰かが先に来ているのだろう。

奥の部屋から何やら話し声もしている。

そんなとき、

「おい」

声が、した。

ありえないと思いつつも振り返ると、やはりそこには妙齡の男性がいつものにやけ顔で立っていた。

僕が乗ったときエレベーターは確かに無人だった。

もうひとつの入り口は反対側に在るので、ここまで僕に気付かれず、しかも背後に回り込むことは不可能に近かった。

そんな僕を見て、彼はこれ見よがしに舌打ちをした。

「早くどけよ。邪魔だろうが」

肩と肩が接触し、危うくよろめきそうになる。

金 龍二さんはいつもどこか別の場所で単独の仕事をしているらしく、その姿を見かけることは叶さんと同じくらい稀だった。

その名前が本名なのか、彼が韓国籍なのかといった詳細は何も知らされていない。

ただ彼の仕事内容が特殊な方法での潜入調査ということは誰かに聞いたことがあった。

僕が一般的な仕事を任されていただけで、ここには犯罪紛いの行為や明らかに違法な仕事を担当している人もいるのだ。

初めから僕は金さんに明確な敵意を抱かれていた。

時々顔を合わせれば睨みつけられ、聞こえるように嫌味を言われ、何かと絡まれている。

物を訊ねるところか普通の会話することすら困難だった。

「若いくせにノロマだな」

隠しよの無い悪意が滲み出た台詞。

金さんは一定の距離を維持しつつ、僕の正面に立った。

「おはようございます。お久しぶりですね」

僕はとりあえず当たり障りのない話でやり過ごすことにしてみる。

「はん。こっちはお前の顔なんか見たくもなかったよ」

金さんは視線をはずすことなく裾の汚れたトレンチコートの襟を正した。

その両目は鋭いというよりは澀んだ色をしている。

彼はいつも同じコートを羽織っていた。

格段に気温と湿度の高くなったこの国では、少し我慢さえすれば冬

でもＴシャツで過ごせるほどの暖かさだというのにも関わらず、だ。
「そういえば、」

コートの謎を保留にしたまま、僕はふと思い出したことを問いかける。

「金さんは確か別の件を担当しているって二ノ宮さんが言ってましたけど」

「な、」

言い方が悪かったのだろうか。

何気なく放ったその一言すらも金さんの気に触ったらしい。

徐々に赤くなっていく金さんの変化を眺めながら、僕は次に言うべきことに悩んでいた。

が、それも束の間

「ふざけやがって」

どこから取り出したのか、金さんがアーミーナイフと呼ばれるものを手にしていた。

電灯の照り返しを受けてそれは鈍く輝いている。

なんだか作り物のようで現実味のない光だった。

そんな僕の反応がさらに火に油を注いしまったのか、金さんは意味の分からない言葉を口走りながらじりじりと近づいてきた。刃の切っ先はこちら側に向けられたままだ。

さっきの言葉は韓国語だったのかかもしれないと思う頃には間合いが詰まり、鋭い先端が僕の眼前でちらついていた。

刹那、

「—— やめとけよ」

金さんが静止する。

「まったく、朝から元気なもんですねえ」

それはソファアのほうから聞こえてきた。

声の主は大きく伸びてから、ぱりぱりと頭を搔きつつ起き上がった。

「おはようございます。柊木沢さん^{ひいらぎさわ}」

「まだ寝てたかったんだけどな」

上半身は裸で、しかも何故か下はバスタオルを巻いているだけの柊木沢さんは、欠伸を噛み殺すことなくずんずんとこちらに直進してきた。

そして僕と金さんの中間あたりに立つと、金さんの手に握られていたナイフの先端に触れる。

「ずいぶん研いだもんだな。これだけ鋭かったらその腹の中に溜まった中性脂肪も抉り放題だ」

「っ、ひいらぎさ」

金さんが名前を言い終える前に、手の中にあつたナイフは柊木沢さんの左手に渡っていた。

その一連の動きはまるでよくできた手品のようだと、思わず状況も忘れて感心すそうになる。

柄の握り具合を確かめながら、柊木沢さんは刃先を金さんに突き出して見せた。

「帰れよ、おっさん。あんたはあのじいさんの指示通り、他人の周りをこそこそ嗅ぎまわっていればいいさ」

「…… 貴様、何を知っている」

張り詰めた空気の中、金さんが静かに呟いた。

先程までの怒りはどこかに影を潜めていた。

「さあな？」

柊木沢さんは動じることなく、ただ肩をすくめて見せた。

「言ってみただけだよ。あんたの仕事がそんなだってことくらい、ここじゃあ誰だって知ってるぜ？」

「お前が 人殺し ということも、な」

「それで挑発のつもりかい？」

けらけらと笑うその手の中でナイフが器用に回される。

「それこそ誰でも知ってることだろうが」

何回か回転させた後、柊木沢さんはそれを自然な動きで金さんの足元へと投げつける。

ナイフは勢いよくカーペットの床に突き刺さった。金さんのつま先までわずか数ミリという距離だった。

「おっとっと。手元が狂っちまった。親指をざっくりいかなくて良かったな」

口調はおどけていたものの、瞳には冷たい光が宿っていた。

「……」

しばらくの間ナイフと自分の足を交互に眺めていた金さんは、やがてそれを床から勢いよく引き抜くと

「……キチガイが」

唸るように吐き捨てて部屋を後にした。

途中、相変わらず同じ場所で立ち尽くしている僕にぶつかっていくことも忘れなかった。

再びバランスを崩した僕の肩を柊木沢さんが支える。

「ありがとうございます」

「お前、一体あのおっさんに何したんだ？」

「何もしていないと思うんですけど」

「それにしちゃあ随分と殺気立ってたけどな」

半裸の柊木沢さんは金さんが出て行った方向を楽しそうに眺めていた。

涼しい顔をしていたけれど、この柊木沢　啓人^{あきひと}という人は何よりも喧嘩が好きなのだ。

喧嘩というよりは争い事全般と言ったほうがいいのかもしいれない。

柊木沢さんは、戦争が起きたとしたら喜び勇んで真っ先に徴兵志願するような人間だ。

もともと柊木沢さんが素直に上官の命令に従っているところなど想像できなかったけれど。

「あー面白くねえ。面白くねえったら面白くねえ」

ソファーにその長い足を投げ出した柊木沢さんはおおげさに嘆いてみせた。

柊木沢さんが片足を上げてスペースを提供してくれたので、僕もその隣に腰掛ける。

「さつきは結構楽しそうでしたけど」

「あんなのはただの余興だ。前座にもならん、ほんのお遊びさ。あのおっさんも中途半端なんだよ」

なんでもないことをアピールするためか、柊木沢さんは眼前で手のひらをひらひらと揺らした。

「おかげで二日酔でステーキ食ったみてえな消化不良っぷりだぜ。

大体ナイフってなんだナイフって。ナイフなんか使わんで拳銃を出せ拳銃を。せめてコルトパイソンでも用意しろ。どうせなら戦車をもってこい。贅沢は言わんからいつそ核でも投下しろ」

「朝から血の氣が多いことねえ」

呆れたような口調。

奥の部屋のひとつから白衣姿の三七三さんみなみが出てきた。

そして軽やかな足取りでソファーへと歩み寄ると、

「もう、来てたなら言ってくればよかったのに！」

後ろから満面の笑みで僕の頭を抱きかかえた。

柊木沢さんは砂糖を舐めすぎた子供のようになげんなりとした面持ちになっている。

「いきなり鬱陶しいだろうが」

「あら、それは嫉妬かしらあ？」

三七三さんは切れ長の目を細める。

頬と頬が触れ合っているため、三七三さんの息と体温を肌で感じた。「残念だけど汚い年上に興味はないの。三七三さんが好きなのは可

「愛い年下くんなのですよう」

「俺だって男にや興味はねえよ」

「まあ言ってくれるじゃないの。相変わらず失礼な人ね」

「僕の首筋にかかった両腕に力が籠る。」

「あたしは男じゃないわよ」

「女でもないだろうが」

「両性具有と言って頂戴」

「アレが生えてる時点で俺の中でのお前のポジションは男で決定なんだよ」

「どっちもあるんだからどっちにでも成れるのよ。ふたなりって言葉を知らないの？」

「当たり前のような顔で凄いを言うな。未成年が聞いてるんだぞ」

「それよりも三七三さん、その、苦しいです」

加熱していく議論の中で三七三さんの腕はきりきりと締め上げられ、さすがに呼吸を確保することが難しくなっていた。

あらあらごめんなさいねと三七三さんが離れていく。

「ほらみる。お前が何なのかはともかく、力は普通の男並みにあるんだからちよつとは加減しろ」

「この細腕のどこにそんなものがあるっていうのよ」

白衣の下のシャツまで巻くり上げ、三七三さんは白い腕を突き出した。

確かに三七三さんの体つきは女性的ではあったけれど、身長は僕よりも十センチは高かったし、顔立ちもどこか中性的だった。

肩まで伸ばした髪をぱつぱりと切り落としてスーツを着込んだら男性に見えないことも無い、かもしれない。

「だからどんなに腕が細くて胸があろうとアレがあるんだからお前は男なんだよ」

「まあ本当に失礼しちゃうわ。アレとかナニとか両刀とか朝から下品すぎるでしょう、まったく」

「んなこと言つてねえよ」

「…… えっと、何のお話ですか？」

三七三さんと同じ場所から今度は瑕奈ちゃんきすなが現れた。

今日はフード付のパーカーにハーフパンツという格好で、短い髪の毛のせいもあつてか男の子のように見えた。僕よりも三つほど年下の彼女がここの最年少だった。

「三七三さん、“両刀”って何ですか？」

「あんたは知らなくてもいいのよ。それよりも、まだ実験の途中なんだから出てきちゃ駄目じゃない」

「そのことなんですけど……」

そこで瑕奈ちゃんは顔を赤らめた。

「これ、本当に効果あるんでしょうか？」

「効果を確かめるための実験でしょうが。ほらほら、さつさと戻って体操していなさいな」

三七三さんこそが例の研究室の主だ。

連日なにやら怪しげな実験を繰り返しては得体の知れない薬や機械を開発し、それを試すことが自分の趣味だと声高々に公言していた。そして被験者が必要となる場合、大抵犠牲となるのが瑕奈ちゃんだった。

きつと今も何かを服用させられているのだろう。

「でも、あの、あんなものを飲んで、ちよつと体を動かしたくらいで、その……」

「歯切れが悪いわね。何かあるならきちんと伝えなさいよ」

三七三さんにぴしゃりと言われ、瑕奈ちゃんは消えそうな声で

「わたしの胸は、その—— お、大きくなるんでしょうか？」

「どんな薬だそりゃ」

柊木沢さんが漏らした。

「っひ、柊木沢さんも居たんですか！」

どうやらソファアの肘掛が死角となつて見えなかったらしい。

顔をさらに赤くして僕たちのほうへと歩み寄つてきた瑕奈ちゃんは、そんな柊木沢さんを見下ろして盛大な悲鳴、というか絶叫を上げた。
「どなな何で裸なんですか！」

「成り行きだ」

「どんな成り行きなんですか！」

「うふふ、これから大人だけでちよつとイイことをしようと思つていたところなのよん」

「はわわ！はわわわっ！不潔です！柊木沢さんも、三七三さんも、先輩も皆みんな不潔です！」

まとめて不潔扱いされてしまった。

「どんな想像してんだ、ったく」

耐えられなくなつたらしく、柊木沢さんは起き上がった。

大げさな態度で顔を覆う瑕奈ちゃんを他所に奥のほうへと退場し、ほどなくして服を着て戻ってきた。

黒いＴシャツと細身の黒いパンツ。口には煙草が銜えられている。

「こつちはただでさえ寝不足だつつのに、こんなときに限つてお呼びが掛かるしょ」

「また女ね」

「さあな」

「もしかして、うまくいかなかったの？」

「どうだかな」

「女に逃げられて、しょうがないからここでシャワーを浴びて、たまたま居合わせたこのあたしを苛立ちと欲求のままに襲つたわけね！」

「変な捏造を付け加えるな」

そんな二人のやりとりを、瑕奈ちゃんが不潔ですと連呼しながらもしっかりと聞いていた。

柊木沢さんは古いジツポで先端に火を点すと、いかにも美味しそうに煙を吸って吐く。

「今日のこれ、何の話だと思う？」

「さあ。どうせまたロクな事じゃないでしょ」

「それもそうだな」

「あーあ。どうせなら“ドクター”が来てくれるような仕事ならいいのに」

ドクターというのは叶さんの知人だった。

僕たちとは違って普通に開業医として生計をたてている人らしく、仕事で何らかの怪我を負った際や医学的な見解が必要なときだけここにやってくる存在だ。

僕はまだ一回も会った事はなかった。

柊木沢さんはその気質と仕事内容の為か、幾度と無くお世話になっているそうだ。

ちなみに僕とそう歳も変わらないという彼は三七三さんのお気に入りだった。

「私、あの人苦手です……」

そんな中、瑕奈ちゃんがぼつりと呟いた。

ここに彼女が通うようになってから半年くらいになるけれど、こんな顔をした瑕奈ちゃんを見るのは初めてだったかもしれない。

三七三さんが何か言おうと口を開きかけたとき、

「皆さんお揃いそうですね」

エレベーターから漏れる光を背に、二ノ宮^{にのみやあかり}明さんが颯爽と入ってきた。

彼女が叶さんと直接コンタクトを取れる唯一の人物にして、彼の秘書的な存在だった。

一つに纏めた黒髪と細い銀縁の眼鏡。

いつも黒か灰色のスカートスーツを着こなし、きびきびと歩く姿が

印象的な女性だ。

「お、明ちゃん。相変わらず目の保養になるねえ。眼福眼福」

柊木沢さんが放った言葉に三七三さんが鋭い肘鉄を繰り出し、瑕奈ちゃんがじつとりとした軽蔑の視線を投げかける。

そんな賛辞に反応することなく、二ノ宮さんは一つだけ他とは孤立している先端のデスクについた。

「お座りください。叶からの伝達です」

促された僕たちは各々が座る特定の席へとついた。

柊木沢さんの隣に僕、彼の正面に三七三さんと僕の向かいに瑕奈ちゃんが座っている。

「貴女には別の仕事を依頼してあつたはずですが」

二ノ宮さんは瑕奈ちゃんの胸元をつついていている三七三さんに問いかけた。

対する三七三さんは、そんな彼女にふんわりと微笑んで見せる。

「いいじゃない。聞くだけなら害はないでしょ？」

「……わかりました。許可します」

少しだけ考えてから、二ノ宮さんは頷いた。

「ただし個人的な詮索は控えてください。それから柊木沢さん」

「あん？」

「何度も言うようですが——ここは禁煙です」

その言葉には冗談めいたものは少しも含まれていなかった。

* * *

「先月、大田区で男性の変死体が発見されました」

二ノ宮さんは静かに切り出した。

僕たちの手元には彼女に渡された資料があった。

各自それに目を通しながら、話の続きに耳を傾ける。

「メディアではあまり大きく取り上げられなかった事件です。若者の薬物中毒死は日常茶飯事ですから」

確かにその通りだった。

違法なドラッグは、まるでスーパーに陳列されたお菓子のように溢れかえっている。

それは決して手の届かない物ではなく、少し年齢を偽装すれば小学生ですら買えるような代物だ。

最近流行っているのは中米のシャーマンが使用していたサボテンが原料となっているもので、比較的中毒性がなく、脳に対する負担も少ないということだった。

実際に使用したことの無く、かつ興味も無い僕ですら知っているのだから、政府や警察などの取り締まる側の耳に入っていないはずがない。

けれどそれでも違法ドラッグの乱用が止まないのは、それがある程度文化としてこの国に馴染んでしまっているからなのだろう。

「死亡した男性には薬物を服用していた前科もあり、実際に部屋の中からメタンフェミンを含む錠剤も見られました。しかし…」

「男の遺体から薬物反応は検出されなかった、でしょ？」

二ノ宮さんのせりふを三七三さんが補完した。

「確か週刊誌で読んだわ。小さい記事だったけど」

「はい。それが資料の四ページ目に掲載されているものです」

そこには『今週のカステリー！?』と題して、白黒の写真と文章が綴られていた。

「うわぁ、何ですかこれ……」

瑕奈ちゃんが顔を歪める。
無理もなかった。

ページの半分ほどを占めていた写真には上半身裸の男が壁を背に座っている。

プライバシー保護のためか首から上にはぼかしが入っていたものの、その異常性はしっかりと確認できた。

肌蹴た胸を埋め尽くすように刻まれた無数の傷。
流れ出た血が男の白っぽいズボンに滲みていた。

これがカラーだったなら、きっと生々しかったことだろう。

表情が窺えない所為か、それは出来の悪いホラー映画の死体みたいだった。

ナイフで故意に抉ったような傷口に目をやると、何かが気に掛かった。

「これ…… アルファベット、ですか？」

「お前、記事見てんのか？ちゃんと書いてあるぞ」

柊木沢さんに言われて初めて下のキャプションに視線を落とした。

大げさな文体で書き連ねられていたそれを読み解くと、どうやら胸の傷は英文のようだった。

記されていた一文は —— < J U D G E M E N T I S N E
A R >。

「んー、あたし英語は全然苦手なんですけど、これ、どういう意味ですか？」

「“全然苦手”っていう日本語も無いと思うわよ。まあ直訳すれば、
<審判は近い>ってところねえ」

三七三さんは胸元のポケットから取り出したペンで瑕奈ちゃんを小突きながら、そう言っって苦笑した。

記事は青年の死因を出血によるショック死、そしてそれは新手のカルト集団が施した何らかのメッセージではないかと問いかけるところで記事は締め括られていた。

全員が読み終えた事を確認すると、二ノ宮さんが頷く。

「ここには掲載されていませんが、これは他殺ではなく自殺のようです。左手首にリストカットの跡も確認されています」

「じゃあ、このメッセージを刻んだ誰かはそのままこの人を見殺しにしたってことですか？」

「それも少し違う、と叶は考えています」

二ノ宮さんが叶さんを語る時、いつもその名前に重きを置いて喋る。彼女と叶さんの間にどのような繋がりがあるにせよ、何事にもこれといった関心を見せない二ノ宮さんが叶さんを絶対的な指針として仰いでいるということだけは確かだった。

「叶は、これが青年の自作自演ではないか、と考えているようです」

「…… はあ？」

柊木沢さんが露骨な反応を示す。

「それこそイカれたジャンキーのやりそうな事じゃねえか。けど、こいつからはクスリの反応が出なかったんだろ？じゃあ、」

「あら？クスリをやってなかったからって彼が狂っていなかったなんて言えるの？」

一同の視線が三七三さんに集まる。

二ノ宮さんについての情報があまりに少なかったので正確に断定こそできなかったものの、彼女を除いた四人の中では三七三さんが一番こういった事情に長けていた。

普段は暇つぶしの研究ばかり着手しているものの、この人はく天才>と呼ばれて然るべき才能を持っている。当然、一般人よりは医学に対して詳しいはずだった。

「…… いやだ、そんなに注目しないでくれる？照れちゃうから」
そんなことを思われていると知ってか知らずか、三七三さんが立ち上がってくねくねとを腰を揺らした。

「あたしが言いたい事なんて一般医学の範疇よ。つまり、この死体くんが生まれつき、もしくはクスリをやってる経過で精神になんらかの異常を来たしていたんじゃないかって話」

「それはないと思います。彼が両親によって強制的に通わされていた精神病院のカルテには、薬物の影響で多少の言語障害があったとされていますが、それ以外の障害は確認されていませんから」

「あらそうなの」

結構良い線ついてたと思うんだけど、と三七三さんはお手上げのポーズをとる。

二ノ宮さんがどういった経由で死んだ青年の個人情報を手に入れたのかについては誰も尋ねなかった。

詮索してみたところで、答えが得られるとも思えなかった。

「けれど、青年の死体には不可解な点がありました」

「それは胸んとこにある傷以外で、ってことだよな？」

「ええ」

そう言つて二ノ宮さんは手元にあつた薄型簡易電腦を開くと、データファイルのようなものを呼び出し、僕たちに向けてそれを開示する。

見せられたので一応理解しようとするものの、細胞名や染色体などの用語の隣に数字が記されてあるということくらいしか分からなかった。画面を凝視しつつ首を傾げているところを見ると、瑕奈ちゃんも同じような状況らしい。柊木沢さんに至っては、最初から見ようとしてもしていなかった。

そんな中、

「何よこれ」

眉根に皺を寄せた三七三さんが空気を飲み込む。表情はいつになく険しく真剣で、その両目が本来持つ鋭さを際立たせていた。

その顔は体ごと二ノ宮さんへと向けられている。

「ちよつと明、これ何かの間違いないんじゃないの。どう見たってこれは、これが本当だとすれば……ちよつと異常、だわ」

「おいおい。そんなに凄いことが書いてあるんなら俺たちにもわかりやすく説明しろって」

多少の興味を取り戻した柊木沢さんの発言も三七三さんには届いていないようだった。

まるで僕たちの存在を忘却してしまったかのように、二人だけのやり取りが続く。

「この歳ではまずありえない細胞の老化と染色体異常。この青年は早老症患者だったわけ？」

「いいえ。この写真は確かに不鮮明ですが、早老症特有の症状は見受けられないはずですよ」

「そうね……。外的症状はまったく言っていないほど。身体的に未成長だったり顕著な衰えはとりあえずないみたいね」

「ええ。ですが、メラニンの著しい欠乏だけは明確な形で、頭髪部分に現れていたようです」

「それもまたおかしい話ね。別にガンだったりしたわけでもない、なのに髪の毛だけっていうのも……ん？」

三七三さんが、我にかえったようにこちら側を見る。

つられて周囲を見渡せば、柊木沢さんと瑕奈ちゃんがぽかんと大きく口を開けて一切の動きを停止していた。

「……な、何ていうか意味不明すぎてもう頭の中が真っ白、です」「俺たち、学が無いってバレバレだよなあ」

瑕奈ちゃんが頂垂れ、柊木沢さんが宙を仰いだ。

そして最終的に全員の視線が僕の元へと集まった。

「先輩はあんまり驚いていないみたいですね。もしかしてさっきの暗号通信みたいな内容を、完璧に理解しちゃったりしてるのか」

「いや、医学的な話なんだろうなってこと以外はまったく分からなかったよ」

「ま、その場合それが仕様なんだ。お前もいい加減に慣れる。それよりも、だ」

変な方向に感心している瑕奈ちゃんを一蹴しつつ、柊木沢さんが本題へと引き戻す。

「その死体はそんなに変なのか」

「変ていうか、ありえないっていうか……」

「具体的にどうありえないんだよ」

「端的に言えば—— 老化してるのよ」

ため息混じりに呟かれた言葉の意味を脳内で反芻してみる。

老化とは、一般的に歳を重ねるにつれて徐々に起きる自然現象。

合成皮膚の移植や半・非合法な臓器交換を重ねることで多少なりとも老いをごまかせたとしても、それは見掛けだけの話に限定されるか、その速度をいくらか緩やかにするだけであって完全に食い止めることは現代医学を以ってしても不可能なはずだ。

「つつてもこいつ、俺には普通の若いにーちゃんに見えるぜ」

「だからさらに不思議なのよ。あたしもこっちが専門じゃないからはっきりとは言えないけど、このデータを見る限り、この男の子の細胞老化レベルは八十過ぎのじいさま並よ」

「おお。そりやすげえ」

やっと事の異常さを理解した柊木沢さんは、満足したように腕を伸ばした。

「で、原因は？」

「今の時点でそれが分かれば苦労しないわよ」

三七三さんが恨めしそうに吐き捨てた。

「せめて実際にこの死体を見て色々調べてるか、もっと詳しい情報を収集してからじゃないと何とも言えないわね。でも…… それ

も無理そうねえ」

「はい」

その言葉に二ノ宮さんが同意する。

「この青年の死体は事件性があるということから司法解剖されたが、その情報が一般レベル及び報道機関に向けて開示されることはありません」

「やつぱりねー。こんなオカルトな話、この週刊誌が見逃すはずないもの。差し詰めどつかのお偉いさんから圧力でもかかってるんでしょう？」

「おそらくは。私のほうでも色々と根回しはして見たのですが、現時点では難しいようです。けれど最後に一つだけ情報を掴むことができました」

二ノ宮さんはそう言った後、少し間を持たせた。
そしていよいよ核心に触れるように口を開く。

「その死体から 頭部が紛失 されたそうです」

誰かが息を呑んだ。

ぽきり、と柊木沢さんの手の中でペンが折れる音がした。

「それって、」

「ええ。皆様のご想像通り、叶もこの事件が先々週のホテル殺人事件、そして昨晚の一家首なし殺人事件に関係していると思っています」

——むしろ、これが全ての始まりである、と

「首……」

何か不穏なものが部屋中に満ちている。

瑕奈ちゃんもその見えない“何か”に怯えているのか、きよるきよると辺りを見回していた。

頭が、無い。

生きたまま頭を & a m p ; # 2 5 4 4 5 ; がれた体。死んでから頭を奪われた死体。

何にせよそれは正常とはかけ離れた、本来日常に介入することのない概念だ。

「何だよ、また“首”かよ」

そんな中、何故か一人不服そうな、というか明らかに怒っている柊木沢さんが重たく呟いた。

「で、叶のじいさんは首なし死体に興味を持つちまったわけだな。悪趣味にも程があるぜ、ったく」

「正確には叶が興味を抱いているのは失われた“頭部”と事件の関係性であって、死体そのものには大した価値を見出してはいません」

「どつちにしろ悪趣味だろうが……」

「まあまあ。そんなの今に始まったことじゃないじゃない」

軽く宥めるように手を振って、三七三さんが二ノ宮さんを見た。

「で？叶のおじいちゃんはおたしたちに何をさせたいの？」

「ま、まさかつ！無くなった頭を探せ、とか！？」

「それは既に金さんが先行しています」

「成る程なあ。今朝の機嫌の悪さは探さなきゃいけない頭がさらに四つに増えたから、か」

確かにそれならば頷ける。

無くなった頭部はこれで計六つ。

一人で探すには些か骨の折れそうな仕事のように思えた。

「叶は—— これからも似たような事件が続くと予測しています」
二ノ宮さんはそう言いながら、僕たちを見た。

叶さんからの言伝を口にするときの彼女は使命感に溢れている。

「阻止するかはともかく、一連の事件が同一犯によるものなのか、被害者の関連性、何の為に頭部を奪っていくのか、あなた方にはこ

これらの点を重点的に調べていただきたいと思います」

「あたしは何をすればいいの？」

わくわくした様子の三七三さんを二ノ宮さんが一瞥。

そして、

「あなたは当面、例の件を継続していただければ」

「ええー！？あたしだけ仲間はずれなんてつまらないわよー」

告げられた言葉に対し子供のように頬を膨らませていた三七三さんは、しかし二ノ宮さんが口にした次の一言に硬直する。

「柊木沢さんは当面、十字製薬を調査してください」

「…… っな」

十字製薬。

三十年ほど前からその勢力を伸ばしてきた大手医薬会社で、製薬や開発は勿論のこと、人工臓器の実用性や人体の部分クローニング技術などにも力を入れてきた会社だ。

その知名度は高かったけれど、裏では非合法的な人身売買に手を染めているとか、要人のクローン体を秘密裏に培養しているなど、黒い噂も多かった。

「なんでまたそんなメジャーどころの名前がでるんだ？」

「この青年が通っていた精神病院は十字製薬の傘下にある病院でした。二件目のホステスは同じく十字製薬の系列病院で盲腸の手術を行っています。そして昨晚の被害者は十字製薬の本社に勤務していたそうです」

「まあ十字くらい幅利かせてるとそんな繋がりの一つや二つは当たり前なんじゃねーのか？」

「ええ。叶も十字製薬に関しては保険程度にしか見ていません。ですが、」

「それ以上に有力な手がかりも無いってか。って、…… おいおい」
柊木沢さんは先程からフリーズしている三七三さんの前に手をかざ

す。

「どうしたんだよ？さっきまで五月蠅いくらい喋ってたつーのに」
三七三さんは怪訝な顔の柊木沢さんを真っ向から無視する形で二ノ宮さんに尋ねる。

「明、あの人があたしをこの件に関わらせたくないのは、十字のことがあから？」

「そこまで把握はしておりません」

「……そう。」

妙に冷たく言い放った三七三さんは、唐突に立ち上がった。

「やーめやめっ。十字に話が及ぶならあたしは退席させていただきますわ」

「え、ちよつと三七三さん？」

「瑕奈、あんたの仕事が何だかは知らないけど、手をつける前に必ずあたしのところに来なさいよ。実験の成果をみないといけないからね」

「はあ、それはいいですけど……」

困惑を交えつつも同意した瑕奈ちゃんの頭を叩くと、

「それじゃあねん」

振り返りもせず歩を進めると、奥の研究室へと去って行った。

扉の閉まる小さな音が後を追う。

「…… えつと、何がどうしたんでしょうか？」

瑕奈ちゃんが誰ともなく意見を求めた。

「三七三さん、この話に凄く興味があつたみたいなのに、十字製薬の名前が出た途端、急にあんな、」

「まあ誰にだって色々あるんだろ」

柊木沢さんが呟く。

「え、もしかして何か知ってるんですか？意味深ですなー」

「そっじゃねえよ。けど、俺にも人に言いたくないことはあるぜ。」

それはお前も同じだろ」

「う、」

言葉に詰まった瑕奈ちゃんを柊木沢さんが口元だけでにやりと笑った。

「ま、俺たちの仲なんて所詮そんなもんなんじゃね？」

寧ろ、そのくらいの距離が丁度いいのかもしれない。
声に出さないだけで誰もが何となくそう思っていた。

僕はどうなんだろう。

胸の奥に隠している事が。

人には決して言えないことが、果たして有るのだろうか。

*

その後、二ノ宮さんを介した叶さんの指令は各自に告げられ、三七三さん不在のまま何となく腑抜けた感じで会議は終わった。

柊木沢さんが十字製薬の調査を担当することになり、瑕奈ちゃんは昨晚の事件の情報を各メディアから集める事、そして僕には柊木沢さんの補佐を命じられた。

銘々が立ち上がりそれぞれの仕事に取り掛かろうとしたとき、僕だけ二ノ宮さんに呼び止められる。

「先に外で待ってるからな」

そう言つて、柊木沢さんはエレベーターの中へと消えていく。
瑕奈ちゃんはというと、律儀にも三七三さんとの約束を果たそうとしているのか、研究室の方へと歩いていった。

「—— 叶は、あなたにも期待しているようです」

誰もいなくなつたことを見計らつて、二ノ宮さんが静かに僕を見据えた。

「時期がくればあなたにも活躍してもらつことになると思いますので、どうぞその心算でいてください」

「できるだけことはしますが、そればかりは僕の一存ではどうすることもできませんので」

「理解しています。ただ、心には留めて置いて下さい」

「はい」

「お伝えしたかったことは以上です」

では、と短く言い残すと、二ノ宮さんもまた奥に在る自室へと消えていった。

*

「よお。何だ、叱られてもしたか？」

外に出ると、柊木沢さんが安穩とした顔で煙草を吸っていた。

「路上喫煙は見つかるよ罰金ですよ」

「それが怖くて外で煙草なんか吸えるか」

清々しく言い切ると、短くなつた吸殻を親指と人差し指で弾いた。それは綺麗に弧を描いて排水溝へと吸い込まれていった。

「さてと、それじゃあ行きますか」

「どこに行くんですか？」

「んん、とりあえず十字の本社に行つてみようぜ。セキュリティーに引っかかったらそれまで、だけだな」

「今日も何か仕込んでるんですか？」

「うん？まあナイフ数本くらい、武器のうちにも入らんだろう」

あいにく銃の持ち合わせはなくてな、と柊木沢さんが屈託なく笑う。

この人は常に体のどこかに何かしらの凶器を仕込んでいた。それがないとどうも落ち着かないのだそうだ。

近頃はスーパードでも警備のためか職務質問をされることがあるくらいだ。

一応、叶さんが用意してくれた偽装の身分証明書を提示したとしても、身体検査をされてしまえば柊木沢さんなんか一発で捕まってしまうだろう。

ちなみに僕は今でも自分個人のIDを使用していた。

申請さえすれば偽造の物を手に入れることもできたのだけど、特にその必要性も感じなかった。

「柊木沢さん」

道中、僕は前から思っていた事を口にしてみる。

「僕たちのしている事って一体、何なんでしょうね」

「おいおい。いきなりどうした？」

左手に新しい煙草を挟んでいた柊木沢さんが不思議そうに僕を見た。

「お前がそういうこと言うのって、珍しいな」

「そうですか？」

「おう、お前はいつも流されるままに生きてる感じがするからな」
微妙に否定ができなかった。

自分の確固たる意志で行動したことなんて、あの日家を飛び出したときくらいだ。

それも理由なんてなく、ただ『気が付いたらそうになっていた』という感じだった。

「いや、そこで沈黙されると俺としても困るんだが……」

「あ、すみません」

「謝るところでもないんだが、まあいいか。お前らしいっちゃらしいな」

手の中で煙草を弄りながら、柗木沢さんが苦笑した。

「俺たちがしている事、ねえ。そんなの俺だって聞きたいよ」
「ですよ」

「まあ俺たちは所詮、叶のじいさまの駒だ。あのじいさんの望むように動いて、期待する結果を出す。そういうところは一介のサラリーマンとなんら変わりはないと俺は思うぜ」

「叶さんの目的って何なんでしょうね」

「よくわからんし、どうでもいい。探ってもわからんだろうからな」
それに、と柗木沢さんは続ける。

「今のこの生活に、俺は決して屈服してないぜ。まあ多少窮屈なところも無きにしも非ずだが、昔に比べたら状況は格段によくなってるからな」

「そうですね」

僕は柗木沢さんの云う“昔”について敢えて触れようとはしなかった。

多分、それを彼も望んでいるだろうから。

「でもさ、俺なりに考えたりはするぜ？ 叶のじいさんが何故俺達を
アウトサイダーズ
＜傍観者＞と呼ぶか、とかな」

その言葉に僕は柗木沢さんを見た。

僕よりも頭一つ分背の高い彼の視線はどこか遠くに向けられている。

「“アウトサイダーズ” つつうのは直訳すると“外側の人たち”、つまり“部外者”だろ？ なのにあのじいさんは＜傍観者＞と呼称する。それは何故、か」

つまりだな、と柗木沢さんは煙草を銜える。

「外側に位置しながらそれを傍観する——つまり、一部始終を把握しながらも直接手を下すことはない。叶のじいさんは俺達にそういうことを望んでいるんじゃないかってな」

「なるほど」

「まあこれは俺の見解だ。あのじいさんが考えてることなんざ、凡人の俺なんかにはわかってたまるか」

そう吐き捨てて、柗木沢さんは煙草に火を灯した。

アウトサイダース
＜傍観者＞としての自己。

全てを知り尽くし把握していながら、直接的に関わることはない存在。

それは僕たちのことというよりも、叶さんにこそ相応しい名称ではないだろうか。

「ま、何にせよ俺達は俺達の仕事をやろうぜ。んでもってさっさと終わらして美味い酒でも飲みに行くぞ」

「そうですね」

相槌を打ちながら、僕はこの件について 『彼』 はどう思うだろうかを考えた。

『彼』 についてはまだ分からないことの方が多い。

それどころか、分かっていることなど一つもないのかもしれない。いずれは確認しなければいけないのだろうか。

とりあえず、今の僕にできることは物語に沿って忠実に生きていくことだけだった。

02・＜新米刑事、浦美澤 光喜（うらみさわ こうき）の受難＞

02・＜新米刑事、浦美澤^{つらみさわ} 光喜^{こうき}の受難＞

基本的に朝は好きな方だ。

低血圧なんかとは縁のない俺は目覚めも寝起きも爽やかで、どんなに飲んでも次の日はかならず九時前に起きることを心がけていた。それ以上寝てしまうと、どうも体の調子が悪くなる。

だから二日酔いにくじけそうになる日も牛乳をパックから一気飲みし、体中に湯を入れて出掛けるのがこの仕事についてからの日課だった。

ああ、今日も新しい一日が始まる……。

昇り始めた白き朝日が俺の瞳に眩しいぜ！

ジャケットを小意気に肩に掛け、警視庁捜査一課 警部補である俺、こと浦美澤 光喜は愛車のロータスエリーゼに乗り込んで、今日も颯爽と事件解決に乗り出すのであった！

……と、まあ朝から自分で自分を演出する痛々しいオレ。

何故こんな何の特にもならない、むしろ傷が増えるばかりの行為に身を投じているのかというと、見事に通勤ラッシュの渋滞に巻き込まれ、それ以外にやることがないからである。確かに朝は好きだった。

まだ冷たさを残すアスファルトにさんさんと降り注ぐ日光　…　は、もうここ何年もお目にかかっていない。早朝の何ともいえないキリつとした空気、にも縁が無い。

何たってここはコンクリートジャングル・東京なのだ。

まあそういうのは置いといて、だ。

そんな朝からフルスロットルなオレも、延々と続く車の列と目覚めた時に飛び込んでくる女の顔だけは苦手だった。

昨日の晩に肌を触れ合わせた女とモーニングコーヒー、なんていうのはオレの趣味じゃない。

できることなら行為が終わったらずぐに帰って欲しいときもある。

ぶっちゃけ毎回そう思っていた。

男として最低の発言だとは分かっているんだが、オレは自分の欲望に正直なんだと言ってみる。

「……　何つつて」

かれこれ四十分近くも停滞が続いている道路。

拡張した意味があるのかってくらい車の流れに変動がない。

心の広さは太平洋を自負していたさすがのオレも、そろそろ限界なようだ。

「しょうがない、か」

助手席に転がっている赤い簡易設置型回転灯つまりパトカーにつけるアレねを手にとると、窓から腕を伸ばし、それをルーフ部分に取り付ける。

そして内蔵してあるボタンを押して、軽快、とはいいがたいサイレン音を鳴らした。

ついでなので無線機兼拡声器を手にとると

「通勤中の皆様、大変申し訳ないのですが道をお開け下さい。緊急の要請がありました」

なるべく重々しく、かつ感じのよさを前面に押し出した声で宣言する。

すると、前方の車がしょうがねえなあという風に道を開けるために動き出す。

まあ動かないなら動かないで、

「その車、道を開けなさい」

なんてお決まりの牽制を現実には演技してみせる楽しみもあるのだが。

そんなオレを、フロントミラーに吊るした都警察のマスコット・ぴぼが君が非難するように見ている。

なんだか急に後ろめたくなった。

「おいおいベイビー、そんな顔するなよ」

切羽詰った事件ではなかったにせよ、要請があつたのは本当なのだ。「現場検証は時間との戦いつてなんかのテレビドラマでも言ってただろ？」

…… 誰に言い訳をしてるんだろうか、オレは。

とりあえず、ぴぼが君は今日も変わらない笑顔を周囲に振りまいていた。

*

本庁に着く頃には既に九時を回っていた。

予想以上のタイムロス。

やはり日本の渋滞を舐めてはいけない。

ふと思い出したように携帯を取り出して、例の番号へとかけてみた。発信音が鳴ることはなく「電波の届かないところにあるか、電源を」の虚しいアナウンスが耳元で告げられる。

…… あのおッサン、また充電しないまま放置してるな

昔読んだ洋書に出てくる悪魔が、もつともらしい顔で

『渋滞と携帯電話は我々が生み出した最良の地獄だ』

なんて言っていた。

オレはその言葉に少なからず同意せずにはいらなかった。

受付で軽く手を挙げると、座っていた女の子（×二人）が同時に露骨な反応を見せた。

左側にいた髪の長い女の子はこっちが見ていて恥ずかしいくらいに顔を真っ赤にして、口の中だけでおはようございますと呟いた。

対して右側の女子は今風の化粧を施した顔で、挑発的な表情を形作っている。

確か前者がミュキちゃん、後者がアユミちゃんだったような気がする。

二人とも同じ週のうちに寝たからか、記憶があやふやだった。

ただ、いつもは大人しいミュキ（アユミ？）ちゃんがベッドの中では随分と大胆で、対照的にアユミ（ミュキ？）ちゃんは情事の最中、何故かずっと泣いていた事だけは憶えている。

どちらもその後の付き合いは今のところない。

同じ職場に勤めているので必然的にほぼ毎日顔を合わせているが、そこはオレ、何とか笑顔で誤魔化している。

ほかにもエレベーターで一緒になった交通課のノリちゃんに軽く迫られ、三階から同乗してきた交通安全部の知らないお姉さまに蟲惑的な視線で熱く見つめられたりもした。

お年頃になってからのオレは、この手の相手に困ることがなかった。そう言う随分自信があるように聞こえるだろうが（まあ自信がなかったわけでもないんだけど）、彼女たちも警視總監の祖父と国会議員の父を持つ将来有望なオレに体以上のメリットを期待しているんだろう。

ま、その点は割り切っているのであまり気にはしていない。

何にせよ、携帯のメモリーに電話一本でいつでも駆けつけてくれる女の子の名前が幾つもあるのは、こちらとしても都合がよかった。

逆にオレには同性の友達が少なかった。

高校時代にはそれなりにいたんだが、警察学校に入る頃にはすっかり上辺だけ調子の良いコバンザメみたいな奴らに囲まれていた。

それも無理はなかったと思う。

あそこでは誰もがオレを「総監の孫」として見ていたし、実際にオレもそれをかなり全面的に押し出しているところがあった。

教官にすらおべっかを使われるような環境で、オレはじくじくと腐っていった。

まともに講習を受けなかったにも関わらず、本庁の捜査一課に新任警部補として派遣されることが決まった時の周りの視線の冷たさっ
たらない。

確かに七光りで得たものだったけれど、それだってオレが頼んでもいないのに祖父さんが四方八方に根回しをした結果だ。

あの人は自身のメンツを守りたかっただけで、孫の意見なんかどうでもいいと思っ
ていたんだろう。

兎にも角にも異例中の異例の昇進で本庁に就職することになったオレは、何事にも期待していなかった。

どうせこのままあらゆる場所で「総監の孫」として腫れ物を触るように扱われ、何もしていないのにあれよあれよと上へと押し上げられ、ジジイになるころにはそれなりの地位まで辿り着いているのだ
ろう、と。

だから就任第一日目で出会ったあのオッサンの衝撃は本気で凄まじいものだった。

忘れもしない記憶の一ページ。

ただの平警部補のオレをわざわざどつかのお偉いさんが出迎えに来たあの日、オレはやっぱりここでも状況は変わらないのか、と多少嘆いたりもしていた。

来賓のように捜査一課本部まで案内され、オレを直接面倒見る立場の人間を紹介されることになった。

それが例のオッサン、こと 柴多^{しばた} 行成^{ゆきなり} 警部である。

初めの印象は、

「オレの目の前にスーツを着た浮浪者が立っている。」
という感じだった。

何かの冗談かと思うほど、ミスマッチな人物だった。

鬼のような忙しさで知られる本庁捜査一課ではあるが、あくせくと働いていた彼らは身なりも小奇麗で、どこか洗練された匂いがしていた。

にも関わらず、である。

下につくように命じられた人物は、シャツは縋れて黄ばみが目立ち、髭は伸び放題、フケの積もり方は粉雪のよう、とまるで汚らしい。

無言で自分のデスクまで付いてくるように指示され、オレは仕方なくその後についていった。

オレが心の中で早くも祖父さんに担当を替えて貰う算段をつけていたことはいうまでもない。

そしてそんなオレに待ち受けていた最初の試練は、

「ここ、整理してくれない？」

彼のデスクの片付けであった。

正直に言おう。

オレは絶句した。

その惨状といったら、ニートの独身男だってこんなに酷くなるまで放置しないだろうっていうくらいの有様。

カップ麺が中身を残したまま緑色のふさふさと異臭を放ち、一体いつから置いてあるのか紙の山は既に富士山級、そして誰に貰ったのであるう観光地のみやげ物がところどころに埃まみれのまま放置されていた。

……これをオレにどうしろ、と。

「いやな、どうしても見つからない書類の束があつてよ。その提出期限がおといだったもんで課長にせつつかれてるんだが、俺に言わせりゃ見つからないもんはしょうがないから諦めろって話だ」
なあ？と、何故か同意を求められた。

「……じゃあ、一から片付けてみればいいじゃないですか」

そんな控えめなオレの指摘を

「俺は片付けられない男なのだ」

自信満々に胸を張り、まあとりあえず頑張ってみてくれや、と自分はさつさとどこかへと行ってしまったのだ。

後々になって誰かから聞いたのだが、柴多という男は捜査一課でもちよつとした問題刑事なのだそうだ。

奔放でいい加減な性格から、下に付く人間が一週間と持たずに悲鳴を上げることでも有名らしい。

しかしその一方で思いもよらない行動や発言が事件解決に繋がることもあり、そこその実績もあったので上層部からはオレとは違った意味で扱いを悩まれている存在でもあった。

デスクの整頓から始まったオレと柴多さんの関係は、どういうわけか今でも続いている。

ために会話の端々に祖父さんの名前や存在を織り交ぜてみたのだが、状況は一向に改善することはなく、オレは相変わらず彼の助手、というかパシリ的な役割を担っていた。

しかし学んだことがなかったわけでもない。

柴多さんは確かに優秀だった。

三十年弱というキャリアの中で取り逃がした犯人は両手で数えられ

るほど、というのも納得できる。

捜査一課に就任して早半年、オレはいつの間にかこの仕事に密かな充実感を得ていた。

何よりも、オレを「総監の孫」として見ない柴多さんはなんだか新鮮で、オレはこの柴多 行成という人間に少なからず興味を抱いていたのだった。

「そんなハートフルかつビューティフォーな回想をしたところで何なんですが、」

柴多さんのデスク前に到着した俺は、先週片付けたばかりの机上に真新しい腐海の森が築かれている様を見て、微かな殺意を覚えた。当の本人といえば週刊誌をアイマスク代わりに、椅子の上でふんぞり返って惰眠を貪っている。

オレは遠慮を捨てることに決めた。

「ちよつと！柴多さん、起きて下さい！事件ですよ、事件！じーけーんっ！」

ばしばしとデスクを叩くと、積み込まれた書類が傾れを起こし柴多さんを直撃した。

「ふがつ」

週刊誌は巨乳アイドルのグラビアページを開けたまま床に落下。

寝ぼけ眼の上司の顔が露わになる。

「…… ふんが？」

「なんすかそのフランケンみたいな奇声は」

「腐乱犬？」

「怪物くんですよ、ってもうそれはどうでもいいですから！事件なんですってば！」

「おお、そうだった。お前を待っていたんだ」

そう言いつつ立ち上がると、何日も洗っていないであろう頭髮をぼ

りぼりと掻き筆った。

年頃の女の子が見たら確実に男性不信になりそうな光景だった。

「また首なしが出たんだってな」

「その言い方だとなんか妖怪の名前みたいですけどね。そうですよ、現場は江戸川区ですけど行きますよね？」

「当たり前だ。そのためにここでお前を待ってたんだからな」

「……ていうか、知ってたんなら先に行って携帯で連絡してくれればよかったものを」

「お前も知つての通り、俺は運転ができない。そして携帯はこの山のどこかで絶賛遭難中だ」

「威張らないで下さい」

「おう」

この状況のどうしようもなさ呆れつつも、オレと柴多さんは連れ立って現場へと向かうことにした。

*

江戸川区にある住宅地。

比較的裕福な家庭が多いのか、どの家にも綺麗に剪定された庭があり、外車が停まっている。

その一角、どこにでもありそうな角家が今回の事件の現場だった。近くの駐車場に車を預け、五百メートルほどを徒歩で移動する。

「あ、見えてきましたよ」

それまでの閑散とした住宅街が嘘のような賑わい。

現場周辺だけ、遠目でも分かるくらいの人で溢れかえっていた。

「ほら、もうこんな人だかりができてますよー」

報道関係者が様々な機材を持って黄色い封鎖テープぎりぎりまで近寄り、押し合うように声を張り上げている。

その後ろに近隣の住人たちの姿もちらほらと見受けられた。表情には深刻さよりもお祭り騒ぎを楽しむような色が濃い。まあ無理もない話だが、テレビに映りたいがためにわざとうるつく行為はどうかと思ってしまう。

件の家は半分ほどを大きな青いビニルシートで覆われている。

七時のニュースではまだむき出しのままだったことを考えると、マスコミ対策なのだろう。

「完全に出遅れた感じっすね。あ、ていうかあれって遺体じゃないっすか！」

人影の隙間から黒っぽい何かが運び出されていく。

大きさと形状、そして数も五つと被害者の数と一致している。

「やばいっすね。もう少し余裕あるかと思っただんですけど」

「何だお前、死体が見たかったのか？」

「できることなら見たくないですけど、やっぱり現場は発見された状態を確認しておかないと」

「お、言っじゃねえか」

俺の教えが良いからな、と無駄に笑顔な柴多さん。

そんなの常識の範疇でしょうがという言葉を飲み込んで、オレは人の波を掻き分けて前に進んだ。

「すみませーん、警察です。退いて下さい、ていうかもっと下がって！」

オレが半ば必死でマスコミを押さえつける後ろから、柴多さんが暢気な調子で続いた。

この人のこういう余裕加減は是非とも見習いたいものだった。

「露払い、ご苦労」

ぜえぜえと息を切らしたオレの肩を労うように叩くと、自分だけさつさと家の中へと入っていつてしまった。

慌てて追いかけるオレはさぞかし間抜けなことだろう。

そんな見つとも無い醜態が全国ネットで放送されないよう、オレは心の中で密かに祈った。

家の中には既に何人かの鑑識官と、見知った一課の刑事の姿もあった。

どうやらこの件を担当しているのはオレたちだけではないらしい。先行した柴多さんがそんな一人に何かを話しかけている。相手の顔が明らかに迷惑そうに歪められているのに、この人は気付いているのだろうか。

しばらくして、オレたち以外の一課の人間は踵を返し撤退して行つた。すれ違う途中で一応頭を下げてはみたものの、真っ向から無視された。

捜査一課の中でオレは既に柴多さんと同じ厄介者として見られているようだった。前途多難である。

「……何か感じ悪かったすね」

「そうか？いつもどおりじゃないか？」

それが問題なんですよ、と言いかけたオレは改めて状況を見渡し、口を噤んだ。

徹底的に蹂躪された室内。

破碎と破壊を尽くされ、まるで廃墟のような有様だった。

冷静に考えてみると、オレが今立っているこの場所で五人の人間が殺されているのだ。

所々にこびり付いている凝固した黒い血のせい、籠もった死の臭いさえ嗅ぎ取れる気がした。

「何ボーっとしてるんだ？色々見ておかないと、って言ってたのは自分だろ？」

不思議そうなその声で現実へと引き戻される。

両手に白い手袋をはめて指紋対策も万全な柴多さんは、部屋の様々な物を手にとって眺めていた。

それに倣うようにオレも部屋の検察を試みる。が、どうも集中できなかった。

「柴多さんは、こういうのって平気なんですか？」

「こういうのっ、て言われてもなあ。まあ初めは俺もそれなりにビビってたよ。でもまあもう慣れたな」

そう言つて、へらへらと笑った。

俺も慣れる日が来るのだろうか？何だか想像しなくなかった。

一瞬脱力しそうになるも、柴多さんの表情を視界に収めることで体の重心を取り戻す。

「それまではとにかく何でもいいから視ろ。全てを視て、目に心に記憶に留める。惨殺死体だろうがバラバラ死体だろうが、しっかりと何もかも視納める。それが仏さんに対する供養にも繋がるからな」

…… この人は。

「柴多さんって」

「あん？」

「本当に、たまーに、良い事言いますよね」

「そうだろ？分かったら俺を崇める！心の師と呼んでくれてもかまわないぞ」

わははと場違いな声を上げて笑ったので、鑑識さん数名からじとりとした視線を投げかけられた。

せっかく漂っていた良い雰囲気が出無しだった。

「で、この状況…… どう思います？」

気を取り直し、捜査一課の端くれとして改めて先輩に問いかける。

「こんなに綿密な破壊行為、どう考えても一人の犯行だとは思えませんがね？」ということは、殺人を担当した人間が一人、家中を荒らしまわった奴らが最低でも三人。まだ鑑識からの公式な発表はないですけど、足跡も数人分発見されたそうじゃないですか。ということはこの事件、例の首なし殺人に関連があると見せかけて行われた強盗殺人！って感じでどうでしょう」

「いや、そりゃないな」

完璧に否定された。

結構自信のある推理だっただけにオレはちょっと、いや大分凹んだ。そんなオレのブロークンハートを気にする素振りもみせない柴多さんは、先程から何を気にしているのかりビングの中をうろつくと動き回っていた。

そして急にぴたりと止まる。

「さっきあいつらに聞いたんだけどな、」

「はい？ああ、寺島さん達にですか？」

そういえば彼らのひとりがそういう名前だったことを今ごろになって思い出した。

「通報してきたのはこの家の妻らしい。時刻は午前四時ごろ。最初、妻は電話で『夫が、夫が』を連呼したんだそうだ」

「何かと思えばそんなことを聞き出していたんですか？」

いずれは公式発表される情報、しかも同じ課に属しているにも関わらず、一課の人間には自分が握った情報を保守する傾向がある。

しかし、しつこく聞き出そうとする柴多さんの姿勢に負けて、情報の一部を漏らしてしまったのだろう。

げんなりとした面持ちの寺島さんたちを思い出し、オレは少し同情しそうになった。

「まあ聞け、電話越しのオペレーターは錯乱していた妻を落ち着かせようと声をかけた。しばらく悲鳴だか絶叫だかが続いて、今度は

夫が電話に出た。その夫は夫婦喧嘩がエスカレートして申し訳ないと平謝りで電話を切ったそうだ。不審に思ったオペレーターが近所に駐在していた警官を向かわせると、

「一家全員首なし死体、だったわけですか」

「変だと思わないか？」

柴多さんが含みを持たせるように呟いた。

確かに変、というか不自然なのかもしれない。

けれど、

「その電話に出た夫っていうのが犯人だったっていうオチだったら解決するんじゃないですか？」

「じゃあ最初の『夫が、』つうのは何だよ？」

「それは、その……旦那さんが殺されて錯乱していた、とか？」

「まあそうかもしれないが、普通旦那を殺すような奴が家に侵入してきたら、まず助けを求めるだろうが」

「だから錯乱してたんですって」

と言いつつも、オレはだんだんとその矛盾に引き込まれていく。

もしも、だ。

仮にオレの家に強盗殺人犯が入ってきたとする。

で、目の前で親父だかお袋を殺される。逃げながらもオレは通報するために受話器をとる。

そして110番が繋がったなら、オレは真つ先状況を説明し、助けを求めるだろう。

「……確かに、『夫が、夫が』はないと思いますね」

「わからんぞ？ご乱心だったかもしれない」

「茶化さないで下さいよ。だとしたら、その夫が事件と何か関係あったのかもしれませんが。犯人は夫の知り合いだった、とか」

「案外——夫が犯人だった、とか……な」

「はあ？」

じゃあ夫は誰に殺され首を切り落とされたんですか？と反論しようとしたオレの全行動が停止する。

その視線は玄関口にロックオン。

凝視する先に現れたのは一人の女性。

否、一人のとてもなく美しい女性、だった。

ああ。

この気持ちをどう説明したらいいのだろうか？

今までオレは愛や恋といったものを妄想だと一蹴し、決して信じようとはせず、女性とは体の繋がりのみを求めて交際してきた。

それが当たり前だと思っていた。

だって考えてもみるよ？愛だの恋だの、そんな不確かな感情をどうやって信じられる？

それならいつそ全てを割り切って考えてしまえばいい。愛や恋に酔っ払いたいなら他でやってくれ。

オレには必要無い。

そう思い込んでいた。

でも今、たった今わかった。

オレは愛も恋もただ知らなかったただけなのだ。

目の前の女性、名前も知らないこの女性。

この人こそがオレに愛を教えてくれる存在なのだった……！

まるで天から舞い降りた天使のように軽い足取りで近づいてくるオレの運命の女。^{ひと}

セミロングの茶髪を華麗に耳に掛け、少し濡れた黒目の大きな瞳はまっすぐにこちらへと向けられている。

そしてオレの目の前に立つと、熟した林檎のように艶めく赤い唇を品良く綻ばせ、

「わたくし、警視庁特別捜査室から派遣されてきました。^{あかさき} 緋咲 ^{けい} 慧と申します」

そう言つて、柴多さんに微笑みかけた。

ああ、それは永久凍土の氷をも溶かす魅惑のスマイル……！
名刺を取り出し柴多さんに渡すその白い手はさしずめ平和を運ぶ白い鳩！

つて……ん？

「柴多刑事の噂はお聞きしておりました。以前から一度お会いできればと思っていました」

んんっ？

ちよ、ちよつと待つてください？

「緋咲……。聞いたことある名前だな。確か、ハーバード出の凄腕が特捜にいますとかつていう話だったが」

「まあ、私ごとき若輩の名を記憶に留めていただけるなんて、まずまず光栄ですわ」

……オレ、アウト・オブ・眼中。

「ん、ああ忘れてた。こっちは浦美澤 光喜。新米のほやほやだが俺の部下だ」

忘れていたという行が非常^{くた}にアレだったが、この際気になんてしない！

ありがとう柴多さんっ！今日だけなら心の師と呼ばせていただいてもかまわない！

「は、はじめまして！オレ、浦美さ」

「お名前は存じています。総監のお孫さんですってね。それよりも

……」

……今、オレの中で最大級の寒波が到来しています。

総監の孫扱い、しかも『それよりも』の一言で終了。

オレ、もう泣いていいよね？

「—— ということですか？」

そんなラブコメムード（とオレの恋心）は柴多さんの鋭い声に踏み潰される。

「きちんと説明していただかないと、納得できかねますな」

「説明も何も、そのままの意味ですわ。

この件は捜査一課から私たち特捜に委ねられました。ですのでお帰りくださいと申し上げたのですが」

「んな、」

あまりの事に変な奇声を上げてしまった。

が、状況はどうやらそれどころではないらしい。

「ちょ、ちよつと！いきなりそれは強引すぎやしませんか！目黒区の首なしホステス殺害事件はウチの管轄です！模造犯にせよその関係性が少しでもあるかぎり、この件を網羅するのも必須なわけで、」

「ああ。目黒区の一案件も捜査権はこちらに譲渡されました」

「はああ！？」

ますます納得がいかなかった。

大体、何で特捜が絡んでくるんだ？ていうか特捜って何だよ、微妙にそこんところがわかんねえ！

「お前はちよつと黙れ」

混乱で思考がエキサイトしていたオレを柴多さんが静かに一喝した。

「それは上の決定なんですね」

「ええ。そういうことになりますわね」

「どうして捜査権がそちらに回されたのか、理由もお教えいただきたい？」

「捜査の関係上、正式な内容は一切公開されることはありません。ですが……」

オレの天使、もとい緋咲さんは柴多さんがまだ手にしていた名刺をそつと抜き取ると、持参のペンで裏側にすらすらと数字を連ねた。恋愛初心者のおレにも、それが何を意味するのは明確だった。

再びそれを柴多さんの手中に戻すと

「プライベートでしたら、考えてもいいですわ」

温暖化に貢献するような笑みを浮かべた。

オレの心がN2地雷並みに撃沈されたことは言うまでもない。

「…… 分かりました。とりあえず、ここは一旦引きましょう」

「ご理解いただけで助かりますわ」

とりあえず柴多さんが何を“分かった”のか気になっていたオレだが、二人の空気を邪魔することも出来ず後ろからすごすごと付いて行くことで精一杯。

「では、また本庁でお会いしましょう」

入り口まで誘導すると、緋咲さんは極上スマイルでそう告げる。

そして、ふとおレの方を見た。

必然的に高鳴る鼓動！

「貴方は、」

「は、はい！」

「お祖父様にでも聞かれてみては如何ですか？色々ご存知だと思いますよ」

「……………」

魂が抜けるというのはきつとこういうことを注すのだろう。

意気消沈しているオレを他所に、何故か柴多さんは緋咲さんに貰った名刺を頭上で掲げていた。

そして、

「あまり調子に乗らないほうがいいですよ——お嬢さん」

笑顔で言い放つと、背を向けて歩き出してしまった。

……何だろう。

軽い口調だったにも関わらず、あの柴多さんが今まで見た中で一番恐かった。

振り返ることもなく進んでいく上司の背中と、（恐らくは）初恋の人とをしばし見比べていたオレは、緋咲 慧さんのきょとした顔を脳裏に焼き付けると、断腸の想いでその場を後にした。

「——面白い人」

だから彼女が呟いたその言葉も、残念ながらオレの耳に届くことはなかったのだ。

* * *

「ちょっと柴多さん！待ってくださいよ！」

もはや競歩のレベルで歩く上司に向かってオレは叫んだ。

渾身のそれが届いたのか、柴多さんはおお、と呟いてその歩みを止

める。

「すまん、年甲斐も無い姿を見せちゃった」

「そんなもんは毎日見てますよ」

「うるせーよ」

荒い息で悪態を吐くオレを叩く柴多さんは、いつもと変わらないように見えた。

それがオレを何となく安心させる。

「でも何なんですか、急に宣戦布告してみたり。こう言っちゃなんですが、あんなのキャラじゃないでしょうに」

「んーそうなんだが、堪え切れなかったんだ。ああいう人間がオレは好かん」

「ええ、そうですか？オレは好きですよ。超タイプです」

「あれは毒婦だ。お前には向かんよ」

珍しく苦い顔で諭されたオレは、ますます惨めな気持ちになってしまふ。

「どうせオレなんか守備範囲でもないですよ。緋咲さんが好きなのは、多分、ロマンスグレーの似合うおじさまタイプですって」

「ああん？それで何故俺を見る？」

「この人は……」

あの熱い視線にまったく気付かなかったとでもいうのだろうか。

確かにフケや汚れに埋もれてはいたけれど、身なりを整え、というか清潔を心がけたら、柴多さんはその手のおじさま好きにはかなり美味しい容姿をしていた。

偏った食生活での中年太りも奇跡的になく、尖った顎と少し扱けた頬は全体的にシャープな印象だ。

何よりその両瞳にはオレのような若輩者が決して手に入れることのできない、時間と経験のみによって構築される影があった。

生まれ持った素材の良さを活かさえすれば、柴多さんは十分緋咲さんに見合う男になるだろう。

って、あれ？

オレって何が悲しくて恋敵の良いところ挙げちゃってんの？

「…… さっきからなんだ？ そんな熱い眼で俺を見るなよ、照れるだろ？」

「柴多さん、今度すごいカリスマ美容師と天オスタイリスト紹介しますよ。それで身なりをきちんとしたら、どっかのクラブでも行きましょう。柴多さんならすぐにもってもてですよ」

「勘弁しろって」

オレが半ば自虐的に放った科白に柴多さんが苦笑する。

「俺はな、母ちゃん一筋って決めてるんだ」

「って、柴多さんの奥さんは……」

その後の言葉に詰まった。

柴多さんの奥さんは、かれこれ十年以上も前に病死していると聞いている。だから彼には子供もない。

これからの人生、まだまだ謳歌する価値はあるというのに、たった一人の女性を想い続けることで終えようというのだろうか。それを美しいと言えるほど、オレはまだ大人じゃなかった。

「なんだよ、そんなにあの女がいいのか？」

オレの沈黙を勝手に勘違いした柴多さんは、心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

うわ、なんだかとても敗北感！

しかし柴多さんが同情したように呟いた次の一言――

「まあ俺には使い道もないし、これはお前にやるよ」

とオレに向かつて緋咲さんの名刺を差し出したことで、先ほどまでのマイナスポイントが一気に回復。
そして、

「マジで！？ いいんすかつ！」

オレは再び浮上する。浦美澤 光喜、完全復活！

今日の柴多さんはさしずめ救世主。

その双肩に降り積もるフケさえも、天から与えられたマナのように……見えなくも、ない。かもしれない。

「せいぜい有効利用するんだな」

柴多さんが苦笑した。

「で、これからなんだが、俺は十字製薬の本社に行ってみようと思う」

「え？そりやまたなんで？」

唐突に飛び出したメジャーな名前に、オレは歓喜の踊りを中断して柴多さんに問う。

「いやな、被害者が勤めてたつつうだけで、その、何となくなんだが」

「やつぱりこの件から手を引く気はないんですね」

「表向きは引くさ。だが、とりあえず誰かに警告されるまでは暗躍してみるのも悪くはない。が、」

「ああ。オレのことならいいですよ」

一応この人の中にも遠慮という感情はあるらしい。

それだけでもオレにとっては大きな発見だった。

「今日だけは柴多さんの行きたいところに行つてあげますよ。でも、今日だけですからね？後は放置という名の黙認ですからね」

「すまない、恩に着る」

素直に感謝された。

これまた珍しい光景に、今日は雨の予報だったかな、と空を仰ぐ。相変わらず灰色の雲は切れ間もなくゆっくりと、しかし確実にオレたちの頭上を流れていた。

都内随一のオフィス街にある十字製薬本社ビルは、その外見からには中に新・東京ドーム一個分の研究設備を要しているとは到底思えなかった。

どこから聞きつけたのか、ここでもマスコミ関係者が入り口周辺をうろついている。

数は江戸川区の非ではなかったものの、社員や研究職員にしてみればさぞかし邪魔なことだろう。

「警視庁 捜査一課の者です。昨晚の事件のことで少し中を見させてもらいたいのですが」

自動扉の前にいる厳つい警備員に、電子警察手帳をかざして見せた。英国衛兵水準の無表情に、一瞬ここにも特捜の手が回っているのかとも思ったが、どうやら取り越し苦労だったようだ。

オレとしてはここに緋咲さんがいらしてくださいださってもまったく問題は無いのだが、柴多さんのその展開はいただけないだろう。しばらく睨めつこを継続した後、警備員は無言で道を譲った。

「最初からこうしてくれればいいものを。ねえ、柴多さん？」

いきなり社員たちに聞き込みするのもまずいので、とりあえず受け付けで被害者の同僚、または上司にあたる人物に取り次いでもらおうというプランだった。

いつ特捜がやってくるかもわからないので、迅速な行動と的確な要求力が問われる任務だ。

こんなことならもうちょっと髪の毛とかセットしてくるんだっとな、と自惚れた後悔。

も、束の間。

「・・・・・・・・」

入り口を入った途端、柴多さんが凍りついた。

「ちよつと、どうしたんですか？マジであんま時間ないですよ？」
体を揺さぶっても、眼前で手を振っても、まるで反応無し。

今日は異常事態のオンパレードなのか？

しょうがないので柴多さんの視線の先を追うと、受付に行き着いた。
本庁よりもモダンで洗練されたデザインのホールの中央に座する、
一風変わった造りの受付だった。

そこにはデパートガールのような可愛らしい制服に身を包んだ女の子が三人、と、受付のテーブルに寄りかかるようにして男が一人、立っている。

どうやら彼女たちの視線は男の一挙一動に釘付けなようだった。

確かに男は非常に完成されたルックスを擁していた。

すらりとした長身は嫌でも目を惹き、その体は細いというよりも引き締まっているという印象の方が強い。

男らしい目元にすっきりとした鼻筋。無造作に束ねられた黒髪はワイルドで、全体的に野性味あふれる雰囲気さらに彩っている。

黒いタイトなシャツに、鈍い光沢を放つ黒いパンツ。

恐らくブランド物ではなく、それどころかやたらカラーチョイスが豊富なことで有名な某店で買ったような代物であったにも関わらず、男の魅力は最大限に引き出されていた。

こういう男は何を着せても似合ってしまうから羨ましい。ちよつと無理をしてもアルマーニを心がけているオレの努力が馬鹿みたい
に思えてくる。

……今日のオレはやたらと自分以外の男を褒めなければいけない
運命らしい。

「って、柴多さん！どこに行くんですか！」

そんな意地悪すぎる星のめぐり合わせを呪っているオレを差し置いて、柴多さんがその男目掛けて突進するか、の速さで近寄って行く。まったく、予期せぬ奇行に振り回されるこちらの身にもなっていない。

文句の一つでも言っただろうと後を追うと、柴多さん、いきなり尋問を開始していた。

さっきのプランはどこへ行った！

「警視庁捜査一課、刑事の柴多です。失礼ですが、お名前とご職業は？」

「自分、ですか？自分は——　　こういふ者です」

見掛け同様、脳に直接響くような甘い低音。

男は余裕の微笑を浮かべると、ズボンのポケットを漁り、皺のよつた名刺を一枚取り出した。

「『週間メモリーズ　ライター・久溜間　透』……記者さん、ですか？」

「はい。今回の事件について少し書いてみようかと思っていましたね。ちなみにこちらは新人で見習い中の弟子、みたいなもんです」
そう言われて横を見ると、まだ青年と呼ぶには幼すぎる空気をまとった少年が、ちんまりとそこに存在していた。

こちらの方は目の前の男に比べるとインパクトに欠ける。

比較対象が規定外だけで決して見られないわけではないのだが、何と云うか、どこにいても空気と一体化して馴染んでしまうような印象だった。

「報道関係の方はあちらで入館を規制されているようですが、どうやってここまで？」

柴多さんの狙いはあくまでもこの久溜間とかいう優男で、こちらの

少年はどうでもいらしかった。

なんだかそれも可哀想だったので、オレは少年に向けてこっそり手を振って見せた。

少年は心なしか少しだけ首を傾いだようだった。

「ああ、実は先ほど知り合った親切なご婦人に入れてもらったんですよ」

そう言つて男は遠巻きにこちらを窺っていた女性に軽く会釈をして見せた。

対して女性の方はというと、両腕に抱えていた書類をばさばさと床に落として見せるという露骨な動揺を示している。

…… 成程。

オレは瞬間、悟った。

この男はオレと同じタイプの人間だ、と。

「で、刑事さんたちもやはり同じ理由で？」

「はい？あ、あのまあそういうことになりますかね」

柴多さんが久溜間さんを凝視したまま再び沈黙状態になってしまったので、しかたがなくオレが応対する。

「しかし記者さんも大変ですねえ。週刊誌なんか、毎日が戦場ですよっ？」

「いやいやいや。捜査一課の刑事さんに比べたらそんな。まあそりゃあ脱稿の日なんかは死に物狂いですけどね」

「はあ。尊敬しますよ。こう見えてもオレ、中学のころまでは小説家になりたかったんですよ」

「お、刑事さん、実は文才があったりして？そういう人ならウチに是非来てほしいですねえ」

「あっはっは」

「――十五年前、」

唐突に柴多さんが低く呟いた。

「“十五年前”と聞いて、何か思い出すことは？」

「……いや、特には。そのころまだ自分は中学生でしたからね。義務教育に甘んじていましたよ」

「では、ご出身は？卒業されたのはどちらの中学？」

「ちょ、ちよつと柴多さん！」

これ以上はさすがに行き過ぎだった。

何を思つての行動だったかは知らないが、事件とは何の関係もない（と思われる）質問を、やはりどう見ても無関係な一般人に強いるのは令状が無い限り無理がある。

受付嬢は全員呆然と二人のやり取りに目を瞬かせていた。

濃度を増していく空気の中、助手というか弟子のような少年だけがさきほどと変わらない様子だった。

久溜間さんはやんわりと拒絶を含んだ口調で、慎重に言葉をかさねる。

「――刑事さん、誰と勘違いしてるのか知りませんが、自分はこんなところで職質を受けるようなことは今のところ何もしていませんよ。」

それでもまだその先をお続けになるというのなら、然るべき手続きを踏んでからにしてくださいや」

至極もつともな言い分だった。

「柴多さん、どうしちゃったんですか？」

オレは耳元で囁いた。

「この男、何か怪しいところでもありますか？見たところ、普通のライターみたいですけど。何なら後で確認してみましようか？」

「……いや、いい」

今度は急速に塞ぎ込んでしまった柴多さんは、

「すまなかつたな——忘れてくれ」

口々に久溜間さんの顔も見ないまま、ふらふらと歩いて行ってしまった。

「な、すいませんホント。何かオレにもよく分らないんですが、もういいみたいなんで！ほんとすいません！」

「別にアナタが謝ることじゃないですよ。楽しいお話もできたことですし、それでいいですよ」

「……すみません」

その後、頭を数回下げてオレは外に出た。

驚いたことに柴多さんの姿は既になかった。

「あ、ありえねえ……」

あのオッサン、オレに面倒なこと全て押し付けてバツクれやがった。しかし有り得ないと思う反面、さっきの柴多さんの異常な行動を思うと憤慨するというよりも心配になった。

「たしか、さっき“十五年前”って言ってたよな？」

どうやらそれがキーワードらしい。

オレなんかまだ小学生だった時代の話だ。

調べてみようかなとジャケットを漁ると、ひらりと白い紙が舞い落ちてきた。

「お！そうだった、そうだった！」

この状況ですっかり忘れていたけれど、オレは柴多さんから授かった女神様の連絡先があるのだ。

懸案事項は多々有ったにせよ、オレの中の絶対的優先順位は明らかに決まっている。

「……せいぜい有効利用させていただきますよ、柴多さん」

そう願掛けするように名刺を握り締めながら、きつと明日にはいつ

もどおりの柴多さんに戻っているだろうとオレは高をくくっていた。

しかしそれは大幅な誤算だった。

後にオレは『週間メモリーズ』の本社に問い合わせてみることになるのだが、過去にも現在にも“久溜間 透”という人物は在社していないことが判明する。

もちろん電話帳にも、もっと確率の高い電脳網にも載っていないかった。

つまりアレは偽名ということになり、出来合いの名刺も調子のよい会話も、全てが虚像だったということだ。

まあそれはいいとして、だ。

オレはその日のうちに緋咲 慧さんの個人的なナンバーにダイアルをして、再び彼女の美声を拝聴した。

その後はどうなったかって？

それはご想像にお任せしたい。

一つ言えるのは――オレもそろそろ自分の立ち位置を定めなきゃなって事。

たった一人の女に運命を変えられてしまうなんて、あの朝のオレは当然ながら思ってもいなかったんだ。

03・ひととヒトの距離＞

03・ひととヒトの距離＞

『アナタは“人”ですか』

Y / N ?

徒歩で約二十分。

そう遠くない距離に十字製薬の本社ビルはあった。海外の有名な建築家によってデザインされた外装はモダンで、超高層ビルが連なるこの通りでも一際高く聳え立ち、目を惹いていた。

「どうすっかなあ」

そうばやいた柊木沢さんは、その口調ほど困っているようにも見えなかった。

ビルの入り口にはカメラやマイクを持ったテレビクルーが、おこぼれを狙う野良猫のように群がっている。

その様子を僕達は少し離れた位置から観察していた。

「ここまで来て入れませんでしたっていうのもカッコ悪いよな」

「でも、やっぱり警備員が立ってますよ」

「そうなんだよな。何とか誤魔化せんものか……ん？」

ガードレールにもたれ掛かった柊木沢さんが、正面に立っている僕の背後に目をやった。

白衣姿の小柄な眼鏡の女性が、大量の紙を抱え早足で通り過ぎていく。

行き先はきつと十字製薬ビルなのだろう。

そんな女性の姿を見て、

「おっ！俺ってばいいこと思いついちゃったよ」

柊木沢さんが少し悪そうに笑った。

そして、僕に後ろから付いて来るよう合図を出すと、何故かその女性に近づいていった。

「それ、随分と重そうだね？手伝おうか？」

「なっ！」

腕の中からいとも簡単に紙の束を抜き取られた女性は、当然のことながらきつい視線で柊木沢さんを睨み付けた。

「あなた何なんですか！？人の物を勝手に、取った、り……して」

初めは憤慨していた女性の声音は、柊木沢さんの顔を見てから徐々に小さくなっていった。

「何って？俺は通りすがりのフェミニスト。重そうだったからちよつと手を貸した、だけ」

「で、でもいきなりあんなこと、知らない人だし、私」

「怒った顔もなかなか結構可愛かったけど」

「っ！」

女性の顔が見る見るうちに赤くなる。

そのとき、僕はようやく柊木沢さんの“思いつき”を理解した。

「君、名前は？」

「え、私ですか。私はミーナといいます」

「名前も可愛いね」

「そ、そんなっ！それで、あなたは？」

「俺は名も無きジャーナリスト。知り合いにはアキって呼ばれてる。そんでもってあっちが新人で見習いの弟子、みたいなもの」

「あら。どうもこんにちは」

柊木沢さんに指摘されて彼女は初めて僕が存在に気付いたようだ。振り向いて軽く頭を下げられたので、僕も同じように返した。

「それでミーナちゃん、ちょっとお願いなんだけど」

「はい？」

「俺たちも君と一緒に中へ入れてもらいたいんだ」

「え、でも、報道関係の人は立ち入り禁止になっていて……」

「そこを何とか！この記事が書けないとマジで仕事クビになっちゃうんだよ！」

「ですが……」

「別に色々探ろうってわけじゃない、ただちよつとそこらへんで話を聞いて、少し写真なんか撮ったりして、あわよくば被害者の職場の雰囲気とか拝見したいだけなんだ！」

「十分探っているじゃないですか」

コミカルに動く柊木沢さんの様子をくすくすと眺めながら、ミーナさんは覚悟を決めたように頷いた。

「分かりました。でも、私がお連れできるのは一階のロビーまでです。上の業務フロアは私の権限では入ることができませんし、地下の研究施設を部外者に公開することは厳罰ですので……」

「ありがたい！恩に着る！」

柊木沢さんは満面の笑みでミーナさんを抱きしめた。捕捉された小動物のような声が腕の中から漏れ出る。

「あ。あともう一つ」

「まだ何かあるんですか？」

再び歩き出した柊木沢さんは思い出したように指を立てた。心なしか嬉しそうな顔をしたミーナさんが、そんな柊木沢さんを眩しそうに見上げる。

「君の番号、教えてくれる？」

「はっ」

ミーナさんが驚愕の表情で立ち止まった。

衝撃で、彼女の眼鏡が勢いよくずり落ちる。

「ついでに今晚、何か予定ある？お礼に奢るよ」

「え、は、はいはい！喜んで」

「それはよかった」

頬を染めるミーナさんに微笑みかけながら、柊木沢さんはほんの一瞬だけ僕の方を振り返った。

そして慣れた仕草でウイंकをすると、何事もなかったかのようにミーナさんとの会話に集中する。

その振る舞いはまるで彼女の恋人のように違和感の欠片もなかった。

*

ミーナさんのおかげで、僕達は入り口の警備を突破することができた。

多少不審な目で見られなかったことも無いけれど、結局呼び止められることもなかった。

「では、私は仕事に戻りますので」

柊木沢さんと携帯番号を交換したミーナさんは、少し名残惜しそうにそう言った。

「あの、本当にあんまり目立つような事はしないでくださいね？」

「大丈夫。もしも捕まっても君の名前を出したりはしないよ」

「…… 捕まったりもしないでください」

「そうだな。今晚のデートは死守しないと」

「っ！で、では！本当にわたしはこれでっ！」

ミーナさんは柊木沢さんが持っていた分の紙を受け取って、あたふ

たとエレベーター方面まで去っていつてしまった。

「さてはて。何はともあれ潜入完了、と」

そんな彼女に手を振って、柊木沢さんは唇を動かさず小声で呟いた。

「思ってたよりも上手くいった」

「慣れてるんですね」

「まあそれなりに場数は踏んでるから、な」

にやりと微笑みながら、

「でもお前、三七三には言うなよ。こんなことあいつが知ったら一週間はネタにされる」

と釘を刺した。

確かに三七三さんなら涎を垂らして食いついてきそうな話題だった。
「んじゃあ、さっそく聞き込みといきますか」

柊木沢さんはひとつ大きく伸びをして、とりあえず、とホール中心に位置した受付に近づいていった。

正直、僕がここにいる意味はなかった。

柊木沢さんは受付嬢三人を相手に軽快な口調で色々聞き出ししている。

僕といえば、彼の横でその様子をぼんやりと眺めているだけだった。

十字製薬のロビーは天井がとても高かった。

あくせくと行きかう人々も、明らかに白衣で研究者風情の人やスーツのビジネスマンらしき人、ターバンを頭に巻いたアラブ人や金髪碧眼の欧米人の姿と、実に多種多様な賑わいを見せていた。

この広さのためか、それぞれの声がよく通るし、響く。

誰かが大きく笑う声。

密やかに交わされる商談。

真剣なトーンで繰り広げられる議論。

その間を縫う様に走る清掃ロボットの電子音。

これ以上磨かなくても床は既に顔が反射しそうなほど輝いている。
ふと、足元に映った自分と目が合った。

それは確かに僕であり、同時に「僕」ではなかった。
刹那、

ここに『彼の存在を感じた。

* * *

気が付くと世界は白と黒のみで構成されていた。

音はただのノイズに成り下がり、伝達にも若干の遅れが生じる。

『—— よお。暫くぶりだな』

脳内に直接響いた、声。

床に映った僕の輪郭が歪んで、違う誰かが現れる。

『彼』は、いつものように冷たい瞳で僕を見下ろしていた。

正確に言えば見下ろしているのは僕なのだけど、『彼』は常に僕の上位に座しているので“見下ろされている”という表現が相応しかった。

『何だ、ここは初めてだな？』

『彼』は境界線の向こう側できよろきよろと辺りを見回した。そういえば、『彼』は昔から知らない場所が好きだった。まだ高校生だった頃、自宅と学校を行き来するだけの僕をつまらなさと嘆いていたような気がする。

『で、今日は何だ？面白い事をしているのか？』

僕は首なし事件の概要を頭の中に再現してみせた。

『ふうん』

もつと興味を示すかと思っていたのに意外と淡泊な反応だった。そんな僕を小馬鹿にするように、『彼』は鼻を鳴らす。

『こっちは年中暇なんだ。首がない人間の一人や六人にいちいち驚いてられるか』

—— までよ。

と『彼』は顎に手を置いた。

『あいつが絡んでいるとしたら、いや、そういうのはあいつらしくはない、か』

一人で思いつき、一人で納得している。

基本的に僕の方から何かを問いかける様なことはない。

この関係はあくまでも一方通行。

『彼』は常に僕の上位にある存在——僕は『彼』の器に過ぎなかった。

『まあそんなビジネスライクな言い方するなよ』

呆れたように僕を竦めながら、『彼』は真っ直ぐにこちらを見た。まるで射抜かれるような視線だといつも思う。

『お前がどう思っているのかは知らないが、俺はお前が嫌いじゃない』

『彼』は言う。

『お前は—— 実に 面白い。お前自身が気付いていないだけで』

そうなのだろうか。

僕には分からなかった。

前にも同じような事を誰かに言われたことがある。

僕はただ、僕として僕を生きていくだけ。

『彼』と違って特殊な能力もなく、柊木沢さんや三七三さんのような才能もない。

『何れは分かるだろう。“その時” が来る事が、お前にとって望ましいかどうかは別として、な』

—— ところで。

と、『彼』は話題を変える。

『叶は相変わらず健在か？』

その問いに、僕は多分そうであろうと答えた。

最後に彼と会ったのはもう三ヶ月も前の話だった。

『 そうか。そう簡単に死なれちゃあ、それこそつまらん話ではあるしな 』

『 彼 』 と叶さんの間には繋がりがあるらしかった。

昔、『 彼 』 は叶さんを “ 限りなく生みの親に近い者 ” と言っていた。

『 そういうことだ。また何か面白そうなことがあったら呼べ 』

『 彼 』 は唐突に全てをまとめ上げると、最後に

『 ——— 誰か来たみたいだぞ 』

そう言い残して僕の世界から滑るように離脱した。

始まり同様、終わりすらも一方的なのは実に 『 彼 』 らしい、と思った。

* * *

断絶された神経。

肉体が現実と虚構の間で迷子のようにさまよっている。

『彼』と交信した後遺症なのだろうか。
会話が終わった後も、僕はしばらくの間、こうして浮遊感を味わうことになる。

音が少しずつ戻ってくる。

柊木沢さんの声が聞こえた。

確かに彼は受付嬢以外の誰かと会話をしている。

男の人、が二人？

色彩が徐々に明確になりつつある中、僕の前に立っている誰かが手を振った。

挨拶をしたかったけれど、体がうまく動かない。

視界の靄が晴れ、筋肉の硬直が完全に解れる頃には、彼らは既に去って行くところだった。

しばらく待った後、

「……俺たちも行くぞ」

柊木沢さんの掛け声で、僕達は十字製薬ビルを後にした。

「お前、さっきのアレ、どう思った？」

外に出た柊木沢さんは機敏な動きで辺りを確認している。

先ほどの彼らがいなくなっただかどうかを見ているのだろうか。

僕の方を見ずに訊ねたその顔は、気のせいかどこか強張って見えた。

「“さっきのアレ”と言いますと？」

「ほら、あの変な刑事のおっさんが言ってた、十五年前がどうとかってやつだよ」

苛立った口調の柊木沢さんに対し、僕は

「すいません。実は、何も聞いていませんでした」

と正直に答えた。

一瞬ばかり口を開けた柊木沢さんは、すぐにいつも僕を見る呆れ

た表情になった。

「聞いてなかったって……。少しもか？ちびつと、もか？」

「はい。最初から最後まで全然」

「おま、そんな堂々と。やる気あんのか？」

「すいません」

叱られたので謝ってみる。

すると柊木沢さんはこのーといいながら、両手で僕の髪をくしゃくしゃにした。

頭の上が鳥の巣のようになった僕を眺め、柊木沢さんは満足げに笑う。

「うむ。お仕置き、完了」

「はあ」

「そんじゃ、俺はミーナちゃんとのデートがあるからここでお別れ
といこうぜ」

柊木沢さんはポケットからごそごそと煙草を取り出すと、そう言った。

「あれ、本当に行くんですか？」

「当たり前だろうが。俺はフェミニストだぞ」

それにな、とお柊木沢さんは顔を寄せる。

「成り行きで知り合ったとはいえ、ミーナちゃんはかなり可愛い」

「はあ」

「そりゃあ優先するのは情報収集だけだな、ちよつとは美味しい思
いをしたところで叶のじいさんだって文句は言わんだろう」

「ええ」

僕にはよくわからなかった。

「というわけだ。明ちゃんへの報告は頼んだぞ」

僕が声をかける前に柊木沢さんは背を向けて、あつという間に雑踏
の中に消えてしまった。

頼まれたところで何も聞いていなかった僕には報告のしようもない。

——とりあえず戻ってみてから考えよう

そう思いながら、僕は柊木沢さんとは反対の方向へと歩き出した。

*

二ノ宮さんには、『彼』との接触を除く全てをありのままに話した。

彼女も最初から何かが掴めるとは思っていなかったらしく、

「ご苦労様でした」

と短く告げると、僕はこの日の業務から解放された。

まだお昼時には早い十一時。

特にこれといった予定もなかったので、三七三さんの実験に付き合うことにした。

瑕奈ちゃんは例の薬の影響で体調を崩したらしく、青い顔でソファに横になっていた。

「そんなに情けない顔するんじゃないの」

非難するような視線を浴びせられた三七三さんは、瑕奈ちゃんの額をばちんと弾く。

「科学の進歩には常に犠牲が付き物なのよ？」

「ううー、犠牲にしないでくださいよー」

「あんたは黙って休んでなさい」

唸る瑕奈ちゃんを残して、僕は三七三さんと一緒に実験室へと入った。

「うふふつ。何をしようか・し・ら？お姉さん、楽しみだわん」

何故か扉を施錠した三七三さんは近くに置いてあつた椅子に腰掛けると、大仰な仕草で足を組み替えた。
そして僕を見る。

「あなたとは一度、じいじいっくり語り合ってみたかったのよねえ」
笑顔に不吉な色が混じっていた。

とは言っていたものの、三七三さんは僕にいくつかの当たり触りのない質問をすると、

「オセロしましょう」

と、どこからか出てきた木製のボードを机に置いた。

結果、三対零で三七三さんの圧勝。

すると今度は、

「モノポリしましょう」

と、またどこから出てきた古い紙製のボードを広げた。

結果、ほぼ全ての土地を買収し、その大半にホテルを建てた三七三さんの勝利。

「これであたしも晴れてホテル王ね。今の時代、石油王よりは将来安泰だわ」

と一人納得すると、取り掛かりたい作業があるからと、オセロとモノポリと人生ゲームを持たされ研究室を追い出された。

その後、大分回復した様子の瑕奈ちゃんと彼女が作ったパスタで遅めの昼食を摂り、珍しそうに見ていたのでオセロとモノポリと人生ゲームをやった。

「せ、先輩！子供が生まれましたっ！」

「それはおめでとう」

瑕奈ちゃんは三種類のゲームの中でも人生ゲームが一番お気に召したらしい。

計四回プレイした中で、瑕奈ちゃんは電腦アイドルになり、スポーツ選手になり、アナウンサーになり、炎の料理人になり、そして最後は常に億万長者になった。

ちなみに僕はずっとサラリーマンで、何故かいつも昇進のチャンス逃した。

「それってすごく先輩っぽいです」

瑕奈ちゃんは真顔で何かを納得していた。

「でもやっぱり結婚して、子供を持って、死ぬまで旦那様とラブイ関係でいられるのは憧れです」

「そういうものなのかな」

「そうですねー。特にお嫁さんは女の子が持つ永遠のドリームですからね！」

夢見るように指と指を絡ませて祈りのポーズ。

「まあ、何よりも好きな人と幸せでいられることは、とても素敵なことですから」

先輩もそう思うでしょう？と、熱い視線を投げかけられた。

「うん。きっと、そうなんだろうね」

そう返すと、瑕奈ちゃんはどうんどうんと首を縦に振って同意してみせた。

五時になり、瑕奈ちゃんが先に帰ることになった。

「今度は三七三さんと柊木沢さんも一緒に人生ゲーム、できるといいですね」

屈託の無い笑顔がエレベーターの向こう側へと吸い込まれていく。

それから三十分ほどただ何もせずにいた僕は、頃合を見計らって立ち上がった。

帰り道、僕はさっき瑕奈ちゃんが言っていたことを思い返していた。

誰かと一緒になるということ。

家庭を築き、子供をもつけ、共に年老いていくという事。

それが―― 幸せ。

それはどうなんだろう、と僕は思った。

僕の中にもそういった願望があるのだろうか。

自分自身を覗き込む行為に突如、足元を掬われるような眩暈に襲われる。

ホントウ ハ ワカッテイルン デシヨウ？

内側から何かがせり上がって来る。

ホントウ ハ ダレモ イラナイン デシヨウ？

「…… やめろ、」

僕の言葉に、隣を歩いていた主婦が眉をひそめて通り過ぎていく。ぴきぴき、と。

亀裂が走る音がする。

「僕は、僕はそんな風には思っ、て、いない」

―― ウソ。

「嘘なんか、じゃ、」

その先がうまく続けられない。

僕は無意識に頭を抑えていた。

世界はやけにしんと静かだった。

消音システムの有効範囲に入ったのだ。

いつの間にここまで歩いてきていたのだろうか？

この距離ならそろそろ自宅が見えてくるはずだった。

じりじりと、一歩ずつ、確実に歩を進めていく。

しかし声は影の如く密接に僕から離れようとはしない。

ニゲヨウ ト イウノ？

ムダ ナ アガキ ダヨ。

ダッテ、

「ハ」「ノ ナカ ニ アル――」

「あ！帰ってきた！」

ふいに聞こえてきた声に言葉の最後がかき消される。

見上げれば、マンションの入り口に見知った顔があった。

「芽衣子……」
めいこ
いちのせ

一之瀬 芽衣子は幼少期からの幼馴染であり、高校までは一緒に通っていた学友でもあった。

「今朝、携帯のほうに電話もしたのに、ちっとも出ないから……」
そこまで言いかけた芽衣子の笑顔が陰る。

「っ、どうしたの！？すごく、顔色が悪いよ」

「いや、ごめん。すぐに、よくなる、から。多分」

そう言ったにも関わらず、芽衣子は心配そうな顔でこちらへ駆け寄ってくる。

紺色のプリーツスカートが風を受けてふわりと揺れた。

「本当にどうしたの？震えてるみたいだし……」

「大丈夫だから」

指摘されるまで震えていることなんて気付かなかった。

芽衣子に肩を支えられ、彼女の温もりを感じたとき、自分という存在が初めて息を吹き返したような気がした。

僕は芽衣子に向かって首を振り、自らの足で立つ。

そして改めて、久しぶり会う幼馴染の顔を見た。

「どうして急に家へ？」

「そ、それは、」

しかしその会話は突然こだました

「ああーーーーー！」

という絶叫に遮られることとなる。

「ちょ、お前！おい！芽衣子ちゃんから離れろっ！至近距離禁止っ！」

「おお。こらまた随分と大胆なこつて。お二人さん、接近戦はお家の中でしような？」

どすどすと近づいてくるのは 真部 鷹巳。

襟足の長い茶髪に少し胸の開いたシャツはいかにも大学生といった感じだ。

胸元や手首に光るシルバーアクセサリーはお洒落のつもりなのだろうか。あまり似合っているとはお世辞でも言えそうにない。

そしてその後ろから大量のビニール袋を引っさげて付いて来るのが、かすかへ まちの春日部 護だった。

鮮やかな緑色の短髪に腕と腹と足、そして背中的大部分が見える露出度の高い服に身を包み、大きな胸を誇らしげに張っている。

二人とも小学生の頃からの付き合いだった。

「なんだ、鷹巳と護もいたのか」

「なんだとはなんだ、なんだとは！」

「そのセリフはまるでアタシたちが邪魔みたいな言い方だな」

「もう！鷹巳くんも護ちゃんも！わたしはただ、」

「てめえが具合なんか悪そうにしているからっ、芽衣子ちゃんは走って駆け寄ったんだぞ！芽衣子ちゃんの体に何かあったらどうする！

！！」

「そのときは責任とって結婚すらいいいじゃねえか」

「んなぬっ！？」

「二人とも……」

噛み付くように食い掛かる鷹巳に片手で圧勝する護、そしてそれを宥める芽衣子。

僕が高校を中退するまで毎日のように見ていた光景だった。

「えっと、今日は一体何の用？」

このままだと永遠に収集が付きそうもないので、とりあえず口を挟んでみる。

「そうだった、そうだった。鷹巳が煩いから忘れてた」

「はあ！？」

「ホレ」

抗議の声を上げかけた鷹巳を無視する形で、護がビニール袋を掲げた。

「酒も摘みも買ってきた。どうせお前のことだからロクなもん食べてないだろうと思って、適当に食材も調達してきてやった」

「はあ」

「…… 相変わらず物分りの悪い奴だなあ」

護は荷物をどさりと地面に降ろすと、左手を強く打ちつけてきた。それは鋭く風を切って僕の耳元を掠める。

護の左肘から下は鋼鉄の義腕だった。

従来の機械義肢と同じく年に数回のメンテナンスと成長に伴う部分交換が必要とされていた。

ただ一般ものと違っていたのは、通常機械義肢と比べて規格外の戦闘能力が備わっていたことと、そして何よりもその表面を人工皮膚で覆われていない点だった。

護はその力と見かけを利用して、昔から女の身で近隣の子供たちの頂点に君臨してきた。

一度隣の中学生に目を付けられたときも、喧嘩を売られたその日のうちに男子中学生十数人を投げ飛ばし、最悪の小学生としてさらに広くその名を轟かせたのであった。

その後、教師と医者にこっ酷く叱られた護は、

「まあ生身の体の方に負担が掛かるから、本当はあんまやんないけどな」

と言って苦笑していた。

けれど一番付き合いの長い鷹巳いわく、護は義腕を手に入れる前から既に最強だったのだそうだ。

「ちょ、ちよつと護ちゃん！」

芽衣子が慌ててその手を制した。

大人でさえ手を焼くような護が唯一その言う事を聞く人物が、何を

隠そう芽衣子であつた。

「護ちゃんの腕は頑張ればコンクリートにも穴を開けちゃうんだから、人に向けたら駄目って何度も言ってるでしょう？」

「いやいや、さすがのアタシもコンクリは無理だ。せいぜい鉄板くらいだろ」

「でも駄目なものは駄目なのっ！」

「だってコイツが、」

「だって」じゃありません！」

芽衣子に見えない死角で、鷹巳が両手を口元に当てて嗤っている。そんな鷹巳に対し、護は拳を突き上げ中指を立てて宣戦布告のサイン。

「もうー！やめなさいってばー！……、あ」

そう悲鳴を上げた芽衣子は、急にバランスを崩し、護のほうへと倒れ掛かった。

「め、芽衣子ちゃん！」

その後姿を見た鷹巳がさらなる悲鳴を上げる。

「ごめんね、ちょっと、はしゃぎ過ぎた、みたい」

切れる息で苦しそうに微笑むと辛そうに護の肩に全身を預けた。線の細い体がさらに弱々しく、そして儚げに見える。

「悪い、アタシも考えなしかった。ちょっと座るか？」

「大丈夫 ……。お薬は飲んできた、から」

ゆるゆると頭を傾ぐ芽衣子を支えながら、護が僕をきつと睨み付ける。

それは睨み付けるといふよりも“視線で殺す”と表現した方が正しかった。

何だかだんだん話が読めてきた。

「…… えっと、とりあえず —— 上がっていけば？」

「そうかあ？　そう言われたら仕方が無い！」

険しかった顔から一転、満面の笑みを振りまく護は芽衣子連れ立って先導していく。

「ほらほら！　お前も、鷹巳も！　ぼさぁつとしてないで億ションに出発だ！」

「お、俺は芽衣ちゃんが具合悪くて休ませるところが必要だから、仕方がなくお前ん家に行くんだからなっ！　じやなきや誰が好き好んでお前の、お前の……！」

「……　おうい、チビツ子。　“ツンデレ”はいまさら流行らんぞ？」
「誰がチビツ子だっ！」

芽衣子の次に身長が低かった鷹巳はそれをかなり気にしていた。
僕たちの中で一番背の高かった譲との差は一向に縮まりそうも無い。

「やれやれ」

笑い、奇声を上げ、突進し、返り討ちにされ、宥め、賺され、また笑顔になる。

久しぶりに賑やかになった玄関ホールを見ながら、僕は燈り始めた街灯の下、彼らの方へと歩き出した。

*

部屋に上がりこむなり、

「ただいまっ！　アタシのセカンドホーム！」

護が謎の雄たけびを上げた。

確かに他の二人と違って、護は何度か家に泊まりに来たことがあった。

ワークブーツを乱暴に脱ぎ捨てると、勝手知ったる様子でずかずかと上がりこみ、そして手にしていた袋の中身を冷蔵庫の中へと放り込んでいく。

その姿を呆気にとられつつ見つめていた残りの二人であったが、護の「なんだお前ら？早く上がれよ」という言葉に、

「お、お邪魔します」

「なんか思ってたよりも広いな……」

恐る恐るその後続いた。

「ではでは、久しい友人との再会を祝して——乾杯っ！」

床に陣取って座った護が音頭をとってビールを缶から直接呷った。そして、

「ぷっしゃー！やっぱビールはアサヒだよな！」

と尖った犬歯を露にして笑った。

ソファアに座っている芽衣子はウーロン茶、その横の鷹巳は糖分の低い炭酸飲料を飲んでいる。

僕はといえば、護にむりやり押し付けられる形でビールを手を取っていた。

「未成年なのに……」

「でもこいつも今年でハタチだろ？問題ないって！」

後ろめたそうな芽衣子を他所に、護はぐいぐいとビールを消費していく。

ちなみに護は同じ学年ではあったけれど、怪我の関係で小学校を一浪していた為にすでに成人を迎えていた。

しかし酒に強いかといったらそうでもない。

この間、泊まる所がないと半ば強引に押し付けてきたときも、持参したビールを数本飲んでソファでそのまま酔い潰れていた。

「まあまあ！芽衣子先生も固いこと言わんの！今日は楽しくいきましようや！」

「…… 譲ちゃん、お酒臭い」

既に酔いが回り始め、無駄に絡み出した譲に芽衣子は冷たい視線を投げかけていた。

乾杯した後は、各自好きに動いていた。

譲はテレビの電源を入れ、あまり面白くもなさそうなお笑い番組を鑑賞している。

足を投げ出した譲の行儀悪さを注意しながら、芽衣子も何だか楽しそうだった。

そんな中、何故か鷹巳だけが僕の方を見てそわそわしていた。

「えっと、鷹巳。大学の方はどうなの？」

「…… べつに。」

僕の言葉にふい、と顔を背けた。

しかしその先にあつたものを視線に入れて、その表情が明るくなる。

「なあ！あれってこのあいだ発売された電脳パソコンだよな！？」

「え、ああ。そうだけど」

「ちょっとだけ触ってもいいか？」

「別にいいけど、人に貰ったまんまでまだ起動もさせてないから、」

「尚更好都合っ」

言うが早いか立ち上がると、おもちゃを与えられた子供のように飛びついて行った。

実際、“玩具”という表現は大方間違いはなかった。

僕たちの中で唯一大学へ進んだ彼が専攻していたのは、電腦関連の電子工学科だと聞いている。

昔から機械のことになると、鷹巳はその才能を発揮した。

父親が古い機械を回収、修理する仕事についていた影響があるのかもしれない。

とにかくその天賦の才は伸びとどまるところを知らず、高校に入った頃には自作のマシンを何台も作り上げ、校内の一室に無断で設置した拳句に学校の回線を経由して政府の電子情報網まで潜り込み、警察沙汰を起こしたこともあったくらいだった。

良くも悪くもその名を電腦網内で知られるようになった鷹巳は、大学進学を前に一度は侵入に成功したその政府機関から直々に破格の待遇で引拔を受けた。

しかしよく話も聞きもせずそれを断ったのは、

「大学の方が色々と縛られずに好き勝手できるから」という理由からだっただけらしい。

何やら熱心にケーブル等々を弄っている鷹巳に、

「なるべく犯罪には発展させるなよ」

と一応、声をかけておいた。

「別にそんなことしねえよ。ただ、この高性能マシンを弄繰り回したいだけっ！」

「でも大学にだってあるんだろ？」

「ああ。でもあそこにある電腦は全部プロテクトが掛かってて、まあ俺にとってはそんなのどうってことないんだけど、勝手に外すとそれはそれで怒られるから手を出さないの」

「なるほど」

いつもは大人びた口調を心がけている節がある鷹巳も、機械の話になると途端に本来の性格が出るようだった。

キラキラと目を輝かせ、どこから取り出したのか色とりどりの工具を使って、僕の電脳を解体していく。

……まあ本人が楽しそうなので、良しとしよう。

「—— あ、あのね」

僕の分のビールと、そろそろ譲に水を与えるためにキッチンへと立つと、後ろから芽衣子が付いてきた。

「どうした？」

「あ、うん。えっと」

以前会った時よりも伸びた髪を弄りながら、芽衣子が言葉を選んで話し始める。

「昨日、朝陽ちゃんあさひと夜月ちゃんよづきに、会ったの」

「ああ」

朝陽と夜月というのは、僕の六つ違いの双子の妹たちの名前だった。

「それでね、朝陽ちゃん。あんまり具合が良くなって——」

「そういえば芽衣子はどうなんだよ」

口に出した後、まずかったかなと少し思った。

別に特に考えて発言したわけではなかったけれど、芽衣子にしてみれば僕が話を逸らしたように感じただろう。

それでも芽衣子はそれについては触れることなく、気丈な笑顔をつくった。

「うん。まあまあ、かな？お薬は飲まなきゃいけないけど、入院とかはしなくていいし」

「そう」

「それにね、この間から新しい治療も始まって、それがうまくいけば通院とかもしなくていいし、大分普通でいられるんだって」

「うん」

芽衣子が何を思っているのか詳しい事は知らなかった。

ただ、小さい頃からよく体を壊して学校を休んだり、時々長期の休みを利用して入院したりしていた。昔から色白で細く陽炎のように危うい所がある芽衣子はそのことでよくいじめられていた。

性格も容姿もまったく異なる芽衣子が譲と仲良くなったのは、譲がそのいじめっ子たちをぶっ飛ばしたことが切っ掛けだった。高校を卒業してからは実質上、家での静養を強いられている。

「本当は短大でもいいから通いたかったんだけど、お父さんもお母さんも心配性だから」

そう言つて、芽衣子は諦めたように微笑んだ。

彼女の父親は五大財閥に名指される一之瀬財閥の長男で、僕の父親の学生時代からの友人だった。

その関係で僕はまだ就学前の芽衣子と出会っている。

そのときの芽衣子は今の姿からは想像もできないくらい活発で、自己顕示欲の強い子供だったように思えた。

あの日のことを、果たして芽衣子は覚えているのだろうか？僕にとってそれは――なかなか忘れ難い記憶だった。

*

「そろそろお迎えが来る時間だわ」

十時を前に芽衣子が小さく呟いた。その声に床でごろ寝をしていた譲も起き上がり、うーんと伸びをした。

「おお。もうこんな時間か」

早いうちから水を飲ませていたおかげか、どうやら大分酔いは引い

ているみたいだった。

「おい、鷹巳。いつまでごちゃごちゃやってるつもりだ？」

「もうちょっと。このコードとこれと、これを繋げて――― できた！」

得意気な顔で立ち上がった鷹巳は、僕の方を見ながら電腦を指差した。

「これ、メンテナンス終わったから、電源入れれば使えるぜ」

「ありがとう」

「お前…… そんな恩着せがましい事言つて、ただ遊びたかっただけだろ？」

「そうとも言っけどな」

「ったく」

僕と鷹巳は譲に命じられて、ほぼ譲が一人で築き上げた宴会の残骸を片付けた。

「冷凍庫にチャーハンとか、冷蔵庫に惣菜とか入ってるから。あ、あとビールな」

「うん。ありがとう」

こう見えても譲はかなり面倒見がいい。

特に芽衣子の事となると、過保護と称してもいいくらいだった。

「お前もあんまり芽衣子ちゃんに心配かけんなよ」

すっかりいつもの調子に戻ってしまった鷹巳は、作業で黒くなった指先を僕に突きつける。

そしてすぐに譲にかっこつけんなよテーマと殴られていた。

最後に靴を履いた芽衣子が冷たい両手で僕の手を包んだ。

「あの、また電話するね？」

「うん。芽衣子も、体には気をつけて」

「ありがとう」

それじゃあ、と一言残して芽衣子が離れ、友人たちの顔は宵闇へと

消えていった。

「……何か、疲れた」

久しぶりの静けさに僕は欠伸を飲み込んだ。

風呂に入ってさっさと寝よう。

そう思い腰を上げると、ふいに部屋の片隅にあった電腦が独りでに起動した。

「鷹巳が変な設定にでもしたのかな？」

傍に寄って電源を切ろうとすると、画面はいきなり黒くなり、そして――

< 久しぶりだな、カイ >

見慣れた顔が映し出された。

感情の薄い目。

五十も半ばを過ぎているとは到底見えない相貌。

黒い髪をオールバックに撫で付け、身を包んだ紺色のスーツには皺ひとつ無い。

「お父さん」

三年振りだというのに、何の違和感もなかった。

その間にも度々ニュースで見かけていたからかもしれない。

< 単刀直入に言おう。朝陽の具合があまり芳しくない >

再会の余韻に浸ることも無く、父はただ用件だけを述べる。

「それはさつき、芽衣子から聞きました」

< 一之瀬のお嬢さんがいらしていたのか >

「はい、さつきまで」

どうやら親友の娘の名前も憶えていないらしい。

そう考えてみると、僕はこの人に誕生日を祝って貰った記憶がなかった。

多分、彼にとってそれはどうでもいいことなのだろう。

< 私も別にお前に帰ってきてほしいわけではない。ただ、朝陽が
ごねるものでな >

そんな父も、僕の妹たちには異常なほどに甘かった。

僕の前に予告もせず現れたのも、多分そんな理由からだろう。

別に僻んでいるわけじゃない。

僕にとつても“父”という存在は肉親というよりも、一緒に暮らしていた他人という認識が強かった。

< 顔を見せてやれ。近日中にだ >

これは懇願ではない。命令だ。

「ええ、じゃあ明日にでも家に寄ります」

逆らえば強制的に連行されることは分かっていたことなので、僕は素直に応じることにした。

< いや、水曜日がいい >

ふと何かを思い出したように、父は言った。

< 水曜日なら都合がいい >

—— 私は家にいないからな

そう補足すると父の顔が消え、
画面は突然黒くなりそのまま電源ごとブツリと落ちた。

*

父との邂逅の後、

僕は何も考えずに湯に浸かった。

昇り立つ湯気を見ながら、明日鷹已に電話して
パソコンに防壁を張ってもらおう、と思った。

こつも簡単に日常を侵略されると、迷惑というよりは面倒だった。

そして風呂から上がると、きちんと髪も乾かさないままベッドに倒れこむ。

時刻は既に “今日” を “昨日” とすり替え、いつの間にか “明日” をつれて来ていた。

—— 今日こそは時計が鳴るまで眠ってみよう

意識が薄れていく中、誰にとも無くそう誓った。

しかし浅いまどろみはまたしても七時を前にして破られる。

「いきなりビンゴだ」

柊木沢さんから掛かってきた電話は、例の事件に関する重要参考人を“保護”したという報告だった。

04・＜ 柊木沢 啓人に与えられなかった選択肢 ＞

04・＜ 柊木沢 啓人に与えられなかった選択肢 ＞

そうだな。

少しかだけ昔の話をしよう。

幼い頃の俺はまるでお城のような豪邸に住んでいた。
どうしてかは聞かないでほしい。

俺の親は裕福で、そんな風にしか金の使い方を知らなかった。

バラや石楠花しゃくなんげが咲き乱れる庭。

庭師を何人も雇って丹念に調和されたその空間。

母はいつも寝室の大きな窓から微笑みを絶やさず、花々の育みを見守っていた。

そして俺は、そんな母の横顔を眺めることが何よりも好きだったのだ。

俺の母は美しい人だった。

父との仲も睦まじく、二人が寄り添っている姿を見ると、使用人たちは感嘆のため息を吐いた。

彼らは俺の自慢だった。

世界は一寸の綻びも無く完璧で、俺の目には全てのものが光り輝い

て映っていた。

今だから言える。

そんな世界はどこを探しても存在しない。

父はよく怪我をした。

乗っていた車が整備不良で事故を起こし入院するなんてことは、日常茶飯事だった。

怪我だけじゃない。

同じものを食べているのに何故か父だけが食中毒になったり、急に具合が悪くなつて寝込む姿を何度も目にしていた。

その都度、母は食事も摂らずに父の傍らで看病を続けた。

それは甘えた盛りの俺としては、あまり喜ばしい状況じゃなかった。

また父が体調を崩し、母が付きつきりで面倒を看ていた。

普段なら寝る前に母が読んでくれるはずの物語もおあずけで、就寝時間になるとメイドや執事がやってきて簡単な挨拶をするだけの夜が続いた。

ある晩、俺は真夜中に目が覚めてしまった。

子供用にしては広すぎた部屋はしんと静まり返り、どこまでも濃厚な暗闇に俺は怯えた。

夜中に出歩くことは禁止されていたにもかかわらず、俺は母の温もりを求め部屋を抜け出した。

ぎしぎしときしむ床を踏みながら息を殺して歩いた。

両親の寝室前に来ると、ようやく安堵に胸を撫で下ろしつつ、その扉に手をかける。

扉は開いていた。

ほんの僅かな隙間から覗き込むと、蝋燭の明かりの中、何かの作業をしている母の横顔が見えた。

その顔はオレンジ色の炎に照らされて怪しく歪んでいた。手に握った袋には何か白い粉のようなものがある。

父はベッドの上でぐったりと眠っていたようだった。

母はその白い粉をコップの水に混ぜると、寝ている父を揺り起こし、額の汗を拭きとりながらそれを飲ませた。

俺は何もかも見なかったことにして、自分の部屋へと戻った。

次の朝、いつもの通り微笑む母と顔色の良くなった父を見て、本当に夢だったのではないかと錯覚した。

しかし背中を感じた冷たい汗の記憶がそれを強く否定する。

もしかするとあれは父の為に用意された薬だったのかもしれない。俺は自分自身に言い聞かせ、しばらくすると本当に納得してしまっただのか、その夜のことはすっかり忘れてしまっていた。

あの日、母が父を窓から突き落とすまで。

それは本当に一瞬のことだった。

寝室の窓辺に座っていた母が父を呼び寄せ、何かを指差し見せようとしていた。

身を乗り出して目を細める父の背後に立つと、母は何の躊躇いもなくその体を突き飛ばしたのだ。

悲鳴を上げる間もなかった。

父は頭から落下。

寝室は三階にあり、何かが潰れる嫌な音を聞くまでも無く、父の存命は絶望的だった。

それでも俺は窓に駆け寄って地上の惨事を見とどけた。

問いただすように母を見上げると、彼女は今まで見たどの顔よりも

嬉しそうに笑っていた。

（しかたのないことだったの）

母は言った。

（わたしはさいしょから あの人のことなんて 愛していなかったから）

その後、駆けつけてきた使用人に母は取り押さえられ、どこかへと連れて行かれた。

見たことも無い親戚と呼ばれる人から、母は警察に引き渡されるわけではないと聞かされた。

理由が分からなかった。

母は天井裏の鉄格子に囲まれた部屋に隔離され、誰との面会も許されなくなった。

俺は一度だけその部屋に入ったことがあるから分かる。

その部屋の窓からはあの美しい庭を見ることができない。

それはあまりにも可哀想だと俺は知らない親戚の人に懇願した。するとその醜い顔をした男は、

—— お前の母さんは狂ったんだ

家の名前に泥を塗るようなキチガイになっちまったんだ、と忌々しげに吐き捨てた。

そうか。

俺は頷いた。

心は穏やかだった。

妙に納得し、全てを理解した俺は ——

だから同じように 狂って やることにした

そのとき俺は十三歳。

幼かった両手では何もかも呪うように破壊することしかできなかった。

* * *

七時を少し回った頃、十字のビルからミーナちゃんが出てきた。

「ごめんなさい！お待たせしてしまって、」

息を切らしながら走ってくる彼女は白衣ではなく、淡い水色のシャツと白いフレアのスカート姿で、昼間とはまた違った印象だった。

「全然。いま来たところ」

地面に散らばった吸殻をさりげなく足で隠しながら、俺は彼女に向かって微笑んだ。

途端に頬を染める姿は、俺にとって久しく新鮮だった。

「じゃ、どこかご飯でも食べに行きますか」

「はいっ」

彼女に歩調を合わせつつ、俺たちは夜の東京へと繰り出していった。

食事は無難にイタリアンをチョイスした。

フレンチだとそれはそれで洒落なのかもしれないが、堅苦しすぎて俺は好きじゃない。

それにこてこての三ツ星レストランよりは、少しフランクな雰囲気のほうが色々聞きやすいだろう。

「私も大久保さんおおくほについて、そんなによく知っているわけじゃないんです」

ペペロンチーノをフォークで巻き取りながら、ミーナちゃんと言った。

ちなみに大久保というのが例の被害者の名前だった。

「確かに研究寄りの方だったので多少面識はありますが、研究チームも違いますし、お見かけたことも少なかったですから」

「何でもいいよ。人柄とか、趣味とか。何なら噂でもいい」

「そうですねえ」

ミーナちゃんは困ったように眉間に皺を寄せて、ガーリックブレッツドを掴んでいないほうの手で眼鏡の傾きを補正した。

「えっと結婚しているってことと、お子さんがいらしたって事。あとは、そうですね。とても几帳面な方でした」

「ほお」

正直、最後の“几帳面である”ということ以外、全て存知の情報だった。

「すみません、あまりお役に立てなくて……」

マルガリータピザのトマトソースを口の端につけながら、小さい体をもう一回り縮めてしゅんとする。

「別に気にすることないよ」

「ひゃっ！」

それを指先で拭くと、ミーナちゃんは見ているこっちが恥ずかしくなるくらい取り乱し、危うくグラスの水を倒しそうになる。

こんなに純情だとそれはそれで手が出しにくくもあった。

……　　なんか俺、いけない人みたい

心の中で苦笑しつつ、俺はハウスワインを呷った。

「――　　あ、そういえば、」

デザートのティラミスを口に運んでいる最中、ミーナちゃんは思い立ったように顔を上げた。

「これは本当に噂なんですけど、大久保さん、もしかすると何か変な宗教に関わっていたかもしれません」

「宗教？」

意外なワードに、俺はダブルエスプレッソのカップを置いた。

「ええ。何か最近よく名前を聞く、ええっと、後世会とか創世会っていう名前の宗教があるみたいなんですけど、それがうちの会社でちょっとしたブームになってるんですね」

私は知らないんですけど、と俺のエスプレッソに添えてあったビスコッティを摘む。

「何でも人間本来の能力を取り戻してくれる教祖様みたいな人がいて、信者になるとその教祖様の恩恵が受けられるようになるんですって」

「へえ」

「なんかどこにでもありそうな感じですけど、うちの部署内に随分と熱心に布教してくる男性がいて。私の友達もしつこく勧誘されて困ってました」

「そうなんだ」

少し気にならないこともなかった。

とりあえずその何たら会の事を明ちゃんに報告して、今度はその男に直接話を聞けばいい。

「―― 不思議ですね」

「ん？」

見れば、目の前の彼女は優しく微笑んでいる。

「私、アキさんのこと何にも知らないのに。今日会ったばかりの人なのに、こんな風にお話して、ご飯と一緒に食べて。こんなこと、いつもなら絶対しないのに」

フラグが乱立していた。

今なら少し甘くお誘いの言葉を掛ければ、二つ返事でお家にティクアウトできそうな雰囲気だった。

「でも、俺にするのはやめておいた方がいいと思うよ」

「どうしてですか？」

適当に誤魔化したつもりが逆に真剣な面持ちで問われ、俺は返答に詰まった。

そして悩んだ挙句、

「俺は―― 悪い男なんだ」

…… 相当バカみたいなことを口走っていた。

「ああ。それは分かります」

しかしミーナちゃんはさっぱりと明るい口調で同意した。

「だってアキさん、受付の女の人たちにもちよっかい掛けてたし」

「いや、あれはだから取材というか、調査というか、」

「いいですよ、別に。やっぱりアキさんで、どこか私の兄に似ている気がします」

「お、お兄さん……」

ティラミスのスポンジを一片も残さず綺麗に完食してしまったミーナちゃんは、スプーンを銜えたまま笑った。

その顔を見て俺は改めて心に決める。

―― この子に手を出すのは止そう、と。

*

「今日は有難うございました」

食事を終えて、俺とミーナちゃんは彼女の寮の前に立っている。女子寮に住んでいる彼女には門限があるのだそうだ。

それを聞いて、俺は残念なような良かったような気持ちになっていた。

いざそういう事に発展したとして、「私、実は初めてなんです」なんて言われたりしたら、二度と立ち直れそうにも無い。

そんなことを思われているなんて露知らず、ミーナちゃんは申し訳なさそうに俺を見た。

「対してお役に立てなかったのに、ご飯までご馳走になって」

「ああ、そんなことは別にいいんだ。あれは俺の気持ちだからそれにどうせ経費で落とせる金なのだ。」

「でもほとんど私が食べたのに……」

「あれくらい気持ちよく食べてくれるとこっちとしても奢る甲斐があるよ」

しかし確かに予想の三倍は上回る食べっぷりだった。

この小さな体のどこに溜めておけるといふのだろうか？

「じゃあ、私はこれで」

こんなこと昼間も言いましたよね、と門の前で笑う。

「また何か分かったら連絡してくださいね。私も興味有りますから」

「ああ」

「それから、雑誌。私これから毎週買いますから、頑張ってくださいね」

「……別に無理しなくてもいいよ」

仕方がないとはいえ、俺は彼女に嘘を吐いているのだ。

仄かな罪悪感に胸が痛む。

「では、おやすみなさい」

そう言つて、彼女が門を潜ろうとした時、

「きゃっ！」

突然反対側から歩いてきた男にぶつかった。

小柄な体はいとも簡単に弾き飛ばされる。

「おい、大丈夫か？」

とミーナちゃんを助け起しつつ、俺はぶつかってきた男の方に意識を注いでいた。

黒いキャップを目深に被りその上サングラスまで掛けている。

寒くも無いのにダウンジャケットを羽織っていたのは、さしずめ体格を隠すためだろう。

そこに居たのはAランク級の変質者だった。

「くそ、」

舌打ちをした男は激突の衝撃に悪態を吐いた。

ふとその声に、ミーナちゃんが目を見張った。

「え、藤沢さん……？」

「っ！」

男はその名前に一瞬動揺した素振りを見せ、まるで全力で肯定するように走り去って行った。

「何、あれが彼氏？」

「ばっ！違いますよ！同じ部署にいる人です。あ、そうです」

ミーナちゃんは男が消えた方向を指差す。

「あの人さつき言ってた、宗教の勧誘をしてくるっていう人です」

聞くが早いか俺は駆け出していた。

確証は無い。

例の宗教に傾倒していただけで、事件とは何も関係もないのかもしれない。

もしかすると本当に変質者だという可能性もあった。

しかし俺の直感は、あの黒帽子をかぎりなく濃厚な真つ黒だと告げている。

何度かあった別れ道を感じただけで選択し、ひたすら走った。

すると、

繁華街に出た道の片隅で呼吸を整えている男の姿があった。

好都合な事に、夜の街ははしゃぎたい盛りの若者たちで埋め尽くされている。

その影にうまく隠れつつ、俺は男のすぐ脇まで接近し、その襟首を掴んで素早く細い路地まで引きずった。

「な、！」

サングラスが落ちる。

その奥に控えていた両目が驚愕で見開かれる。

血走ったそれが瞬くのを待たずに、俺は男の腹を目掛けて右フックを繰り出した。

「か、はっ」

唾液が飛び散る。

男は抵抗することなく壁にもたれ、ずるずると下がり落ちていった。その頭に片足を置き押さえつけると、俺は男を問いただす。

「あそこで何をしていた？」

「…… お前は、誰、だ？」

「質問には簡潔に答えような」

靴先で頬を蹴った。

少し力を籠め過ぎたのか、男の唇から血が滲み、頭からキャップが転がり落ちた。

どうも加減がうまく出来ない。

さっきのアルコールのせいだろうか？歳のせいでできるほど俺は老成してはいなかった。

「ああ、すまない。悪気は無かった。けど俺は男には容赦がないんでね、」

逆らわないでくれよ、といいかけて、俺はそれを止めた。

全神経という神経が研ぎ澄まされる。

「おまえ、」

俺は露になった男の頭髮を見て、瞳孔が急速に開いていくのを感じた。

その髪は安っぽい電灯の光を浴びて張り詰めたピアノ線が如く、煌いていた。

俺よりも少し年上くらいの男の頭は、歳には似つかわしくない白髪だった。

専門的な知識がない俺にでも、完璧なその白は人工的には作り出せそうもないと理解できた。

「その髪はどうした？」

聞こえていないのか、男は必死に溝をまさぐり落ちたキャップを探している。

その口は小さく、けれど忙しく動いて何かを呟いていた。

俺は聴覚を集中させてみる。

「…… まった。晒してしまった。曝してしまった。見られてしまった。視られてしまった。観られてしまった」

「見られることがそんなに不味いのかよ」

「お前のような下賤の者に説明する義理は無い！」

突然、男は前歯を剥き出して糾弾した。

「お前のように真理を理解しない者がっ、 “あの方” の恩恵も得ら

れないような下等な人間がつ、私のように選ばれた存在に意見を求めるなど論外だ！ただ腐り廃れ朽ちていくだけの劣悪な生命のくせにっ！」

「…… そういうセリフって小物っぽいぜ？」

口ではそう言ってみたものの、ムカついていないわけではなかった。俺は男と視線を合わせるためにしゃがみ込んだ。そして、

「俺さ、このまま行くと—— あんたのこと、殺しちゃうかも」

思ったことを口にする。

「っひ！」

「何だよ？選ばれた存在のくせに俺が恐いのか？」

俺の中の血流が瞬間冷却されていくのを感じた。

あの時と、同じ。

このまま行くと壊れてしまう。俺が、狂ってしまう。

だからその前に、こちらが壊さなければ。

「……」

俺は男の首筋に手を掛けた。

そして徐々に力を入れていく。

「が、はあ、あ、ぐっ」

「大丈夫。苦しいのなんて一瞬だ」

俺は男の瞳を覗き込んだ。

「すぐに—— 何も分からなくなる」

「っ……！」

硬くなった肉塊。

血の河は黒ずみ、温もりは失われていく。

誰も動かない、何も息をしない静寂を、俺は知っていた。

「…… なあって、な」

俺はパツと手を離れた。

「俺もさ、あの頃よりは大人になったってことかな？」
誰に向かって言っているというのだろう。

恐らくは自分自身、今の「俺」ではなくあの日の「俺」へ。

「さて、」

俺は立ち上がって、男の姿を見下ろした。

意識が飛んでしまう間に失禁したようで、ズボンの前が濡れている。

「これを運ばなきゃなんのは、さすがに抵抗が……」

どうしたもんかと思いつつ、俺は携帯電話を取り出して、慣れた手つきで明ちゃんの短縮を押していた。

*

下着を剥き出しにした男を抱えて本部に辿り着く頃、明ちゃんは既に到着していた。

何事も迅速に、を心にかけているだけはある。

個人的な話としてはパジャマに寝ぼけ眼でやってくる姿を期待していたが、昼間の完璧さはどうやら夜も乱れることは無いらしい。

「これが先ほどお話にあった男ですか」

汚れたズボンは申し訳ないが脱がして捨ててきた。

赤くなる様子も照れる素振りもなく、ただ淡々と現状を視認する明

ちゃんに俺は苦笑するしかない。

「創世会、と仰いましたね」

「ああ。確かミーナちゃんはそんな名前だって言ってたな」

「私も聞いたことだけならあります。確か丸の内の一等地に建つビルを買い取ったという話題が、数ヶ月前の新聞に掲載されていました」

「へえ。お布施でがつつり儲かってんのか」

「それとも、どこか大きなスポンサーがついているのか」

明ちゃんは目を細めた。

「とにかく男が目覚め次第、尋問の必要性があります。質問事項はこれから私が作成します」

「んじゃ、俺はそれまでこいつを見張りながら眠るとするぜ」

さすがに朝から活動していた為か、体が休息を要していた。

「柊木沢さん」

「…… はい？」

そんな折、改まって名前をよばれた俺はなんとなく背を正す。

「私は一言も“貴方に尋問をお願いする”と申してはおりませんが」

「え、いやしかし、明ちゃんには少し不向きな仕事かと、」

「私が行うとも言っておりません」

「じゃあ ……」

三七三は人体実験ができると喜びそうだったが、それでは尋問にはならない。

第一この男は三七三が一番毛嫌いしているタイプの人間だった。

瑕奈は考えるまでもなく論外。

だとすると。

いや、まさか。

「―― アイツ を呼ぶのか」

明ちゃんは無言のままだった。

それが何より肯定を裏付けている。

「本気なのか？」

「そのために彼はここに居るのです」

抑揚の無い声。

「なあ、そんなことしなくても俺がうまくやるからさ。何もアイツを使わなくても、それに、」

「叶もそれを望んでいますから」

「……」

俺を黙らせるにはそれだけで十分だった。

「分かった。でもあいつに連絡するのは夜が明けるまで待ってくれ。朝になったら俺から電話してみる」

「いいでしょう」

短く言い残すと、明ちゃんはピンヒールの踵をカツカツと鳴らして自室へと引っ込んでしまった。

「まいったなあ」

俺はソファアに深く腰掛けながら、明日の朝が永遠に來ないことを祈った。

*

それでも繰り返し日は昇る。

灰色の厚い雲の中、確かに太陽はそこ^{それ}にあるのだ。

俺はとりあえずあいつの携帯に掛けた。

四回ほどの着信音の後、いつもより擦れた声であいつが応じる。

「どうしてこういう時に限って出るんだよ？」

「…… はい？」

「いいや、こつちの話」

俺は手短かに用件を伝えると、すぐに来るようにとだけ告げると会話を終えた。

これからあいつに課される事を思うと本当はもつとなにか言つべきことがあつたようにも思えたが、それは俺にとって些か荷が重かつた。

「……。」

何だか自己嫌悪に陥る。

イライラしたので、三七三も叩き起こしてやることにした。

開口一番、いつもよりも随分と男らしくだったのでそれを指摘すると、あいつはすぐに出来損ないのオカミみたいな声を出して俺を罵つた。

…… 呼ぶんじゃ、なかった。

さらに疲れることとなつた俺は、とりあえず“尋問”に使用されるであろう一室に男を運ぶことにした。

「おはようございまーす」

最初に現れたのは、呼んでもいない瑕奈だった。

英文字の入ったトレーナーに短いスカートを履いた姿は、いつもならそれなりに和みを与えてくれるのだが、今日だけはお呼びじゃなかった。

「…… お前、何でこんなに早いんだよ」

「ほあ？だって三七三さんが面白いことがあるから来いって」

「あのオカマ」

舌打ちを漏らした俺を、瑕奈は心配そうに見る。

「あの、あたし邪魔でした？」

「いやそういうわけじゃないんだが」

「そうよ！一人だけ仲間はずれにしたら可哀想でしょう？」

俺の疲れを増幅させる奴が来た。

三七三は色つきのサングラスに胸元が深く開いた黄色いシャツを着ていた。

「なんだお前は。リゾートにでも行くつもりか」

あまりに場違いな格好に、俺は思わず叫んでいた。

それを受けた三七三は、

「何よ、一晩中汚い男の股間ばかり見てたんでしょ？だからちよつと潤いを提供してあげようと思ってねえ」

無駄に肢体をくねらせて、色気を演出していた。

瑕奈は既に放心状態である。

「こ、股間……」

「誤解するな、俺はだな」

「百聞は一見に如かず、よ。実際に見てみれば分かるわ」

にやりと怪しい顔でそう言つと、三七三は瑕奈の手を引いて一番奥の小部屋へと入っていった。

刹那、

「にぎやああああー！！！！？」

瑕奈の悲鳴が響く。

勢いをつけて飛び出して来た瑕奈は、半分涙目で俺のシャツを掴んだ。

「ひ、柊木沢さんっ！お部屋の中に、なんか縛られてパンツ一丁で頭に黒いビニール袋を被せられた人がいるんですけど……！！」

「ああ。見たまんまだな」

「あの人、何なんですか!？」

俺が答える前に、三七三が実に苦い顔をしてこちらへ戻ってきた。

「想像以上の汚物ね。見るに耐えないわ」

「その割にはじっくり見てみたいじゃねえか」

「あれ、あんたが縛ったんでしょ? 無粋だからあたしが直々に芸術的、かつエロティックな束縛を試してあげようかとも思ったんだけど、結局汚くて触れなかったわ」

三七三はブランド物のハンカチで両手を拭った。

「それはそうと、随分犯人が早く見つかったわね」

「まだ犯人だと決まったわけじゃねえよ。ただ怪しいっただけだ」

「ま、それは本人に聞いてみれば分かるでしょう。で? あんたがやるんでしょう?」

「それは ……」

「すみません、遅れました」

まだ幼さを残した声。

青年と少年のちょうど中間あたりに属する奴は、寝癖なのか後ろ髪が跳ねていた。

皺のよったTシャツにジーパンと適当に着てきたことが丸分かりな格好だった。

「……?」

どうやら俺の視線に気付いたようだ。

その異様さに鞆の紐を持ったまま、入り口付近で停止する。

「ちょっと、ちょっと! まさか例のアレをやるつもりじゃあないでしょうね?」

やっと事の重大性を理解した三七三が耳元で俺に囁きかける。

俺は無言で頷くことしかできなかった。

「うっそ！え、本気で？今から？どうしましょう、まだ心の準備がっ！」

「…… 何でお前が赤くなるんだよ」

「だって滅茶苦茶好みだもの、アノ子。ドSだし！」

「あのー、何のお話ですか？」

三七三の痴態を横目で捉えつつ、瑕奈が俺に尋ねた。

「今から誰か来るんですか？もしかして、ドクター、とか？」

「いや、それはないから心配するな」

とりあえず不安そうにしていたので、その小さな頭を撫でてやった。とは言っただものの、できることならこいつには尋問の様子は愚か、アイツの存在すら知ってもらいたくはなかった。

何か理由をつけて追い出せないものか考えてみたが―― 少し遅かったようだ。

「いらっしやって頂けたようですね」

明ちゃんが手に質問事項を記した紙を持って現れる。

「あ、明さん。おはようございます」

「おはよう、明」

「おはようございます」

義務的に口にしたものの、明ちゃんの視線は完全に奴へと注がれていた。

そしてそのまま奴に近づくと、

「これが今回の尋問に際する質問事項です」

「はい？」

受け取ったものの、よく状況が掴めていないのか奴は目の前の人物と紙とを交互に見比べていた。

「これを、僕が？」

「正確には“あなた”ではなく、あなたの中にいる“もう一人”に、です」

「―― ああ」

その言葉の中に落胆や困惑の類は一切含まれていなかった。

ただ周りを眺め、自由な方の自分の手を見つめ、そして顔を上げる。

「昨日も言いましたが、僕は僕の意味で『彼』と通じているわけではありません」

「分かっています。でも、やってみてくださいね？」

「…… はい」

そう呟くと、奴はそのまま深く目を瞑った。

部屋全体に重い沈黙が降りる。

「ちよつとあの、柊木沢さん？三七三さん？」

状況がみえていない瑕奈だけが、きよろきよると辺りを窺っていた。

明ちゃんは奴から離れ静観中。

興奮を押し殺すことでいっぱいなのか歯を食いしばっている三七三。何も分らない瑕奈と、密かに右手を忍ばせポケットナイフの柄を握っている俺。

その中心に―― 奴が居る。

ふいに閉じられていた両眼が開かれる。

思わず身構えるも、ぼうつとした表情であること以外、変化がなかった。

微妙に火照った顔を明の方へ向けると奴は、

「…… すいません。やっぱり駄目みたい、です」

些か申し訳なさそうに呟いた。
しかし、

「、あ。」

瞬間、

すっと何の前触れもなく頭が後ろ向きに落ちた。
それに続くように体がぐしゃりと床に崩れる。

「せ、先輩っ！」

瑕奈が思わず駆け寄った。

力の無い肩を揺ると、奴はその顔をまるでスローモーションのよう
にゆっくりと持ち上げ、
そして

「…… まあそう慌てるなって。別に出ないとは言っていないだろう
が」

片方の唇だけを吊り上げて、凶悪に笑った

「せんぱ、い？」

「ん？」

驚いた瑕奈は反射的に後ずさる。
そんな様子を見て、

「お前は見たことのない顔だな」

奴は、
いや――『終児^{しゅうじ}』が、瑕奈の頬に手を掛けた。

*

「先輩、ですよね？」

まだ理解できていないのだろう。

頬に添えられた手に困惑しながらも、瑕奈はそいつに向かって微笑みかけていた。

「どうしちゃったんですか？そんな、見たことない、とか」

対して『終児』は、

「お前は初めて見る。だから見たことがない顔だと言っている」

「そんな、じゃあ、えっ？」

「……しつこい」

『終児』が、動いていた。

そう脳が認識する頃には既に『終児』は両手でがっちりと瑕奈の頭を捕縛していた。

そして俺を含む誰もが行動に移る刹那――

『終児』が 瑕奈の 中 を覗きこんでいた。

「あ、あ、ああ、あ、」

瑕奈がぶるぶると痙攣を始める。

俺はナイフを取り出そうとするも、両腕が動かなかった。

それどころか体中の筋という筋がまるで糸に絡められたかのように凍り付いていた。

『まだ始めたばかりだ、邪魔をするなよ』

脳内に直接伝達される声。

「く、そっ！」

見えない壁に立ち向かうように足掻く俺の目の前で、瑕奈は両眼から大粒の涙を流し、口元をわななかせながら、確実に壊れていく。最悪の結果が脳裏にちらつく中、

「やめなさいな」

『終児』と瑕奈の間に三七三が割って入った。

「お前に用は無い」

「ええ、分かっているわよ。けれどこれ以上この子を虐めるのはやめてちょうだい」

「どうせ俺が手を下さなくとも」

「—— だからそれも分かっているわ」

『終児』の言葉を遮るように三七三は瑕奈を抱きしめた。

「分かっている。分かっているわよ、だからもうやめてちょうだい」

「…… ふん」

つまらん、と間の抜けた声がした。

そしてその瞬間、俺の体は自由になり、瑕奈は三七三のほうへと倒れこんだ。

「っ、お前は」

「ただ遊んでやっただけだろう」

不服そうに呟くと、『終児』はくると明ちゃんを振り返った。

「お前とも久しいな」

「…… 何のことでしょうか」

瑕奈が侵食されている間、明ちゃんだけはただじっと成り行きを見ているだけだった。

『終児』はそんな彼女の反応を鼻で笑って一蹴する。

「で、俺は誰を “ 尋問 ” すればいい？」

「…… こっちだ」

これ以上こいつの好きにはさせないよう、俺は案内役を買って出た。しかし、

「ああ、別にいい。俺は俺の勝手にやる」

言うが早いか、『終児』は教えられてもないのに勝手に奥へと進んで行った。

「って、おい！」

慌ててそれを追うと『終児』は男のいる小部屋へ入っていくところだった。

中では既に男の目隠しが外されていた。

突然の光に眼を細めながら、それでも男は唾を飛ばしつつ『終児』に食って掛かった。

「な、お前は誰だ！？ここはどこだ、これは暴行監禁罪に問われる

ぞ！」

「そうだろうな」

言い終わるが早いか、男の体は縛り付けられている椅子ごと壁へ叩きつけられる。

「がはあっ！」

男は激しく呻いて血を吐いた。

「おい、殺すなよ」

「そんなことはしない。人は“生”という苦しみをもつと存分に味わうべきなのだ」

怯える男に近づきつつ、『終児』は涼しい顔でそんな事を呟いた。

—— 成程、それがこいつの哲学ってわけ、か

俺がどうでもいいことを悟っている間に、『終児』は先ほど瑕奈にしたように男の顔を掴み、その瞳を覗き込んでいた。

「ひ、やめろ！何をする！」

「今度は止めるなよ」

始める前に『終児』は俺を見て、にやりと笑った。

そして、『終児』は男の内部へと介入を開始する。
もちろん俺が止めることはなかった。

男の絶叫が、高く部屋中にこだました。

*

奴 —— カイ と出会ったのは二年前。

俺がこの得体の知れない集団の仲間入りをしてから、初めての新人だった。

最初の印象は“普通の子供”だった。

少し話してみても必要最低限の受け答えをするだけで何の面白みも無い。

三七三はやつと若い子が来てくれたと大喜びだったが、俺には表情も乏しいつまらない奴だという認識しかなかった。

そんなある日。

カイが通うようになってから数日、たまたま俺と奴だけが残されたときがあった。

特にこれとった共通点もない相手と会話が弾むわけがない。

何もすることがなかった俺は、ソファアーにふんぞり返って昼のワイドショーを見ていた。

しばらくして奴がいたデスク方面に目をやると、奴は腕枕をつくって静かに寝息を立てていた。

「んだあ？一応、仕事だぞ」

自分の事を完全に棚に上げた俺は、カイに近づいていった。

この数日の間でこいつについて学んだことといえば、人並みに電脳パソコンが弄れるという事くらいだった。

もしかすると何か特別な才があるのではと大分探ってみたのだが、一般的な少年の枠から外れるような片鱗はどこにもない。

余程疲れているのか、カイは本格的に寝入っているようだった。

もしかすると夜の営みが忙しいのだろうかと下世話なことを考えながら、俺は何も考えずにそいつの頭に手を伸ばした。

が、寸前でそれは止まる。

勿論意図的ではない。

「な、なんだ？」

突然のことに警戒を強めていると、寝ていたはずのカイが伸びすぎた前髪の隙間から俺を見ていた。

「勝手に触るなよ。変態か、お前は」

今までにきいたことの無い口調。

表情は愚か、その瞳の色さえも完全に別人のものだった。伸ばしたまま停止状態の俺の腕を掴んで起き上がったカイは、俺を覗き込んだ。

そこに芽生えるのは——微かな恐怖。

「別人だろ思うのはしょうがない。実際に“別人”だからな。そう、俺は」

『終児』だ

そう告げると同時に、奴は俺の中を無理やり決じ開けた。

あの感覚は体験してみないと分からないだろう。

言葉で説明するには

それはあまりにも暴力的で抗いがたく、拒みたいと思う精神とは裏腹にどこかで全てを投げ出してしまいたいという願望があったのも事実。

『終児』 は俺が生まれてからの記憶をまるで玩具のように扱った。土足で踏み入れ、生の手で触られるたびに、俺の内部は悲鳴を上げた。

幾千もの触手に絡めとられるような感覚。そしてその無遠慮な手は、

—— 母を殺したあの日の記憶をも 引きずり出そうとしていた
それだけは、と
俺は必死に叫んだ。

それは駄目だ
それを止める
それに触れるな

それ以上進むと、俺 が 壊れ て しま う か ら ——

『終児』 にとって、それは無いにも等しい抵抗だっただろう。
それなのに —— 記憶の蹂躪は唐突に終わった。
しかしそれで全てが元通りになったわけではない。
海の波が浜辺の砂を攫って行くように、俺は俺の中にあつた名前も

ない何かを、それまでそこにあったことすら気付かなかった何かの一部を永遠に失っていた。

それでも俺はそこにいた。

自分の足で立ち、ひとつの存在として、世界の中に在った。

「なかなか重たい過去を背負っているみたいだな」

動けるようになっていたにも関わらず、俺はただそいつの顔を凝視していた。

言いたいことも聞きたいことも色々あった。

何の権利でお前はあんなことを、と力任せに殴りつけその首を切りつけて、殺してしまいたかった。

俺がそうしなかったのは、

目の前に居た カイ ではない 何か が、とても人だとは思えなかったから。

人ではない何か。

異形の存在、見てはいけない暗部、覗き込んだら二度とは戻れない深淵の果て――

「そんな大層なものではないさ」

それ はそう言って晒う。

「本質は極めてお前たちに近い。ただ、ここに至るまでの過程が少

々複雑でな」

カイの顔を使つて、そいつはにっこりと笑った。

「だからお前も俺に、というか こいつ に手を出そうなんて思うなよ。そのときは、」

―― 今度こそ確実に、お前を壊すからな

次の瞬間、俺の前に居たのは寝不足な目をした子供だった。

カイはぼんやりと俺を見上げ、

「何か言いましたか？」

と、首を傾げた。

後に明ちゃんから聞いた話だ。

カイの中にはもうひとつの別人格、自らを 『終児』 と名乗る者がいるそうだ。

そいつは時々表層に現れては勝手気ままに行動し、人を壊して遊ぶのだ、と。

それは確かに危険極まりない存在ではあったけれど、圧倒的な力

―― もはや俺には超能力のようにしか思えない力は使いようによつて役に立つ。

故に叶のじいさんはこいつを引き入れて、それを有効利用しようとしているのだ。

ただ、カイは 『終児』 を自分とはまったく違う概念だと言う。

「うまくは言えないんですけど、“彼”の体はどこか別のところにあるんです。でも今はそれが動かせなくて、たまたま精神だけが僕を器として利用することを思いついたんじゃないか、と」

本当によく分からないんです。

説明の終わりにカイはそう呟いた。

何にせよ当の本人が分からないものを、他人の俺に理解できるはずもない。

あれが二重人格の産物なのか、誰かが憑依している結果なのかはこの際もうどうでもいい。

俺はあれを認めることができない。
認めたくは、なかった。

*

「――終わった」

そう呟かれるまで五分もかからなかった。

しかしそれは一人の人間を壊すには十分すぎる時間だった。

男の目は宙を見ていた。

時折何かを追いかけるように動いてはいたが、そこに生気ない。

口端から涎を垂らし、意味を成さない言葉を紡ぐその姿は、完全に廃人そのものだった。

「お前やあの娘の時よりも長く覗き込んでいたから、しかたがない」
当たり前のように呟いて、『終児』は男の足を蹴った。

「こいつは幸せだ。これから起こる何もかもを知ること無く、平穩に生きられるのだから」

「…… お前が何かするのか？」

「いや」

男の見ている先を眺めながら、『終児』は微笑んだ。

全てを飲み込んでしまう最悪な笑顔でもなく、感情という感情を喪失した冷たい笑みでもない。

「…… 人のような顔をして、微笑んでいる。」

「俺は何も望まないし、何も起さない。ただ俺は俺として、創造された意味を補完するだけだ」

「意味がわからんな」

「そのうち分かる時が来る。お前も、俺も、それから こいつ も」
そう言う『終児』は人差し指と親指を鉄砲に見立て、自らの頭に突きつける。

「俺は戻る。報告はこいつの口から聞け」

ぱん、と撃ち抜いた仕草を見せた後、その体は力なく崩れ落ちた。

「—— ご苦労さん」

俺は床に激突する前にカイの体を掴みあげる。

完全に気を失っていた。

無理も無い。普段のこいつからは考えられないような力を使うとい

う事は、こいつを精神的にも肉体的にも疲労させる。

俺が初めて『終児』の存在を感じたときも、こいつは連日のように『終児』の意識を浮上させられていたことで疲れていたのだ。

男にしては酷く軽い体を担いで、俺はその小部屋を後にした。後々、椅子に縛られた男をなんとかしなければいけない事は分かっていたけれど、今はとりあえずカイを休ませることが先決だ。

「……何なんですか、アレは」

カイをソファーに横たえる。

部屋の隅では瑕奈が目を見開いたまま、同じ言葉を繰り返していた。

「あれは、何ですか。何ですか。アレ、あれは」

どうやらそうとう堪えたらしい。ぼろぼろとただ零れるだけの涙を、抱いている三七三が懸命にせきとめようとしている。

大丈夫だからと告げられる言葉も瑕奈には届かず意味を成さずに消えていく。

焦点の合わない視線がふいに俺へと向けられた。

何なんですか、あれは。

そう、問いかけられたような気がした。

「——さあ。俺に分かるくらいなら苦労しねえよ」

俺は眠るカイの額に手を置いた。

このまま首を絞めてしまえばこいつは楽になれるだろうか。

と、そんな事を思った。

05・＜書物の森に住まう者＞

05・＜書物の森に住まう者＞

『 “本” は 完結 した ひとつの 世界
そこには ただ 始まり と 終わり が 有る 』

道 が在った。

真っ直ぐに伸びた道。

圧倒的な暗がりの中に白く際立つ一本の道。

ちようど人がひとり歩けるくらいの幅を有した細い道。

その道に僕は立っていた。

前を見れば道が続いている。

後ろを振り返ると、途中でそれはぼんやりと闇に同化していた。
つまりは前に進むしかない。

僕は歩き出した。

どこへ行くのか、この先に何があるのか。

それは大して重要なこととは思えなかった。
とりあえず歩く。

一歩ずつ足を交互に動かして体を前に移動させること。

そのことだけに集中する。あとはなにも考えない。

どのくらい進んだのか。

生まれてからずっと歩いていたような疲労感。

なにか言葉にできないモノに突き動かされるように僕は歩いた。
もうこれ以上は少しも先に行けないと思った時――

唐突に道が途切れ、

目の前には残ったのは無限に広がる暗闇と、

ひとつの箱だった。

人の顔くらいの大きさだろうか。

色は骨のように白く、何の装飾も施されていない。

誰かが置き忘れていったかのように、それは存在している。

蓋はしっかりと閉じられていたものの、左上の角に小さな^{ひび}罅が走っていた。

開けては いけない

何故かそう感じた。

そんな僕の意思に反し、

石のように重かった両足が引き寄せられるように近付いていく。

両腕は箱を掴むように伸ばされ、そして箱もそれを望んでいるように見えた。

が、

指先がほんの僅かに触れた刹那

僕は落ちていた。

下腹部に強い浮遊感。

掴まる物も、着地する地面もなく、ただ落下していく、体。

周りを見渡せば先ほどの暗闇から一転、そこには様々な「映像」があった。

まるで何万もの映画が同時上映されているような光景。

視覚と聴覚が悲鳴を上げる。

それは色彩の拷問。

または音響の責苦。

その全てが世界中にいる僕ではない誰かの人生のひとコマなのだと
気付く頃、

僕は光の渦に飲み込まれ、

落下していた体がふわりと宙に浮く。

そこは不思議な空間だった。

空と大地が反転した世界。

僕の足元で白い雲が青い空を流れ、

頭上では森や海や町が落ちることなく続いていた。

ここは、どこだろう。

『 どこでもない、どこか とでも言うっておこうか 』

その問いに答えるように、“彼”が現れる。

僕と“彼”は空と大地の境界線で向かい合うように漂っていた。

そういえばここまで間近に　そして障害物もなく　“彼”の姿を見るのは初めてだった。

今はまだ眠り続けているという　“彼”の本体。

柊木沢さんと同年代だろうか。

どこかミケランジェロの彫刻を思わせる完成された肉体だった。

『お褒めに預かり光栄だよ』

あまり嬉しくはなさそうだった。

『どうせ形ばかりの製作を急がれた器　と　寄せ集めの精神の集合体だ』

その結果が　これ　ならば、もはや滑稽としか言いようが無い

時々　“彼”　はこんな風に分からないことを言う。

作られた肉体。

創られた精神。

“彼”　は、ひと　ではないのだろうか。

『それよりも、だ』

その問いに答えることなく、“彼”は僕を視る。

『お前　――　アレを　揺すったな』

何の話だろう。

にやりと笑ったその顔は、“彼” が面白いものを見つけたときの顔だった。

『俺が止めていなければ、お前はあの 箱 を開けていただろうな』

箱？

あれについて “彼” は何かを知っているのだろうか。

僕は指先の感触を思い出す。

ほんの僅かな接触ではあったけれど、その中は確かに何かが入っていた。

でも —— 何が？

『お前は俺と世界を繋ぐ唯一の存在だ。故に知り合いの^{よし}誼みで助言しよう』

“彼” が押し殺した声で言う。

これは警告なのだ、と。

『あれはまさしくパンドラの箱だ。そして残念なことに箱の底には 希望 も無い』

そんなものがどうして僕の中にあるというのだろうか。

『それは俺が答えるべきことじゃない。何にせよ、今の時点で開ける事はお勧めしない』

静かに延べ切ると、“彼”は黙った。

これ以上語ることは無い、と体現するように。

『そろそろ俺はあの棺桶に戻るとしよう』

しばらくの沈黙の後、“彼”はそう呟いた。

そして大気を泳ぐようにして僕の目の前に立つと、

『これが例の男の情報だ』

そう言つて、“彼”は僕の額を弾いた。

*

男がいる。

中肉中背、平たい顔、暗い性格。

男——藤沢 という名の男は毎日をとてもツマラナイと感じていた。

そんな藤沢の人生に転機が訪れる。

気乗りしないまま参加したとある宗教の集い。

そこで藤沢は、人ならざる神々しい生き物との出会いを果たす。

真白い服。

真白い髪。

真白い肌。

直視することすら恐れ多い、光り輝く奇跡の子。

藤沢はそこで生まれ変わった。

天使の一部を体内に取り込み、数多くの肉体的、そして精神的試練を乗り越えることで、彼は人の身でありながらその上に属するモノへと成り代わったのだ。

素晴らしい気分だった。

他者に対する圧倒的な優越感を手に入れた藤沢は、自分の身に起きた変革を広く世の中に浸透させようと、あらゆる場所での布教を開始した。

しかしその行いは決して親切心からではなかった。

それは――選別。

神の徴^{しるし}を享けた信者の中には、肉体的に崩壊を来たすものや、精神的に瓦解する者も多数存在した。

今まで彼を下に見ていた人間がその脆弱な体と虚弱な心ゆえに敗北していく様は、静観する藤沢にさらなる愉悦を与えたのだ。

その中でも稀に「異端者」が生まれることがある。

彼らは進化の過程で狂ってしまう。

大抵の者が見境無く暴れ、傷つけ、最悪の行為に走る。

それはあくまで少数にのみ生じる副作用のようなものだ。

にも関わらず、それが世間に露呈することがあれば、彼が崇める主は無粋な下々の者どもに生け捕られ、唯一無二の居場所である彼の

宗教自体も断罪されてしまっただろう。

それだけは阻止しなければいけなかった。

幸いなことに、神の子はその「異端者」の存在を感じ取ることができた。

故に藤沢を含む従順な使徒たちは、彼の命を受けると指定の場所へと赴き適切な処理を施した。

主は「異端者」にすら慈悲深き恩恵を与えるために、彼らにその頭部の回収してくるよう命じた。

自らの肉体に生じた異変に神を呪って訴えようとした水商売の女がいた。

彼らはその女の自宅に迎え、わめく体を押さえつけると風呂場でその頭を刈った。

変化に伴う苦痛と混乱から自らの家族を殺めた愚鈍な男がいた。

それは藤沢の同僚だった。

彼らは男を殺害すると、殺人強盗を偽装する為に男を含めた全員の首を切断し家の中を荒らした。

最初に狂った麻薬中毒の青年は彼らが到着する前にその命を絶っていた。

藤沢は警察によって回収・検死された遺体の安置場所に忍び込み、頭部の奪取に成功した。

そして今、新たな「異端者」が生まれようとしている。

それはまたしても藤沢がつれてきた同僚の女だった。
気付いているのはまだ彼だけのようだ。
主に知られてしまえば、いくら敬虔な信者である彼といえども罰せられてしまうかもしれない。
怯えた藤沢は女を憑けて廻り、機会を見計らって殺してしまおうと思っていた。

しかしそれは突然現れた黒い男に遮られることとなる――

*

目の前に知らない天井があつた。

一瞬、どこなのか分からなかった。
起き上がろうと触れた革の感触で、ようやく自分が<傍観者>アウトサイダー本部
に来ていたことを思い出す。

“彼” に接触された後の記憶がない。
どうやら気を失ってしまった僕はソファ―に寝かされていた。
運んでくれたのは柊木沢さんだろうか。
お礼を言わなければと心に留めていると、

「よお。やっとお目覚めか」

奥の部屋から柊木沢さん本人が出てきた。
その顔は眠そうで、それと同じくらい疲れて見えた。
「すいません、何か運んでいたみたいで」

「いいや。それにしてもお前って随分軽いのな」

呆れながら、柊木沢さんは持ってきたパイプ椅子を僕の前で広げ、背もたれの部分に抱きつく形で座った。

「お前さ、前にも言ってたけどアイツに意識乗っ取られてる間のことって何も憶えてないんだよな？」

「はい」

「―― 瑕奈に何をしたのか、もか？」

「何かしたんですか？」

「ああ、いや。お前が悪いわけじゃないのは分かってるんだけどさ」
柊木沢さんは困ったなあと頂垂れる。

その様子を見るとやはり僕、いや “彼” が何かを仕出かしたことは明らかだった。

“彼” は何事においても容赦がない。

たとえ瑕奈ちゃんが僕の知人だと分かっているとしても、それは変わらないだろう。

だとすると、

「瑕奈ちゃんは大丈夫なんですか？」

「今は大分落ち着いたよ。とりあえず一人で家に帰れるくらいにはな」

「そうですか」

「でもまあ、そういうわけだから、あいつが変な態度取っても気にするなよ。あいつにも一応お前とアイツが違うことは説明したんだが、」

「いいですよ。別に」

前にもこんなことがあった。

中学最後の冬、よく僕に絡んできた同級生に金をせびられた事があった。

―― お前んちってお金持ちジャン？

バタフライナイフをちらつかせ、彼はそう言った。

僕が断り去ろうとする前に “彼” が表層に現れ、同級生からナイフを奪い取り、その精神を汚染した。その一件は父によって完膚なきまでに鎮圧され、関係者には多額の慰謝料を払って口止めが成された。しかしその後も噂は広がり、僕の周りからは芽衣子たちを除いた友達が消えていった。

「いずれは瑕奈ちゃんにも知られてしまう事だったわけですし、これでよかったんじゃないかと思います」

「…… 全然よくねーだろ」

柊木沢さんはため息を吐いた。

「でもそれもお前とあいつの問題だ。俺がとやかく言ったところでどうなるってもんでもねえしな」

それよりも、と柊木沢さんは壁時計を見上げた。

短針は九と十の間を指している。

「これって、まだ朝ってわけじゃないですよね」

「ああ。夜の九時半だ」

すると僕は十二時間以上も眠っていたことになる。

「それだけ疲れてたってことなんだろ。で、時間も時間だし申し訳ないんだが、お前が起きたら詳細を話しに来てって明ちゃんが」

「そうですね。僕も忘れないうちに話しておきたいですし」

僕は泥のような体を持ち上げる。

両足がとてつもなく重い。

夢の中での疲労が、現実にも反映されているかのようにだった。

「…… そうですか」

二ノ宮さんは呟く。

僕は彼女の自室に備え付けてある椅子に腰掛けている。

“彼” から譲り受けた藤沢という男の情報を話し終えると、二ノ宮さんは改めて僕に訊ねた。

「では例の一家殺害事件は、被害者の一人だと思われていた男性の犯行で、その宗教団体が彼の行いによって自らの正当性が揺るがされることを危惧したが為に、殺された……と」

「多分そういうことなんじゃないかと思います」

「それで、その教祖は何の目的で“異端者”と呼ばれる人物たちの頭部を収集していたのですか？」

「さあ。理由までは知らされていなかったみたいです」

「成程。」

二ノ宮さんは全てを書き留めると、分かりましたと頷いた。

「創世会については私の方で調べておきます。貴方もお疲れでしょうから、週末は休息をとってください」

「ありがとうございます」

僕は立ち上がった。

「—— もう一つだけ、」

ちょうどドアノブに手を掛けたところで引き止められる。

振り返るといつもなら相手の目を真っ直ぐに捉えて話す二ノ宮さんが、珍しく顔を背けていた。

そして、

「彼は…… 『終児』 は、私のことについて何か言っていましたか？」

と、躊躇がちに聞いてきた。

「いいえ。以前、叶さんはどうしているかと言われたことはありますが」

「そう、ですか」

あなたも “彼” をご存知なんですかと僕が口に出す前に、

「呼び止めたりして申し訳ありませんでした。おやすみなさい」

と言われてしまったので、僕も同じように返して部屋を後にした。

*

その後の二日間は眠って過ごした。

ひたすら眠り、昼前に少しだけ起床してまた眠る。

護が買って来てくれた惣菜のおかげで、空腹を憶えることはなかった。

その間、何度かあの箱の夢を見たような気がした。

けれど触ろうと近付いていくところで唐突に目が覚めた。

左上の輝が徐々に大きくなっていることだけが気に掛かった。

週が明けて、僕はいつものように出勤した。

「やほー！また少し痩せたんじゃない？」

三七三さんは僕の顔を見るなり、羨ましいわねと抱きついてきた。その腕の中に捕まっている僕を瑕奈ちゃんが遠巻きにじっと見ていた。

が、

「っひ、」

僕の視線に気付くと、すぐにどこかへと隠れてしまった。

三七三さんが僕の額に手を添える。

「…… ごめんなさいね。 まだあなたの事が恐いみたい」
「三七三さんは恐くないんですか？」

「全然！ って言いたいところだけど、 まあちょっとはねえ」
でもね、と三七三さんが微笑む。

「あたし、ドMだから大抵のことは快感になっちゃうのよねん」
「はあ」

ばちんとウインクを決められた。

僕と入れ替わるように柊木沢さんが休暇をとっていた。

十字製薬本社に潜入する前から疲れていたようだったので、 良い機会だと思う。

それから数日、

瑕奈ちゃんは今らかに僕を避けている様子だった。

一度だけ謝るために近づくと、

「…… 別に先輩のせいじゃないってわかってますから」
と小さく呟いて、 けれど目を合わせようとはしなかった。

「これは深刻ね」

そんな僕たちを見ていた三七三さんが腕を組む。

「何か状況を打破する切っ掛けが必要だわ。 何か、何か非日常的なイベントが」

「やっぱり成り行きに任せるしかないんじゃないですか？」

「そんな悠長なことじゃ駄目よ！ 青春という限られた時間を鬱で根暗な思想に費やしたくはないでしょう？」

「はあ」

ぶつぶつと何かを考え込んでいた三七三さんは突然、

「ひらめいたっ！」

と飛び上がって叫んだ。

そして三七三さんの思いつきは、その次の日に実行されることとなる。

*

「お使いを頼みたいの。」

僕と瑕奈ちゃんを招集した三七三さんは、並んで座る僕たちの前を指差した。

「ちょっと必要な資料があるから、それを新国立電腦図書館で借ってきてもらいたい」

国立新電腦図書館とは五年前に杉並区にて設立された、世界最大級の図書館だった。

千代田区の国立国会図書館と違っていたのはその利用システムが電腦端末を介していること、日本国内の書籍は愚か世界中のありとあらゆる本が集められている点がある。

「そんなの、ネット電腦網で探してくださいよう」

「もう探したわ。で、なかったの。だから頼んでいるの。お分かり？」

「あつう」

三七三さんの有無を言わさぬ口調に、瑕奈ちゃんが小さくなる。そしてちらりとこっちを見て、慌てて視線を外した。

「で、でもそれなら私が一人で行ってきますから」

「バカ言ってるんじゃないわよ。あんたが一人で出かけたら迷子になるでしょうが」

「うっ」

「だーかーら！二人仲良くお手々繋いでいってらっしゃい！」

「うっ」

瑕奈ちゃんが涙目で唸った。

「……」

「……」

そして現在に至る。

僕と瑕奈ちゃんは微妙な距離を保ちつつ、荻窪駅周辺を歩いていた。地図を持った僕の数歩後ろを瑕奈ちゃんがついてくる。

「ここから少し歩くみたいだよ」

「あ、はい」

「バスも出てるみたいだけど、それに乗る？」

「平気です」

必要最低限な会話だけが交わされていく。

三七三さんには申し訳なかったけれど、とても手を繋いで歩けるような雰囲気ではなかった。

「……先輩は、」

五分ほど無言で歩いていただろうか。

突然、瑕奈ちゃんが立ち止まる。

そして

「先輩は、恐くないんですか？」

震える声で訊ねられた。

「私は凄く、すごく恐かったです。先輩が、あ、先輩じゃなくてあの、“あの人”が近づいてきて私の中を覗きこんだ時、とても普通じゃいられなかった。もしも私の中にあんなものがいたとしたら、多分」

—— 死にたくなっちゃいますよ

瑕奈ちゃんはオレンジ色のパーカーの裾を握った。

「先輩は、平気なんですか？」

「…… どうなんだろう」

あまりよく考えたことがなかった。

僕が “彼” の存在に気付いたのは中学に入って間もない頃。

家の洗面台で顔を洗っているときだった。

水に映った自分がゆらゆらと変わり、知らない誰かがそこにいた。背後を見回しても誰もいない。

『 よお —— どうやらお前とは波長が合うみたいだな 』

脳に直接聞こえてきた声に、僕は目の前の存在が一般的常識からかけ離れていることを覚った。

『 まあ俺にはお前しかいない。そういうわけで、たまに体を貸してもらうことになるぞ 』

一方的に告げられて、僕たちの奇妙な関係が始まった。

「 “彼” が僕自身に危害を加えることはないんだ。だから、時々意識がなくなったり、ちよつと体が疲れたりする以外は不便には思わないかな」

「でも、周りの人に迷惑がかかるじゃないですか。それって必然的に先輩にも、」

「そうだね。それで友達がいなくなったりしたことはあったな」
「気味が悪いと囁かれたり、後ろ指を差されたり。」

芽衣子や護や鷹巳がそれに気付いていなかったわけがない。

それでも彼らが僕の元から離れていかなかったのは何故なのだろう。

「それじゃあ――いいことなんか、何も無いじゃないですか」

瑕奈ちゃんが拳を握り締める。

「体を勝手に使われて、意識を乗っ取られて、ぼろぼろに疲れて、その上友達もなくて……そんなの」

――先輩が可哀想です

「瑕奈ちゃん」

「ふぐつ、だ、だって可哀想ですもん！そんな、そんな意地悪ですよ！」

大粒の涙をはらはらと零しながら、瑕奈ちゃんがしゃくりあげる。たまたま通りかかった散歩中の老人が僕のことをじろりと睨みつけた。

「あ、ごめんなさい！別に先輩に泣かされたわけじゃないのに！」それに気がついた瑕奈ちゃんがパーカーの袖で顔を擦った。

「瑕奈ちゃん」

「は、はい？」

「ありがとう」

「へ？な何で、ですか？」

「何でだろう」

「はあ……」

つい口から出ていた。

本当は泣いて謝るべきは僕なのだろう。

けれど、どんなに頑張っても僕の目からは涙が出なかった。

「代わりに泣いてくれたから、かな」

「よくわからないですけど……」

首を捻っていた瑕奈ちゃんは、しかし急に真剣な顔つきになった。
「ほんとに私、よく分からないですけど決めました」
そう言うのと、それまで保っていた距離を徐々に縮め、僕の隣に立った。

「私は先輩を嫌いになりません。“あの人”のことは今も恐いですが、だからって先輩を恐いと思うことはやめにします。先輩は私と一緒に人生ゲームをやってくれた人です。先輩は——優しい人、です」

そして、えへへと恥ずかしそうに笑った。

「瑕奈ちゃん」

「はい」

「こういう場合、仲直りのしるしに手を繋いだほうがいいのかな」
「それは小学生みたいなんで遠慮したいです。けど、握手ならいいと思います」

「そうだね」

僕と瑕奈ちゃんはお互いの手を短く握った。

「でも瑕奈ちゃんなら頑張れば小学生に見えないこともないよ」
「……それは言わなくても良かったです」
栗毛の頭ががっくりと頂垂れた。

*

新国立電脳図書館の外観は写真で見るよりもずっと大きく見えた。

そして、

「わあっ！すごい綺麗です！」

内部に入った瑕奈ちゃんが、そこが図書館であることも忘れて叫ぶ。

正面玄関は旧大英博物館図書館をイメージして造られていた。

高く天井まで聳えた木製の書棚には隙間なく古書が並べられ、味わいのあるオークの床と相俟ってノスタルジックな雰囲気醸しだしている。

入り口に立った警備員のわざとらしい咳に、瑕奈ちゃんは慌ててその場を離れた。

ここでは本格的に検索・閲覧を開始する前に、名前等の個人情報登録する必要がある。

僕は自分の本名を入力して、司書の女性からバーコードリーダーと記録用USB端末を借り、説明を受ける。

「まずは貸し出したい本を電腦で検索するか、ご自分の足でお探しください。見つかったら電腦で検索した場合、そのままUSBを差し込み情報を取り込んでください。借りたい本自体を見つけた場合は一度背表紙に貼ってあるバーコードを読み取った後、バーコードリーダーを電腦に接続しUSBにダウンロードしてください」

本は特別閲覧室に置いてあるもの以外は館内で自由に手にとって閲覧できること、

USBの貸し出し期間は二週間、記録されている情報は自宅の電腦に接続することで閲覧することができ、情報が所有することはできないこと、そしてUSBを不正改造して情報を保持しようとした場合や紛失した際は警察に連絡が及ぶことを聞かされた。

「こ、こんなに小さな物、私だったら絶対失くしちゃいますよ」

「USBにはGPS機能もついておりますので、一度ご連絡さえいただければ大抵の場合見つけることができますよ」

うろたえる瑕奈ちゃんを見て、司書の女性はくすくすと笑った。

「とりあえず、三七三さんに頼まれた本は後で電腦検索するとして、」

瑕奈ちゃんは興味深そうに辺りを見回していた。

「私、実は図書館で初めて来たんですよ。ちょっと色々見たいんですけど、いいですか？」

「別に構わないよ」

「えへへ」

瑕奈はひょこひょこ本棚のほうへと行ってしまった。

「さて、と」

そんな彼女の背中を見送りながら、僕は電腦で検索を開始することにした。

三七三さんが必要としていた本は十冊。

どれもが細胞学や染色体についての現代的見解など、生物学的なものが多かった。

三十分もするとそれら全ての書籍を入手することができた。

「意外と早く済んだな」

僕は軽く肩を叩くと、瑕奈ちゃんを探すために立ち上がった。

世界最大級と自負するだけあって、一般的の図書館の何倍も広がった。

本棚と本棚の間を縫うように歩いて瑕奈ちゃんの姿を探す。

途中、世界史などの歴史を扱っているセクションで、ふと足を止めた。

そこには車椅子の少年がいた。

品のよい柄のセーターとコーデュロイのズボンをはいた少年は、彼が手を伸ばしても届かないであろう高さの本をじっと見つめている。

「あの、とりましようか？」

反応はなかった。

しばらく待って、もしかすると聞こえなかったのかもしれないともう一度声を掛けようとする

「大丈夫です」

少年は僕へ、柔らかに微笑んだ。

「もう読み終わりましたから」

「え？」

「暗記しているんです、全部」

少年は車椅子を動かして僕の前にやって来る。

「それはあの本の内容を、ということですか？」

「はい。正確にはあの本だけじゃなく、この図書館にある全部の本ですけど」

「そうなんですか」

納得した僕に少年は意外そうな顔をした。

「随分あっさり信じてくれるんですね」

「別に嘘を吐く理由なんてないと思ったから」

「理由なんてなくても、人は嘘を吐くものですよ」

「じゃあ嘘だったんですか？」

「いいえ」

証明してみせましょう、と少年は僕に何でもいいから本をとるよう

に促した。

僕は後ろを振り返る。

歴史書に雑じって、何故か村上春樹の<スプートニクの恋人>が置かれていた。

目についたそれを棚から抜き取った。

「じゃあ、適当なページ数と行数を言ってください」

言われたとおり、僕はパラパラとそれを捲った。

たまたま開いた箇所に変わった女性の名前があった。

「188ページ、14行目」

少年は目を閉じる。

そして、

「“ミユウはオレンジをむき終えると、ナイフの刃をナプキンでいていに拭いた。”ところであなたはすみれのご両親に会ったことはある？”」

すらすらと暗唱してみせた。

「このミユウっていうのは彼女の名前なんだろうか」

「司書としては、読む前に答えを教えるような無粋な真似はしたくないですね」

「“司書”？」

「ええ、僕はここの司書をしております。梧桐こうどう 志記しきです。どうぞよろしく」

「よろしく」

僕は瑕奈ちゃんよりも細い手を握った。

「ちなみに僕、いくつくらいに見えます？」

「中学生くらいかな、と」

「そうですか」

梧桐さんは苦笑した。

「まあ正確に言えば僕は普通の司書とは少し違うんですけどね」

「そうですね」

「ええ。僕の仕事はここにある本を全て記録してしまうことなんです」

そう言って、梧桐さんはどこまでも続く本の列を眺めた。

「記録し、記憶し、思い留める事——それが僕に課された唯一の仕事ですから」

それが一体誰によって命じられたことなのか。
何故か僕はそれを聞くことができなかった。

「じゃあ、もしも本がなくなってしまったり、この図書館が燃えてしまったりしても、梧桐さんがいれば安心ですね」

かわりに呟いた言葉に、梧桐さんは呆氣にとられた表情になった。
が、それも束の間

「……あなたって意外と大胆なことをいうんですね」
「そうでしょうか」

上から下までまじまじと眺められた。

「ああ、先輩！いたいた！」

どたどたと大きな足音を立てて、瑕奈ちゃんが走ってきた。

「図書館では走らないでくださいね」

「はひい、すいません……」

梧桐さんに注意された瑕奈ちゃんはしかし彼の姿を見ると、ん？と首を傾げた。

「先輩のお知り合いですか？」

「うん。今、知り合ったところ」

「こんにちは」

「は、はい！こんにちは」

瑕奈ちゃんが勢いをつけて頭を下げる。

「では、出会ったばかりで残念なのですが、僕はもう行きますね」

梧桐さんは腕時計を見ると、そう告げた。

「また本を借りにいらしたときは是非お声をかけてください。僕はいつでもいますから」

「はい。必ず」

「では」

車椅子のボタンを押すと、彼は絨毯の床を滑るように消えて行った。

*

梧桐さんと別れてから、僕たちも図書館を後にした。

「さっきの子、“いつもいる”って言っていましたね。小学生なのに真面目ですねー」

私とは大違いです、と瑕奈ちゃんが感心する。

「そうだね」

僕は梧桐さんが司書であること、どうやらあの膨大な数の書籍を全て暗記しているらしいことを伝えようか迷って、結局やめることにした。

特に理由もなかったけれど、質問を返されると面倒だった。

しかし思えば僕は確かに彼の言っていたことを鵜呑みにしすぎているのかもしれない。

「このUSB、返却は二週間後の水曜日ですね」

「そうだね」

と同意しつつ、僕は瑕奈ちゃんが放った言葉のどこかが気になっていた。

…… 水曜日？

「あ。」

思い出した。

水曜日は――今日は、僕が父に家へ帰ると約束させられた日だ。

「どうしたんですか、先輩」

「ごめん瑕奈ちゃん。実は今日、実家に帰らなきゃいけないんだ」

「え、お家に何かあったんですか？」

「いやそついうわけじゃないんだけど、妹が会いたがってね」

「妹さんがいるんですか！」

初耳です、と瑕奈ちゃんが顔を近づけてきた。

「妹さん、可愛いですか？」

「うん。そうだね。可愛いと思うよ」

「そうですか！」

瑕奈ちゃんはなんだか嬉しそうだった。

「じゃあ、このUSBは私が責任もって三七三さんにお届けしますねっ！」

結局調べてくれたのは全部先輩ですけど、と瑕奈ちゃんが舌を出す。

「ごめんね。一人で帰れるよね？」

「なっ！当たり前です！私だってもう十六歳ですよ？」

瑕奈ちゃんは赤い顔で抗議すると、

「じゃ、また明日です！」

手を振って、下校帰りの学生が賑わう大通りを駆け抜けて行った。

「さて、」

実家に帰るなら、一度家に着替えを取りに戻らなければならない。

「お土産とか買っていったほうがいいのかな」

僕はケーキの箱を大事そうに抱える子供を見て、ふと思った。

—— 箱、か

“彼” は 今は開けないほうがいい、と言っていた。

それは同時にいつか開けなければいけない時がくることを示唆している。

僕が、箱を開けるとき。

そのときが来たら僕もパンドラのように 後悔 することになるの
だろうか ——

* * *

外はすっかり暗くなっている。

閉館時間は三十分前に過ぎていた。

帰り支度をする司書たちのお喋りも小さくなっていき、図書館には
僕だけが残される。

僕には帰るべき場所がない。

この図書館こそが僕の家であり —— 僕のための 牢獄 でもあ
った。

特別閲覧室の奥に、僕の部屋はあった。

誰もいない図書館は足元の非常灯に照らされている場所以外、暗闇に包まれている。

見る人が見れば恐いといって泣き出しそうな光景ではあったが、僕にとってこの闇の中にいるときが一日のうちで一番安らげる時間だった。

閲覧室の施錠を解く。

すぐ横にはこの図書館の名物となりつつある、巨大ステンドグラスがあった。

それは外の街灯を浴びて絨毯に色とりどりの模様を描いていた。外の世界。

僕が窓の向こう側にしか眺めることが許されない、遠い場所。

「——それはお前の思い込みだろう」

僕を見透かすように響く声。

ステンドグラスの前に長い影が伸びている。

さっきまでは確かに僕だけだったはず——

「ああ、貴女でしたか」

混乱しかけた頭が冴えていく。

“彼女” ならば、入り口のないこの場所に突然現れても不思議ではなかった。

黒々と伸びた髪。

それは“彼女” の脰脛^{うでひざ}まで伸び、まるで外套のよう。

漆黒のセーラー服に赤いスカーフだけが鮮やかに浮かび上がる。
美しいと形容するにはあまりにも整いすぎて恐ろしさすら感じさせる美貌。

「何か、僕に御用ですか？」

そんなある種の芸術品のような “彼女” に問いかける。

「閉館時間はとくに過ぎているんですけどね」

「お前、 あいつ に会っただろう」

そう言つて、“彼女” は 持ち合わせていた林檎を齧った。

あいつ、とは誰の事を指しているのだろう。

「 とぼけるな。 お前は確かに あいつ に会って、言葉も交わしていたぞ」

今日一日を振り返る。

朝、司書たちに挨拶をして、歴史書を上の段から下の段まで読み返して、それから、そして――

「あの少年、ですか？」

<スプートニクの恋人>を選んだ彼。

僕が告げた全てをいとも簡単に信じて疑わなかった少年。

そうかと思えば突然とんでもない事を言い出したりして、と確かに面白いとは思ったものの

まさか、彼が――

「面白かったのか、あいつは」

“彼女” は手の中にある林檎をしゃくしゃくと咀嚼していく。
林檎、というのはまさしく “彼女” に相応しい。

永遠の園で、イブ が アダム に食べさせた禁断の果実。

「それは 私への当てつけのつもりか」

突き刺さる氷の視線。

途端に呼吸が苦しくなり、僕はセーターの胸元を掴んだ。

「—— まあ、いい」

本当のことだからな。

そう言つて “彼女” は虫を払うように手を振った。
胸の高まりは収まり、僕の呼吸は正常へと戻る。

「だが、私もいつまでも膠着状態を続けているわけではない」

そろそろ動くぞ、と “彼女” は僕を見た。

「私だけではない。あいつ も 奴 も、そして—— 世界
も、だ」

最後に “彼女” は林檎の芯を口の中に放り込んで、バリバリと
噛み砕いた。

…… それも実に “彼女” らしい。

＜ 始まり
始津子』 の 終わり
には 。
＞
――
凡ての根源たる、この
𐄌

06・＜古也 廻間（ふるや はざま） による 真部 鷹巳 についての

06・＜古也ふるや 廻間はざま による 真部 鷹巳 についての考察 ＞

―― 新・東京理科大学付属、青山キャンパス

通称、電腦キャンパス。

それは電腦工学と呼ばれる電腦装置とその性能、および関連技術の修学に特化した学部と、探究・開発を主な目的とした大型研究施設によって構成された学び舎である。

十五年前に設立されたこの学部は基本的に理学部・工学部どちらに属すこともなく、文部科学省の特別管轄の下、その支援を受けながら運営されていた。

173

その電腦学部を飛び級で卒業した僕こと古也ふるや 廻間はざまは、今年から同研究所にて研究者として勤務している。

仕事内容としては新型電腦の性能を試したり、一般電腦防壁の強化に携わったりと、まあやっていることは学生時代とさして変わりがなかった。

しいていえば先述した大学を卒業したという肩書きが出来たことと、先輩として学生に助言する機会が増えたことくらいだ。

「古也くん」

A棟とB棟を繋ぐ渡り廊下の途中で、正面から歩いてきた人物に呼び止められる。

小型電脳技術を応用した機械人形製作論で一時期時の人となった、アンドロイド
くらさか たもつ

倉坂 有教授だった。

「倉坂教授、こんにちは」

「やあ。研究のほうはどうかね？」

「そうですね。いまのところ順調ではないか、と」

正直なところ、彼は僕にとって苦手な種の人だった。

おどおどと硬い笑顔を貼り付けて若輩者の僕にも媚び諂う様な態度は、はつきり言ってみ苦しい。

そのくせ在学生の課題を大勢の前で酷評してみたりと、その性格は陰険極まりなかった。

彼は自分が影で某“陰金たもつ”と呼ばれていることを知っているのだろうか。

「ところで、」

倉坂教授は引きつった顔を僕に寄せてきた。

「例の“天才少年”を見なかったかね」

「…… 鷹巳 のことですか？」

「そうなんだ。彼、また僕の講義に出てなくなっただけ。いくら単位は取れているからって、このまま欠席が続くようだと僕も学長に報告しなくてはいけないと思っているんだよ」

彼の喉の奥から羽虫の羽ばたきのような音が聞こえてくる。

それが笑い声であることに気付くまで、随分の時間を要した。

「でも、そういったお話なら僕にせず、彼に直接なさったらいいかがですか？」

「そうしたいのは山々なんだが、彼は僕のいう事なんか耳に入らないよ」

卑屈に呟くと、倉坂教授は右手で僕の肩を掴んだ。

「彼も親友である君の話ならばきつと素直に聞くだろう。そういうわけだから、ここは一つ私の顔を立ててくれたまえ」

「…… はい」

白衣の上からでも感じる汗ばんだ手に抱いた圧倒的な不快感。

これはおろしたばかりの一着だったけれど、今日中に捨ててしまうことにしよう。

「それでは僕はこれで、」

その手を失礼にならないくらいそつと振り払うと、僕は一礼してその場から立ち去ろうとした。
が、

「待ちたまえ」

すれ違いざまに腕を掴まれた。

「…… まだ何か？」

「あ、いやその、」

いい加減、付き合いきれなかった。

倉坂教授は感情を押し隠すことをやめた僕の顔を見て怯えるようにぱつと離れた。

そして唇をひと舐めすると、

「その —— お父様に、私からよろしくお伝えしてくれ」

わざと何でもないように延べて、足早に立ち去って行った。

「ああ。そういうこと、か」

小さくなっていく後姿に納得する。

どうやら鷹巳に関するあれこれはただ僕の気を引くための口実で、本当の目的はこれを伝える事だったのだ。

電脳工学の権威でありこの大学の特別顧問教授でもある父の名は、この学界では絶大な威力を発揮した。血の繋がりが無いとはいえ、息子である僕に対しこの類の話で絡んでくる人の数は在学中から減ることがない。

さしずめ次の学内会議での口添えを期待しているのだろう。
まったく、鬱陶しさこの上ない。

「さて、」

僕はひとつ大きな深呼吸をすると、最初に話題へ上がった例の友人について想った。

時刻はもうすぐ六時になろうとしている。

珍しく雲間からちらつく赤い夕日の残像を眺めながら、これからのことを考えた。

「…… まあ、久しぶりに会いに行ってみますか」

説得はさておき、僕はとりあえず彼の様子だけでも見に行ってみることにした。

*

電脳学部 B棟。

A棟の影に立っていることもあつてかここは昼間でも薄暗く、静かだった。

その不気味さ故か、この棟で何かの影を見たと言証する生徒も多かった。

専攻している学問があらゆる意味で現実的な分、その手の話題が流るのだろうか。

僕が入学してからも夜な夜な電脳を持ってさ迷う女の霊が出るとか、誰もいないはずの電脳室の奥から呪いの電子音が聞こえてくるといった噂をよく聞かされたものだ。

B棟にはいまだ使われていない部屋の方が多い。
血のように見える空の色を反射した廊下は確かに薄気味悪くも見える。

しかしそれを逆手にとって、このB棟五階で好き勝手にやっている人物を僕は知っていた。

「――鷹巳、入るよ」

B棟第二視聴覚室。

ほんのわずかに光の漏れる扉に手を掛けると、がらがらと引き開ける。

そこには初見ならば思わず引いてしまうような光景が広がっていた。

黒い遮光カーテンによって完全に塞がれた窓。

部屋には大きめの木製デスクに置かれた改造電脳を初めとした各種タイプの電脳が、ところ狭しと並べられていた。

そのどれもが複雑な方法によって部分リンクされている。

それは個別に活動する電脳の群れであり、と同時に全体でひとつのワークステーション
大型電脳基地として稼動していた。

「また連結増やしたんだね」

気を付けないと躓きそうになる回線をよけながら、僕は振り向かない背中に向かって話しかける。

ふと右脇に見慣れた種の電脳があった。

「あ、これ！うちの研究所から勝手に持ち出したやつでしょ！」

それは先月開発され、現在特許の申請を待つばかりの最新型だった。所長はこれを『今世紀最大の一流傑作』と自負していた。

「いくら同型の作りおきが何台かあったからって、無くなった一台の存在を誤魔化すのに僕がどれだけ苦労したことが…… ねえ、聞いてる？」

「・・・・・・・・」

鷹巳の全神経は目の前の電腦に注がれている。

その両手は休むことなく動き、画面上ではいくつものプログラムが並列して同時進行していた。

「鷹巳、つてば」

ためしにその体を揺すってみる。

回転椅子に片膝を立てた鷹巳は、無言で揺られているだけだった。

「鷹巳？鷹巳さん、鷹巳くん、鷹巳さま？」

目の前で手を振ってみる。

その両眼は虚ろで、僕の存在をまるで認知しようとしない。

鷹巳は明らかに一種のトランス状態に陥っていた。

「……しょうがないなあ」

こうなってしまうては埒があかない。

なので、

奥の手を利用することにした。

「鷹巳。」

僕は友人の耳元に囁きかける。

「—— 大事な芽衣子ちゃんがどつかの野郎に孕まされちゃうよ？」

「んなつ！」

「あた、」

鷹巳が振り返った衝撃で、彼の頭と僕の額が激突する。

「痛いじゃないか」

「おま、なんかいまさらつと不吉なこと言っただろ！？」

「さあ？空耳じゃない？」

「そ、そうか？」

両手で顔をごしごしと擦る鷹巳に罪悪感を感じつつ、電腦世界から帰還してくれたのでよしと思うことにした。

「ところで、一体熱心に何をやってるのさ」

「おお！良い事を聞いてくれました！」

鷹巳は子供のように目を輝かせ、得意気に解説を始める。

その顔を眺めながら僕は彼の語る内容よりも、先ほど倉坂教授が言っていた“天才少年”という行がくたり気になっていた。

＊

< 天才少年 >

真部 鷹巳の名前は、入学前から知っていた。

電腦技術に少しでも感心がある者なら誰もが耳にしていた噂だ。

—— 国に喧嘩を売った男

かつて政府の電腦防衛ラインを尽く掻い潜り侵入したにも関わらず、その情報を一切持ち出すことなく消えた伝説の破壊者クラッカーの存在。

それが僕と同じ年の少年だということは俄かに信じがたかった。

彼の入学日当日、青山キャンパスには在校生から卒業生、そして教授やはたまた政府の要人にまでもが、その姿を一目見ようと講堂に集まっていた。

しかし、結局その日彼は現れることはなかった。

かわりに注目されることとなった僕としてはとんだ災難である。

養父について聞かれたところで、僕に語れることなどほとんどなかったのだから。

僕が鷹巳を初めて見かけたのはとある講義でのことだった。

入学式をさぼった天才児の噂はもはや天文学的なレベルにまで膨れ

上がっていた。

特に欠席した理由については、F B Iに極秘任務を依頼されていたからといったものから、実は超VIP待遇で秘密の隠し通路からその光景を隠れ見ていたなどといった見解にまで飛躍した。

その日の講義でも一番後ろの席にふんぞり返った鷹巳は注目の的だった。

教えている方の教師が居た堪れなくなる雰囲気の中、生徒たちはちらちらと鷹巳を振り返り、小声で彼についての詮索を囁きあった。しかし当の鷹巳本人はといえばそんな視線に気付いてもいないのか、講義開始わずか十分足らずで大きな寝息を立てている有様だった。

その後、鷹巳について回った噂は沈静化の一途を辿った。

彼の提出物や課題発表は確かにその知識の深さを垣間見せていたものの、どこか情熱に欠け、いかにもやつつけ仕事といった感じが否めなかった。

鷹巳自身、自分について何も語ろうとしなかったせいもある。

特に伝説的な活躍もなく、その無欲な態度に妄想することにも飽きてしまった人々は、終には鷹巳が伝説の人物だというのはでまかせだったのだ、と結論付けてしまうのだった。

僕としては、最初から鷹巳の存在にまるで興味がなかった。

文部科学省にスカウトされようが、F B Iの秘密工作員だろうが、何だってよかった。

あの頃の僕は自分に降りかかるプレッシャーに押しつぶされないよう必死で、他人のことまで気にしている余裕なんて皆無だったのだ。

そんなある日のこと。

僕が食堂で昼食をとっていると、見慣れない先輩の集団が近づいてきた。

—— 君、あの名誉教授の息子なんだって？

周囲に聞こえるような声を張ったリーダー格の男は、僕の前に腰掛けた。

—— いいよねえ、親のコネがある人は

彼は仲間にむけて大仰な態度で嘆いてみせる。

後ろから彼らの間抜けた笑い声が響いた。

—— でも、親って言っても義理の関係なんですよ？

ふいにそう問われ、僕は改めてその人物を見た。

吹き出物にまみれた醜い顔をしていた。

—— 君って、高校に上がってから引き取られたんでしょう？それってちょっと怪しくない？

なあ？

彼が後ろの取り巻きに同意を求め、彼らがより大きな笑い声を上げたとき、僕はようやく彼が言いたいことを理解した。

—— 君って可愛い顔してるもんね。やっぱりアレなの？そうやって取り入っちゃったわけ？

はつきり言うと、僕は決して我慢強い方じゃない。

古也さんはいつも冷静沈着ですねと言われることもあったけれど、それは僕が意図的にそう見せているからだった。

それだって僕にしてみればかなりの努力を要しているのだ。

だからこのときも内心は怒りで震えていた。

実際、片手はフォークを握り締め、もう片方は水の入ったコップを掴んでいたりと、かなり危険な状態だった。

そして僕の忍耐は、目の前の男が放った次の一言で決壊する。

—— 単位が欲しいときはパパにお願いするのか？その体を使って、さ

限界だった。

そう思った僕がコップの水をぶちまける前に、男は頭からスパゲティーまみれになっていた。

あまりに突然のことに、一体何が起こったのかわからなかった。

トマトソースを滴らせた男が鷹巳に掴みかかっているのを見て、ようやく僕は彼が男の頭めがけて自分のトレーをひっくり返したのだと知った。

結果、鷹巳は食堂の向こう側まで吹っ飛ばされた。

男とその友人たちは鷹巳に二度とその面を曝^{さら}すなど吐き捨てると、どこかへ消えて行ってしまった。

「…………… どうしてあんなことしたわけ？」

「あ？」

鼻から流れ出る鮮血を拭いながら、鷹巳が僕を見上げた。

「僕に同情でもしたつもり？だったら大きなお世話だよ」

「でもよ、」

冷たく言い放った僕に、鷹巳は不服そうな顔になる。

「誰だつてさ、可愛いとか女顔とか背が低いとか言われたら腹が立つじゃない！」

「…………… は？」

「俺もさー、好きな子がいるんだけど、その子との身長差が五センチくらいしかなくてさー、やっぱり十センチは欲しいよな。十センチは」

「同情したのって、そこなの？」

「うん」

真顔で呟かれた僕は、呆氣にとられるしかなかった。

それから僕と鷹巳は何かと一緒に行動するようになった。

表面上しか見ていない教師たちには僕たちが親友に見えていたのかもしれない。

実際のところ、どうだったのか。

僕にとって鷹巳は父の存在を抜きにして付き合える稀有な存在だった。

よく授業をサボる鷹巳のためにノートをとってやつたり、単位が危うくなると忠告してやるようなことはしても、休日どこかへ遊びに行ったりするようなことはなかった。

友達というよりも、他人から学友に昇格したようなものだった。

しかし鷹巳の方は違ったようだ。

殴られたあの日を境目に、僕は彼にとっての“心の友”、そして共有の話題が通じる唯一の相手として認識されるようになった。

「いやな、高校時代からのダチは電脳こうちの話になると滅法弱くてさ」
対等に話せる奴を探してたんだよね、と彼は笑った。

その二年後、

僕は飛び級で卒業し、鷹巳はいまだ在学中。

けれどその後も僕たちの関係は今も変わらず続いている。

そして気がつくと僕は、鷹巳にだけは自然に笑えるようになっていた。

*

「ちよつとちよつと、廻間さん？聞いてます？」

見れば鷹巳が怪訝な顔をしていた。

「斬新かつせんせーしよなる、な俺の計画の全貌を分かりやすくお前に説明したんだが、」

「“斬新”と“センサーシヨナル”って同じ意味だよな」

「そこに注目するなっ！」

鷹巳は底の磨り減ったスニーカーをばんばんと踏み鳴らして憤慨した。

薄く積もった埃が宙を舞い、僕達はしばしそれに噎せ苦しむことになる。

「それよりも、さ」

僕はふと思い出したように呟いた。

「鷹巳、また講義出なかったんだって？さっき倉坂教授に僕が怒られたよ」

「“陰金たもつ”にか？」

「そうそう」

「うーん、だってあいつの授業、つまないんだもん」

確かに、と僕は思う。

鷹巳と付き合い始めて僕は改めて彼の電腦に対する知識の広さを思い知った。

彼ほどのレベルならば、並大抵のことは教えられる前から習得してしまっているのだろう。

「でも」

それはそれ、だ。

「あの人、君がこのまま出ないようだったら学長に連絡するって言うってたよ」

「げっ。それは困る」

「だろ？だから、今度の講義はちゃんと出るように」

「うーむ。面倒臭いがしかたがない、か」

嫌々ながら納得してくれたようだった。

倉坂教授に義理などなかったけれど、これで彼との約束も果たせたわけだ。

勿論、後者の嘆願については聞こえなかったフリをしてみつつもりだった。

そうこうしている内に、すっかり時間が過ぎていた。

「そろそろ終わりにしたら？もう陽も暮れたよ」

「んー。今日は泊まりで仕上げようと思ってただけ」

「でもお母さんだって心配するでしょ？それに、」

僕は鷹巳の格好を観察した。

シャツには皺がより、目には隈ができている。

「どうせ昨日も帰ってないでしょ？汚い男は女の子に嫌われるよ」

「そ、それもそうだな！」

鷹巳は勢いよく立ち上がった。

こういうところの感覚は、まるつきり男子中学生のままだった。

「——で、芽衣子ちゃんとはうまくいつてるの？」

「いつ！」

鷹巳個人のプレイルームと化した視聴覚室を後にして、僕達はB棟の階段を降りていた。

建設上の経費削減か、このB棟にはエレベーターがない。

地道な下降の途中、ふと投げかけた問いに鷹巳が顔を赤くする。

「お、お前な！その神聖な名前を軽々しく口にするんじゃないやねえよ！」

「……やっぱりうまく言っていないんだ」

彼の想い人である芽衣子という少女を実際に見かけたことはなかつ

た。

ただ鷹巳いわく、彼女は清廉かつ可憐で笑う姿は花のよう、ということだ。

しかし彼女はどうかやら彼らの共通の友人に恋をしているようで、その男を想う切なげな表情もそれはそれでまたいいのだ、と鷹巳は夢見心地で語っていた。

「でもさ、年頃の男の子なんてケダモノだよ？早く動かないと芽衣子ちゃんが妊娠するって」

「バカ！たとえ脳内でも芽衣子ちゃんを汚すことは許さん！」

「純情なんだから」

「お前といるとエロエロが伝染する」

鷹巳は早足で階段を降りていく。

その後姿は確かに男と呼ぶにはまだ頼りなさ気に見えた。もつとも、僕も人のことは言えなかったけれど。

「ねえ、鷹巳」

「んん？」

「鷹巳はさ、将来何になりたいの？」

「いきなり唐突だな」

大分伸びた茶髪の頭が振り返る。

満ち始めた夜の空気に肌寒さを感じた。

「そうだなあ。とりあえず、^{ミスハ}MIZUHAシステムの攻略かな？」

「…… それ、まだ言ってるの？」

^{ミスハ}MIZUHAシステムとは、政府が独自に開発した電脳防衛網の総称だった。

その防壁はペンタゴンも真っ青になるほど強固なものだと聞いている。

しかしそれは実際にその存在を確認されているわけではない、つまり都市伝説のようなシステムなのだ。

どこに設置されていて、壁の向こう側で何を守っているのか。

何の情報も無いというのに、それは電子網の海でも信憑性のある噂として、鷹巳のような電脳使用者^{コンピューター}たちの間で実しやかに流れ続けていた。

「でも、MIZUHAに侵入して鷹巳は何をしたいわけ？」

「んにゃ。別に」

「…… はい？」

「だから俺の目的は侵入することであって、その向こう側にあるものには興味がないの」

仮にMIZUHAシステムが存在するとして、その実態が噂どおりであるならば、それはエベレストを酸素マスクもなくガイドもつけずに登頂するようなものだった。

成功した暁には誰だって何か記念になるものを持ち帰ろうと思うだろう。

しかし鷹巳は現に政府の防壁を突破したときも、そこに記されていたであろう数多くの重要機密にはまったく手を触れなかった過去をもっている。

「…… 君ってほんとに無欲だね」

「どうだっていいだろ」

「そんなにMIZUHAがいいわけ？ あんな幽霊みたいに手ごたえのないものより、もっと確実な、そう、たとえばそれこそペンタゴンとか狙えばいいじゃない」

「実はここだけの話なんだけどさ、」

ふと鷹巳が声を顰め、辺りを窺った。

「—— 俺のオヤジさ、どうもMIZUHAシステムに関わってるみたいなんだよ」

「お父さんが？」

僕は眉を寄せた。

一度だけ鷹巳の家に行った時、彼を見かけたことがある。

いらなくなった電化製品や廃品を回収して修理、販売するいわゆる

“ジャンク屋”を営む鷹巳の父親は、機械メカニック技師というよりはボディ
ービルダーのような筋肉隆々の体をしていた。

「そんな話、聞いたことなかったけど」

「だって話したことなかったもん」

鷹巳がきょとんとした顔になる。

「まあ関わってるっていつても、初期の構想とかを練ってただけだ。
結局オヤジの提案とかはもっと上の人間に搾取されちゃったみたい
だけ」

「なるほど」

それならば納得できた。

「でもさ、前にオヤジが俺に言ったことがあったんだよ。MIZU
HAシステムは人間の可能性を最大限に引き出したシステムなんだ
ってさ！」

「……そう」

「だからさ、オヤジがそこまで言うもんならやっぱ挑戦してみたい
じゃん？」

「それはお父さんを超えるため？」

「そんな難しいことは考えてなかったな」

ただ、そこにあつたから。

それが一番大変なことだと言われているから。

「鷹巳ってさ、とりあえず山があつたら登ってみちやうタイプだよ
ね」

「意味わかんねーよ」

「比喻だよ、比喻」

誰かが聞いたらバカにされそうなことを、真剣に言えるということ。それは簡単なようで何よりも難しいことだ。人は誰でも、駄目だった場合や失敗してしまう時を恐れ、その一歩が踏み出せない。

僕も同じだった。

結局誰かが敷いたレールの上を歩くしかない僕には、鷹巳のその強さが正直羨ましいのかもしれない。

*

「ああ、そういえば母さんがお前にまた来いって」

鷹巳が思い出したように呟いた。

B棟とは違い、A棟にはまだ数人の学生が残っている。

「母さんさ、お前のこと気に入っちゃって。またあの美少年を連れて来いって煩いんだよ」

「そうなんだ」

家にある電腦を見てほしいと言われ赴いた鷹巳の家は、想像以上に賑やかだった。

たくましい父親と優しく線の細い母親。食卓には毎晩温かい手料理が並べられ、家族全員でそれを囲んで食べる。

それは、僕が体験したことのない種類の生活だった。

「あ、悪い。お前の都合も聞かないで」

「うっん。いいよ、お母さんの料理、とっても美味しかったし」

「そうかあ？」

そう言いながらも鷹巳は嬉しそうだった。

—— ああ、そうか

僕は静かに理解する。

彼のこの強さは、あの温かい場所で育ってきたことに由縁するものなのだ。

愛し、愛されることで得た強さなら、僕に対抗できる余地は無い。

「鷹巳はずっとそのままにいるといいよ」

僕は落とすように呟いた。

「ずっとそのままできてね。そしたら僕も、何となく大丈夫だから」
「はあ？どうした、頭でも打ったか？」

「ううん。なんでもないよ —— 鷹巳ちゃん」
「っ！」

彼の母親はこの歳になった彼を今でもそう呼び続けていた。

何の疑問も感じていなかった様子の鷹巳は、僕が指摘したことでも少気にし始めたようだった。

「あれから母さんにはその呼び方はやめさせた！今では“鷹巳くん”だ！」

「ええー、それも可愛いけどやっぱり僕は“鷹巳ちゃん”がいいなあ」

「お前の希望なんざ聞いてねえ！」

A棟と研究所を繋ぐ通路で、僕達は別れることにした。

「まだちょっとやらなきゃいけないことがあるから」

「お前、働きすぎなんじゃねえの？」

「大丈夫だよ。誰かさんと違って毎日家に帰って、お風呂に入って

いますから」

「うっ」

絶句する鷹巳は、恨めしそうに僕を見た。

「じゃあな。今度、また誘いに来るからな」

「うん。お母さんには楽しみにしてますって伝えておいてね」

「おう」

そう短く応じると、彼は背を向けて去っていく。

一度だけ腕を伸ばして手を振るその姿を、僕は消えてしまっただけ送った。

「さて、」

僕は暗くなった空を見上げた。

虫取り用の電流を流した外灯がちりちりと音を立てて、青白い明りを提供している。

季節はずれの大きな蛾がそれにぶつかってひらりと墜ちた。

ぶつかることのできない僕と、ぶつかって散っていく命と。
本当に生きているといえるのは――どちらだろうか。

* * *

この校舎に付設された研究室には一般の研究者は愚か、同大学の理事ですら知らない場所があった。

それは物置の一つに見立てられ存在している。

万が一知らない誰かがそれを見たとしても、入ってみようとも思わなかっただろう。

仮に何らかの理由で興味を持ったとしても、鋼鉄製の扉は正規の方法以外では押し開けることもこじ開けることもできなかった。

その入り口の前に、一人の少年が現れる。

白衣姿の彼はポケットの中からいくつもの鍵が連なった鎖を取り出すと、二つを選択し、同時にその扉へと差し込んだ。

扉は彼の前に何の抵抗も無く開かれる。

目の前には暗闇の中、ぼんやりと灯ったエレベーターがあった。

迷いなき足取りで進むと少年はその箱に乗り、設置されていた指紋認証タイプのロックを解除して、下降を始める。

どこまで下降していくのだろう。

階数にして二十階、いや三十階ほどだろうか。

まるで冥界へと続いていくような暗闇の中、突然その箱は全ての動きを停止する。

再び扉が開かれたとき、そこには少年以外の少数しかその存在を知ることの無い、もう一つの研究所があった。

暗がりの中、多種多様な機械と白衣姿の研究員が何人か忙しくデータを取っていた。

その一人が少年の存在に気付き、近づいてくる。

「―― 状況は？」

少年は冷え切った声で訊ねる。

つい先ほど、友人と楽しそうに語り合っていた姿とはまるで別人だった。

訊ねられた薄毛の男は太りすぎた体でひいひいと息を吐いた。

「そ、それが、その、機嫌が悪いみたいで……」

「“機嫌”？あなたはまだあれをそんなレベルで見えていたのですか？」

「は、すみません」

「もういいです。私が直接行きましょう」

目の前の男に大してさして期待もしていなかったのか、落胆も見せずに少年は呟いた。

そして研究所の奥へと進んでいく。

それは下水溝のような場所だった。

足元には少量の水と、大量のケーブルがうねり絡み合っている。

家庭で見慣れた細いタイプのものから子供の胴体ほどある太い管まで、色とりどりのそれはさしずめ腕を流れる血管のようだった。

少年はその最深部にあるひとつの部屋に入っていた。

この部屋に入る権限は小数の中でもさらに少数、少年を含め三人にしか与えられていない。

「―― また我が侘、ですか？」

部屋に入るなり、少年は強い口調でそう零した。

「あなたは自分の立場というものをわかっているのですか？」

返事はない。

「その状況でよくも抵抗、いや拒否などできるものですね」

返事はない。

「私が本気になればあなたを戒めることなど簡単なのですよ」

返事はない。

「……　そうですか」

少年は暗い瞳で嗤った。

それは堕ちてしまった者の顔だった。

「そうですね。確かにあなたは優秀です」

返事はない。

「私たちもあなたがいなければここまで完璧なシステムは構築できなかったでしょう」

返事はない。

「けれど、だからといって　——　代わりがないわけではないんですよ」

返事はなかった。

しかし、

鈍く響き渡った音が部屋の中にある各種の装置が起動したことを証明する。

そしてここでも散乱しているケーブルのうちのいくつかは、何かを供給するように脈動していく。

「そうです。やればできるじゃないですか」

少年は労うように目の前の存在に触れた。

それは巨大なガラスの筒だった。

天井から床までしっかりと固定された円形の筒。

中には水槽のようにたっぷりの水、正確には培養液が閉じ込められている。

筒の内部には　それ　が、いくつもの細い管に繋がれ漂っていた。

黄色い光に照らされるように浮かび上がっていたのは――人の脳。

「では、この調子で頑張ってくださいね。私は他にもやらなければならぬことが沢山ありますので」

もちろん、返事はない。

けれど　それ　には少年の声が確実に届いていた。

「私を失望させないくださいね――　ミズハ」

そう言い残すと　少年こと古也　廻間は　棺桶で眠る住人を見舞う為に　その部屋を後にした。

07・＜ 戻れる場所 帰らない人 ＞

07・＜ 戻れる場所 帰らない人 ＞

『おかえりなさい』

『さようなら』

瑕奈ちゃんと別れた後、バスに乗って自宅方面へ。

途中、お土産を買うために街中をぶらついてみた。

お菓子屋のウィンドウを覗いてはみたものの、二年ぶりに会う妹たちの好みが変わらなかった。

確か朝陽は洋菓子が好きだったはずだ。

けれど体が弱い彼女は食事制限されていて、大好きなチョコレートケーキも週に一度しか食べられないと事あるごとに嘆いていた。

逆に、食べようと思えばいくらでも好きなものを食べることが出来た夜月（よづき）は、食に関して無頓着だった。

お菓子はおろか通常の食事に関しても好き嫌いがなく、ただ栄養補給のために咀嚼しているといった様子だった。

やはりどこかで朝陽に遠慮している部分があったのかもしれない。一つの障害を除けば彼女はそれなり学校へ通うこともできたはずなのに、双子の姉と同じように外出を控え、自宅で専属の家庭教師による指導を受けていた。

結局なにも買わないまま、帰路に着いた。

マンシヨンの前に停まっっている黒塗りの外車に気付かなかったのは、食べ物ではなく花のように鑑賞できるものが良いのかを考えていたからだった。

「カイ様」

ふいに名前を呼ばれ、車の方を振り返る。

助手席から黒と白を基調とした正装に身を包んだ男性が降りてきた。そして白手袋をした手を胸に当て、僕の方へ向かって恭しく礼をする。

「お久しぶりです。お嬢様の命^{めい}でお迎えに参りました」

「家を出た僕にお辞儀なんてしなくてもいいですよ、唐沢さん^{からさわ}」

唐沢 文生^{ふみお}さんは、父に仕える使用人の筆頭格だった。

身寄りのなかった唐沢さんは僕の母に引き取られ、養育費を援助してもらった傍ら、家事の手伝いなどをして生活することとなった。

彼が高校に進学すると同時に僕が生まれ、忙しかった父と母に代わり随分と面倒を見てもらったことを憶えている。

そして大学を卒業した唐沢さんは、そのまま使用人として雇われることとなったのだ。

「カイ様がどこでお暮らしになると、貴方が君島家の理人^{りひと}様と翠^{みどり}様のご子息である限り、私の立場は変わりません」

唐沢さんはいつものように硬い感じでそう述べた。

しかしその表情は柔らかく慈しみに溢れている。

「本当にお久しぶりです。やはり少し大きくなりましたね」

僕の姿を上から下まで眺めた唐沢さんは、感嘆するように目を細め

た。

「唐沢さんは相変わらずお若く見えますね」

「そうでしょうか？」

唐沢さんは右手で耳を触る。

三十も半ばを過ぎているというのに、唐沢さんは大学にいたところとまるで変わりがなかった。

「最近、お嬢様には“年のせいで口うるさくなってきた”と多々言われるのですが、」

「ああ。想像ができます」

いかにも朝陽が言いそうなことだった。

一旦部屋に戻ると、着替えと洗面用具をいつものカバンに放り込んだ。

そして唐沢さんが待つ車に乗り込むと、それは音も無く動き出した。

「さつき、“お嬢様の命で”って仰ってましたけど、」

「はい。朝陽様が、どうせカイ様は約束など憶えていないだろうから、と」

「成る程」

相変わらず、勘が鋭いようだった。

見慣れた黒い車を見た瞬間は、てっきり用意周到な父が仕向けてきたのかと思った。

「お嬢様方はカイ様にお会いできることを、それはそれは楽しみにしてらっしゃいますよ」

助手席の唐沢さんは、笑顔でそう言った。

「しかし生憎、理人様は本日会食の予定がございまして、お帰りは深夜になられるかと」

「それは父に聞いています。だから今日にしろと言われましたから」
「…… さようでございますか」

僕と父の仲が冷め切っていることは、家中の誰もが知っていることだった。

そのことについて僕は割り切っていたし、父にいたっては最初から気にもしていない有様だ。

きつと唐沢さんにも思うところはあったのだろうけれど、この人はあくまでも使用人として客観視していた。

「本日はお泊りになれますか？」

漂い始めた重たい空気を払拭するような明るさで、唐沢さんは僕に訊ねた。

「そのほうがきつと朝陽様と夜月様もお喜びになると思いますが」

「一応着替えとかは持ってきてはいるんですけど、まだそこまでは決めてません」

「もういつそのこと、このままお帰りになつてはいかがですか？」
何気ない口調ではあったけれど、それが彼の本心であることは分かっていた。

あの日、僕が唐突に家を出ると宣言したとき、一番反対したのは唐沢さんだった。

「これからどこへ行こうというのです」

出て行こうとする僕の肩を掴んだ彼は、今までに見たこともないくらい険しい顔でそう言った。

その手には容易に振り解けないほどの力が込められていた。

「私はあなたのお母様、翠様からあなたやお嬢様のことを託されているのです。目的も行く先もないあなたを、こんな状態で送り出すわけにはいかないのです」

しかし最終的に僕は家を出て、彼はそれを見送ることとなる。

唐沢さんとは生まれたときからまるで兄弟のように密接に過ごしてきた。

僕が去っていく背中を見つめながら、そんな彼は何を想っていたのだろう。

「そういえば、」

ふと、僕は家の誰にも今の住所を明かしたことがないことを思い出した。

さしずめ芽衣子にでも聞いたのだろうか。

「何でしょう？」

「いいえ、別にいいんです」

あえて唐沢さんに聞いてみなかったのは、もしかするとそこに父の存在が絡んでいるかもしれないからだ。

父は僕個人に関心を持っていなかったけれど、その動向については一定の監視を怠らなかった。

その理由は世間体を気にした、ひいては自分の評価に繋がるからといったものだった。

だから僕は一般的に裕福な家庭の子供が通うエスカレーター式の学校に通わされ、適度な功績と恥にならないくらいの成績を要求された。

それが嫌になったから家を出たわけではないと思う。

僕にとって勉強とは日々の過程で、学んだことを結果として残すことをさして辛いとは感じていなかった。

家を出て高校を中退すると告げたとき、てっきり父の僕に対する関心は完全に無くなってしまったんだと、どこかで思い込んでいた。

僕が住んでいる場所を特定することなど、父には造作も無いことだっただろう。

では僕がしている事はとうだろう？

あのビルで叶さんの指揮下、＜傍観者^{アウトサイダー}＞の一員として活動している事実を、彼は認識しているのだろうか。

「そろそろ到着しますが、どこかそれまでに寄られておきたい場所などありますか？」

「あ、花屋が近くにあればそこへ」

「かしこまりました」

唐沢さんが指示を出し、運転手がハンドルを切る。しばらく道なりに進むと、小さいけれど感じのいい個人経営の花屋の前に車をつけた。

「ここに来て何なんですけど、朝陽と夜月の好きな花ってなんですかね」

「そうですね」

少し考えるように唐沢さんが宙を見た。

「夜月様はわかりませんが、朝陽様はダリアなど派手で明るい色の花を好まれますね」

「ありがとうございます。参考になりました」

僕は車を降りると花屋に入り、小さな花束を二つ買った。

「お待たせしました。じゃあ、行きましょう」

僕が告げると、運転手は無言で車を発進させた。

*

二年振りに帰ってきた家は、出ていった日の夜と何も変わらずそこにあった。

仰々しい鉄の門。

カメラ越しに車の存在を確認すると、それは自動的に開かれた。

緩やかに続く砂利の敷かれた車道脇には、整えられた芝と水の湧き出る小さな噴水が見える。

確認したことはなかったけれど、僕の家は多分、豪邸と呼ばれていい大きさなんだと思う。

五階建てのそれは家というよりは小さな寮のようだった。
ベッドルームの数は二桁。

大きなキッチンには常にメイドやコックがいたし、ダイニングルームは家族が集まる小さなものと父が会議用に使うもの、時々来客を招いて会食を行う広いものと三つもあった。

中央には中庭と温室が、地下にはワインセラーと耐震用のシェルターも完備されている。

正面扉の前で僕と唐沢さんを下ろすと、車は車庫のある裏手へと消えていった。

唐沢さんが艶のあるマホガニーの大きな扉に手を掛けて押し開くと、中から何かが勢いよく飛び出してきた。

「お帰りなさい、お兄様！」

朝陽は伸びた髪をはためかせて、僕の腰元へとしがみ付く。

紫の生地にレースをふんだんにあしらったドレス姿の朝陽は、聞いていたほど病状が悪化しているようには見えなかった。

頬はうつすらと赤く、血色も良いように思える。

「私、待ちきれなくてずっと入り口で待っていたの！本当にお帰りなさい！」

「うん。ただいま」

僕は朝陽の背中をあやすように叩くと玄関口に立っているもう一人に視線を向ける。

顔の輪郭に沿うように揃えられた髪。白く透き通るような肌。

そこには黒いワンピースに身を包んだ夜月が、主のいなくなった車椅子の後ろで所在無さ気に立っていた。

僕が手を振ると、夜月も応えるように振り返した。

「朝陽様、そんなに興奮されますとお体に障ります」

「いいの！今日は大丈夫だもん！唐沢はほんと心配性なんだから！」

「はあ……」

困った顔の唐沢さんを他所に、朝陽は僕の手を引いてどんどん中へと進んでいく。

「お兄様が帰ってきてくれて、私、ほんとうに嬉しいです！お父様と芽衣子お姉さまに感謝しなくっちゃ！」

「体の調子はどうなの？あまり良くないって聞いているけど」

「新しいお薬が嫌なだけ。別にそれ以外は平気」

短く言うと、朝陽は夜月に声を掛ける。

「ね？夜月もお兄様が帰ってきてくれて、嬉しいわよね？」

夜月は表情を変えないまま、小さく頷いた。

小さい頃、庭で遊んでいた夜月は何かに躓いた拍子で喉に木の枝が刺さり、一命は取り留めたものの、声を出すことができなくなってしまうていた。

機械を使えば喉の微弱な振るえを感知して発声することが可能だったにも関わらず、夜月は人工声帯の移植を初めとした全ての治療を拒否していた。

故に彼女とのコミュニケーションは必然的に手話が筆談になる。なかなか手話を覚えようとしない夜月は、いつでもスケッチブックを持ち歩き、そこに文字を書き込むことでの意思表示を好んだ。

<お兄さん、おかえりなさい>

黒いペンで記したそれを僕に向けて掲げる。

「うん、ただいま。ああ、これ二人にお土産」

僕は袋から二つの花束を取り出すと、各自に渡した。

結局お店の人に言われるがまま、朝陽には赤いバラとダリアのブーケを、夜月にはそのイメージから宵待草とカスミソウを併せたものにしてもらった。

「わあ！ありがとうございます！」

「……」

朝陽は頬を上気させ、夜月は花束に顔を埋めその匂いを嗅いでいた。

「—— さあさあ、いつまでも入り口に立っていますと風邪を引かれますよ?」

唐沢さんはどこから持ってきたのか二人の肩にブランケットを掛ける。

「続きはお食事を召し上がりながら、ゆっくりとなさればいいじゃないですか」

「それもそうね、お兄様もお腹が空いているでしょう?」

「うん、そうだね」

思い返せば朝ごはんを食べて以来、何も口にしていなかった。

瑕奈ちゃんとのあれこれや図書館での調べ物をしている間に、すっかり忘れていた。

言われて見れば、随分とお腹が減っているような気もする。

「じゃあ、私がお兄様のお隣に座るからね!」

誰とも無く宣言した朝陽は、僕の腕を掴むとダイニングルームのほうへと誘導していく。

その後ろから無人の車椅子を押す唐沢さんと夜月がゆっくりと歩いてきた。

*

夕食はいつにもまして豪勢なものだった。

豚の香草焼きに白身魚のムニエル、ポテトと根菜のグリルとポルチーニ茸のスープ。

その他にもコールドビーフやさつと茹でた青菜のソテー、色とりどりの料理が次から次へと運ばれてきた。
家を離れてみて初めて分かった。

こういった食卓は普通ではないのだと。

「でね、先生が今度一緒にオペラを見に行きましょって言うの」

朝陽は食えることよりも、お喋りに夢中な様子だった。

「私、オペラなんて見たこと無いんだけど、面白いのかしら？夏には毎年お父様がクラシックのコンサートに連れて行ってくれるけど同じようなものなのかしら？そうそう、去年はブラームスを聴きに行ったのよ。その前はシヨパンだったわ。私はどちらかというとシヨパンのほうが好き。憶えてらっしゃる？前に北海道の別荘に行った時、一緒にシヨパンの古いレコードを聴いたでしょう？」

「朝陽様、お魚も召し上がってください」

僕が答える前に、唐沢が口を出した。

そんな彼を朝陽がじろりと睨み付ける。

「だって、お魚は骨があるもの。喉に引っかかったら痛いじゃない」

「骨ならシェフが丁寧に取除いていますよ。残っているのは噛み碎けるくらいの小骨です」

「噛み碎く、だなんて。下品だわ」

「少しは夜月様を見習ってください」

僕の向かい側に座った夜月は、皿に載せられたものを淡々と食している。

「ねえ夜月、私、にんじん要らないからあげるわね」

唐沢の注意が削がれたほんの一瞬の隙を見て、朝陽がオレンジ色の欠片を夜月の皿に移し変えた。

対する夜月は嫌がる素振りも見せず、ただフォークを突き刺してそれを口へと運んでいく。

「あなたって、本当に何でも食べるのねえ」

そんな夜月を感じるように眺めて、朝陽が漏らした。

食後の紅茶が終わるまで朝陽は休むことなく喋り続け、夜月は黙々と全てを飲み込んでいった。

彼女たちがお風呂に入るといので、僕は自分の寝室へと戻ってみることにした。

「カイ様が出て行かれてから定期的にお掃除をする以外、何も手をつけていませんから」

唐沢さんがそう言っていたように、扉の向こう側に広がっていたのはあの日とまるで変わらない風景だった。

夜闇に浮かび上がるシルエット。

一人用にしては大きすぎるベッド。

貰ったまま一度も使うことの無かった望遠鏡。

勉強机やその椅子の位置にいたるまでの何もかもが、まるでタイムスリップしてきたかのように同じだった。

ぴんと張られたシーツの上に腰掛けて、ぐるりと辺りを見回してみる。

生まれてからの十数年をここで過ごしてきたという実感がなかった。

僕は部屋と廊下を隔てている扉に目をやる。

昔はこの扉をひどく強固に感じたものだった。

小さい頃、恐い夢を見たことがあった。

その中で僕はひとりぼっちだった。

いつものように唐沢さんが起こしに来ない。

不思議に思い部屋を出て歩いてみると、家の中には誰もいなくなっていた。

恐ろしくなつて家を飛び出すと、街の中にも人の姿はなく、僕は世界中でたった一人になってしまったのだと途方に暮れていた。

そんなとき、後ろから誰かの声がして――

「カイ様。」

こんこんとノックの音がして、唐沢さんが頭を覗かせた。
そして、

「どうされたのですか？こんな真っ暗闇の中で」

そう言つて、明かりを点けた。

「そういえばカイ様は前にもこんな暗がりの中で泣いていましたね」

「僕が、ですか？」

「はい。小さい頃、そうですね、あれは三歳くらいでしょうか。――
之瀬様のお嬢様が初めて遊びにいらした日のことです」

「――ああ。」

その日のことならば、よく憶えている。

父の学生時代からの友人である一之瀬 樹雄^{みきお}には、僕と同じ年の子供がいた。

樹雄さんのことは何度か見かけたことがあったけれど、その子供である芽衣子に出会ったのは、あの夏の日は初めてだった。

――カイ、これが一之瀬のお嬢さんだ

そう紹介された女の子は父親の足元に隠れ、じっとこちらを窺っていた。

最初はただ人見知りなのだと思っていた。

父と樹雄さんとは何か大切な話をしなければならなかったので、僕と芽衣子は僕の部屋で一緒に遊んで待っていることになった。

大人は子供ならば誰でもすぐに仲良くなれると思い込んでいる節がある。

子供といえど個人の意思と自我を持つ生き物だ。

彼らが思い込んでいたほど、僕達は無邪気で柔らかい存在ではないのだ。

寝室の扉が閉まった途端、芽衣子の態度が豹変した。

―― あたしね、もうすぐ死ぬの

その子の放った言葉の意味が、よく理解できなかった。

芽衣子は僕のベッドに断りも無く這い上がると、ぴょんぴょんと飛び跳ねながらそう言った。

―― もうカラダがもたないんですって。だからあたしは死ぬの
当時の僕にとって、死という概念は宇宙と同じくらい遠い存在だった。

今でもその意味についてきちんと考えたことがあるかと聞かれれば、無いと応えざるを得ない。

とくに子供と死を結びつけることが幼い僕には難しかった。

多分、僕はそれは何かの間違いなんじゃないかと芽衣子に訊ねたんだと思う。

―― だっておとうさまとおかあさまがそう言ってるの、きいちゃったんだもの。それにね、

何でもないうように呟くと、芽衣子はベッドを降りて僕の方に近づいてきた。

―― あたし、ときどき 血 をはくのよ

得意気にそう言った芽衣子は、僕の目の前でごほごほと咳をし始めた。
どのくらい続いただろうか。

急に喉の奥からひゅうひゅうという音がして、辛そうな声と共に芽衣子は少量の血をその手の中に吐き出した。

—— ね、ほら？

まるで自慢するように見せびらかすと、彼女はその血を僕の頬に擦り付けた。

—— ねえ、死ぬのってこわいと思う？

動けなくなっていた僕に、彼女はそう聞いた。
頬の血はみるみるうちに凝固していく。

—— 死んだらさ、あたし、あなたにあいにきてあげる

唐突に言われ、僕は戸惑った。

死んだ後とはすなわち幽霊ではないか、と。

—— そうね、ぜったい来るわ。それでこんどはあなたをつれていくのよ

そう勝ち誇ったように宣言すると、芽衣子は僕を突き飛ばして勝手に部屋を後にした。

それから唐沢さんがやってくるまで、僕は一人で怯えていた。

父に見送りに出てくるよう言われ、玄関で芽衣子の姿を見たときもそれは変わらなかった。

当の芽衣子といえ、最初に見かけたときのように父親の足元でじっとこちらを見つめているだけだった。

そのときのことを、僕は唐沢さんを含め、誰にも打ち明けることはなかった。

その後、就学した僕らは同じクラスで再会を果たすことになる。

あんなに死んでしまうんだと連呼していた芽衣子は、弱々しくはあったけれど血を吐いたりはしなかった。

それどころか、僕の家での出来事も忘れてしまっているようだった。

――まるで違う人のようだ

それが僕の抱いた再会の第一印象だった。

「あの日以来、私はあなたに“ねえ、おばけっているの？死んだら人はおばけになるの？”と、それはもうしつこく聞かれましたよ」「そうでしたっけ？」

確かに芽衣子に言われたことを気にしていた時期はあった。

寝ている間にやってくるんじゃないかと、眠るのを拒んでいたことも憶えている。

「それで唐沢さんは僕になんて答えたんですか？」

「さあ、どうだったでしょうね」

唐沢さんはやんわりと微笑んだ。

「でも翠様はたしか、こう言っていましたね。」

“おばけなんて恐くない、本当に恐いのは死んだ人じゃなく、あなたの隣で生きている人たちだよ”、と」

「……それは、あまり子供向けな回答ではありませんね」

「翠様はそういうお人でしたから」

一瞬、唐沢さんが遠い目をしてどこかを見つめた。

母はどういった経緯で唐沢さんを引き取ることになったのだろう。

何故彼を自分の養子にはせず、養育費を援助するだけの関係を保ち続けたのだろうか。

それは誰にも聞くことの出来ない問いの一つだった。

「もうすぐお嬢様たちがおやすみになられるお時間です。その前に会いに来て欲しいと仰っておられましたよ」

「そうですか」

立ち上がると、唐沢さんが扉を開けた。

僕がその向こう側に消えてしまうと彼は部屋の明かりを落とし、再び静寂の訪れたその部屋を後にした。

*

「お兄様、明日のご予定は何かありますの？」

ベッドに寝転んだ朝陽が期待を籠めて僕に訊ねる。

「ああ。ごめん、仕事があるんだ」

「そう……。お仕事、なの」

声を落とした朝陽は、お父様と同じねと小さく呟いた。

「最近のお父様はいつにもまして凄く忙しそうなのよ。テレビに出たり、どこかの偉い人と会議があったり、ちっと私に会いにきてくれないの。だから私はいつも一人ぼっち」

「夜月がいるから一人じゃないだろ？」

僕は横で本を読んでいる夜月を見た。

この二人は今でも同じ部屋の同じベッドで寝ている。

「夜月は私の半分だもの。もう一人私がいたところで、それは一人と同じだわ」

「そういうものなのかな」

「そういうものなんです」

双子という存在について、当たり前だが一人で生まれてきた僕にはよく分からなかった。

似ていない双子もいれば、似ている双子もいる。

この二人は容姿的には髪長さや服装の違いを除けばそっくりだったにも関わらず、性格的な面ではまるで正反対だった。

明るく社交的な朝陽と、静かで内向的な夜月。

まさしく太陽と月のような関係だった。

「では、代わりに私が眠るまで手を握っていてくれますか？」

「いいよ」

僕は差し出された手を握った。

風呂上りだからなのか、朝陽が子供だからなのか、それは不自然なほど温かった。

「お兄様は毎日なにをして過ごしているの？」

「そうだね、書類を作ったり調べ物をしたり、今日は杉並にある大きな図書館に行ってきたよ」

「まあ！そこにあるステンドグラスがとても綺麗だって、ピアノの先生が仰ってましたわ。お兄様もそれをご覧になって？」

「それは見なかったな」

代わりに僕はそこにある全ての本の内容を記憶しているという人物の話をした。

しかし何の疑いもなくそれを信じた僕とは違い、彼女はそれについて懐疑的だった。

「そもそも、どうしてその本が歴史の書棚にあったんですか？」

朝陽は僕の方を見て首を傾げた。

「きっとその方はお兄様のような人をからかって楽しんでいるのよ。きっとそうだわ」

「僕みたいなのって？」

「純朴で人を疑うことを知らない、簡単に騙されやすそうな良い人のことです」

何だかあまり褒められているような気がしなかった。

しばらくすると朝陽に瞳が潤み始めた。

食後に飲む薬の副作用ですぐ眠くなってしまふのだ。

何度も欠伸を押し殺すものの、とうとう目蓋の重さに負けてしまいその目を閉じた。

起こさないようゆっくりと手を離すと、すやすやと寝息を立てるその体から離れる。

そして朝陽側のベッドサイドランプを消すと、灯かりを受けてぼんやりと浮かび上がる夜月の顔を見た。

「まだ眠くないの？」

夜月は無言で頷く。

読んでいた本を脇に置くと、彼女は僕を呼び寄せた。

「何を読んでいるの？」

備え付けの椅子に座って、僕は夜月のほうを覗き込んだ。

見たことの無い文字だった。その本の題名すら僕には読むことができない。

「何語？」

<ロシア語>

「そうなんだ」

スケッチブックのページを見て、僕は納得する。

「どうしてロシア語なの？」

<昔観た映画のお医者さんがロシア人だったから>

「ふうん」

微妙に答えになっていない文章をすらすらと走らせながら、夜月は首を縦に振る。

夜月は朝陽の前ではあまり僕と話をしようとしなない。

朝陽が極端に嫉妬深いことも理由のひとつとしてあったのだろう。

しかし普段抑えている分、一度書き出すと止まらなくなる時もある。

昔、そうやって“会話”をしている途中でスケッチブックのページがなくなってしまう、唐沢さんが慌てて新しいものを買に行ったこともあった。

一度誰かが書いてはすぐ消せる小さなホワイトボードのようなものを買ってきたとき、夜月はそれに触ろうともせず、頑としてスケッチブックを手放さなかった。

彼女いわく、＜自分が書いたことは全て残したい＞のだそうだ。

現に今までの使用済みスケッチブックは全て大切に保管されている。

＜お花、ありがとうございます。とても綺麗です＞

＜宵待草は別名を月見草とも言うんですよ？知ってました？＞

＜オペラについてどう思いますか？お兄さんは観たことがありますか？＞

＜私はどちらかというとブラームスのほうが好きです。ショパンはどこか疲れてしまうもの＞

そんなやり取りが続いた後、

＜お兄さん、お母さんの話をしてください＞

唐突に綴られたそれに僕は彼女の顔を見た。

夜月は何かと母の話を聞きたかった。

「僕が知っていることはもう全て話したと思うよ」

＜では、もう一度聞かせてください＞

そう頼まれてしまったので、僕は微かに残る母の思い出を手繰り寄せ、回想を始めた。

*

母は聡明な人だった。

その振る舞いは知的で、いつも何かの研究に没頭していた。それは父も関わっていたものらしい。

大掛かりな設備を必要としていた為、父も母も家にいることが少なかった。

生まれたときから既にそんな状態だったので、僕は大きく彼らを恋しいとは思わなかった。

僕は唐沢さんを筆頭とする使用人の方々に十分すぎるほどの面倒を見てもらっていたし、一人で何かをしながら時間を潰すことに楽しみを見出せる子供だったのだ。

たまに帰ってくると、母は僕を呼んで何をしていたのかを聞きたがった。

母はいつもラフな格好で床に座り、僕を膝の上に乗せる。

彼女からはいつも知らない薬品の匂いと煙草の残り香がした。

「それで？今日は何をしていたの？」

僕は庭で蟻の行列を追いかけて転んだこと、みみずが干からびると焦げた様に黒くなると発見したことなどを話して聞かせた。

母はいつもうんうんと頷いて、たまに内緒にしてねと隠れて煙草を吸った。

煙草を吸う女は嫌いだと父が顔を顰める為である。

「でもさ、人は誰だって何かに依存しなきゃ生きていけないものよ。あたしの場合、それが煙草だっただけ」

そういつて彼女は美味しそうに煙を吐いた。

その一服は大抵唐沢さんに見つかってしまつので、母が小さくなっ

て叱られる様子を何度も見かけたことがある。

逆に僕が母に何をしていたのかを訊ねると、彼女はいつも曖昧な口調で、

「新世界の礎の試作」

とか

「人についての可能性の模索、あるいは研究」

と子供にはまるで分かな言葉を並べて僕を魅了した。

聡明であると同時に、母は美しい人だった。

彼女の実年齢がいくつだったのかは分からない。

けれど彼女には子供を生んだとはまるで思えない、少女のような無邪気さがあった。

その反面はつとするほど洗練された美しさを見せることもあり、社交界での彼女は注目の的だった。

研究の合間、父と母は彼の仕事の関係で様々なパーティーに出席する機会があった。

いつもの格好からイブニングドレスに着替え、軽く化粧を施した母の姿は子供の目から見てもどきどきするほど妖艶だった。

「じゃあ行つて来るからね。帰りは遅くなるから、ちゃんと寝ておくんだよ」

そういつて抱きしめてくれた母の体からいつもは嗅いだことのない香水の匂いを嗅ぎ取って、これは知らない人なんじゃないかと不安になったりもした。

父は母を愛していたのだろうか。

表面上では仲が良さそうに見えていた。けれどそれは子供の視点からの話だ。

両親には仲良くいてほしいと思う願望も含まれていただろう。

母は妹産んだ後、その病院からいなくなった。

唐沢さんの話だと母は病院着のまま家に戻って荷物をまとめ、彼に子供たちを頼むと言い残すとそのまま消えてしまったのだそうだ。原因は今でも分からない。

母がいなくなった後も、父の態度は変わらなかった。

いや正確に言えば、彼はさらに家へと戻らなくなり、辛うじて存在していた僕との会話も無いに等しいレベルまで減少した。

今思えば、彼は母の失踪の理由を僕に見出していたのではないだろうか。

それならあの冷たい視線の訳も納得できる。

六歳だったあの日。

僕の人生から母はいなくなった。

寂しいと思ったこともあったのかもしれない。

けれど“母の不在”は僕の中でその他多くの謎として、ただ心の奥に集約されていた。

*

僕が話し終える頃には、夜月も眠っていた。

その腕の中からスケッチブックを抜き取ると、その体に毛布を掛けて電気を消した。

「お嬢様方はおやすみになられましたか？」

部屋の外には唐沢さんが待っていた。

「ええ。夜月も今、寝付いたところです」

「ご苦労様でした」

唐沢さんは小声で僕を労った。

「どうなさいますか？お泊りになれますか？」

「いや、やっぱり帰ろうと思います」

「…… この家はあなたにとってそんなに居心地が悪いものなのですか？」

訊ねられて、僕はどうなんだろうと思う。

この家は快適だ。

居心地が悪いどころか食事の心配はしなくてもいいし、そのほかの面倒も全て世話してもらえる。

けれど、この家に僕の居場所 wasn't なかった。

そう言えばきつと唐沢さんは否定するだろうけれど、どんなに言葉を尽くされてもその気持ちは覆りそうにもない。

いつからそう感じていたのだろうか。

多分、一番最初から。

自我が芽生えてからすぐ僕はそれを悟ったのだろう。

幼い頃はここしか帰る場所がなかった。けれど今は自分ひとりでもなんとかやっていけている。

あの日、この家を飛び出した理由が今になってようやく分かったよ

うな気がした。

「やはりお父様のことですか？」

唐沢さんは静かに呟いた。

「確かに理人様はあなたに対して冷たい態度をお取りになるかもしれませんが、それは決して愛情が欠損しているからではないと思います。ですから、」

「——別にそういうわけじゃないんですよ」

僕は続けようとする唐沢さんをやんわりと制した。

「ただ仕事もありますし、それに明日の朝になれば妹たちも別れるのが辛くなるかもしれません」

「そう、ですか」

まだ心から納得している様子ではなかったけれど、唐沢さんは背筋を伸ばして一礼する。

「出すぎたことを申し上げました。お許しください」

「だからそういうの、いい加減にやめませんか？」

僕が苦笑して言うと、

「親しき仲にも礼儀あり、です」

と彼もつられて笑った。

*

「私がお見送りできるのはここまでになります」

玄関口で唐沢さんは残念そうにそう言った。

「車は用意させました。自宅までお送りできなくて申し訳ございません」

「いえ、十分ですよ」

彼はこれから帰ってくる父を出迎えなければならないのだろう。実質上の主人は父なのだから、それはしょうがないことだ。

「今日は有難うございました。シェフの方にもとても美味しい料理でしたとお伝えください」

「かしこまりました」

車が到着し、中に僕が乗り込むのを見届けると

「カイ様。あなたが何とお思いになろうと、ここはあなたの家なのです。お帰りになりたくなったらいつでもご連絡下さい。何処に居ようとお迎えに上がります」

唐沢さんは真剣な口調でそう言った。

それに対し、

「じゃあ、今の仕事をクビになったら考えてみますよ」

と応えた僕に、唐沢さんは笑顔でそつとドアを閉めた。

夜の道を静かに走る車内で、僕は小さい頃に見たあの夢の中の人に
ついて考えていた。

彼女 —— そうそれは確かに女性だった。

誰もいない街。

たった一人の僕を彼女は見下ろして、右手でどこかを指差したのだ。
ふと唐突に、それが果たして夢の話だったのかどうか曖昧になっ
てきた。

僕はどこかで本当に彼女と会ったのではないだろうか。
だとしたら、一体どこで。

どうして忘れているのだろう。

窓の外では雨が降り始めている。

すれ違った車の中に、父の影を見たような気がした。

* * *

カイ様と入れ違いになる形で、理人様の車が門を潜った。

「おかえりなさいませ」

「ああ」

車から降りてきた理人様は、連日お帰りが深夜であつたにも関わらず、あまり疲れた様子もなかった。

彼のジャケットとブリーフケースを受け取って、中へと先導する。

夜の空気に雨の匂いが混じっている。

どこかで降り始めたのかもしれない。

「三浦大臣との会食はいかがでしたか？」

「相変わらずだったよ」

ネクタイを解きながら、理人様は何でもない風にそう呟いた。

「文部科学省の連中は何も気付いていない。試しにいくつか鎌をかけてみたが、引っかかりもしなかった。あれは演技ではなくただの

無知によるものだ」

「そうですか」

「それはそうと、アレが帰ってきたのだろう」

「…… はい」

私は理人様のこういう口調があまり好きにはなれなかった。

彼はどうしてカイ様に対してだけこういう態度をお取りになるのだろうか。

「朝陽と夜月はどうしていた？」

「二人ともお喜びになっていましたよ。二年ぶりのご対面でしたから」

「そうか。ならばアレにもまだ価値があるというものだ」

そう言つて理人様は私が用意したウイスキーに口をつける。

「…… ご子息のご様子はお聞きにならないのですか？」

思わず口から出ていた。

慌てて取り繕おうとすると、彼は気にした様子も見せず

「アレの顔はこの間、電腦越しに見ているからな」

と答えた。

お着替えになられるというので、私は外に出て明日の為のスーツを取りに衣裳部屋へと赴いた。

お届けしようとノックをすると、向こう側から返事がなかった。

「理人、様？」

失礼を承知で扉を開けると、そこに彼の姿は無い。

奥のバスルームには張られたばかりのお湯がバスタブの中で湯気を立てている。

不審に思い書斎の方を見ると、机の下の秘密戸が開いていた。

「…… またあそこですか」

私はスーツをそこに置くと、その扉の奥へと入っていった。

この場所の存在を知っているのは理人様と私以外には、建築に携わったものと、ここで“保管”されているものの製造者しか知らないはずだ。

勿論、ご家族であるカイ様やその妹君たちも気付いていない。もし知っていたとしたら、到底平常ではいられなかっただろう。

「理人様」

白いガウンを羽織っただけの背中に声をかける。
ゆっくりと振り返った彼の顔はとても満ち足りていた。

「文生、分かっているとは思いますが、お前の最優先事項は朝陽と夜月の成長を見守ることだ」

「……はい」

「“あれ等”の経験や感情はいつか 彼女 が目覚めるときのために必要なだからな」

そう言つて、うつとりとそれを眺めた。

それは人間を収めたタンクだった。

その“少女”は胎児のように背を丸め膝を抱き、そこに漂っている。時折、夢を見るようにその両眼が瞬いた。唇からは小さな気泡が立ち上っている。

「ああ、君こそが完璧だ —— 真昼^{まひる}」

真昼と呼ばれた少女。

朝陽様と夜月様に瓜二つな容姿を持った彼女。

理人様が一体何の目的で彼女を培養しているのかは分からなかった。
私は、それを聞くことが恐ろしかったのだ。

いつか彼女が目覚める時――

そのとき理人様は、朝陽様と夜月様をどうするお積もりなのだろうか、と。

07・＜戻れる場所 帰らない人＞（後書き）

この小説もようやく四分の一までできました。

名前ばかりが増え、伏線に接ぐ伏線のオンパレードで僕自身も全て回収できるか心配です。

専門的な話（電脳技術 e t c .）にも触れていますが、あれは僕の無い知識を総動員させた結果です。非常に残念な結果ですが、これもひとつのエンターテインメントと思い目を瞑っていただけると幸いです。

08・＜少女・瑕奈（きずな）の華麗なる潜入調査記録＞

08・＜少女・瑕奈^{きずな}の華麗なる潜入調査記録＞

“フツウ”。

普通——って、何ですかね？

たとえば。

近所の野良猫さんの話なんですけど、

この間、トラックが規定速度ぶつちぎりで道路を走っている目の前を、虎縞のかわいい猫さんが、こう、優雅に横切っていくところを見たんですよ。

で、私、思わず

「危ないっ！」

と、心の中で叫んだんですね。

そりゃあ私だって助けられるものなら助けたかったですよ。

でも私は陸上選手みたいに早く走れませんし、火事場の馬鹿力に期待できるほど運もよくありません。

おまけに時を止めるとか、猫を助けた反対側の手でトラックを止めるなんて魔法みたいな力も持っていないんです。

実に普通の少女なんですよ。

あ、私の話じゃないですね。

猫さんの話でした。

それでその猫さん、どうなったと思いますか？

トラックは猫さんに気付くことなくどんどん前へと迫ってきます。
無骨な四対の車輪が猫さんの華奢で細身な体軀に今にも到達しそう
になったとき、

その猫さん、宙返りしたんです。

ええ。

そうなんです。

宙返り、したんです。こう、綺麗に弧を描く感じで。

猫さんはトラックをちらりと見ると、まるで全てが予定調和の出来
事みたいに、慌てず動じず、ただその後ろ足の強靱なバネを利用し
て、びよーんと跳躍した挙句、くるっと一回転して塀の上に降り立
ったんです。

信じられますか？

私は俄かに信じられませんでした。

しかもその猫さん、私の視線に気付いて何と、にやっと笑ったんで
す。

猫が笑うところって見たことがありますか？

私はそれが初めてだったんですけど、結構ブキミなものでした。も
う二度と見たくないくらいには。

とにかくですね。

私はそのとき、確実に悟りました。

「この猫は普通じゃない」

普通の定義がなんであれ、たとえ平凡と非凡の境目が曖昧だとしても。

私の目の前でひらりとトラックをかわし、あまつさえ宙返りまで見せてくれたあの猫さんは、明らかに一般的常識からかけ離れている存在なのだ、と。

尚、この猫さんは今後のお話に一切関係ありません。

彼（彼女？）はあくまで私の回想の中に登場する虎縞が綺麗で宙返りの上手な猫さんです。

まさか主人公の絶体絶命の危機に颯爽と現れ、全てを解決に導くなんてことは絶対にありません。

これは本当です。

伏線じゃないですよ？

だってその次の週、猫さんは同じ道路の真ん中でぺしゃんこになって潰れてしまっていたんですから。

*

ということとで私の話をしましょう。

私は極々普通の十五歳の女の子です。

あ、失礼しました。

この間、十六歳になったんでした。忘れてましたよ。

容姿も能力もいたって平凡。

そりゃあ目も当てられないほどブサイクってわけじゃないですけど、胸だって平均よりは小さいですし、背も小学生並みに低いのが実は密かなコンプレックスだったりしています。

そうですね、得意な事はお料理です。

同居人（後に記述）がまったくいいほど家事をしない人なので、それなりに家の中の事はできるはずだと自負しています。けれどそれも一般のレベルからはみ出ることはないでしょう。

けれど私も生い立ちは少々複雑かもしれません。

詳しくは語りませんが、私はその幼少期をかなり“苦痛”だと思う環境の中で過ごして来ました。

虐待ってわけではないんですけど。

ああ、でもアレも虐待の一種になるんですかね。どうなんでしょう。昔の話なのでよく分かりませんね、私にも。

父と形容されるべき人は、私のことを愛してなどいませんでした。けれど興味がなかったわけではないようです。

まあその関心は親が子に対して抱くものではなかったんですが、私としてはそれでもよかったんじゃないかな、と思います。

私という存在をこの世に生み出してくれたことを今では感謝しています。

そのおかげで色々な事を知ることができましたし、素敵な体験もたくさんできましたから。

さてはて。

私自身は凡庸かつ平凡なわけですが、周りに集まってくる人たちはどうも普通じゃありません。

父にしてみたってそうですね。

彼は俗に謂う“マッドサイエンティスト 狂科学者”というやつでした。

けれどただ単に狂っていたわけではなく、その突飛なアイデアと斬新な意見を求め、政府の偉い人なんかがたまに訪れたりしました。今は離れて暮らしているんですが、十中八九きつとあのままなのでしょう。多分。

そんな私には弟妹がいます。

私たちは三つ子として生まれました。

二人は何の才能もない私とは違い、世間があつと驚く素晴らしい能力を持っているのです。

弟は発達した嗅覚と聴覚の持ち主です。

雑踏の中でも五キロ先で釘が落ちる音を聞き分けたり、遠く離れた家の晩御飯を見事当ててみせたり、とその能力はもはや犬並みです。あ、こう言つと彼は凄く怒るので、内緒にしてくださいね。

小さい頃はいつも涙を溜めた目で私の背後に隠れ怯えていました。それは無条件に抱きしめてあげたくなるくらいの可愛さでした。その遺伝子の欠片でもいいから私に受け継がればよかったのにと、無駄なことを思ってしまうくらいに。

そんな弟は近年その人間不信にすっかり拍車がかかり、ついには家の中に引きこもって一步も出なくなりました。

ええ、ニートです。

そして彼こそがさきほどの“同居人”さんなんです、最近では顔を合わせてもくれません。

これがお年頃つてやつでしょうか？

妹の方は、そうですね……平たく言えば天才です。

確か誰かが彼女のことを“**電腦世界の申し子**”と呼んでいましたね。それで間違いないんだと思います。

妹は私たちがまだ覚えてたこの這い這いに夢中になっていた頃から、**パソコン**に關して異常な興味を示してきました。

そして言葉を習得する前に**電腦**を使いこなすことを覚えてしまったのです。

驚きですよ。

そんな妹は、ある日その才能を聞きつけた偉い人に連れられて、どこか知らない場所で生活することになりました。

それ以来、もう十年近く音沙汰はありません。

とある筋からそれなりに元気でやっているとは聞いているんですが、それでも姉としては心配になってしましますよね。

それが私の自慢の弟妹たちです。

今は二トで行方不明の身ですが、それでも私は彼らを愛していると公言できます。

好きです。大好きです。超愛しています！

私の家族以外にも、不思議な人たちはたくさんいます。

半年前から働き始めた<**傍觀者**>という事務所の同僚の方たちなんですアウトサイダーズが

謎の老成パトロンとその美人眼鏡秘書を筆頭に、

ジェンダー性別錯乱した変態実験マニア、

危険な匂いがぶんぶんするかなり二枚目なナイフ男、かの007も真つ青なスパイ能力を持つおっさん（失礼）と、

若くして医師免許と電脳工学に精通した“ドクター”と呼ばれる青年。

それから、私とそう歳も変わらない常に無表情顔の少年。

入りたての頃、仕事のあれこれを教えてもらったので私は彼を“先輩”と呼んでいます。

その先輩なんですが、ついこの間まで私と同じく非力・無能要員としてそれなりに親近感を懷いていたんですけど——それはとてもない検討違いでした。

多分、私たちの中で一番異能なのは彼、正確に言えば彼の中のもう一人の存在なのではないかと、うすうす思い始めている今日この頃です。

ということで、これが私と、私の周りを取りまく人々です。

改めて考えてみると、彼らに比べ私は本当に微妙ですね。

その微妙さ加減もまた微妙すぎて、なんていうかどうしようもなく不完全燃焼です。

私は私が好きです。

私が今の“私”に成れたのはここまでの経緯のおかげです。

私まで“私”を嫌いになってしまったら、今まで私を支えてくれた全ての人たちに何だか申し訳ない気がするのです。

——
だけど

やっぱりそれでも少しは思っていますよね？

三七三さんみたいに頭が良かったら。

柊木沢さんのように強くなれたら。

先輩のように……は、やめておきます。

やっぱりあれは特別です。

私がどう足掻いたところであそこまでは無理ですよ。

普通じゃない、私。

平凡じゃない、私。

凡庸じゃない、私。

憧れの非・日常。望んでいた超能力。少しばかりの才と知恵。

もしもこんな日々から抜け出せる方法があつたとしたら、試してみたいと思いませんか？

——
ね？

* * *

ある日のく傍観者アウトサイダーズ>事務所でのことです。

先輩と図書館に行った日から数日後。

私と先輩は、明さんの部屋に呼び出されました。

「—— 潜入、ですか？」

告げられたのは思ってもみなかった次の仕事内容。

今まで私は（先輩もそうですが）、ちょこちょこ書類を作成したり、三七三さんの実験の犠牲になったり、調べ物をしてみたり、三七三さんの実験の玩具になってみたり、と事務的なことしか任されてきませんでした。

それもそうですよね。

十六歳の少女と十九歳の少年に、柊木沢さんのような血の臭いがするあれやこれやはちよっと、いやかなり無茶がありましたから。それがいきなり、潜入工作とききましたよ！

「正確には潜入工作ではありません。貴方がたには、ただこの集いに参加していただきたいだけです」

そう言つて、明さんは一枚のチラシを私たちに見せた。

「『創世会 体験入信のお誘い』？」

「ええ。これは創世会と呼ばれる例の団体が月に一度催している、PRイベントのようなものです」

「それに僕たちが参加するんですか？」

先輩がチラシから顔を上げます。

その無表情っぷりからは判別しにくかったけれど、多分先輩も私同様混乱していたんだと思います。

「何故、僕たちなんですか？」

訊ねつつ、先輩はちらりと私の方を見ました。

「僕も瑕奈ちゃんもこういうことには不慣れです。どちらかというところいう事は、金さんか柊木沢さんあたりが妥当かと思いますが」
「私も大いに賛同します！」

どさくさに紛れて意思表示。

明さんのことは美人だなとは思っていたけれど、その一貫した態度と口調に萎縮してしまうところもありましたから。

そんな私と先輩の態度に動じることも無く、明さんは淡々と選抜の理由を説明していきます。

「金さんは首探してからシフトして新たな任務についています。柊木沢さんは目立ちますから、顔を覚えられる可能性もあります。私が、いえ叶が望んでいるのは創世会の内情についての“視察”です。貴方がたは特に何もせず、むしろ下手に動くことなく、ただその場の流れに任せありのままの状況を見てきていただきたいのです」

「で、でも、もし本格的な入信を迫られたら」

「それはないと思います。全員が全員、その場でイエスと言えるはずがありません。少し検討してから後日また、という選択肢も必ず与えられるはずですから」

「それはそうかもしれないですけど……。もし、私たちがどこかからの回し者だとバレたりしたら、」

「そんなことになったら—— お前らだけで対処できるとは到底思えないな」

まるでアニメに登場する正義の味方のような声。

振り返ればそこには柊木沢さんが、扉の陰にもたれかつこよく腕を組んでいます。

「どうすんだ？ 相手は必要とあらば人の首を切るような連中だぞ？ 生きて帰れると思ってたんなら、ちと樂觀的すぎやしませんかね」

「じゃ、じゃあもしバレたりしたら……」

柊木沢さんは不吉な音を上げながら、自分の首を人差し指でなぞりました。

典型的な首ちょんぱのポーズです。

「ひいっ！」

「なんてな、そういうこともあるかもしれないって話だよ」
思わず悲鳴を上げた私に柊木沢さんは肩を竦めます。

「で？ どうなのよ、明ちゃん？ そのところ考えてるわけ？」

「ですから彼らにはそのような事態を招かぬよう、何の先入観もなく自然な態度で臨んでいただくのです」

「それじゃあ説得力に欠けんぜ？」

「…… それでは、貴方はどうしろと仰るのですか？」

「俺も行く」

柊木沢さんは真剣な顔で宣言しました。

確かに私も柊木沢さんと仕事外でデートは好ましい展開で、あ、いや何でもないです。

とにかく柊木沢さんが来てくれるなら私としても安心です。先輩もきつと同じ風に思っているのでしょうか。

…… 相変わらずの無表情ですが。

しかし対する明さんは珍しく露骨に嫌な顔をしています。でも美人って、どんな顔にしても美人なんですね。

これは発見です。

「創世会は貴方が思っているよりも一般的に広く知られています。このイベントも抽選制でして、二人分の参加権しか入手することができませんでした。なので、」

「そんなの明ちゃんなら何とかできるんだろう？」

柊木沢さんは私と先輩に近づいて、その両肩を引き寄せるように背後から腕を回します。

し、心拍数が！心拍数が！

「俺はこいつらをそんな狼の群れに裸で投げ込むような真似、賛成できねえな。別に事を荒げようってわけじゃない。なんなら得物だつて持っていないよ。俺はあくまでも保険、または保護者だな」

「…… 分かりました」

凄いですっ、あの明さんがとうとう折れました！

というか、柊木沢さんを説得するほうが困難だと気付いたのでしょうか。懸命な判断です。

「もう一席分、どうか用意させましょう。しかし貴方には彼らと別行動で潜入していただきます。くれぐれも穏便に事を運ぶよう心

かけて下さい」

「了解。明ちゃんは話が早くて助かるねえ」

そう言うと、柊木沢さんは私たちを引き連れて笑顔で明さんの部屋を後にしたのでした。

「よかったですか、あんなこと言って」

部屋の外で、先輩が柊木沢さんに訊ねました。

「いいのいいの。どうせ俺も暇してたし、それに首を刎るような連中の親玉だぜ？見てみたいに決まってるじゃねえか」

「成る程」

…… それってただの暇つぶしと好奇心ってことですよ？

しかし先輩も納得していますし、私も特に意見することはやめました。

そこへ、

「何なにー、あたしだけ仲間はずれなのー？」

騒ぎを聞きつけてきた三七三さんが不満そうにこちらへと向かってきます。

その頭には何故かゴーグルが装備されています。必然的に嫌な予感。

「えー、みんなどこかへ行く計画？あたしも混ぜてほしいわぁ」

「…… お前ら、何があってもコイツにはバラすなよ？死んでも口を割るなよ、いいな？」

「ええー何その態度っ！三七三さん、傷ついちゃうなー傷心だなー」

柊木沢さんは完全に無視しています。

先輩は、その、何ていうか無表情です。ここまでくると清々しいです、いつそ。

そして三七三さんの視線は順当に巡り廻って、私の方へと向けられます。

「…… 瑕奈？」

「は、はい！ なな何でしょうかつ？」

「ちよつと新しい拷も …… いいえ、実験を思いついたの。ちよつと一緒に来てもらえる？」

「いまなんか言いかけた！」

絶対何か不穏なことを言いかけましたっ！

「せ、先輩——！ 柊木沢さん！」

助けを求める私の叫びも虚しく、三七三さんは女性とは思えない凄
い力でどんどん私を引きずって、あ、いや、引っ張っていきます。

「今、ちようどラットを使った実験にも飽きてきたところだったの。
活きのいいサンプルが欲しかったのよね」

うふふと不気味に微笑む三七三さんは右手をわきわきと動かしてい
ます。

最後の力を振り絞って、私は柊木沢さんに目を向けました。
すると彼は両手を合わせ目を瞑り、

「—— 合掌」

となにやらお経を唱えています。

「ちゃんと成仏してくれよ！。間違っても逆恨みで化けて出るなよ
——」

まだ死んでいませんからっ！

*

そしてその数日後の日曜日。

私は先輩と東京駅で待ち合わせて、一緒に例のなんたら会の集いに向かうこととなりました。

ちなみに柊木沢さんとは直接会場で待ち合わせの約束です。

…… なんだかとても残念な心情です、ハイ。

「お腹、空いてない？」

内心がつくりきっていた私に、先輩が訊ねます。

時刻はもうすぐ正午になろうというところです。

例の集会是一時半からなので、まだ少し時間がありました。

丸の内ビルあたりには、親子連れやカップルさんたちの姿がちらほらと見受けられます。

「そうですね、小腹は若干空いてきたかと」

「じゃあ会場に向かう前に何か食べていこう」

そういうと先輩はいちやいちやと手を繋ぐ恋人たちの脇をすり抜けて、新・丸の内ビルに入っていきます。

慌てて追いかける私。

なんだか聞いたことのある名前のレストランで、私と先輩は向かい合って昼食と洒落込んでいました。

先輩はカツカレーとコーヒーのセットを、私はオムライスと食後のデザートにこの店の名物だというパフェを頼みました。

実を言うところといった場所で食事するのは初めての経験でした。

しかも男の人と二人きり、これってひよっとすると本当にデートみたいじゃないですか？

お相手が先輩というのが残念といえば残念ですが（失礼ですね）、知り合いが周りにいない今、これは色々聞きだす絶好のチャンスなのかもしれません。

「先輩つて、柊木沢さんと仲がいいですよね？」

私はさりげない感じで聞いてみました。

それにしても、私が頼んだのは普通のオムライスのはずなんです、何故かそのてっぺんに紙でできたイタリアの国旗が立てられています。

隣の人もオムライスを頼んでいたのですが、その男の人のオムライスには旗なんか立っていません。

不思議ですね。

「どうなんだろう、普通じゃないかな？」

私の問い掛けに対し、先輩はフォークを持つ手を休め答えます。

「いやいやいや。だって先輩、柊木沢さんにご飯食べに行ったりしてますし、仕事終わったら飲み連れて行ってもらったりもしてるじゃないですか！」

「それは僕が男だからじゃないかな。たまたまそこにいたからとか、そんな理由だと思うよ」

「でも！たとえば飲み屋さんとかバーとかクラブとかで、色んな話をするわけじゃないですかっ！」

先輩がクラブで踊り明かしている姿を想像、いえ、想像できませんでした。

「まあ少しは」

「ですよ！ですよ！じゃあ、じゃあプライベートな話とかもするんですよ！？」

「瑕奈ちゃん、ケチャップが洋服に飛んだよ」

「ああ、本当です！ふ、ふきんを……」

最悪です。

今日はよりもよって新しく購入したばかりの白地に小さなお花がプリントしてあるシャツを着ています。

ケチャップの毒々しい赤は当然ピンクと黄緑の中で目立ってしまう

わけで……。

「うん。大分見えなくなっただよ」

「本当、ですか？」

「ごしごしと擦った結果、ようやく少しは薄くなったようです。」

「ふう、と額の汗を拭ってスプーンを持ち直し、レッツ・お食事再開です。」

それにしてもこのオムライス、玉子はふんわりしてますし、中のチキンにまでしっかり味がついていて何とも美味な一品です。

家でもこのくらい美味しいオムライスが作れたらいいお嫁さんになれるんですけどね。

え、誰のお嫁さんかって？

それは勿論……

「——っは！そうだった！」

ケチャップのせいで忘れていましたよ！

「先輩、単刀直入に聞きますよ？」

私はカツカレーをほぼ完食しつつあった先輩のほうへと身を乗り出します。

「あの、その——先輩のタイプってどんなんですか？」

……。

「ま、まずは周りから固めていかないかね！」

いきなり柊木沢さんの好みとか聞いたら、好きって言ってるのと同じじゃないですか。

え、ちょっと待ってください。

「ということは、もしかすると今私は先輩に直接的に好きって言ってしまったってことですか？」

「タイプって……血液型のこと？」

「そんな私の心配を他所に、先輩は勘違いの斜め上に行く珍回答を提供してくれました。」

「たしかA B型だと思うけど」

「ふうん。一番レアなタイプですね」

確かに先輩は二面性がありますし。万事納得。

って、違う！

「そ、そうじゃなくてですね、その、なんていうんですか？女性のタイプですよ、好みの女性のタイプ！」

「“好みの女性のタイプ”？」

先輩は最後の力ツを突き刺したフォークを宙で止めました。

「女性の、好み……ねえ」

「なんでもいいですよ？髪が長いほうが好きとか、清纯派が好みとか」

「うーん、髪の長さ……。清纯、派？」

「ああじゃあもういいです！」

面倒くさくなってきたので、私はいよいよ本丸に飛び込んでみることにしました。

「じゃあ、柊木沢さんの好みってどうなんですかね？」

「柊木沢さん、かあ」

どうやら先輩は思考の迷路から解放されたようです。

そうですよね、先輩と女性というのはどうも私の頭の中でもうまく結びつけることができませんから。

「柊木沢さんてモテそうじゃないですか？実際のところ、好みとかにも煩いんですかね？」

先輩は少し考えてから、

「柊木沢さんは——眼鏡の人が、好きかな？」

唐突にそう零しました。

眼鏡。

めがね。メガネ。MEGANE。

……それは盲点でした、迂闊でした。

柊木沢さんにそんな属性があったとは。

「二ノ宮さんのことも好きみたいだし、ミーナさんも眼鏡掛けてたし。どちらかというと知的な感じの人が好きなんじゃないかな？」

「そ、そうですね……」

切実な質問なんです、知性ってどこに売ってますか？それっておいくらで買えますか？

「って、ちょっと待ってください。その、“ミーナ”って誰ですか？」

「ああ。この間、十字製薬の本社に行ったときに柊木沢さんが知り合った女の人だよ」

先輩は、三七三さんには内緒にしておいてねと私に言付けました。しかしそんなことはどうでもいいです。

「で、そのミーナさんと柊木沢さんは、どういう関係で？」

「どついう……？うーん、そうだな。十字のビルに入れて貰うために話しかけたんだけど、携帯電話の番号も交換してたし、その後にデートの約束も取り付けてたしな。そこまでは僕も見えてないし、実際のところどうなんだろうね？」

「……」

デート、の約束。

携帯番号の交換。

私は徐々に遠のいていく意識の中、そのミーナさんを想像してみました。

十字製薬につとめる眼鏡のエリート女研究者。

白衣の下には胸を強調した小さめのシャツ、脚の線を浮かび上がらせたタイトなスカート。

泣きホクロと赤い唇がセクシーで首筋からはそつとコロンの匂いを

漂わせる、大人の女。

そんな（想像の）人を相手に、私が勝てるわけがないじゃないですか。

「あの、瑕奈ちゃん、ケチャップがまた」

「…… もういいんです。赤い花を咲かせておけばいいんです」

と言いつつも、おしぼりを手にとってしまう私。

あーあ、このシャツも高かったのにな。

店員さんが凄く似合いますよこのスカートと合わせたら男なんてイチコロです、なんて言うからセットで購入したっていうのに。

何だか悲しくなってきました。

泣きたいというよりも笑い出してしまいたいです。

あ、嘘。やっぱりちよつとばかり泣いてもいいですか？

「瑕奈ちゃん、もしかして柊木沢さんのことが好きなの？」

「ほわっつ！？」

急に口から英語が飛び出していました。

その弾みでスプーンが涼しい音と共に床へと落下。

暇そうにしていたウエイトレスのお姉さんが、後で拾いますから大丈夫ですよ、と爽やかな笑顔で新しいスプーンを持ってきてくれます。

けれど私はお礼も言えませんでした。

心の中では土下座までしました、本当ですよ？

それよりも ——

「ど、なななどうしてそんなこと思ったんですかっ？」

「違うの？」

「いや、あの違うのかと言いますとそうではないとは申し難く、非常にあの、その」

「言いたくないならいいよ、別に」

先輩はそう言って、空のお皿の前で手を組みます。

「ただちよつとそう思っただけ」

「……。」

いつもは鈍いというか勘が悪いのに、どうしてこういうときだけリーダーが利くんでしょう？

それとも、それほどまでに私の態度が分かりやすかったんでしょうか。

きつとそうなんでしょうね。

「好きっていうかその、気になっているというか」

「かつこいいもんね、柊木沢さん」

「そうなんですよ!」

ぶつちやけ一目惚れでした。

初めて見たときから心、奪われちゃったんです、私。

「でも、柊木沢さんは多分私のことなんか妹くらいにしか見てないんですよ」

「歳の差があるからね」

あ、そこはもつとフォローしてほしかったな!

でも先輩なんで多くは望みません。

「じゃあ、先輩はどうすれば私が柊木沢さんに気にしてもらええると思いますか?」

「そうだね。よく分からないけど、髪を伸ばしてみたらどうかかな?」

「髪、ですか?」

「やつぱり髪の長い女の人は綺麗だと思うから」

「ほお」

……先輩のこういう意見を初めて聞きました。

ある意味すごく新鮮です。

*

「とりあえず、ご馳走様でした!」

色とりどりのフルーツのパフェも食べ終わると、私たちは外に出ました。

ちなみにお勘定は先輩が持ってくれました。

私がお礼を言うと、

「そんなに感謝されるほどの額じゃなかったよ」

と軽くあしらわれました。

私のオムライスとパフェで二千元、先輩のカツカレーセットが千二百円。

合計すると十代の若者のお昼代としてはあまり安いとは思えません。そうなんです、先輩からは時々ブルジョア臭がするんですよ。

私と先輩は再び賑やかな通りを、会場のビルへ向かって歩き始めます。

途中、小さなブティックでとっても可愛いワンピースを見つけてしまいました。

しかしお値段を見ると、あれこれゼロが一つ多いんじゃないのって感じの額でした。

さすが丸の内、原宿の竹下通りで千九百八十円のシャツに悩む私の世界ではありません。

そんな私と先輩の横を、ふいに一台の車が通り過ぎ、そして停止しました。

私は大して気にもしていなかったのですが、先輩の足が止まります。

「カイ君、」

車の中から声がしてウィンドウが下がります。

先輩は、ああやっぱりとそれに近づいていくので、私も反射的にその後を追いました。
すると、

「どうしたの、こんなところで？」

…… 凄い美人さんがそこにいました。

線の細い、いかにも儚げなお嬢様といった感じです。

上品に着こなした白いシャツと紺色のスカートのコンビネーションは、ラルフローレンでしょうか？

黒い艶のある髪をそつと耳に掛ける仕草は、女の私が見ても惚れてしまいそうな気品に満ち溢れています。

間違いありません、この人、本物のお金持ちです。

「あら？もしかして、デートだった？」

お嬢様（仮）は私に向かって優しく微笑んでいます。

「えっ、いいえ！そういうわけじゃありません、はい！」

「たまたまこっちの方に用事があったんだ。樹雄さんも、お久しぶりです」

お嬢様（仮）の隣には男の人が座っていました。

その人は先輩ににやかな笑顔を見せています。

そしてふいに私のほうを見ると、軽く片目を瞑られました。

…… 世の中には自然にウイंकを投げかけられる種類の人もあるんですね。

これがロマンスグレーの魅力！

ビバ・ナイスミドル！

思わず叫びそうになりました。

「これから病院なの。近くまでなら送ってあげられるけど？」

先輩はお嬢様（仮）の誘いを首を振って辞退します。

「歩いたほうが早いから大丈夫。有難う」

「いいの。それじゃあ、またね」

お嬢様（仮）は電話するわね、と呟くとウィンドウを上げました。その姿が完全に見えなくなってしまうと、車は再び道路へと走り出していきました。

銀色に光るそれが角を曲がった瞬間、私は先輩に問い訊ねます。

「先輩先輩っ！今の人、先輩の何なんですか？」

「何って、そうだね。幼馴染で元・学友かな？」

「あんな人と幼馴染っ！先輩って一体どういう生い立ちしてるんですかっ」

「別に普通だと思うけど」

聞いてしまってから、私はもの凄い後悔の念に襲われました。

誰だって人に言われたくないことはある——　そう言っていたのは柊木沢さんでした。

「先輩、あの、ごめんなさい」

「何が？」

「その、生い立ちとかって誰でもあんまり話したくないですよね。私も、実はそうなんです。だから、」

「ああ。ほら、あれが僕の父親だよ」

「……　へっ？」

先輩が指差したその先には、大型スクリーンがありました。

そこに映し出されているニュースでは日本の防衛大臣が新たな軍事兵器増産についての会見を行っています。

「って、あれがお父さんですかっ！」

「そうそう」

先輩はあまり関心なさそうに言いました。

が、私の方としては関心有りあります。

なんてったって、あの君島きみしま 理人りひとですからね！

日本情勢や政界の動きに疎い私でも、その整った容姿と頭脳明晰な政論展開で有名な君島防衛大臣の顔を幾度も雑誌や新聞で拝見していました。

その息子が、先輩。

「はわー……」

私が抱いていたブルジョワ疑惑、完璧にどんぴしゃです。

このことを柊木沢さんや三七三さんはご存知なんでしょうか？

「ちなみにさっきの芽衣子は一之瀬財閥の一人娘だよ。親同士の繋がりで僕達は知り合ってたってわけ」

「いちの、せ」

またしても登場したビッグネームに、私は目を白黒とさせるしかありません。

「でも先輩、あの、そんなこと私に教えてもいいんですか？」

「別に隠しているわけでもないからね。今までは聞かれなかったから言わなかっただけ」

「ほお」

でも、分かったことは先輩の家庭環境だけじゃありませんよ。

「先輩って清純派路線が好きなんですね」

「どうして？」

「またまたー、芽衣子さんですか？超、綺麗な人でしたね！」

「そうかなあ」

先輩は不思議そうな顔をしています。

「……」
あんな美人を前にしてそんな感想しか持てない先輩が、少しかわい
そうになってきました。

*

そうこうしているうちに、目的の＜創世会 本部ビル＞までたどり
着いてしまいました。

「またこれは大きな建物ですね ……」

五十階はあろうかというビルの上から下までを創世会が独占してい
るそうです。

宗教って、そんなにスペースを必要とするものなんですかね？

「とりあえず入ろう。もうすぐ約束の時間だ」

「あ、はい」

半円形型の自動扉を抜けると、私と先輩はごく一般的なオフィスビ
ルのロビーに出ました。

きよろきよろと探ってみますが、例の集会を呼びかける看板は愚か、
そこには誰もいませんでした。

「体験入信の方ですか？」

受付のお姉さんに尋ねられ、私と先輩は頷きます。

「ではこちらでお名前を確認します」

そう言われ、私たちはお姉さんの方へと赴きました。

何故かお姉さんは病院服のようなものを着ています。

「これですか？」

私の視線に気付いたお姉さんが笑いかけます。

「これは信者の誰もが着ているものです。本当は何も身につけず、生まれたままの姿で世界を感じるべきなのですが、それですと捕まってしまうからね」

「…… はあ」

私と先輩はこっそり目を見合わせた。

これを着なければいけないとしたら、せっかく買ったこの上下がますます台無しですよ。

けれどお姉さんは私たちの名前を確認すると、奥のエレベーターで地下三階まで降りるように促すだけでした。

二人きりでは広すぎるエレベーターに乗り込むと、私は思い出して先輩のほうに向き直りました。

「そうでした！先輩、あのくれぐれも私がその、柊木沢さんにほ、ほほ惚の字であることは内密にお願いします」

「うん、分かった」

私はこのとき、相談したのが先輩で本当によかったと思いました。これが三七三さんだったら、どうしようかなーとはぐらかされた拳句、ことあるごとにそれを理由として様々な実験の生け贄にされてしまいそうです。

あ、それって普段とあまり変わりがないですね。あはは。

…… 果たして笑っていいものか。

エレベーターの扉が開いたとき、向こう側には何もない空間が広がっていました。

比喩ではありません。

さしずめそれは真っ白で大きな箱の中です。

ビルがスリーフロア分くらいぶち抜かれ、真っ白に塗られています。

それだけです。

高い天井には明かりの類も見受けられませんでした。

なのに、ここは思わず目を覆いたくなってしまうほどの明るさです。

そこには既に私たちよりも前に到着した人たちが、五十人ほど集まっていた。

私はその中に柊木沢さんの姿を探します。

どちらかというと、中年姿の男性や女性が目立ちます。

なかには杖をついたお爺さんや私よりも小さい子供もいました。あ、柊木沢さんです！

柊木沢さんは一匹狼よろしく腕を組み、壁のひとつに凭れ掛かっていました。

その雰囲気から誰も近づいていこうとはしませんが、女の人はおろか男の人だって彼の肢体に釘付けです。

それは少し誇らしくもありました。

そして、そんな柊木沢さんは私たちの方を見て無関心を装いながら、小さくウインクをします。

私の身近にも自然なウインクを飛ばせる人がいたことを忘れていました。

十分ほど待つと、突然部屋の真ん中の床が開き、女の人が見れました。

正確には何か機械のようなもので体を押し上げられてきたようです。ほら、よくコンサートなんかで見る、ちょうどあの仕掛けのような感じです。

時刻は一時半きっかりでした。

「皆さん、創世会へようこそ！」

その女の人は素敵に赤い唇をしていた。
長くも短くもない茶色の髪を頭の上のほうで束ね、服装は受付のお姉さんと同じものを着ています。

「貴方がたは今、真理への扉を叩いたのです。そして世界は貴方がそれを開ける事を静かに待っています」

何かの劇のようでした。

それから女の人は世界は汚染され、人は愚鈍になり、本来人間という生き物が持っているポテンシャルを失ってしまった、というようなことを延々と語り続けます。

話し上手なためか、私もそれに飽きることなく聞き入ることが出来ました。

ああ、でも柊木沢さんだけは既に退屈モードです。

この人は本当に何をしにきたんでしょうか？

「私たちの救世主は選ばれた存在です。そして、そんな世界を憂い、自らに与えられた恩恵を私たちにも分け与えようと、その腕を慈悲深く広げておられるのです！」

……
うっかりその中に飛び込んだら首を切られてしまっんですよね？

それは救世主というよりも、人食いワニみたいだなと私は思いました。

「私の至らない説明だけでは、救世主の真の目的を理解してもらうことは不可能でしょう。ですので、」

女の人が両手を天に掲げます。

すると、フロア中のいたるところに人が入れるほどの白い箱が幾つ

も現れました。

それも先ほど女の人が上がってきたときと同じ原理です。が、こちらのほうは些かスケールが違います。見ていた人々の口から驚きや感嘆の声が漏れます。

「わあ、」

当の私も声を上げてしまった一人です。

先輩はいえいつもの無表情でそれを眺めているだけ、柊木沢さんも少し顔を上げただけで大した反応も見せていません。ちよつと恥ずかしくなっています。

「では、この箱の中にお入り下さい。さらなる真理をご理解いただけると思います」

会場にざわめきが走ります。

これは私にとつても想定外でした。

さすがの柊木沢さんも顔を顰めています。先輩も…… まったく無表情を崩しません。

私の頭の中では“洗脳”や“マインドコントロール”と云った単語がぐるぐると回っています。意味は同じですけど。

「私の言葉では説得力が足りませんが、この箱の中には貴方がたを強制的に我が教団に入信させるような仕掛けは一切ございません」確かに説得力はありませんでした。

周りの人たちも口々に何かを囁きあいながら、それに入ることを渋っています。

「—— けれど、これだけは言わせてください！」

まるで全ての迷いを断ち切るような声で、女の人が叫びました。

その影響で部屋の中は再び静けさで満たされます。

「この箱の中にあるのは、“真理”です。貴方の人生を、価値観を、そして貴方自身をも変えてしまうことをお約束します」

変わりたいんでしょう？

そのために、ここへ来たんでしょう？

何故か、そう言われたような気がしました。

しばらくその言葉の余韻に浸っていた人々は、やがてゆっくりと動き出しました。

私たちもそれに倣います。

「―― 振り返るなよ」

素早く背後に忍び寄った柊木沢さんが囁きます。

「あの得体の知れない箱の中に何があるかは分からねえ。が、身の危険を感じたらすぐに飛び出せ。そして叫べ。その後は俺が何とかしてやる」

冷たく冴えた声でした。

私と先輩は無言で頷きます。

私たち三人は密接していた箱を選び、それぞれ中に入って行きます。

私は最後にもう一度だけ、二人を見ました。

柊木沢さんは何の抵抗もなく箱へ入っていきます。先輩も同じでした。

箱にはドアノブのようなものも、引き戸のような隙間も見当たりません。

押しても開かなかったので箱の角隅に軽く触れると、それは簡単に開きました。

小さく深呼吸をして中に突入します。

体を全部入れてしまうと、それは自動的にぱたんとしまりました。

隙間なく閉まってしまった為、箱の中に完全な暗闇だけが残ります。防音処理でもされているのか、外の音はなにも聞こえません。唯一この耳に届くのはうるさく高鳴る鼓動だけ。

……
なんだか不安になってきました。

試しに扉を押してみたのですが、やはり開きそうにもありません。

箱の中はどうかやら公衆トイレの個室二つ分くらいの広さのようです。手探りで辺りを歩くと、何かに膝があたりました。椅子、なのでしょうか？

それにゆっくりと腰掛けると、ふいに頭上のスポットライトが勢いよく部屋の内部を照らし出しました。

外の部屋とは違い、箱の中は真っ暗でした。

私が座っているちょうど真正面に映画のスクリーンのようなものが設置されています。

ちりちり、と。

何かが焦げるような音がしました。

そして、

その 上映会 は静かに始まりました。

* * *

皆さんは後悔することってありますか？

私は結構ありますよ。

昨日もテレビを見ていたらすっかり鯖の味噌煮を焦がしてしまいました。

雨の予報に気付かずにお布団を干してしまつて、タオルケット一枚で眠ったこともあります。

まあどれも後悔というにはお茶目すぎる失敗ですよ。

本当は後悔なんて、したことはありません。

私は若いですし、大抵のことはそれで何とか乗り切れます。

でも、

ただ

だから――

もしかするとそれは私にとって初めての“後悔”になるのかもしれない。

後悔、先に立たずとはよく言ったものです。

だけど私はどうしてもあの猫さんのことを思わずにはいらなかったのです。

いまさらこんなことを言っ たところで何もかもが手遅れなのに、ね。

09・＜ 忘却の果てにある モノ ＞

09・＜ 忘却の果てにある モノ ＞

『 すべてのメモリーをデリートします
Y / N ? 』

不思議な映像だった。

白いスクリーンには、まず見知らぬ子供が映し出される。

粒子の粗いそれはホームビデオで撮影されたものようだ。

五歳くらいだろうか？

薄暗い部屋の中、蝋燭に飾り付けられたケーキを前に子供は輝くような笑顔をこちらへ向けている。

誰かが彼に蝋燭を吹き消すよう、促した。

子供はひとつ大きく息を吸い込むと頬を膨らませ、ふーっとそれを吹き消した。

残るは落ちるような闇。

歓声は湧き上がらなかった。

それから、様々な映像が断片的に映っては消えて行った。

横断歩道を渡る無数の人々。
蝶が孵化する瞬間。

原爆投下の図。

宇宙の果て。

アフリカ原住民。

猿から人への進化。

遠い海原に光る白い月の姿。

脈絡も繋がりも節操もない映像。

目まぐるしく展開されるそれに、僕は何の意味も見出せなかった。

ふと壁の異変に気付く。

光を吸収するような黒い壁は、ぼんやりと向こう側が透けて見えるようになっていた。

違う箱の中で老人が涙を流してスクリーンに縋り付いている光景が見える。

ある人は恍惚の表情で、またある人は驚愕に口元を押さえながら。彼らが僕と同じものを観ているとはとても思えなかった。

< ——— それはそうでしょうね >

目の前から声がする。

再び視線を正面に遣ると、そこには一人の少年が頼杖をついている姿が映し出されていた。

何もかもが白い少年だった。

髪は積もり立ての雪のように柔らかい光を放ち、素肌は漂白されているかの如く白い。

その服装は先ほどの女性の物と同じか、あるいは少し上等なもののように見えた。

少年はスクリーンの中で腹ばいになり、小首を傾げていた。

< 彼らは自分が観たいと思っているものを視ているのですよ >

少年はそう言って泣いている老人の方を指差した。

必然的に僕の顔もそれを追う。

彼が観ていたのは、休日を楽しそうに過ごす家族の映像だった。

< あれは彼の死んだ妻と子供の記憶です >

恍惚の表情を浮かべた女性は、周りの人間にちやほやされている自分の姿を、

驚愕に顔を歪めた男性は、そう遠くは無い未来の荒廃したビジョンを観ているようだった。

< あなたが何を望みなのか分かりませんでしたので、適当なものをご用意させていただきました >

成る程。

しかしそういう事ならば、始めから指示するべきなのではないのだろうか？

箱に入ったら自分の観たいものを思い浮かべろ、と。

少年はむき出しの細い足をぶらぶらと宙で交差させ、にっこりと微笑んでいる。

< ここにいらっしゃる方たちの大半が、何かを望んでやってくるのですよ >

日常からの脱出。

冴えない日常の払拭。新しい自分への序曲。

“宗教”というものはつまり、そのためのツールにしか過ぎない。

< 故にあなたや、あなたのお連れ様のようなケースは珍しいので、少々戸惑ってしまいました >

僕は何となく柊木沢さんの方を見た。

箱の中の彼は腕を組み、口を開け、どうやら熟睡しているようだった。

彼のスクリーンには一般家庭でも見られるようなニュース番組が放映されている。

瑕奈ちゃんは僕が入ってきた扉のちょうど向こう側に位置する箱にいた。

ここからでは彼女の顔も、何を観ていたのかも確認することはできなかった。

少年は僕と柊木沢さんを交互に見て、クスクスと笑う。

< さて、私はわたしはどうするべきなのでしょう？あなた方の存在を誰かに報告するべきか、 >

あるいは —— と、少年は僕を見る。

そしてそれまで頬を支えていた腕をすつと伸ばした。

それは映像と現実の境界線を易々と越えて来る。

どろり。

まるで雛が己の殻を突き破って生れ落ちるように、少年は“こちら側”へとやってきた。

僕は身動きひとつ取れぬまま、その光景を眺めていることしか出来なかった。

「わたしはあなたに多少の興味を抱いているのですよ」

そう言つて、少年は僕の方へと赴き、僕の頭を両手でそつと掴んだ。

「教えてください。あなたは、何が見たいのですか？何を知りたいのですか？」

問われた僕は改めて考える。

見たいもの、知りたいこと。

そう言われてみたものの、急に何かを思いつけはしない。

「それでは、思い出したい事は？」

少年は再度訊ねる。

「記憶の河の向こう岸に落としてきてしまったそれを、取り戻したいとは思いませんか？」

—— ひとつだけ。

僕は心の中で呟く。

“彼” との共存に慣れていたお陰で、声に出さないやり取りは容易だった。

そう。

僕はただ思えばいい。

僕は――あの夢の女性に、会ったことがあるのではないだろうか、と。

「それがあなたの視たい過去、ですか」

いいでしょう。

少年は呟いて僕の額と自分の額を重ね合わせる。

そして――

回想が始まった。

*

あれは僕が小学校に入学してからの事。

僕を含めた大半の子供たちが、送迎車による通学手段をとっていた。中には護や鷹巳たちのように徒歩で通える距離に住む一般家庭の子供たちもいないこともなかった。

その日も授業が終わった僕たちは、入り口でそんな迎えを待っていた。

芽衣子は先に帰り、鷹巳は護に引きずられるように早々と下校している。

ふいに一台の車が僕の目の前で止まった。それは見慣れない日本車だった。

「お坊ちゃまですね？」

中から出てきた顔にも見覚えはなかった。

しかしその男の人は確かに僕の前に立つと、安堵の表情を浮かべ肩を掴んだ。

「遅れまして申し訳ありません。途中で車が事故に遭いまして、急遽新しいものを調達していましたら時間がかったものでして」
そう言われると、納得することしかできなかった。

「さあさあ、お外で待たれてお体が冷えたでしょう」

車の後部座席に半ば押し込められるように入れられた。

僕がシートベルトを締めたことを確認すると、例の男は辺りをきょろきょろと窺って助手席へ乗り込み、ドアを乱暴に閉めた。

おかしい、と思ったのはそれから三十分後のことだった。

いつものルートとは明らかに違う。

始めはどこかで工事があつて、回り道を余儀なくされているのだと思ひ込んでいた。

いや、薄々はどこかで感づいていたんだと思う。

自宅とは真逆の方面へとひた走る車の外には、見たこともない歓楽街の景色が広がっていた。

——唐沢さんは、どうしたんですか？

僕は小さな声でそう訊ねた。

助手席に座っている男はただ、何も心配はありませんよ、と繰り返す言うだけだった。

運転していたスキンヘッドの男が低く漏らすように笑った。

だんだんと心細くなってきた僕は、カバンの中から携帯電話を取り

出した。
すると、

「ふざけた真似するんじゃないよ」

男の態度が豹変した。

振り返った男は凍りついた僕の手の中から携帯電話を奪い取ると、胸のポケットに収めた。

「大人しくしてれば何もしねえよ。とりあえず交渉のときまでは生きていて貰わねえと、金が出ないからな」

—— ったく、騙されやすいお坊ちゃんだぜ

そう言われた時、僕はようやくこの人たちに誘拐されてしまったのだと気が付いた。

「ほら、出るよ」

車はどこか倉庫のような場所で停まった。

緊張で動けなくなっていた僕の体を、男は無理やり引きずり出した。体は投げ出され、半ズボンの膝小僧が硬い地面に擦れて皮膚が破け、血が出始める。

「小便ちびつてシートを汚してないだろうな？」

男は僕を睨み付け、お腹の辺りに鋭い蹴りを何発か見舞った。

自分の口から聞いたことも無いような音が漏れる。

唇も切れてしまったようで、口の中に苦味のある鉄の味が溢れた。

「おい、殺すなよ」

スキンヘッドの男に制されて、男は息の上がり始めた呼吸を整えた。そして動かなくなった僕に向かって勢いよく唾を吐きかけた。

「とつとと立てよ」

男は僕の腕を掴んで立ち上がらせようとするものの、だらりと垂れた足はまるで自分と繋がっているとは思えなかった。

「てめえ、いつまで転がってるつもりだ！」

痺れを切らし激昂した男は、僕に向かって硬く握った拳を振り上げた。

が、

その刹那――

「……あ？」

男の顔に困惑が走る。
しかしそれも束の間。

「がっ！はあ、はっ、ぐふ、」

僕の目の前で男の喉元から真っ赤な血飛沫が、決壊したダムのような勢いで放射される。

「な、なんだあ！？」

スキンヘッドの男はその光景に腰を抜かした。

悲痛な叫びも虚しく、スキンヘッドの首が落ちる。

その首はころころと転がって、僕の足元へとやってきた。

痙攣しながら膝を付いた男は赤い泡を口の端に浮かべ、白目を剥いて前のめりに倒れた。

男の温かい血を一身に受けながら、僕はそれを眺めていた。

何もかもが夢のようだと思った。

そうか。

これは悪い夢なのだ。

この首はここには存在していないし、体中に纏わり付く血の臭いも全ては朝が来るまでの幻。

僕は感覚のない腕で男の首を手繰り寄せ、胸に抱いた。

―― 早く醒めないかな

ぼんやりと空を仰ぎながら、僕は口の中で歌を口ずさんでいた。
クリスマスに教会で聴いたとても綺麗な曲だった。

「―― 何故、唄う？」

ふいに視界が翳った。

気が付くと目の前には、見たことの無い女の人が立っていた。

その人はとても綺麗な人だった。

けれどあまりに綺麗過ぎて、その無表情な顔は恐くも感じられた。

黒いセーラー服を着た女の人にはこりともせず、僕の方へと近づいてきた。

何だか恐ろしかったので僕はお尻をついたまま、じりじりと後ろへと下がっていった。

彼女の手が、僕の方へと伸びる。

―― ぶたれる

思わず目を瞑った。

しかし僕はぶたれなかった。

彼女は僕の腕の中からスキンヘッドの頭を抜き取ると、地面に置いて片足で思い切り踏み潰した。
砕け散った様はまるで割れたスイカのようなだった。

「 恐くはなかったのか？ 」

彼女は僕に訊ねた。

そして同じ高さまでしゃがみこみ、制服の袖で血に汚れた顔を拭ってくれる。

恐かったと思う。

僕は正直に答えた。

恐くて恐くて、足が動かなかった、と。

そこで僕はこれが現実なのだと理解した。

途端、何かの堰を切ったように大粒の涙が零れ、こみ上げる嗚咽をとめることが出来なくなる。

「 お前はまだ泣けるのだな 」

再び立ち上がっていた女の人はそう言って、僕を見下ろした。
慰めて欲しかった。

抱きしめてほしかった。

なので僕はそんな彼女に向かって、非力な両腕を伸ばした。

「 —— やめろ。 私にお前を救うことなどできはしない 」

突き放すように呟いて、彼女は顔を背けた。

「 私にできるのは、死体の山を築き上げることくらいだ 」

何もかもを拒む冷たい目。

世界を凍結させるようなその視線で、彼女は投げ出された二つの遺体を眺めた。

「直にお前の家の者が探しに来るだろう。大通りなら、あっちだな」

彼女はそう言つて、倉庫の裏側を指差した。

でも僕はまだ動けなかった。

ただ、その横顔を見つめることしかできなかった。

「どうした？お前が行かぬのなら、私が行くぞ」

——今は見られると厄介なのでな

そう言い残すと、彼女は破れたスカートの裾を翻し、どんどん僕から離れていってしまう。

待つて。

僕は叫んでいた。

名前を。

名前を、教えて下さい。

彼女は振り返った。

「私はアルファ。周りは私を
“ ” と呼ぶが
な」

そして彼女は遠ざかって行く。
もう二度と振り返ろうとはしなかった。

僕の意識はそこでぶつとりと途切れてしまう。

気が付くと僕はどこかで知らない場所にいた。

制服の代わりに真新しい匂いのするシャツを着て、ブランケットに包まれている。

手にはホットチョコレートの入ったマグが握り締められていた。

何が起ったのか、まったく思い出せなかった。

学校の校門に立っていたところまでの記憶はある。

ただどその先にあったはずの何かが、まるで霧深い森の中の出来事のように不鮮明だった。

僕の隣には白衣を着た女の人が座っていた。

彼女は優しく僕に声を掛けて、ひとつずつ質問していく。

あそこでなにがあったの？

どうしてあんなところにいたの？

誰もあなたを怒ってはいないし責めてもない。

だから話すようにと促されても、僕には何もわかりません、と答えるしかなかった。

ただ、あそこにはアルファがいたんです。

アルファ？と白衣の人は問い返す。
それはなあに？人の名前？

僕は少し考えてから首を傾げる。

アルファって、何だろう？

しばらくしてから青白い顔をした唐沢さんが迎えに来た。
僕の顔を見るとまるで倒れこむように抱きついてきた。

「よかった。本当に、よかった」

唐沢さん苦しいです、とその支配から逃れようとして僕は驚いた。

——唐沢さんは泣いていたのだ

僕は抵抗を止め、逆にその頭をあやすように抱えた。

その日以来、僕の中の何かがどうしようもなく変わってしまった。

世界がひどく曖昧で、不確かなものに成り下がってしまったように
幼かった僕の意識もまた、予期せぬ改革を余儀なくされたのだ。

「——それが、あなたの忘れていた過去、ですか」

見れば、白い少年が背後に立っていた。

僕の目の前からはあの日の光景は消え、例の箱が足元に置いてある。

まるで開けてほしいと懇願するように。

「ここはあなたの内側ですね。しかしそれにしても、その箱は一体……?」

少年は深く底の無い暗闇を見渡した。

僕たちの立っている場所以外、どこにも行けそうもなかった。

「さしずめ、わたしはあなたの中に閉じ込められてしまったということですか」

そんなつもりは微塵もなかった。

「けれど実際に状況は芳しくない。ここには出口もなければ先もないようですから——」

そう言つて少年は僕の前にある小さな箱に目を落とした。その瞳には怪しい光が宿っていた。

「……この箱は何なんでしょうね?」

——開けてみればわかりますか

少年が滑るような足取りでそれに近付いていく。

僕は止めようと腕を伸ばすも、わずかばかりに届かなかった。

少年の白い指先が箱の輪郭をなぞる。
が、

「っ——！！」

瞬間、

箱全体が激しい光に包まれる。

そして僕たちは何かに追いやられるように、その空間から弾き出されたのだ。

*

「っは、閉じ込めておいて核心に触れれば強制排除、ですか」

少年は形の良い唇を歪め、忌々しげに呟いた。

僕は先ほどと同じように椅子に腰掛けたままだった。

胸の鼓動が幾分か早い。

心臓のあたりに軽く手を触れて、僕は今まで観ていた光景を思い返してみる。

“アルファ” と名乗ったあの少女。

あれは確かに僕が実際に体験したことだ。

今になって何もかも思い出す。

血の温もりと男の首の感触、そしてセーラー服の黒い影。

彼女は僕を助けてくれた。

けれどそれは何故だったのだろう。

偶然や善意で子供を助けるほど優しい人には見えなかった。

「まさかこんな“少年”の中に、“彼女”を見つけることができるとは」

僕はスクリーンに寄りかかる少年を見た。

何がそんなにおかしいのか、彼はくすくすと声を漏らして笑っている。

「これが笑わないでいられるものですか、と言ってもあなたは本当に分かっていないようですね」

少年は哀れむような視線を僕に落とした。

「“彼女”は言わば――始まりの存在です。手に入れられれば世界の掌握も夢ではない」

世界の掌握。

たった一人の少女にそんなことができるとは到底思えなかった。

しかし、僕は確かに彼女が得体の知らない力を使つところを目撃している。

けれどそれは“彼”も同じだった。

何かが始まるうとしていた。

それはもう既に始まっているのかもしれない。

僕の周りでパズルのピースが少しずつ集まりつつあった。

――箱を開けなければいけない時がくるだろう

そう、“彼”は言っていた。
来るべき日、定められた時、決められた場所で。

僕はそのとき、どうなってしまふのだろう。

世界が揺らいでいるような気がした。

「もしかするとわたしが探していたのは、あなただったのかもしれない
ませんね」

少年は微笑んだ。

それは優越感に満ちた笑みだった。

「また必ず見えるときが来るでしょう。そのときまで——その
首はそこに預けておきましょう」

後ろで扉が開いた。

思わずなだれ込んできた音と光に目を伏せる。

そこには少年やあの女性と同じ服を着た信者の男性が立っていた。

「お疲れ様でした。真理を垣間見ることはできたでしょうか？」

僕はその問いに答えることなく少年の方を振り返る。

が、既に彼はそこにいなかった。

まるで融けるようになくなっていた。

彼が現れたスクリーンは、入って来た際と同じくただ白いままそこ
にあった。

「どうか、しましたか？」

男性に訊ねられ、僕は首を振った。

そして軽く痺れていた両足に力を籠めると、その小部屋を後にした。

＊

「もーっ！私、見てて本当に恥ずかしかったですよ！」

箱に入っていたのは時間にして四十五分程度。

僕と瑕奈ちゃんは一旦ビルを出て、東京駅方面へと歩いた。

そして柊木沢さんと落ち合う約束をしていたバス停で、その姿が見えてくることを待った。

約三十分後。

「いやあ、わりいな。ちよつと出掛けに絡まれちゃってさ」

すつきりした顔の柊木沢さんは僕たちの肩を叩いた。

「なんか興奮した感じのお姉さん方がさ、どんな真理を見ましたか？とか、一緒に入信しましょう！って煩く迫ってくるもんだから、さ」

柊木沢さん、困っちゃったよ。

そう言って乾いた笑いを周囲に響かせた。

瑕奈ちゃんはご立腹だった。

「まったく、“困っちゃったよ”じゃありません！私、みてましたよ、柊木沢さんドアが開いてもなかなか出てこないからどうしたのかな、って思ってた啦……あの中で熟睡してたじゃないですか！」

「俺さ、昔から映画館とか苦手でさ。ああ暗くて、いい感じに音楽とか流れてくると、どうも気持ちよくなっちまうんだよなあ」

「ほんとにもう！なにが、“その後は俺が何とかしてやる”ですか！頼りにして損しました。ほら、先輩も何か言ってくださいよ！」

「えっと、まあ何もなかったからいいんじゃないかな？」

「全然よくないです！」

瑕奈ちゃんはぷりぷり怒って足を踏み鳴らす。

「まあまあ、それよりもさ——」

ひらひらと瑕奈ちゃんをあしらっていた柊木沢さんは、急に真面目な顔になる。

「お前ら、あの箱の中で何を観た？」

「何をつて……。私たち、同じものを見せられていたんじゃないんですか？」

「ああ。それが違うらしい」

柊木沢さんがお姉さん方の証言を個別に聞いたところによると、それぞれが観ていたと宣言していた映像はどれもまったく異なっていたらしい。

「え、じゃあ私が見た猫さんのあれも、」

「猫？」

「あ、はい。私は近所の猫さんの映画みたいなものを観てました。それで……。えっと、柊木沢さんはどうですか？」

「俺は最初から熟睡モードだったからな。部屋に入った瞬間に寝て起きた頃には全てが終わってたよ」

「……じゃあ、先輩はどうですか？」

「僕は——」

僕は迷っていた。

あの中で見たものをそのまま伝えるべきなのか。

多分、あの少年は藤沢と名乗る男が“主”と呼んでいた存在に違いない。

けれど、

「僕が見たのは映像の断片が繋ぎ合わされていた、ショートフィルム

ムみたいなものでしたね」

嘘を吐いたわけじゃない。

確かに最初はそれを観ていた。

それ以上に見たものを言葉に変換する事は、今の僕には難しかった。

「そうか。大した収穫もなかったな」

柊木沢さんがそう言つて、大きく伸びをした。

その目尻には涙が乾いた後が薄く線を描いている。

「よし！お前ら、これから飲みに行くぞ！」

「ええつ、まだ夕方ですよ！それに明さんにも報告しないと、」

「んなこと明日でいいよ、明日で。あんなに窮屈なところに小一時間も詰め込まれてたんだぞ？ちよつとくらい息抜きしたところで明ちゃんだつて怒らねえよ」

「え、でも……」

躊躇う瑕奈ちゃんを強引に引っ張つて、柊木沢さんは歩いていく。

「ほら、お前も行くぞ」

「あ、はい」

声を掛けられ、僕もその後が続いた。

「……？」

その道中、

僕は視線を感じて振り返る。

それは丁度斜め後ろのビルの屋上あたりからだつたような気がした。

いや、それとは別に——もうひとつ。

「何してんだ、信号変わってるぞ？」

柊木沢さんがきょとんとした顔で僕を見る。

その腕の下に挟まれて、瑕奈ちゃんは幸せそうだった。

「どうした？何か見えたか？」

「いえ、何も」

訝しむ柊木沢さんの視線を浴びながら、僕は横断歩道を渡った。

視線のひとつはあの少年のものに間違いは無い。

——では、もうひとつは？

僕はもう一度だけ振り返る。

黒いセーラー服のはためく音が聞こえたような気がした。

* * *

「——行っちゃいました、か」

少年は、目的の“少年”の意識が完全に遠のいていくのを感じ、そう呟いた。

「お話中にすみませんでした。少々、気になることがあったものでして」

「……いいえ」

少年は創世会ビルの最上階に居た。

四方をガラスで囲まれたこの場所は、少年のオフィスであり住居でもあった。

信者といえども易々と入ることは許されない禁域。

その閉鎖された空間で、少年はひとりの少女と向き合っていた。

「それで、その後の経過はどうですか？」

「ええ。これといった変化はまだ感じられませんが、違和感や拒絶反応も無いみたいです」

「そうですか。それはよかった」

「けれど、私——」

こんこん、とノックの音がした。

「失礼いたします」

扉の向こうから、一人の女が一礼した後に入ってくる。

体験入信の会で最初の前座を担当したあの女だった。

「ご来客中のところ、申し訳ありません。お急ぎの件だということでしたので」

「構いませんよ。それで——」

「はい。例の“少年”を含む三人は、間違いなく叶老人の回し者かと」

「やはりそうでしたか」

少年は指と指を絡め、やんわりと微笑んだ。

「叶がいるということは、二ノ宮も関わっていますね」

「恐らくは」

「あなたのスパイは優秀だ。そしてとても迅速です」

「恐れ入ります」

女は年端もいかない少年に向かって、恭しく頭を下げた。

「それで、これからどういたしますか？」

「あなたのスパイには監視を続けるよう命じてください。時期が来たら動いてもらうかもしれません」

「はい」

「ありがとうございます—— アカサキ」

少年の言葉に女はそれではと断ると、入ってきた扉からまた出て行った。

「さて、失礼いたしました。さきほど何か言いかけましたね」

「いいえ。それはもう、」

「いけませんよ」

少年は白く細い指で少女の頬に手をかける。

少女の体が微かに震えた。

「あなたの不安は全て取り除くようにと言われています。溜め込まず、何もかも吐き出してしまいなさい」

「私は…… 私っ、」

困惑した様子の少女は耐えられなくなったように顔を背けた。

しかしそれは少年によって許されない。

「あ、」

まるで子供とは思えない力で顎を掴まれて、再び正面へと向けられた。

そして必然的にそこに在った少年の瞳を覗き込むことになる。

途端、

「私は—— 私の中にこんな醜い感情があるなんて、思ってもみませんでした」

少女の口から言葉が溢れ始める。

「小さな頃から“優しくあれ”と育てられてきました。全ての人に優しく、公平に接しなさいと。なので私もそうあるうと心がけてきたつもりです。いいえ、そうしてきました。けれど、今日“あの人”に遇って、あれを見てしまったとき、私、思っただんです」

少女は手の甲に爪を立てる。

「何故あそこにいるのが私じゃないんだろう」と、“どうして私を選んでくれないのだろう”と」

爪は皮膚に鋭く食い込み、肉を裂いていく。

「私は決して劣るとは思っていません。それどころか、私のほうがどの観点から見ても上のはずです。なのに私は選ばれない。“あの人”は私も見もしない。どうして？何故？私は、私、私がっ！」

「—— いいですよ」

少年は少女の手をそつと押さえた。

そして少年が血の滲み始めた部分を撫でると、傷は一瞬のうちになくなってしまった。

それを目の当たりにした少女が、涙を溜めて訴える。

「私は、こんなに容易く許されていい存在ではありません！あの傷は戒めなのです。私のこの醜い心に、脆弱な精神に、だから、だから……」

返して、と少女は呟く。

その傷を返して、と。

しかし少年は首を振ってそれを拒んだ。

「あなたは何も間違っただけではありません。それはあなたが懷いて当然の感情なのです」

「わた、しが？」

「そうです。何故なら——あなたは選ばれた小数なのだから」

少年は立ち上がって少女の手をとった。
成されるがままに少女も立ち上がる。

「あなたは望めば叶えられる立場にある。そんな人間が手に入れられなくて嘆くのは当たり前です」

「望めば……手に入る」

「その通りです。けれど、今はその前に」

少年は少女を見た。
少女も少年を見た。

「望みが、ありますね？」

「——はい」

少年の耳元で、少女はそつと囁いた。

「あの子を、殺して。」

少年は薔薇色の笑みで微笑むと、少女の手に口づける。
そして、

「——それがあなたの望みならば」

賞賛にも似た吐息を漏らした。

10・< 捜査一課刑事、柴多 行哉（しばた ゆきなり）の事件簿 >

10・< 捜査一課刑事、柴多^{しばた} 行哉^{ゆきなり}の事件簿 >

俺の名前は柴多 行哉。

警視庁捜査一課に勤務して早三十数年。

妻にも先立たれ子供もない俺にとっては、仕事が人生の全てのよ
うなものだった。

俺がここでしたいのはそんなかつこいい話じゃない。

若かりし日の俺が悪人をばったばったと引っ捕まえる話が聞きたい
奴は出直してくるといい。

出直してきたところで俺の口から語れるのは、失敗と失策に塗れた
栄光の残り滓みたいなものだけ、なんだけどな。

俺の肩書きは警部だ。

世の中には誤解している奴も多いと思うが、日本警察に“刑事”と
いう役職は存在しない。

私服で捜査にあたる警察官を俗称でそう呼んでいるだけだ。

しかし世界には刑事と呼ばれる人間もたくさん存在している。

だからコロナボさんの存在を根底から疑う必要はない。あいつは正
真正銘、本物のデカだ。

そんなわけで俺は警部で刑事なわけだが、ここではあえて刑事であるという設定で話を進めていこうと思う。

設定も何も、本当に刑事なんだから断りを入れる必要も無いのだが。まあとりあえず聞いてくれ。

長い間この仕事を続けてきたせい、俺は人の仕出かす大半の事に驚かなくなっていた。

当たり前だよな。

人間は大昔から顔を付き合わせれば戦争しているような生き物だ。民族浄化を目的とした特定人種の大量虐殺や核兵器を考案するような人の存在こそが、今まで報告されてきたどんな犯罪より恐ろしいのかもしれない。

本当のところ難しいことは俺にもよく分からないし、敢えて考えないようにしている。

とにかく、俺は数少なくない人間を見てきた。

その大多数が何らかの犯罪の容疑者かそれに準ずる何かだった。

俺達本庁の刑事が担当するのは大抵前書きに“凶悪”なんて文字がつく連中ばかりだ。

婦女子連続暴行殺害犯の男。

十年間で三十人近くの女性をその手に掛けた。

被害者にはまだ小学生だった女の子も含まれている。最低の野郎だった。

連続暴力団構成員襲撃犯の青年。

日本から暴力団を排除しようと個別に襲撃を仕掛けた。

確かに考えは正論でもやり方が悪かった。自分が人殺しになっちまったらそれで全てがお終いだ。

老人ホーム壊滅事件を引き起こした女。

介護士だった女は鬱憤の捌け口を老人の殺害に見出した。

六十人近い老人と同僚を食事に混ぜた毒で殺した拳句、建物に火を点けて一帯を焼け野原にしちまった。

これ以外にも目を覆いたくなる悲惨な事件はまだまだ沢山ある。

事件そのものに動じなくなったとは言ったものの、その残虐性・非人道性は変わらない。

幸か不幸か、先述した事件の犯人たちは既に他界している。

この日本という国で未だ存続している死刑制度のおかげだった。

それについての論議はまた別の場所で、他の誰かがやるべきだ。俺に言えることは何も無い。

ただ、こう思うことはある。

少子化を叫ばれる世の中でも赤ん坊は絶えず生まれてくる。

その中にはどう足掻いても世界には馴染めない、異端的な存在もいるのではないかと。

無論、奴ら自身の責任に変わりはない。

たとえ生い立ちがどうであれ、犯した罪が軽くなるわけではないというのが俺の見解だ。

けれど、もしも世界が違ったら―― 奴らのしてきた事も受け入れられるのかもしれない。

男尊女卑が普及している世界だったら、

粛清による正義が認められている世界だったら、

老いていくだけの非力な生命を抹消することが正当化されている世界だったなら――

それも所詮は過程の中の話だ。

今の世の中は狂ってはいたが、どう引っくり返っても奴らの行いは認められるはずが無い。

せめて次に生まれ変わってくるときはもう少しだけこちら側に適応していることを願うばかりだ。

あの少年はどうだったのか。

十五年前の暑い夏の日、俺はあいつと出逢った。

カビと汗の臭いが充満した取調室で何度か言葉を交わし、俺は多少なりともあいつと分かり合えたと思っていた。

それがどう間違っただんな結果になったのか。

結局、あいつもこの世界では理解されない異端的な存在に過ぎなかったのかもしれない。

真実は闇の中、だ。

それでも俺は思い出さずにはられない。

あの時、振り返って俺を見たあいつの目。

あいつの顔は笑っていた。

血だらけになって笑いながら、あいつは同時に――泣いていたのだ。

* * *

「……うーむ。」

そんな俺は今、自分のデスクの惨状に首を捻っていた。

どうすればこうも汚くなるのだろうか。

俺はただ、他の連中と同じように仕事をしていただけだというのに。

「まあ、仕方がねえか」

片付ける気もなかったので、なるべく端に寄せて誤魔化した。

そして積み重なっていた新聞記事のコピーを手にとると、既に何度か目を通してあるそれに再びペンを走らせる。

「“江東区に新たな首無し死体”、ね」

捜査権が正式に特捜にうつってから一ヶ月弱。

この捜査一課ではその話題を口にすることすらタブーのようになっていた。

そんな中、同僚のいつにも増して冷たい視線を浴びながら、俺はただ一人事件の経過を追い続けている。

江戸川区の一件に関してはその後も進展はないようだった。

目黒区の事件同様、失われた首は依然発見されないまま。

その行方についてもこれといった手がかりはなく、連日ワイドショーでは犯罪心理学者やプロファイラー達が熱っぽい論議を展開させている。

「もはや神隠し、だな」

俺は新聞の“首”の文字に赤く丸をつけた。

そもそも犯人は何故、被害者の頭を持ち帰る必要があるのだろうか。世間では犯人はハンニバルのレクター教授よろしく人食家であるという説が有力だった。

「人間の脳みそなんか食べて何になるんだろうなあ。美味しくもなさそうだが」

「…… 少なくとも、オレは柴多さんの脳味噌は食べたいと思いませんけどね」

目の前に某大手ハンバーガーチェーンの袋が降ってくる。

見上げるとんざりした顔の浦美澤^{つらみさわ}がYシャツの襟を揺らし、風を送り込んでいた。

「お昼、何でもいって言うんで適当に買ってきましたよ」

「ポテトはLサイズだろうな？」

「コーラもダイエットじゃなくてゼロカロリーにしましたよ」

「うむ、ご苦労」

「…… 何でもいって言うわりには注文が多いですよね」

嘆く部下を尻目に、俺は袋の中からダブルチーズバーガーを取り出すと無心で齧り付いた。

ネズミの肉だろうがミミズが入っていいようが、美味しければそれで良いというのが俺の心情だった。

「で、また例の“首無し”の話について調べているんですか？」

「あん？まあ調べてるってほどでもないけどな」

「もうやめたほうがいいですって」

小声で囁きながら、浦美澤はストローの先端に歯形を立てる。

「部長もそれに関してはやけに神経質ですからね」

確かに部長は苛立っていた。

その苛立ちは一課全体に蔓延し、ここ最近停滞した梅雨前線のような沈鬱した空気が立ち込めている。

「俺が呼び出されるまであと三日ってとこだな」

「オレは巻き添えを食らうのだけは嫌ですからね」

「なんだよ、“放置という名の黙認”に徹するんじゃないのか？」

俺はポテトを頬張った口でもしやもしやと呟く。

それについて答えを出すことはなく、浦美澤は真剣な顔で俺を見ていた。

「―― ねえ、柴多さん」

「何だよ急に。俺はそっちの気はないぞ？」

「どうしていつもそう茶化すんですか！オレだって柴多さんみたいな汚いおっさんに手を出すくらいなら、寺に入って頭丸めますよ！」

「…… 声がでかいぞ、浦美澤」

「あ。」

数名の同僚が驚いて逃げていく。

その口元には下卑た笑いが浮かんでいる。

「あーあ、ありや完全に聞こえたな」

「だ、大丈夫ですよ！だって別に内容が内容ですし、オレと柴多さんがどうこう、とか」

「刑事は想像力が命だぞ？さしずめ情事の^{もつ}縄れによる痴話喧嘩か、お前がツンデレだと思われてるだろうよ」

「ツンデレって今時死語でしょうが！ってオレ、怒るところはそこじゃない！」

自分で自分に突っ込みを入れる浦美澤。

何とも器用な奴だった。

「で、改まって何の話だ？」

「ああ、そうだった！柴多さんがこの事件にここまで執着するのって、あの十字製薬のビルで見かけた男のせいじゃないですか？」

ずぶずぶずぶ。

俺の手の中にあるポテトが、ケチャップの海に沈んで行く。

「…… 何の話だ？」

「いやいやいや、図星でしょうがその態度は」

「浦美澤君が何を言おうとしているのか、おじさんにはまったく分かんないなあ」

コーラの容器と手にとって、ストローから吸い込む。
ずるずると嫌な音が立った。

「柊木沢さん、それ空ですから」

「…… 氷が溶けるのを待ってるんだ」

「じゃあ待つてるついでに聞いてくださいよ」

浦美澤がため息混じりに呟いた。

「あれからオレなりに調べてみましたよ、十五年前の事件についてとかね」

ぐしゃ。

紙の容器が哀れな断末魔と共に潰れていく。

それでもまだ俺はストローから口を離せないでいた。

「オレもすっかり忘れていましたよ。十五年前っていったら“あの事件”で日本中大騒ぎだったじゃないですか？まあオレもまだガキでしたからしょうがないっちゃしょうがないですけどね」

「…… 俺にとっては今もガキみたいなもんだよ」

「どうでもいいですよ、そんなこと。でも事件の存在自体は知ってましたけど、その担当が柴多さんだったってことはオレも知りませんでしたけどね」

沈黙。

同時にそれは肯定でもあった。

「確かにあの事件の犯人が生きていたら、十字で見た似非ジャーナリストの久溜間って男くらいの年でしょうね」

—— 生きていたら

その言葉がオレに突き刺さる。

「例の“花園家惨殺事件”の犯人、はなその花園 まもる衛の死刑は十年前に執行されてますよ」

史上最年少の死刑執行例。

それは日本だけでなく、海外でも大きな反響を呼んだ。

執行日当日、どこから漏れた情報に刑場は様々な団体が集まって抗議運動を繰り広げていた。

しかしそれは確かにその日、執行されたのだ。

にも関わらず、俺は未だにあいつの死が信じられなかった。

—— 刑事さん、僕はね おかしくなっちゃったんですよ

そう言って笑うあいつの顔が今もこの目に焼きついて、離れない。

*

花園一族。

十八世紀の終わりに突如その姿を現した謎の集団。

一族とはいっても、始めは他人の寄せ集めだったのだろう。

これはあくまでも噂に過ぎないのだが、花園家の人間はかなりえげつない方法でその財を成したそうだ。

暗殺家業に奴隷売買、表にできない商売のほぼ全てを掌っていたと

いつでも過言ではない。

現代においてもその説は濃厚だった。

花園とは主に、花狩はなかりと花守はなもりという二つの分家で成り立っていた。代々党首を務める人間はそのどちらからか輩出される。

花狩家の人間が荒事や実務を担当し、花守家が一族の内政や保持を任され、その全てを花園姓の人間が管理する。

何世代にも渡って繰り返されてきたシステムだった。

花園 衛は、その花狩家の息子と花守家の娘との間に生まれた、いわば両家の架け橋のような存在だった。

周りの人間は彼が温厚で聡明な普通の子供であつたと述べている。

けれどそれはあくまでも他人の意見だ。

傍から見た印象など、解釈次第でどうにでも変わる。

生憎、通っていた学校の関係者や近所の住人以上の証言は得られなかった。

何故なら花狩家と花守家、そして花園家のほぼ全員が死亡していたからである。

犯人は勿論、件くだんの衛少年だ。

使用人の一人から通報を受けた警察が到着したとき、既に事はどうしようもなく終了していた。

まるでフランスの古城のような本家から巨大な正門に続く長い花道には、事切れた人の死体が野原に咲いたアネモネのように点在していた。

逃げようとしたところを襲撃されたのだろう。
どの遺体にも背後から鈍器、または刃物で刺殺された痕が残されていた。

家の中にはさらなる地獄絵図が待っていた。

窓という窓を閉め切られていた為か、そこら中に血の臭いが充満していた。

真夏の午後ということもあって腐乱速度も速いようだった。

死体の数は減ることなく、至るところに転がっていた。

その姿もメイドや使用人から子供、高そうなスーツを着た男たちやそのボディーガードまでと節操がなかった。

幾度となく殺人現場を見てきた俺も、さすがにあのときは絶句した。

後ろでは若い警察官が次々に吐き戻している音がしていた。

使い物にならなかったたので、俺は一人で家の中の搜索にあたった。

途中、大きな円卓を擁した宴会場のような場所で見たことのある顔の死体をいくつか発見した。

それは裏世界や闇商売で名を馳せていた花園一族の中でも頂点に立つ人物達だった。

一族の定期会議の最中に予期せぬ襲撃を受けたのだろう。

―― 対抗組織の差し金、あるいは内部分裂による勢力崩壊。

俺は最上階にある小部屋でその少年を発見するまで、そんなところだろうと思い込んでいた。

初めはその少年も死んでいるのだろうと思っていた。
屋根裏に位置する隔離されたようなその部屋で、少年はベッドに横たわった女に添い寝していた。

体は血に汚れ、足元にはナイフや殺害に使われたと思われるハンマーやバット、おおよそ武器として人を殺傷しうるに値する無数の品々が転がっていた。

俺が銃を構えて近づくと、少年はゆっくりと起き上がって眠そうな顔で俺を見据えた。

その両目は迷惑そうに細められていた。

―― 静かにしててください、母が寝ているんです

母というのは隣の女の子のことだろうか。

遠巻きに見ていても、彼女が既に死亡していることは明らかだった。何にせよ、俺は生きているその少年を保護しようと近寄っていった。

お母さんが寝ているのならそつとしておいてあげよう、それよりもこっちに來て話を聞かせてくれないかな？

そついった類のことを言っただと思う。

すると少年はきょとんとした顔で首を傾げた。

―― 何言ってるんですか？母はもう死んでいますよ

まあ僕が殺したんですけどね

少年は何気ない口調で呟くと、ぴよんとベッドを降りて俺の方へと近づいてきた。

その後、少年は何の抵抗を見せることなく保護された。

事情聴取の際に、彼は自分が家中の人間を殺害したことをあっさり

と認めた。

—— 僕ね、おかしくなっちゃったんですよ

何回目かの事情聴取で少年はぽつりと漏らした。

発言の内容のわりに彼の口調は冷静だった。

最初の精神鑑定の結果でも正常だと判断されている。

それでも彼は自分を異常であると宣言した。

—— 母もおかしかったって、おじさんが言っていました。これって
遺伝なんでしょうか？

少年は自分の母親が父親を殺害した事、それを親戚一同が隠蔽し、
母親はあの屋根裏部屋で幽閉されていた事などを語った。

その証言通り、彼の父親らしき人物の遺体が地下室から発見された。

—— だから何か全部がどうでもよくなっちゃって、みんな殺しち
やいました

その笑顔には幼さが前面に押し出されていた。

無理もない。

たった数時間で百名近くの人間を殺したと供述する少年は、まだ十
三歳。

被害者の中にはその手の状況に場慣れした手勢もいたはずだ。

まかり間違ってもこんな年端もいかない子供に易々と殺されるわけ
がない。

しかしその後実施された少年の身体能力テストで、俺を含む目撃者
全員がそれを認めざるを得ない状況に陥ることとなった。

簡単な筋力測定や基礎運動能力を調べた結果、少年はごく一般的な能力を有していることが分かった。

ただ後日行われた模擬戦闘で、少年は訓練された兵を相手に武器も無く圧勝し、それでも戦闘をやめなかったことから数人の大人に取り押さえられる事態にまで発展した。

介入があると、少年はすぐに兵士から手を離し大人しくなった。

しかし介抱を担当した医師の証言によると、あと数秒遅ければ男の首は折れていただろうとの話だった。

—— なんかこう、スイッチが入ると駄目なんですよね

これも狂ってるからでしょうか、血のせいでしょうかと少年は俺に訊ねた。

問われたところで俺に答えが見つかるわけもなかった。

少年には何人もの弁護士とカウンセラーがついた。

彼らは少年の更生こそが人類の威信を賭けた最後の可能性とでも言わんばかりに、日夜を問わず連日のように少年の元へと通いつめた。俺としても、できることならこの前途有望な少年が自らの過ちに付き、いつの日か再び自分の人生を歩んで欲しいと切に願っていた。そして少年も俺に興味を持ったのか、自発的に謁見を望んだ。

—— ねえ刑事さん、僕はもう一度やり直せるでしょうか？

そんなある日、少年は俺にぼつりと溢した。

季節を跨ぎ、十三歳だった少年もひとつ歳を重ねていた。

あの日とまるで変わらない澄んだ瞳で聞かれた俺は力強くそれを肯定した。

君ならできる。

過ちを認め罪を償って、君が奪った人たちの人生^{ぶん}まで生きるんだ。

俺がそう諭すと、

—— 刑事さんは優しいですね

そして、有難うございますと述べた。

それから数週間後、少年は遠い田舎の隔離養護施設のような場所に移されることとなった。

精神の安定を認められ、自傷や他傷に走ることもないことからの決定だった。

その場所で少年は他の問題を抱えた子供たちと一緒に学び、生活を共にしていく事となるのだ。

俺は彼の門出を喜んだ。

そんな少年の名前も姿も知らない世論は、人殺しに甘すぎるとその決定を痛烈に批判した。

正直、後に俺自身もそれを強く感じる事となった。

少年は過ちを認める気も、罪を償う気も —— そして生きる気さえもなかったのだ。

少年が養護施設へ出発した早朝のことだった。

前の晩からの仕事がやっと片付いた俺は、ひさしぶりの眠りを貪っていた為に少年の見送りには立ち会えなかった。

八時過ぎ、一本の電話が鳴る。

いつまでたつても鳴り止むことの無いそれを仕方が無く取り上げると、俺は向こう側から告げられた事実に一瞬で眠気を吹き飛ばされる。

少年が輸送車の中で担当官を殺し、輸送車の外で一般人数名を殺して今も逃亡している。

俺は現場へと急行した。

たどり着く頃には既に少年は無数の機動隊に銃を突きつけられ、手を挙げて静止しているところだった。

そんな中、少年が俺の視線に気付く。

全身血まみれな姿は、まるで初めて出逢った時のようで不思議な既視感を覚えた。

—— やっぱ無理でした

少年はそう言っ、笑う。

可笑しそうに笑って、そして一方で泣いていた。

—— 僕はどうかやら本当に、おかしいみたいなんです

合図があった。

機動隊の一人が麻酔弾を打ち込む。

そして、少年の細い体はゆっくりと後ろ向きに倒れた。

それから幾多の審問の後、少年が十七歳の夏、死刑判決が言い渡された。

日本の法律を覆してまでの判決だった。

少年の手によって作り出された死者の数は三桁に達し、悪逆な所業に反省の色もなく、更生は永遠に望めないだろうというのが端的な理由だった。

弁護団の懇願も虚しく、少年はその判決を受け入れた。

少年が輸送車を脱走した後、俺はこの一件から外された。

上は俺を責めていたのではなく、むしろ俺の精神状態を考慮しての判断だった。

あれについては忘れなさい。

上司にそう説得され、同僚にも心配されていた俺は忘却を試みた。しかし表面上では忘れた振りをしていても、それは唐突に甦っては俺を苛めた。

何がいけなかったのだろうか。

俺にできることが他にもあったんじゃないか、少年からのサインを見逃していたのではないか。

今となつては分からなかった。

俺は精神科医でも児童心理学者でもない。

それでも俺は人間だ。そしてあの少年も、周りが何と言おうとも人間だった。

人同士ならばいつかは分かり合えると思っていた若かりし日の俺の心は、その一件でぼつきりと折られてしまった。

担当を外された晩は妻が死んだ夜よりも酒を飲み、一人孤独に涙したものだった。

それから一年後の秋、
俺がようやく回復の兆しを見せ始めた頃
批判と非難の嵐の中で少年の刑は執行された――

*

「俺さ、遺体を見せてくれって頼んだんだよ」

「…… は？」

「死刑が終わってから刑場に行って、開示の要求してみたんだよ」

「聞くまでもないですが、一応聞きます。それで？」

「見せてもらえなかった」

「やっぱり」

当たり前である。

そんな事は俺だって赴く前から分かっていた。

しかし自分の目で見るまでは納得ができなかった。

俺の中であの少年の笑顔と死体の二つは重なり合うことの無い概念だった。

「でも刑は執行されたんでしょう？新聞とかニュースでもばんばんやってましたし」

「そうなんだよなあ」

「仮に、ですよ？もしも仮にその死刑囚が何らかの形で生き延びていたとしても、世の中に一般人として紛れ込むことは不可能に近いですよ」

「そうなんだけどさあ」

「そうなんですよっ！」

浦美澤は終わらせるように吐き捨てて、机をばんと叩いた。

「だから、あの久溜間って男は全然違う赤の他人です。名前と身分を偽っていたのは謎ですが、ただそれだけの話です。本当にもう忘れてくださいよ！」

「そうかもなあ」

「そうですよ！」

俺としても特に確証があつたわけじゃない。

ただ横顔が何となく少年に重なっただけだ。

忘れていたあの事件を記憶の底から呼び起こされて、混乱していただけなのかもしれない。

しかし、

「——それはそれ、これはこれ、だ」

俺は立ち上がった。

「確かに十五年前の話は忘れる。今頃後悔したところで全てが遅いからな。が、だからといって首なしの一件に関わることをやめるわけじゃない」

「はあっ！？て、どこに行くんですか！？」

「ちよつと野暮用。出掛けるから付いて来るなよ」

「お、オレはどうしたらいいんですか！？」

「んー俺のデスクの整理でもしといてくれ」

「またですかー！」

浦美澤の悲痛な叫びをその場に残し、俺は捜査一課を後にした。

「…… あいつを信用していないわけじゃないが、な」

下降するエレベーターの中で俺は思う。

浦美澤の影にはどうしてもその祖父、警視庁総監の威光が付いて回った。

あいつを連れ立って下手に動けばその分圧力が掛かるのも早いだろう。

総監は孫の経歴に汚点が付くことをみすみす見逃すような人間ではなかった。

「だったら俺じゃなくて、他にもっと優秀な奴がいるだろうに」

それは上の命令を素直に聞くという意味での“優秀”だ。そう。

総監は捜査一課のようなある意味汚い仕事を請け負う下っ端などではなく、もっと官僚コースを狙える特捜のようなエリート部署に孫を送り込めばいいのだ。

しかし彼が敢えて選択したのは捜査一課、そして直属の担当は俺。

「たたき上げでの昇格なんて面倒な手段を取るがない」

とすると、必然的に他の詮索をしてしまうのである。

「―― まあ、俺ごときを総監のお孫様が直々に監視、っていうのも突拍子もない話だがな」

俺は地上階に到着したエレベーターを出て誰ともなく呟いた。

「ていうか、既に自意識過剰なレベルだな」

わっはっはと笑う俺を見て、受付嬢の一人が露骨に嫌な顔をした。

…… やれやれ、最近の若い子は礼儀を知らないのだろうか？

ここは警視庁本部だというのにその髪は明るい色に染まり、化粧の度合いもきつかった。

「そういえば、」

俺はふとあの特捜所属のいけすかない女捜査官の事を思い出した。
赤々しい唇の目立つ整った容姿をしていたものの、体全体から隠し
ようも無い毒婦の香が滲み出ていた。

あんな外面に見事なくらい騙されていた浦美澤は俺からしてみれば
まだまだといったところだろう。
名刺を渡してから早数週間が過ぎたが、その後の進展はあったのだ
ろうか。

「確かあの女、名前はなんだったかな。えっとアカオギ？いやアカ
イシ、アカニシ……」

「――
緋咲さん、」

「おお、そうそう。アカサキだ」

ばちゃんと指を鳴らすと、俺は思い出させてくれた誰かさんに心ばか
りの感謝をしようと目を向ける。

見れば数メートル離れた場所に暗い顔をした中年の男が立っていた。
それはどう鼻屑目に捉えても警察関係者には見えなかった。

裾の汚れたコートを羽織った姿には傍観しているこちらが暑苦しさを
感じた。

「……
金さん、^{キム}こちらの方には来ないようにとあれほど、」

俺はとつさに観葉植物の陰に隠れた。

さきほどと同じ受付嬢が眉を顰めて、俺から距離をとった。

一昨日風呂に入っただばかりなのでそう臭くもないはずなのだが、あ、
いや一昨昨日だったかな？

とにかく俺は特捜の緋咲と金と呼ばれた男の姿を眺めていた。

緋咲は不自然でない程度に辺りを窺っているが、俺は見つからなかつ
たようだった。

そして男を促すと、ロビーの一角にある比較的目立たない位置へと

移動して行つた。

それを確認すると、俺は背広の内側からボロボロになった携帯電話を取り出した。

今日はちゃんと充電もできている。

そして慣れない操作の果てに浦美澤の番号を呼び出した。

『…… もしもし、こちら腐海の森です。ユパさまですか？』

『誰だそれは？』

『何でもないですよ。で、野暮用は終わりましたか？』

『いや、これからだ』

電話越しに浦美澤の長い溜め息が聞こえてきた。

『で、そんなお忙しい柴多さんは俺に何の御用ですか？』

『いやお前に耳寄りな情報をご提供しようと思つてな』

『嘘くせー』

「信じる者は救われるぜ？お前の大好きなアカサキさんが一階のロビーで男と密会中だ」

『…… マジっすか』

「おうよ。で、物は相談なんだがお前、今から一階まで降りてきてあの女を張れ」

『はい？』

「ついでに会話の内容も軽く探つとけ、それで後で俺に報告しろ。以上だ」

『ちよ、』

俺は浦美澤の返事も待たずに一方的な会話を終えた。

万が一、緋咲に気付かれてもあいつならうまくやるだろう。

俺と違ってあいつはなかなか見られる容姿をしていた。

「まるで若い頃の俺を思い出すようすな、うんうん」

携帯電話に着けたストラップのぴぽば君（東京警察公式マスコット）

に向かって頷く俺を見て、受付嬢はいよいよ嫌悪を露にする。

「――さて、情報収集といきますか」

警察内部では何も聴き出せそうも無い。

それどころか、これ以上動き回ると色々と不味かった。

従って俺はこんなときの為の奥の手を発動させることにする。

「持つべきものは腕利きのクラッカー、じゃないハッカーだよなあ」

本庁を出た俺は馴染みの酒場・^{バー}＜夜想曲^{ノクターン}＞へと歩を進めた。

11・ < 咎人たちの、夜会（ソワレ） >

11・ < 咎人たちの、夜会^{ソワレ} >

『 今宵、踊るは咎人たちの夜想曲^{ノクターン}
どなた様もどうぞ心満ち逝くまでご堪能下さい
』

創世会に潜入を果たしたその後。

翌日になってから二ノ宮さんに報告を済ませた僕たちは、一旦この件から手を引くよう命じられた。

「これ以上の詮索は無用だと叶は判断しています」

「え、でも私たち、何も調べられなかったんですが、」

「ご提供いただいた情報だけで十分です。これから先は私の方で別ルートを使い、単独での調査を進めるとの指令ですので」

「…… はあ」

次の指示があるまで待機するようお願い渡された僕たちは、二ノ宮さんの部屋を後にした。

「でも何か不完全燃焼ですね」

瑕奈ちゃんが不満そうに呟いた。

「もっとこう、すっごいビッグな情報とかが掴めるかと思ってたん

ですけど、」

「じゃあもう一度あそこに戻ってみるか？本格的に入信してみりゃ、多分例の首狩り教祖様にも会えんだろうぜ」

「うー、柊木沢さんはいじわるですー」

結局、僕は二ノ宮さんにも本当の事を伝えることができなかった。

そもそもあそこであの少年に出会ったことや、見せられた記憶の欠片が本当のものだったのか僕自身も疑問視しているくらいだ。

跡形も無く消えてしまった少年。ひどく断片的で曖昧な過去。

けれど疑わしいと思う反面、同じくらい確かな現実感を持ってそれは僕の中を支配していた。

もしかすると伝えなかった事を後悔するときがいつか来るのかも知れない。

「まあ、アレだな」

久しぶりに仕事のなくなった柊木沢さんは、一人ソファーに陣取ってのびをした。

「たまにはいいんじゃない？夏休みみたいなもんだと思えばさ」

「……でも結局出勤してこないといけないじゃないですか」

「堅いこと言うなって。リラックスしようぜ、リラックス」

「柊木沢さんはいつもリラックスしっぱなしでしょうが！」

二人のやり取りを眺めながら、僕はあのときの事を深く己の中へと沈めていった。

*

それから至って平穏な日々が続いた。

「これのどこが“平穩”だっというんですかつ！」

瑕奈ちゃんが三角巾にマスク姿で絶叫した。

僕たちは今、三七三さんの命で研究室の大掃除に着手していた。

埃で涙目になっている瑕奈ちゃんの手の中には、漫画の中で古本屋の店主が使うような短い叩きが握られている。

「大体、どうして私たちが掃除しなきゃいけないんですかつ！私たちが！」

「黙って掃除に専念しなさいよ。“口よりもまず手を動かせ”ってよく言うでしょう？」

「……それ、超絶に説得力ないですよ」

対する三七三さんは、どこから持ってきたのかパラソルと簡易デッキチェアを広げ、一人サマーハットに水着姿でリゾート気分を満喫していた。

ちなみに水着は黄色のセパレートで、上はビキニタイプ、下はデニムのスカート仕様となっていた。

「先輩もっ！無駄な解説なんてしてないで、抗議の一つでもしたらどうですか！」

「え、でも他にやることもないし。掃除は別に嫌いじゃないから」

「そうそう。あたし、素直な子は大好きよ。素直な若い子は特に、ね」

そう言っただけで起き上がると、三七三さんが背後から抱きついてきた。

僕の胸元に両手を這わせ、耳元に息を吹きかけられる。首筋に鳥肌が走った。

「なっ、」

そんな様子を瑕奈ちゃんがわなわなと震えながら眺めていた。

「ちょ、ちよっと！三七三さんも先輩も！昼間っから不謹慎すぎます！」

「気になるなら見なければいいじゃない？別に外じゃあるまいし、部屋の中ならどんなにエロエロしようがあたしたちの勝手でしょう？」

「ふ、不潔禁止ですー！」

「うるせえぞ、お前ら」

瑕奈ちゃんの叫びを聞き付けて、柊木沢さんがひょっこりと顔を覗かせる。

タンクトップ姿の双肩にはタオルが掛けられ、額にはうつすらと汗が滲んでいた。

「集中して運動もできねえだろうが」

「あら、汗臭い男は入ってこないでよ」

三七三さんが顔を顰めた。

反論しようと口をあけた柊木沢さんは、しかし

「って三七三お前、なんちゅう格好してるんだ」

三七三さんの姿態を視界に収め、半ば絶句した。

「見せてあげるだけでも有り難いと思いなさいよ」

「いやいや、頼んでねえし。見たくもねえし」

「この体のどこが不満だっていうのよ」

「だからその下半身のブツが問題なんだって」

「失礼ね！スカートで隠せば見えないでしょう！それに、腰から上はれっきとした女体よ！」

柊木沢さんに向かって分厚い洋書が投げつけられる。

仁王立ちで怒りを露にした三七三さんは、ぶんぶんと怒りつつ部屋を後にした。

「…… 前々から思ってたんですけど、三七三さんって一体何なんですかね？」

「俺に聞くなよ」

柊木沢さんは瑕奈ちゃんの素朴な疑問を一蹴する。

そして三七三さんが寝そべっていたデッキチェアにどっかりと腰を落とした。

「あいつは人のことはよく突くクセに、自分の事は殆ど語らねえかな」

「でも、その三七三さんって、実際のところ――男の人なんですか、女の人なんですか？」

「だから俺に聞くなって」

三七三さんについては僕も知らない事が多かった。

柊木沢さんや瑕奈ちゃん、雇い主の叶さんについても未だに素性の知れないところがあつたにせよ、それは三七三さんの非ではなかったように思える。

そもそも僕を含めた誰もが三七三さんの“研究内容”について理解していなかった。

彼女（彼？）は一体何を専門とし、その目的や目標が何処に向いているのか。

僕としては性別や身体的な謎よりも、どちらかというところの方々が気になっていた。

「それにしても、暇だよなあ」

両手で風を送り込みながら、柊木沢さんがぼやいた。

「最初こそ好き勝手やってやると思ってたんだが、ここまでやる事がないと何つつかこう、だんだんダレてくるな」

「それなら誰か適当に女の人と遊んでくればいいじゃないですが。ミーナさん、とか」

棘のある言い方だった。

薬品戸棚に勢いよく叩きを掛ける瑕奈ちゃんは、先ほども増して仏頂面になっている。

「ミーナちゃんねえ」

どうやら柊木沢さんはそんな物言いに気付いていないようだった。それどころか、瑕奈ちゃんがその名前を知っていることに疑問すら懷いていないようだ。

「あれから何回か携帯の方に着信があっただけど、もう会えねえだろ」

「どうしてですか？」

「あの子は俺が藤沢を追いかけていった事を目撃している。その翌日に藤沢があんな形で発見されたんだぜ？ 関係性を疑わない方がどうかしてるぜ」

僕が意識を失っている間に、柊木沢さんは精神的に壊れてしまった藤沢を近くの病院付近に残してきたと聞いている。

その後、発見された藤沢は保護・搬送され、今は精神病院での日々を送っているとの報告を受けていた。

“彼” の所業ではあったにせよ、僕は多少なりとも責任を感じるべきなのではないのだろうか。

「気にすることはないだろ」

そんな思考が漏れていたのだろうか。

僕は柊木沢さんの言葉に、大量の印刷物を整理していた手を休める。

「あいつはあいつで自分の宗教のために人を殺していたような奴だ。頭がおかしくなっちゃったのは気の毒だが、それも自業自得だろ」

「そうですよ、それにあれば――先輩のせいじゃ、ないですから」

「だといいですけどね」

正直なところ、罪悪感は覚えていなかった。

僕自身が藤沢という男に直接関わっていないからなのかもしれない。こんなことを言ったら柊木沢さんや瑕奈ちゃんはどんな顔をするだろう。

僕は人として欠けていると罵られたりするのだろうか。

――離れていってしまうだろうか？

「あーあ、それにしてもミーナちゃんは惜しかったな」

柊木沢さんは本当に残念そうに呟いた。

「結構タイプだったんだけどなあ。こう、時間を掛けてゆっくりと攻略したくなるっていうか」

「それはお気の毒でしたねっ！」

瑕奈ちゃんは柊木沢さんに向かって埃の溜まった実験機材をばんばんと叩いた。

「お前っ、おい埃臭いだろうが」

「恋愛に対して“攻略”とか言っちゃうゲーム感覚な駄目大人への制裁です！」

そう言いながらも、瑕奈ちゃんは楽しそうだった。

耐え切れずくしゃみを連発し始める柊木沢さんは、慌てて椅子から飛び起きる。

そして埃の責め苦から逃れるように入り口へと走ると、ようやく安堵の息を吐いた。

「ま、女はミーナちゃんだけじゃ無し、だ。最近あんまり遊んでないことですし、そろそろどこかで狩りでもしてみますか」

「…… 最悪だ」

「何とでも言ってくれ」

柊木沢さんは華麗に手を振ると、再びトレーニングルームへと戻っていった。

その後姿を見つめていた瑕奈ちゃんがぐったりと肩を落としている。

「…… そしてさらに最悪なのは、そんな最悪な男に惚れてしまった私ですね」

「瑕奈ちゃん」

「先輩、ミーナさんは髪の毛長かったですか？」

ふいに訊ねられ、僕はあの日の記憶を回想する。

「えっと、そうだな。確か長かったと思うけど」

「――先輩、やっぱり私、髪伸ばします」

瑕奈ちゃんは拳を高々と掲げ、宣言した。

「髪も伸ばすし、もつと女の子らしい格好も心がけます。これから勉強もちゃんとして知的な雰囲気身を付けて、しかも勉強のしすぎで目を悪くして眼鏡っ子にも転職しますっ！」

「別に伊達眼鏡でいいじゃないの」

飲み物を片手に戻ってきた三七三さんが、不思議そうに首を傾げた。爽やかな色のトロピカルジュースが入ったグラスには、どこから持ってきたのかパイナップルと装飾のパラソルが添えられている。

三七三さん、こだわる所はとことんこだわる性格のようだった。

「なあに？脱・お子様宣言？」

「私だつてやるときはやります。見ていてくださいよ、あと数年すれば私も立派な知的美人です！」

「……それは楽しみね」

何故か寂しそうな顔をした三七三さんは、一瞬浮かんだその色を完璧に拭ってしまうと瑕奈ちゃんを抱きしめた。

「三七三さん？」

「女らしくなりたいのなら、まずは女性らしく振舞うことね」

「み、三七三さん、その胸に圧迫されて苦しいです」

「そりゃあ外見も大事よ？でも何よりも男は女性の女性たる雰囲気にはやられちゃうものなのよ。いわば母性ってやつかしら」

「はあ、っていうかまだ苦しいんですけど、」

「だーから、女らしさを培うために、あんたはまずお掃除から始めることね！」

「……それってただの口実じゃないですか」

三七三さんの腕の中から解放された瑕奈ちゃんは、苦笑混じりに呟いた。

*

瑕奈ちゃんの誓いは宣言どおり、着実に実行へと移されているようだった。

「おはようございます、先輩！」

数日後、瑕奈ちゃんは髪を明るく染めていた。

そしていつものパーカーやパンツスタイルをやめ、淡い色のスカートや女の子らしいワンピースを身に着けるようになっていた。

うつすらお化粧もしているようで、唇はグロスの艶で瑞々しく濡れている。

「本当はエクステンションをやつを付けようと思ったんですけど、あれって結構いいお値段なんですネ」

まるで顕微鏡を覗き込む科学者のような慎重さで爪にマニキュアを塗りながら、瑕奈ちゃんが呟いた。

「だから、とりあえず次のお給料が出るまで保留です。代わりにワカメをたくさん食べます！」

「あ、うん。頑張つてね」

次のステップは

「じゃじゃーん！赤眼鏡さんです！」

駄菓子の飴玉に似た色をした伊達眼鏡を着用してきた。

「どうですか？知的に見えますかね？」

「うん、なかなか似合ってるよ」

「知的かどうかは別としてね」

三七三さんの指摘にもめげることなく、瑕奈ちゃんは上機嫌だった。

「まずは何でも形からですよ！これで私も勉強ができるような気になってきました！」

「うん。頑張つてね」

「この子、気持ちから入るタイプなのね」

息巻く瑕奈ちゃんを遠目に眺めながら、三七三さんが呆れたようにそう言った。

そんな知的欲求を満たすため、瑕奈ちゃんは暇さえあれば国立新電脳図書館へと通った。

「毎回付いて来ていただいて、申し訳ないですね」

瑕奈ちゃんは僕の顔を見上げる。

三七三さんに彼女への同伴を命じられていた僕は、必然的に同じ回数だけ足を運ぶこととなった。

「別に構わないよ。気が済むところに呼んでね」

「はい。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げると、瑕奈ちゃんは分厚い本を難しい顔で読み始める。

僕は本を手にとってみたり、梧桐さんのお喋りに興じたりして瑕奈ちゃんを待った。

「彼女、今日は何を読んでいるんですか？」

図書館内にあるカフェでお茶をしていた僕に、梧桐さんが訊ねた。

「さあ。僕もよく分からないんですが、多分生物学的な何かだと思っています」

「前回いらっしゃった時は日本の歴史について、その前にはシェイクスピア全集でしたね」

「ええ。知的なことだったなら何でもいいんだと思います」

「そうなんですか？僕としてもその意欲はとても素晴らしいと思いますが、初めてお会いしたときとの印象が随分と違うので少し戸惑っていますね」

「そう言われてみればそうですね」

確かに瑕奈ちゃんは変わった。

“知的キャンペーン”と称し、三七三さんの研究にも積極的に参加するようになった。

それは被験者としてではなく、むしろその研究の論理について貪欲に吸収するようだったと三七三さんは語っている。

「勉強してるってのもあながち嘘じゃないみたいね」

三七三さんは感嘆にも似た溜め息を吐く。

ちなみに“試したいことがある”と宣言した瑕奈ちゃんに研究室を占拠してしまった為、三七三さんは僕にチェスの勝負を挑んでいた。

「元からそう頭は悪くないんでしょうね。だから知識欲が芽生えた今のあの子は乾いたスポンジ状態よ」

ビショップを動かしながら、三七三さんは呟いた。

「ただ、好きになった男のためとはいえ、少し焦りすぎだとも思うのよ」

「そうですね」

僕は周りを固められつつあったキングの駒を後退させる。

それは所詮、一時の悪あがきに過ぎないと分かっていた。

*

瑕奈ちゃんの変化は柊木沢の目にも奇異に映っていたようだ。

「だってあのお子様が一人前に化粧してるんだぜ？そりゃあ俺じゃなくても驚くだろうよ」

その日、僕と柗木沢さんは二ノ宮さんに頼まれて、多忙な叶さんのかわりに加納建設が担当する開発現場を視察していた。

加納建設は<傍観者>^{アウトサイダーズ}本部の表向きカモフラージュ会社だと思っていたけれど、どうやら普通の建設業者として機能しているようだった。

「朝から土砂の山と鉄筋しか見てないような気分だぜ」

横浜方面の現場を始め、ここ西麻布のマンション開発地をいれど計十箇所以上も廻ってきた計算になる。

「視察たつて、現場の人間がちゃんと働いてるか見てくるだけってんだからな」

別に俺たちじゃなくてもいいじゃねえか、と柗木沢さんが肩を鳴らした。

「でもさっきのマンションが最後でしたよ」

「そりゃあ六時も過ぎれば、な」

「どうします？報告は遅くなっても構わないということですけど」

「だったらさ、ちよつと寄り道してこうぜ」

そう言つて柗木沢さんが片手で何かを煽る仕草をする。

「今頃一日の労働に疲れた工事現場のおっさんたちも飲み始めてる頃だ。俺たちも見習おうぜ」

「どこに行くんですか？」

「ちよつど近くに良い店があるではないか、少年」

「—— ああ。泡女さんあわめのお店ですね」

あの人とも久しく会っていなかった。

最後に顔を出したのは柗木沢さんで行った去年の暮れ頃の話だ。

「そうと決まれば出発進行っ！」

急に元気を取り戻した柗木沢さんに連れられて、僕たちは六本木にあるクラシックバー・<夜想曲ノクターン>を目指した。

*

六本木通りのとあるビル。

その八階にある<夜想曲^{ノクターン}>は、知る人ぞ知る隠れ家的な場所だった。一応“クラシックバー”と銘打たれていたものの、オーナーの気分次第でジャズが流れていたり演歌だったりと、そこに統一感はない。しかしその内装には味わい深い古木を使用したカウンターやアンティークのスツールを取り入れるなど、店内の雰囲気にはそれなりの定評があった。

カラン

カウベルのような音と共に、店の扉が開かれた。

「いらつしゃいませ—— ああ、柊木沢さんですか。お久しぶりです」

カウンター越しにグラスを磨いていた朱鷺^{とぎとつ}藤さんが微笑みかける。黒いベストに赤っぽいシャツを着込んだこの人が、<夜想曲^{ノクターン}>唯一のバーテンダーだ。

柊木沢さんと同じくらいの長身にしなやかな体つき、瑕奈ちゃんが見たら騒ぎ出しそうな容姿を持った眼鏡の男性だった。

「よう、トキちゃん。何だ、今日は“大将”はいないのか」

それはそれで好都合と柊木沢さんがカウンターに腰掛けたとき、

「…… てめえ、その“大将”って言い方はやめろって昔から言っ

てるだろうが」

九階の住居部分に繋がる螺旋階段から、どすの利いた低い声が落とされる。

「さすが妖怪だな、耳ざといこつて」

「次そんなこと言ってみるよ？お前が若い頃にちよつかい出してた女全員に連絡してやる。さぞ面白いことになるんだろうな、ええ？」

「……それだけは勘弁してください」

ふん、と鼻を鳴らすと、そこで泡女さんはようやく僕が存在に気付いたようだった。

「あら！アタシったら嫌だわ、お客様の前ではしたない！」

泡女さんはネグリジエのようなピンクのドレスを掴んでお辞儀をする。

「ようこそ、<夜想曲^{ノクターン}へ！今宵も貴方を魅惑の夜会^{ソワレ}へとお誘いしますわ」

「……きもちわりい」

「てめえはすつこんでろ、このガキが！」

ちなみに口調から察していただけたと思うけれど、泡女さんはれっきとした男性である。

しかもかなり体格のいい、まるでアメリカの軍兵のような体つきをしている。

その泡女さん（もちろん偽名）はマリリンモンローのような金髪のウイグを被り、顔には細く女性的な眉を描いていた。

「いくら化粧で誤魔化そうとしても、その髭剃り跡は消えねえぜ？」

「うるっせえんだよ。注文しねえなら叩きだすぞ」

泡女さんはピンヒールの踵を折りそうな勢いでどすどすと古いジュークボックスに近づくと、そのスイッチを入れた。

機械の起動音と共に眩しい電飾が灯る。

そしてしばらくの沈黙の後、バー全体に小音量で静かなジャズが流れ始める。

「まったく、今日はロクな客が来ないわね」

マッチで煙草に火をつけると泡女さんは残念そうに溜め息を吐いた。柊木沢さんはジンバツクを、僕はとりあえずアルコール度数の少ないカクテルを頼んだ。

「ロクなつて、俺たち以外誰もいねえじゃねえか」

「さっきまでいたのよ。上のほうにね」

泡女さんはこのバーを経営する傍ら、情報屋のようなこともやっていた。

ただそちらのほうの商売は比較的最近まで繁盛していなかったそう
だ。

しかしここ最近、^{ネット}電腦網上で評判が噂になり、今ではバーに通う客よりも様々な情報を求めてやってくる人間のほうが多いと軽く嘆いているほどだった。

「それもこれも、あの子のおかげなんだけどね」

「例の拾ってきたっていうガキが、か？」

「そうなのよ。元々噂好きだったアタシの道楽が、あの子が来てから本格的な^{サイバー}電腦テロリストだわ」

「それって色々マズいんじゃないの？このご時勢、電腦警察も煩いぜ？」

「そういうところはうまくやってるみたいなのよ、あの子」

まるで自分のことのように自慢した泡女さんは、細く煙草の煙を吐き出した。

柊木沢さんに紹介されてこの場所にやってきたのは二年前。

「^{アウトサイダー}ほぼく傍観者」>入社したてのことだった。

親交と親睦を深めるためとつれてこられた僕を見て、泡女さんは未

成年じゃないのと柊木沢さんを咎めた。

けれど元来面倒見の良い性格のためか、お酒は飲んじや駄目だからねと忠告はしたものの追い出すようなことはしなかった。

泡女さんには、昔から拾いクセがあった。

壊れたテレビやスプリングの飛び出たアームチェアのようなものから、捨て犬や捨て猫、果ては捨てワニにいたるまで。

「ゴミ捨て場に置いてある物を見ると、何だか居た堪れなくって」それを聞いた柊木沢さんが人だけは拾ってくるなよと茶化していたのだけれど、ある日突然一人の女の子を抱えて戻ってきたそうだ。その少女を見たのは拾ってきた泡女さんと朱鷺籐さんを含めた二人だけだった。

「裸同然の格好で路地に転がっててね。餓死寸前なのにひどく脅えてるみたいだったし、しかたがないからタオルで包んで連れて来ちゃったのよ」

柊木沢さんに散々「ロリコンの人攫い」と囃^{はや}された泡女さんは、鬱陶しそうに言い訳を吐いた。

「まあ元気になってくれたのはいいんだけど、それから電腦のある部屋に籠もって出てこないのよね」

「正氣に戻って、とんでもないところに連れて来られたって自覚してるからじゃないのか？」

「それなら別に出て行ってもらっても構わないんだけど、どうやらあの子、行く場所もないみたいだし……。怖い人から逃げてきたのかもしれないじゃない？」

「まあ何だっていいけど、アヤマチだけは犯すなよ」

そう言って笑った柊木沢さんを、泡女さんは思い切りぶっ飛ばした。

「—— 実際のところ、どうなわけ？ トキちゃん」

情報を求めてやってきた客の対応のため、泡女さんは上階へと行ってしまった。

それを良いことに柊木沢さんが朱鷺籐さんに顔を寄せて訊ねる。

「いくらトキちゃんだって、素性も知らない女の子を連れてきたときはビックリしたろ？」

「そうですね」

朱鷺籐さんは曖昧な顔をしていた。

「同じ境遇の身としては、何とも言えませんかね」

「は？」

「あれ、知りませんでしたか？僕も昔、泡女さんに拾われたんですよ？」

「…… 知らなかった」

どういう経緯いきさつなのかは教えてくれなかったけれど、柊木沢さんと泡女さんの付き合いは相当長いようだった。

「トキちゃんは普通にバーテンとして雇われているもんだと、てつきり」

「雇っていただいているのは本当ですが、それまでに色々ありましたね」

苦笑すると、朱鷺籐さんは僕の前にピンク色のカクテルを出した。

「桜のリキユールを使ってますよ。ベースは薄くしてありますので飲みやすいかと」

「有り難うございます」

確かにお酒の味はあまりしなかった。

ふんわりとまるやかな甘みの後にほんのすこしの重みを感じるだけだ。

まるで今流れているジャズのようなうだと思った。硬質のピアノは背景に溶け込むようにうまく馴染んでいる。

「で、トキちゃんは拾ってもらった恩義を感じてあの妖怪に付き合ってるのか？」

「その単語は禁句ですよ？」

「いいんだよ、スキンシップみたいなもんだ。それで、そこどこうなんだ？」

「勿論、泡女さんに感謝はしていますよ。あそこで拾ってもらわなければ僕はきつとまた元の生活に戻っていましたから」

朱鷺籐さんの顔に陰が差す。

「それまでの僕は人の内面を覗き込むようなことをしていました。いいえ、それしかしていなかったともいえます。人は隠したい事や誰にも見せたくないような事を心の奥深くに閉じ込め、鍵を掛けます。僕の仕事はその鍵を開けて中身を盗み見ることでした」

「……ふっん」

僕は朱鷺籐さんという人間を改めて見た。

穏やかそうな人だと思っていた。

黒縁眼鏡の向こうに見える瞳は常に柔和に揺らぎ、物腰も丁寧で接客態度にも卒がなかった。

そんな朱鷺籐さんにも口に出すには容易ではない過去もある。

—— 鍵を、開ける

その言葉が、ひどく気に掛かっていた。

たとえそれが比喩的な言い回しだったとしても、もしもそれが本当ならば

僕の中にある あの箱 も、開けられてしまふのではないだろうか？

「じゃあ、さしずめトキちゃんは“恋心泥棒”ってところか？」

「そういう風に見ていただいても良いかもしれませんね」

柊木沢さんの言葉に朱鷺籐さんはいつもと変わらぬ表情に戻っていた。

「けれど、僕的能力は別に心限定ではないのですよ？ 鍵と名のつく

物だったら、僕は太抵開けられますから」

朱鷺籐さんに言われ、柊木沢さんはごそごそとポケットを漁った。そして木目の綺麗なカウンターの上に携帯電話を投げ置いた。

ひとつ返事で応すると、朱鷺籐さんは人差し指で携帯電話に触れた。そしてしばらく目を瞑って何かを模索していた後、再び目を開けて満足気に微笑んだ。

「お、
すげえ！」

「ちよつとちよつと！それどうやっただよ？凄え才能だな！」

「でもさ、それなら逆に鍵を掛けることもできるんじゃないか?」

「あんまり図に乗るんじゃないよ」

「朱鷺籐ちゃんも、こいつが面白がるようなことしちや駄目でしょ？」

「すみません。つい、久しぶりだったもので」

ドア越しに客を見送って、泡女さんが振り返る。

「泡女さん、」

「……有り難うございます」

「……なあ」

「はい？」

「俺たち、完璧にお呼びじゃないよな？」

「そんな雰囲気ですね」

向こう側では完全に二人の世界が出来上がっていた。

「あーもうやめろやめろっ！妖怪のせいで酒が不味くなるっ！」

「……朱鷺籐ちゃん、もうこいつにお酒売らなくてもいいわよ」

柊木沢さんをじろりと睨み付けると、泡女さんは僕の隣のスツールに腰掛けた。

「おお、そういえばさっき“ロクな客が来ない”って言ってたよな？」

「そうだけど？」

泡女さんの前に琥珀色の液体が出される。

それを舐めるように呷って、泡女さんは天井部分を仰いだ。

「あの子、自分の立場を分かっているのかしら？よりにもよって、警察内部にも顧客がいるのよ？」

「警察が情報を買いに来たのか？」

「そうなのよ。しかも、例の首なし事件についてね」
途端、

「——へえ」

柊木沢さんの横顔がほんの少しだけ硬くなる。

僕は残っていたグラスを空けた。底の方がアルコールは強い。

「で、おたくの電腦テロリストちゃんはどんな情報を買ったわけ？」
「あの子だって万能じゃないのよ？後日送信するってことで手打ったわよ」

ああでもね、と泡女さんは銀色の煙草ケースを取り出しつつ付け足した。

「おまけだって言って与えてた情報がちょっとだけ面白かったのよね」

ケースの中から煙草を摘むと、泡女さんにはやりと笑った。

「ちよつと都市伝説みたいな話なんだけど——聞きたい？」

「焦らさないでとつと喋れよ」

「じゃあ、はい」

泡女さんは噛み付くような柊木沢さんに向かって手を出した。

「ああ？何の真似だ？」

「誰がタダで教えるって言ったのよ？代金はもちろんいただくわよ」

「汚ねえな！もう使いまわされた情報だろうが！」

「でも情報は情報よ。ホラ」

指をくねくねと動かして催促する。

しかたねえなあと財布を出してきた柊沢さんは、千円札を一枚抜き取って渡した。

泡女さんは手のひらに置かれたそれを、まるで汚い雑巾のように眺めていた。

「なあにこれ？」

「何って、金だろ」

「これっぽちでアタシから情報を買おうっていの？」

「今日はそれしか持ち合わせがねえよ」

柊木沢さんは財布を逆さに振った。

レシートと名刺が数枚、何かを暗示するように落ちてきた。

「な、！あんたこんだけでどうやってお勘定支払うつもりだったのよ！」

「まあ付けておこうかな、と」

「あんたね、ウチの店にどんだけツケが溜まってると思ってるのよ」

「ケチケチするなよ。俺とあんたの仲じゃねえか」

「……そんなもんで騙されると思っなよ、てめえ」

「あの、」

話が進みそうもなかったので、僕は手を挙げて進言する。

「僕なら少しはお金がありますけど」

「あら、駄目よ！」

泡女さんは慌ててその提案を却下する。

「子供からは取れないわ」

「けど、」

「……んもう、しょうがないわね！今日は可愛い子に免じて特別よ！」

言いつつも、手の上に乗せられていた千円はちゃっかりと応酬された。

「あの子が突き止めた話なんだけど———今、大量の物資が闇に消えてるらしいのよ」

泡女さんが指を振って語り始める。

「正確に言つと建設用の鉄筋とか木材、それから工事に使う道具やらそういった類の物が相次いで現場から盗まれているらしいの」
それを聞いて、僕と柊木沢さんは密かに顔を見合わせた。

今日の視察にはそういうことが背景にあったのだろう、と。

「最初は色んな場所から少しずつ、それこそ全国の工事現場からちよつとちよつと色んなものがなくなっていた。けれどいくらちよつとと云ったって、それが何度も続けばいずれは誰かが気付くでしょうにね」

「それだけか？」

「まあ落ち着きなさいって。あんた、二十年くらい前から防衛省に付き纏つてる噂、知ってる？」

——— 防衛省。

父の職場に関する噂とは、何だろう。

「あそこはね、二十年前から正式申請されてない予算があるって噂なの。その予算が何に使われているのかは誰も知らない、けれど都市伝説的に伝えられているものはある」

「何なんだよ」

「防衛省はね——地下にもうひとつ大きな都市を建造しているって話よ」

「……はあ!？」

柊木沢さんが奇声を上げた。

もう少して椅子から引っくり返ってしまうんじゃないかという勢いだった。

「おま、それ絶対アニメの見すぎだって!防衛省はネルフか!？」

「別に人型汎用兵器は造ってないと思うけどね。でも、そう考えると辻褄が合うと思わない?」

消えていく物資。

謎の不正規予算。

それらがつき込まれていく先にあるのは——第二の都市の存在。

「いやいやいや」

柊木沢さんは全力で頭を振った。

「絶対ない。まずない。マジない。有り得ないって」

「そうかしら?結構面白い発想だと思うけど」

「あーそんな情報に千円も出しちまった俺が可哀想……」

柊木沢さんはそう呟いて、カウンターに突っ伏した。

＊

結局、お代は再び柊木沢さんのツケとなった。

僕が払うと申し出ただけで、

「いいのよ。また近いうちに来てちょうだいね」

泡女さんはそういつて、大きな投げキッスを吹いていた。

「本当に良かったんですね」

「ああ？いいんだよ、どうせ俺が払われるんだし」

冷たい夜風に後ろ髪を攫われながら、柊木沢さんは目を細めた。

「でも、まあ本当に近いうちに行かなきゃかも、な」

「首なし事件の話ですか？」

「おお。それに、例の物資がなくなってるって話も気になるしな」
地下都市の存在はないがな、と柊木沢さんは付け足した。

「防衛省つていやあ、確か」

「はい。父が勤めているところです」

「で、オヤジさんから何か聞いたことは？」

「無いですね」

「だよなあ」

僕たちはアウトサイダーズ傍観者＞本部へ向かって歩いていた。

たった今泡女さんから仕入れた情報も含め、今日の報告を済ましてしまおうという算段だった。

「情報は鮮度が命って刑事もののドラマでも言うしな」

既に正面入り口は閉鎖されていたため、僕たちは普段は使用しない

非常用入り口から入ることにした。

「僕、この場所から入ったこと無いです」

「俺はしょっちゅうホテル代わりに泊まるから頻繁に使っけどな」
その言葉通り、柊木沢さんは慣れた手つきで鍵を開け、中へと入っていた。

<立ち入り禁止>の封鎖を完全に無視すると、その奥に続く階段を降り始める。

十分程ひたすら下降すると、薄い扉にぶち当たった。

「よつと、」

片足で押し開けた柊木沢さんの後に続く。

中は、真っ暗だった。

エレベーターのある正面入り口とは真逆の方向に出た僕たちは、手探りで歩いていく。

「電気は向こう側にしかないんですよ」

「ああ。それが面倒なんだよな」

何とか躡かずに電気系統を掌るスイッチまでたどり着くと、僕は表部分の電灯を点けた。

瞬間、

「――誰か、いる」

柊木沢さんが低く漏らした。

その手には既に重装ナイフが握られている。

片手で僕にしゃがむように合図すると、柊木沢さんはゆっくりとソファアのほうへと向かっていく。

言われたとおり、僕は床に伏せた。

ふとその角度から、デスクとデスクの間に何かを見たような気がした。

「あれ、は……？」

「どうした？」

有無を言わさぬ鋭どさで問いかけられたにも関わらず、僕は答えることができなかった。

そこにいたのは、

「瑕奈ちゃんっ」

デスクの後ろ、死角になる部分に横たわっていたのは苦しそうな顔をした瑕奈ちゃんだった。

沈鬱な表情で目を閉じ、両手でお腹を抱えている。

その顔に生氣はなく、青い唇だけが微かに震えていた。

しかし

それよりも、そんなことよりも瑕奈ちゃんは、

「お前、どうしてそんなところに——」

駆け寄ろうと体を捻った柊木沢さんの目が見開かれる。

僕はあの藤沢という名の男を思い出していた。

彼が言っていた言葉を。

“ 神の徴^{しるし}を享けた者の中には
肉体的に崩壊を来たす者や、精神的に瓦解する者もいる
“

瑕奈ちゃんの髪。

明るい茶色に染めていたその髪が―― 真っ白になっていた。

「きず、な…… お前、その髪は、」

―― 柊木沢さんがそう漏らしたのと “侵入者” が彼に飛び掛
って行ったのは、ほぼ同時のタイミングだった。

12・＜春日部 護（かすかべ まもる）に遺された罪と贖（あがな）いの

12・＜春日部 護に遺された罪と贖いの日々＞

アタシは父さんが嫌い。

憎くて憎くて、それこそ殺してやりたいほど大嫌いだ。
なのに。

アタシはそれと同じくらい、父さんが―― 恐かった。

「おんが譲、
」

父さんはいつもその名でアタシを呼んだ。
否定したくてもできない。それはアタシにとって戒めでもあったか
ら。

「譲、ちよつとまた必要なデータがあるんだ」
振り返らない背中が告げる。

アタシはすっかり寂れてしまった研究所を見渡した。

かつて父さんが最も輝いていた場所。

“生命の魔術師”、“生物学の異端児”。

学界で名を馳せ、いくつもの画期的な論文を發表し続けた父さん。

ここは父さんが自身の悲願でもある ＜完全なる人間＞ の研究に
明け暮れ、そしてその生け贄として

—— “本物の譲” を奉げた場所でもあった。

「譲、私はね今度こそ成功するのだよ」

暗く湿った声。

本当は言ってやりたいことが沢山あった。

けれどそれら全ては口を開く度にどこかへ消えて行ってしまう。

「昔の仲間がね、私の研究データを持ち逃げしてしまったんだよ」
奪われたものは取り返さなければ。

父さんは低く笑う。

壊れてしまったように、諦めてしまったかのように。

何が父さんを壊してしまったのだろう。

そもそも初めから壊れていたのかもしれない。

彼の研究が、始める前から終わっていたのと同じように。

「だから、譲 —— 盗んできてくれるね？」

父さんは振り返らない。

アタシは、左腕を撫でる。

冷たいチタンの感触だけが荒ぶる心を殺してくれた。

* * *

「よお。珍しいよな、お前が俺に会いに来るなんて」

水曜日。

アタシは鷹巳の大学に来ていた。
理由はひとつ。

「で、アタシが頼んでおいたこと、ちゃんと片付けておいてくれた
んだろうな？」

「…… 開口一番が脅しとかマジありえないんですけど」

と言いつつも、鷹巳はポケットからUSBを取り出し、アタシに投
げてよこした。

「ほらよ。それがあれば大抵の電脳パソコンに掛かってる防衛は看破できる
と思うぜ」

「“大抵”じゃ駄目だ。全部の電脳に対応させろ」

アタシがUSBを付き返そうとすると、鷹巳が溜め息混じりにそれ
を制した。

「今度は何だ？ペンタゴンにでも忍び込むのか？」

「そういうことは聞かない約束。で、実際どうなんだ？」

「大丈夫。簡単なプログラムだけど威力は大。政府の電脳防壁を破
るよりは楽な仕事だよ」

「上出来」

アタシは鷹巳に礼を言つと、足早にその場を立ち去ろうとした。

「なあ、」

鷹巳の声がする。

が、アタシは止まらずに歩き続けた。

「なあつてば！おいっ！」

「…… うるっせえな。追いかけてくんなよ」

アタシは肩に掛かった鷹巳の手を払いのける。

「なあ、まだ泥棒みたいな仕事続けてんのか？」

「だからそれは聞かないって約束だろ」

「だけどき、芽衣子ちゃんだって心配してるし、それに」

「それに—— 何だよ」

アタシは目の前にいる幼馴染を見つめた。

その視線に居た堪れなくなつたのか、鷹巳が顔を背ける。

「別に、でも危ないことは止めたほうがいいだろ」

「危ないか危ないかはアタシが決める。お前は何も心配せずに、
ここで勉強にでも励んでいればいいさ」

「…… そうかよ」

アタシは再び歩き出した。

もう鷹巳は追いかけてこなかった。

途中ですれ違った白衣の男が、アタシの顔と鷹巳の姿を交互に見比べていた。

自分でも反吐が出るような言い方だっただと思う。

鷹巳は何も悪くない。

アタシが高校に行かずコソ泥の真似事している間も、鷹巳は順調に学歴を積んで行った。

それだけのことだ。

それなのにアタシはあいつに責めるような言葉を吐き捨てる。

顔を合わせればいつもこうだ。鷹巳に心配されると、つい棘のある言葉をぶつけたくなる。

アタシはただ—— 甘えたいだけなんだ。

結局は解っているから。

“鷹巳はアタシを見限らない”。

どんなにキツイことを言っても、冷たい態度を取っても、鷹巳は決してアタシを責めたりしない。

「……アタシはずるいな」

重い曇天の空を見上げる。

ねずみ色のそれは、今にも降り出しそうな雰囲気だった。

「——ごめんな、鷹巳。それでもアタシはやめるわけにはいかないんだ」

前に進むしかない。

それがアタシに残された罪滅ぼしの形だから。

*

父さんに指定された場所は、とあるビルの地下室。

夕方になり、社員が退社して行く。

その数十分後にビル全体の明かりが落ちるのを視認する。

それからさらに一時間ほど待ってから、アタシは乗り込むことにした。

黒いタイトなスウェットスーツの上下と深く被った目出し帽を身につけ、トンファータイプの特殊警棒を装備していた。

もちろん最大の武器は左手の義腕だ。

できることなら下手な小道具など使わずに、この腕だけで片付けた

いと思っていた。

正面玄関からの侵入は最初から論外。

夜間とはいえ人の目もあるし、カメラも設置されていた。

無関係な人間をぶちのめすのは極力避けたい。せめてものエゴだ。

アタシは裏口に回りこみ、非常口のひとつである扉の前で止まった。当たり前のようにカギが掛っている。

しかしそれはオーソドックスなタイプのものだった。

スウェットのポケットからひとつの鍵を取り出すと、アタシは扉の鍵穴に差し込んだ。

しばらくガチャガチャとそれを回し込むと、一拍の間をおいてそれは開かれる。

何も難しいことをしたわけじゃない。少し電脳網^{ネット}で検索すれば、この手の偽開錠ツールはいくらでも手に入った。

建物内部に侵入し、内側から再度鍵をかける。

そしてアタシは扉に小さな圧力センサーを取り付けた。

下で活動中にこちらで動きがあれば、アタシの携帯に直接知らせが入るようになっていた。

ちなみにこれを考案したのはアタシで作ったのは鷹已だ。なかなかナイスな泥棒七つ道具の一つだった。

「さてと」

暗闇の中、暗視スコープを装着する。

細い廊下が続いた後、立ち入り禁止となっていた非常階段を見つけアタシは下降していく。

どのくらい降りただろうか。

父さんの話では、その施設は大体地下八階あたりに位置しているそうだった。

「この辺りだな」

アタシはそれらしき入り口に当たりを付けて、ハンドルをそっと回した。

幸い、今度の鍵は開いていた。

薄く扉を開いて中の様子を確認する。

明かりは点いていたものの、中から人の気配はしない。

けれど小部屋のようなものが幾つか見受けられたので、これは個別に人の存在を確かめていくしかなかった。

一番嫌なパターンではあったけれど仕方がない。

アタシは一旦暗視ゴーグルを脱ぐと、左腕を構え中に進んで行った。

最初の部屋は何もなかった。

机と椅子だけしか置いてない、勉強部屋のようだった。

そこに潜み、しばらくそのまま様子を見てみるものの、やはり何の反応もない。

後の部屋も同じだった。

トレーニングマシンの置かれた小部屋、簡易キッチンとトイレ、小さな実験室、そして――

「この部屋か」

一見すると社長室のような部屋。

大きなデスクの上には目的の電腦が置かれていた。

アタシはそれに近づくと素早く起動させる。

パスワードの入力画面になると、鷹巳特製のUSBを差し込んだ。

電腦がそれを認識するとまるで魔法のようにスタート画面が表示された。

「鷹巳、偉い」

ファイルをひとつずつ開け調べている時間はなかったので、電腦に保存されているデータをそっくりそのままコピーしてしまうことに

した。

さすがにそれには十分前後の時間が掛かるようだった。

作業中、アタシは気の抜けた心持ちでそれが終わるのを待った。

父さんはこの場所を“昔の知人”が腕っ節に覚えのある精鋭を集めて作った組織の本部だと言っていた。

だからこちらとしてもそれなりの覚悟を持って侵入してきたというのに、戦闘になるどころか鉢合わせもなかった。

その上、消灯を忘れていくような間抜けた連中だ。

「……しかし、そんなところと知っていて娘を送っちゃう父親っていうのも、実際どうかと思うけどね」

アタシは自嘲気味に呟いた。

根底にあるのは信頼や期待なんかじゃないことは百も承知だった。

父さんはアタシだから任せたのではなく、たまたまアタシがいたから任せるのだ。

もしもアタシがここで失敗してもあの人ならば変わりはいくらでも用意できるのだろう。

昔はそれを悲しいとも思っていた。

目の前にいるのに見てくれない現実を嘆いたりもした。

けれど今のアタシの父さんの間にあったのは—— 多少の哀れみと畏怖の念と幾許かの恩讐。

そして家族としての情だ。

がたん、

ふいに表の方で物が倒れるような音がした。

体を駆け巡る電流にも似た緊張感。

アタシはまず冷静になって、電腦画面を見た。

作業が完全に終了するまであと三分といったところだ。
それまでに相手がこちらに気づかなければ、それで済む。

しかし――

「その“精鋭”っていうのがどのくらいか、試してみようじゃないか」

最初から穩便に済ませる気など微塵もない。

端から非合法的な組織なのだ。ちよつとくらい暴れても警察沙汰にはならないだろう。

昔からの悪い癖だ。

アタシは今までこの左腕で全てを薙ぎ倒し、道を切り開いてきた。
だからこういう状況に立たされると――血が、滾るのだ。

獣のようにしなやかな足取りで部屋を出る。

小部屋の密集したこのエリアとは隔てられた先にある、デスクとソファアの置かれた表部分。

こちら側からでも人気の無さが感じられたため、隅々まで調べることを怠っていた。

しかし、それならそれであちから仕掛けてくるチャンスはいくらでもあった筈だ。

それに広い部屋の中からは、殺気が微塵も感じられない。

「……？」

何かがおかしい。

アタシは構えていた左腕を下げ、辺りを見回した。

「――は、」

吐息の漏れる音。

それはデスクの後ろ側から聞こえてきた。

警戒しながら近づくと、そこに――女の子が倒れていた。

「っおい、大丈夫か？」

ここがどこであるかも忘れ、思わず駆け寄っていた。

中学生くらいだろうか。

細い体をぐったりとデスクの脚に預け、顔は伏せられていて窺えない。

とにかく具合が悪そうなことだけは分かった。

「しっかりしろよ。とりあえず横になったほうがいい」

アタシは目出し帽を脱ぐと、女の子の体に手を掛けた。

見事なほどの白髪がアタシの鼻先をかすめる。

そして振り返ったその女の子の顔を見て、アタシは本当の意味で硬直した。

「、な」

息もつけなかった。

両腕はただ女の子を抱いたまま静止している。

頭の中では分かっていた。

そんなハズはない。

あの子は――譲は、十年以上も前に死んでいる。

けれどそれでも想わない日はなかった。

今、あの子が生きていたらどんな風に成長していただろうか。

きっとアタシのようにやさぐれず、真っ当な人生を歩んでいたことだろう。

そして幼いころから少しも変わらない微笑みで、アタシの怠惰な生

活を諫めるのだ。

訪れる事のなかった未来。
奪われてしまった、笑顔。

それが今、アタシの目の前にあった。

「ゆ、ずる？」

ポケットの中で警鐘が鳴っている。

誰かが建物に入ってきたのだ。

でもそんなことすら今はどうでもよかった。

アタシは苦しそくに顔を歪める女の子を胸に抱いた。

ああ、譲がいた。

譲がここにいてくれた。

—— あれは全部夢だったのだ。

*

あの日学校から帰ってくると、いつも出迎えてくれる弟がいなかった。

父さんは研究に夢中でそんな姿に嫌気が差した母さんは出て行った。
だからアタシたちにはお互いしかいなかった。

なのに。

それなのに。

嫌な予感がしていた。

アタシはかばんを放り出すと、父さんの研究所へと急いだ。

そしてそこでアタシは見た。

父さんが譲を、何かの装置に入れようとしているところを。腕を引かれる譲が嫌がって泣いている光景を。

アタシは走った。

譲はとうとう中に入れられ、扉が閉められつつある。

弟は呆然としていた。

父さんはただ傍観している。

アタシは閉まりつつある扉の隙間に手を入れた。

父さんが驚いて退けようとする。けれどアタシはどかなかった。鉄の扉がどんどん、どんどん閉じていく。

譲はアタシの手に触れた。

もう扉の隙間は腕が一本入るくらいしか残っていない。

それでもアタシはそれを抜き取るうとはしなかった。

譲の小さな手がアタシの指にしがみ付いている。

やがてその隙間すらも埋まってしまう。

弟の顔が永遠に消えていく。

そして目の前が白くなり、強烈な痛みを意識が飛んだ。

目が覚めると、自分の部屋に寝かされていた。

頭がひどく重たい。

起き上がろうと力を入れると、左腕に違和感を覚えた。あるべきはずの左腕が、そこになかった。

その瞬間アタシはようやく譲のことを思い出し、這いずる様に研究所へと向かった。

譲の姿はなかった。

装置は稼動している。

父さんはちらりとアタシを振り返ると、再び何かの計算に没頭し始めた。

その様子を見て、アタシは改めて理解した。

父さんは譲を何かの犠牲にしたのだ。

そしてアタシは、怯える譲をそれから守れなかったのだと。

父さんは研究所に籠って何かを育てていた。

それが何なのか知りたくなかったアタシは、気づかないフリをしていた。

そして手に入れたばかりの義腕を使い暴れまわって全てから逃れようとした。

それから父さんはアタシを“譲”と呼ぶようになって、アタシもそれを受け入れた。

父さんはアタシにいろんなことを頼むようになった。

—— 生き返らすのに必要なものなんだよ

父さんはそう言ってアタシを使った。

本当はそれが嘘だと分かっていた。

けれどアタシは敢えて訊ねなかったし、逆らおうとしなかった。

あの子のことを忘れないように。

自分の罪を刻み付けるように。

*

警鐘が鳴り続けている。

アタシは腕の中の女の子を床に横たえた。

その蒼白な顔は、確かに譲と酷似している。

目の前のこの子が何であれ、守らなければいけないと瞬間的に思った。

それからの行動は早かった。

アタシは一旦全ての電気を落とすと、来訪者からは死角となるソファの影に隠れた。

しばらくすると扉が開く音がした。

足音は二つ。

男の声と、少年のような声。

頭の片隅がひどく落ち着いていた。

それと同時に、心の内は限界までに荒れていた。

——こいつらがあの子を傷つけているのか

許せなかった。

これ以上、あの子が、譲が傷つけられるのを許すわけにはいかなか

った。

来訪者は慣れた足取りで進むと、電気のスイッチを入れた。
アタシが飛び掛ろうとした刹那、

「――誰か、いる」

男の方が確かにそう呟いた。

殺気が漏れたとでもいうのだろうか。

声を発した方の男は手にナイフを握っていた。

やはり傷つけるのか。

その事実にあタシの怒りは最高潮に達した。

そして、

少年の短い叫びの後、男があの子に向かって近づいていくのが見え
たとき――

アタシはその背中に飛び掛っていた。

*

火花が散る。

アタシが繰り出した左腕のタックルに、男は手元のナイフで応対し
た。

金属と金属がぶつかり合う嫌な音。

男が完全に体を反転させる前に、空いたほうの腕へ警棒を叩き付け
た。

「くっ、」

その衝撃に、男が間合いを取って床に崩れる。
しかし男もただ遠ざかっただけではない。

足首からスローインナイフを掴むと、男はアタシの方へと投げつけてきた。

正確な投擲だった。

それは軌道を外れ、カーペットに突き刺さる。

左腕でガードしていた隙に男は体勢を立て直していた。

そして再びナイフで応戦。

斬り付けて来たそれを左腕で受け警棒を振りかざそうとするも、右腕を蹴られた。

結果、警棒はどこかへ飛んでいく。

「これでイーブンだよなあ」

男はひどく嬉しそうな顔をしていた。

凶悪で、最悪な笑顔。

「……そのどこがイーブンなんだよ」

体中にナイフを仕込んでいるのか、男はさらに新たなナイフを取り出すとそれを両手に構えた。

「お前、誰だよ？」

「誰が答えるか」

「そっかい——！」

ナイフが煌めき、アタシは左腕を構えた。

視界の外れには常にあの子の姿が映っている。

少年の影が近づいていく。

その横顔に、見覚えがあった。

「余所見しててもいいのかなあっ！」

ナイフが来ると思った。

しかし男はあえてそれを捨てて、素手でアタシの腹に拳を埋め込んできた。

「がっ」

「まだまだあ！」

「この、」

アタシは全力を左腕に籠め、男の頭に向けて打ちつけようとした。しかしそれは寸でのところでかわされ、アタシは男によって床へとねじ伏せられる。

「くそ！離せ、このっ」

「離せって言われて……」 以下省略

男はうつ伏せになったアタシの体に馬乗りになり、少年の方に声を掛けた。

「カイ——とりあえずこっちは片付いた。瑕那はどうだ？」

「駄目です、意識が朦朧としているみたいで」

「カイ、だって？」

まさかとは思っていた。

あいつがこんなところにいる意味が分からない。

しかしカイは至って冷静に立ち上がると、

「僕も、こんなところで護に会うとは思ってもみなかったよ」

アタシの顔を見下ろした。

その言葉に動揺したのは、アタシだけじゃなかった。

「ま、まもるってお前、どこでその名を、それを誰に、いや、何で知ってる？」

「柊木沢さん？」

「…… アタシの名前がどうかしたか？」

「—— へ？」

男はアタシとカイを交互に見ると、急に納得したような顔つきになった。

「何、お前、まもるって名前なの？」

「それがどうした？」

「いやいや、ちょっと親近感」

そう呟いた男はカイにロープを要求し、それでアタシの手を背後で縛った。

ロープが簡単に出てきてしまう辺り、やっぱりここはまともな場所じゃないんだな、と他人事のように思った。

*

「で、お前の目的は？」

柊木沢と呼ばれた男は、アタシの正面に座っている。

女の子はソファアーに寝かされ、その隣に付き添うカイは柊木沢に言われて、どこかに電話を掛けていた。

「ていうかお前の知り合いなのな」

「ええ、まあ」

戻ってきたカイが曖昧に呟く。

アタシは小学生の頃から知っているそいつの顔を見た。

顔に出してはいないが、多分混乱していたはずだ。

カイが感情を表に出さなくなったのはいつからだろう。

そつえば、あの誘拐沙汰が起きてからのような気がする。

「なあ—— カイ、お前何でこんなところにいるんだよ」

アタシは自分への問いかけを無視して、カイに訊ねた。

「ここがどんなところなのか、知ってるのか？」

「少なくとも護よりは知っているつもりだよ」

「ここが父さんの研究を盗んだ—— MIZUHA^{ミズハ}システムの概念を横取りした奴のアジトってこともか？」

「なんだ、その何とかシステムって？」

柊木沢がぼかんとアタシを見ている。

カイもわずかに首を傾げているだけだった。

どうやらそれについて、ここにいる奴らは何も知らされていないようだった。

しかし——

「…… みずは、ちゃん？」

意外な事に部屋の中でただ一人、その女の子だけがアタシの言葉に薄く目を開いた。

「みずはちゃんを、知っているんですか？」

「瑕那ちゃん、動かないほうがいいよ」

青ざめた女の子の顔の中で頬だけが紅潮していく。

「教えてください、みずはちゃんは—— 私の妹、はどこ、ですか？」

「…… 妹、？」

その単語に、アタシは全てを理解した。

目の前のこの子が、譲に似ている理由^{わけ}を。

「…… そうか、お前が父さんの研究、か」
「え？」

「アタシは、春日部 秀しげの娘だ」

「—— あ、」

アタシの推測どおり、その名前を忘れていたはずがなかった。

瑕那、という名の女の子の表情が、見る見るうちに翳わななっていく。唇が小刻みに戦慄わななしていた。

「あ、ああ、じゃあ私は——」

「貴女が春日部博士の娘さんですか」

エレベーターの到着音。

それと共に現れた二つの影。

ひとつはスーツに眼鏡の女、もう一人は深刻な顔をした長身の女だった。

「瑕那っ」

「三七三、さん」

長身の女は瑕那に近寄って、その額に手を当てた。

「どうしてこんな、髪もこんな色に……」

「ごめんなさい。私、その」

「そんなことよりも、春日部さんのお嬢さんに“尋問”する必要があるですね」

「…… “そんなことよりも”？」

尋問という言葉の不穏性よりも、目の前の少女の体調すらも軽んじる女の発言が信じられなかった。

「お前、その子の知り合いなんだろう。だったら少しは、」

「侵入者に発言の権利はありません。春日部博士の命で来たというのなら、尚更です」

「あんたは、父さんを知ってるんだな」

女は答えなかった。

多分、知っているのだろう。

まだ幾分か正常だった父さんを。

政府の一部と五大財閥が展開していた研究に召集されていた頃の父さんは、母さんともうまくいっていた。

「あなたは、＜アルファ・プロジェクト＞の関係者か？」

「―― 何のことでしょうか」

「とぼけるなよ。父さんはどうして解雇された？研究は、うまく行っていたんじゃないのか？」

「そんなこと、今はどうでもいいでしょ！」

三七三と呼ばれた長身の女が叫んだ。

「それよりも瑕那、あんた一体どうして、」

「私―― あの後、創世会に行っただんです」

瑕那がぼつりと漏らした言葉に三七三の顔色が明らかに変わった。アタシには意味の分からなかったが、それはどうやら部屋中に沈黙を広げるほどの威力を持っていたようだ。

「―― どうしてそんなことを、」

しばらくして、三七三が小さく呟いた。

その呆然とした顔を前に、瑕那が乾いた笑顔を零す。

「私、馬鹿ですよ。危ないって分かってたのに」

「じゃあ何故、」

「―― フツウが嫌になったんですよ」

瑕那は依然と辛そうな顔をしていたが、口調は淡々としていた。そして弱った体を無理やりに奮い起こす。

まるで痛みを押し殺すように。

感情を殺^そいでしまったかのように。

同じだ、と思った。

譲を失ったあのときのアタシと同じ。

「ここに通っている時々、自分の平凡さがどうしようもなく嫌になることがあるんです。皆それぞれ特別な能力を持つてるのに私だけどうして、って」

「それは、でも」

「そんな私に創世会の人は、“変わる方法”を教えてくれたんです。私、あのとき体験会であったこと、全部は言ってなかったんです。あの日、あの箱の中で私は——教祖様と会ったんです」

再び訪れる沈黙。

「それで私、変わってみようって。私も——皆みたいに特別になれたらって、思って、創世会に入信して、教祖様の一部を、受け入れたんです」

「じゃあ、」

重苦しい静けさを払い除けるように、柊木沢が立ち上がる。

「その教祖の野郎のところにいけばなんとかなるんだな。そうだな、三二三」

「え、急にそんなこと言われても……。多分ドクターに診断してもらったほうがいいわ」

「——無駄ですよ」

瑕那が硬い声で宣言した。

「もう、無理なんです。だからドクターは呼ばないで下さい」

「だってそんな」

「お医者さんは、もう沢山なんですよ」

「瑕那、あんた……」

悲鳴のように零された言葉の意味。

それにはきつと、父さんが深く関わっているのだろう。

「無理なんですよ、もう」

瑕那は自分自身をも納得させるように繰り返す。

「その教祖様にも言われました。私の体は多分耐えられないだろうって。十中八九、死んでしまうって最初に告げられました。でも私、それでもいいって言ったんです。だって私、」

―― どうせ死んじやいますから。

「きず、な」

「いいんですよ、三七三さん。私、気づいてましたから。この体に溜まった“毒”の量は、もう手遅れなんだろうなって」

「毒ってなんだ？」

柊木沢が声を荒げ、そして三七三を見た。

「お前、そのことについて知ってたのか？」

「…… ええ。知っていたわ。叶に教えられていたもの、瑕那は幼少期に大量の、ありとあらゆる毒薬を使って、人体実験をされていた、と」

―― 人体実験。

薄々は気づいていた。

あの薄暗い地下室で父が何を“飼っている”かも、そしてそれらを使って何をしているかということも。

それでもアタシは見ないフリを徹底した。

また失うのが怖かったから。

次は自分だと思っていたから――

「……マジかよ」

さすがにその事実には柊木沢も絶句しているようだった。

放心状態で椅子に座り込み、片手で頭を抱えている。

三七三は強く唇を噛み、例の女はただ全てを静観しているだけ。そんな中、カイだけはずっと瑕那を見つめていた。

「あの、お姉さん？」

ふいに声を掛けられ、アタシは顔を上げた。

「その、こんなときに言われても何だとは思うのですが――ごめんなさい」

突然の謝罪にアタシだけではなく、その場にいた全員の視線が瑕那に集まる。

「私は、お姉さんの弟さんを“サンプル”にして生み出されたんですよね？」

「……知ってたのか？」

「お父さん、あ、春日部博士がいつも言っていましたから。いつもいつも私たちに、言っていましたから」

アタシは、何も応えられなかった。

父さんが譲について憶えていたことよりも、

彼女が語られたような酷い虐待を受けていたにも関わらず、あの男を、“父”と呼んだ事が――

それがたまたまなく辛かった。

「……何で、」

「はい？」

「何でお前が謝るんだよ？謝るのは父さんや、お前を助けようとし

なかったアタシだろ？」

「でも、私は」

「お前は悪くないんだよ！」

叫んでいた。

叫ぶことしか、できなかった。

この子は、瑕那の世界には父さんしかいなかった。

だからどんな責め苦を受けても慕い続け、頼ることしかできなかった。

それなのに、父さんはこの子や、この子と一緒に生まれてきた子供たちに譲の死の責務までを押し付けようとしたのだ。

誰がこの子を解放してあげられるのだろうか？

死に掛けの小さな体を抱きしめて、守ってあげられるというのだろうか？

「俺には、分からないけどな」

静かに落とされる声。

「柊木沢、さん？」

「お前の生い立ちがどうで、体の状態とか毒とか、そういうことは全然分からんけどな。瑕那、」

そして困惑する瑕那に近づき真正面から見据えると、その体を片手で引き寄せた。

「それでも俺は、お前に——生きていてほしいと思うよ」

「っ——！」

瑕那がその顔をシャツの胸板に押し付ける。
そして、静かに泣き始めた。
想いが溢れ出したように、ただ肩を震わせ泣いていた。

「というわけで、俺はこいつを連れて創世会本部に殴り込みをかけます。異議のある人は？」

「当たり前です」

それまで冷たい蠟人形のような顔だった厳しく女が言い放つ。

「それがどれだけ無謀なことかお分かりですか？それに教祖は“異端者”と成り得る者の存在を感知することができるといふ話ですよ？もしも彼が瑕那さんを“異端者”であると看做^{みな}していたら、貴方がたが向かって来るといふことも事前に把握できるという意味を持つのです。ですから、」

「僕は行きますよ」

「な、」

予期せぬ人物からの反撃に、女は口を噤む。

カイはいつになく真っ直ぐな視線で瑕那と柊木沢を見ていた。

「僕もあの日、教祖と会っています。どういう原理なのか、それが本当だったのか分からなかったので今まで黙っていました」

「貴方は……」

「でも、一回遭遇している分、それなり対処できます。それに“彼”も、興味を抱いているようですから」

「じゃあ、それで決まりだな」

柊木沢は腕を組んでストレッチをしている。

「俺は一旦家に戻って準備してくる。その間に三七三は瑕那について、カイは車を手配しろ」

それから、と柊木沢はまた黙り込んでしまった女の方へと向き直った。

「明ちゃんはこの件を叶のじいさんに伝えてくれても構わない。これは俺の独断だから罰するなら俺を、つてな」

「…… 止めても聞かないのでしょうか？」

「勿論」

「了解しました。それなりの事後責任は負って貰います」

そう事務的に言い残すと踵を返し、アタシが作業を途中で放り出してきた部屋に入って扉を閉めた。

「さて、準備に取り掛かりますか」

柊木沢の言葉を合図にそれぞれが動き始める。

「アタシも —— アタシも、連れて行ってくれ」

思わず声を上げていた。

「アタシもその何たら会に行かせてくれ！きつと役に立つから！」

「どうしてだ？」

「それは、」

アタシは土気色の顔に汗を浮かべる瑕那を見た。

その視線は微弱ながらもこちらの方へ向けられている。

それだけで、心を決めるには十分だった。

「アタシはもうアタシの“家族”を —— アタシの 妹 を傷つけさせるわけにはいかない」

だからこの手で守るのだ。

二度と後悔しないように、もう逃げたりしなくていいように。

これは罪滅ぼしでも贖罪でもない —— アタシ自身の覚悟だ。

「おねえ、さん」

アタシは不安そうに揺れる瞳にそつと微笑む。

「心配すんな。こう見えてアタシ、結構強いから」

「…… ありがとうございます」

「—— “結構” じゃなくて、“かなり” だろ？」

拘束が解かれる。

自由になったアタシの肩を柊木沢が馴れ馴れしく抱いた。

「勝手に触んなよ」

「俺さ、お前と遊んでて久しぶりに楽しかったんだよなー。よく見たら顔も好みだし、仲良くしようぜ」

「全力で断る」

アタシの立場はさしずめ捕虜つてところだろう。

あの陰険そうな眼鏡女が“尋問”を諦めるとは思えなかった。しかし今は考えないことにする。

「ということでカイ、しばし共闘になるな」

「うん。でも、芽衣子には言えないね」

「そりゃそうだ」

そう言つてアタシは笑った。

アタシは今、あの子の為に動こうとしている。

それが何故か不思議なほど心地良かった。

過去を忘れるわけじゃない。

けれど、いつまでも引き摺られるわけにもいかない。

それら全てを抱擁し大切な者を護れるような —— そんな強い人

間になりたいとアタシは切に願った。

今度こそ、間違ってしまわないように。

1 3 ・ < それは零れ落ちる 砂 のように、 >

1 3 ・ < それは零れ落ちる 砂 のように、 >

わたしは笑えていますか？

わたしは生きていますか？

わたしは —— ここにいますか？

僕は正直驚いていた。

自分が柊木沢さんに付いて行くと言った事。

あの白い少年に再び会いに行くと宣言した事。

何の為に？

瑕那ちゃんのため、だろうか？

僕の中で彼女の存在はそこまで大きくなっていたのだろうか。
少し考えてみる。

結論。

そういうわけでもなかった。

彼女は僕にとって、同じ職場に勤める同僚以外の何者でもない。

自分が薄情なことは分かっている。

けれどそれはもう変えようのない事実だと諦めていた。

では何故？

僕はさらに考える。

けれど答えは見つからない。

ただ明確だったのは、

いずれにせよ僕はあの少年ともう一度向き合わなければいけないということ。

そして――

箱の蓋が、開きかかっているということだけだった。

*

「すまん、遅くなった」

柊木沢さんは出て行ってから一時間もしない内に戻ってきた。

その右肩には、黒いスポーツバッグが掛けられている。

横長幅広のそれは、所どころ不思議な形に歪んでいた。

まるで野球バットが大量に詰め込んであるように見えなくもない。

「で、車は調達できたのか？」

「ああ。はい、でも僕じゃなくて二ノ宮さんが、」

「明ちゃんか？」

柊木沢さんは意外そうだった。

「何だよ、結局明ちゃんも心配してんじゃねえか」

「いえ、僕が個人名義で車を借りると、最悪の場合、叶さんにまで迷惑が及ぶかもしれないからという理由らしいです」

「……なるほどな」

二ノ宮さんは、ただ自分の主人を守っただけ。

叶さんに降りかかるあらゆる不都合を回避するのが彼女の務めなのだ。

「しかしそうだとしても有り難い」

「結果的にはそうなりますね」

たとえそれが間接的だったとしても、僕たちは結局二ノ宮さんの行動に助けられたことになる。

「じゃあ——行くか」

部屋中に広がる出発の合図、

「よし！」

護が呼応するように右の拳を左の義手へと叩きつける。

そしてソファーに横たわった瑕那ちゃんに歩み寄ると、そのぐったりと力ない体を抱き上げた。

その様子を、隣に腰掛けた三七三さんが見つめていた。

「……大事にしてあげてね」

「当たり前だ。この子はアタシがきつと守るよ」

瑕那ちゃんを腕に抱えつつ、護が力強く頷いた。

三七三さんは立ち上がって青ざめた顔を覗き込む。

「瑕那、」

返事はなかった。

「瑕那、あんた具合がよくなったら、一生あたしの奴隷だからね？」
閉じられていた目蓋が薄っすらと開く。

「覚えておきなさいよ。絶対、忘れないでよ」

声を掛けながら、護の腕に支えられた小さな手を握る。

瑕那ちゃんは弱々しくもそれを握り返していた。

そして僕も立ち上がる。

壁時計が二十二時のチャイムを鳴らしていた。
それはまるで始まりを告げる鐘のようだった。

*

裏口から表へ出ると、正面玄関の前に一台のワゴン車が停まっていた。
た。

そのフロントガラスには飾り気のないキーリングにつけられた鍵が
乗っている。

僕は免許を持っていない。

護は瑕那ちゃんの傍を離れようとしない。

運転は消去法的に柊木沢さんがすることになった。

「いいか、プランはいたってシンプルだ」

柊木沢さんは啞え煙草でハンドルを切る。

「こそこそ回りくどい事はしない。正面玄関から堂々と中へ入る」

「なっ、こんな時間だぞ、“入れてください” “はい、喜んで”
なんて展開があるかよ」

「誰が頼むって言ったよ？ かばんの中を開けて見る」

後部座席の護は、後ろに置かれた柊木沢さんのかばんを持ち上げ、そして驚いたように振り返った。

「重っ！ これ何が入ってるんだよ？」

「まあ開けてみるって」

柊木沢さんがにやりと口元を歪めた。

怪訝な顔になりながらも、護は言われたとおりにファスナーを開ける。

そして、

「お前—— どこぞのテロリストか？」

そんな言葉が聞こえてきた。

黒いかばんからは細長い銃のようなものやピストル、護が使用したものと同タイプの警棒、そしてどうやら手榴弾グレネードのような物も垣間見えた。

「こんな装備、一体どこから」

「持つべきものは理解のあるパトロンってな」

想像はしていたけれど、やはり叶さんの助力だった。

「お前ら、マジで危ない連中なんだな」

「安心しろ。頭のネジが緩んでるのは俺だけだ」

「…… ハンドルを握っている奴にそんなこと言われて安心できるか」

どうやら護は柊木沢さんとすっかり馴染んでいるようだった。

こんなことを言うと殴られそうなので口にするのはやめておこう。

「で、正面玄関から堂々に入った後はどうする？」

「そりゃあ勿論最上階を目指すだろ」

「どうして？」

「煙と馬鹿と悪の親玉は高いところが好きって言うだろ？」

「それ以外の根拠は？」

「ねえけど」

「お前が馬鹿なんじゃねえの？」

「とにかく上に行ってみるんだよ。それでいなかったら、途中で人質でもとって脅せばいい」

「……結局最後は武力行使なんだな」

護は呆れたように天井を見上げた。

「……うふふ、ふ」

微かに届いた笑い声。

車内にいた全員がそれを振り返る。

二人のやり取りを聞いていた瑕那ちゃんが、楽しそうに肩を揺らしていた。

「お姉さんと柊木沢さん、おもしろい」

「そうか？普通の会話じゃねえの？」

「人質って単語が出てくる会話は十分普通じゃねえよ」

「褒められても困る」

「いや褒めてねえし」

「うふふ、やつぱり、いいですね」

窓ガラス越しに瑕那ちゃんの顔が映る。

目の下には痛々しい隈が浮かんでいた。

生気のない笑みを浮かべた横顔に、前髪がはらりと落ちた。

「皆さん、私のために——本当にありがとうございます」

湿った声だった。

瑕那ちゃんの頬は外の灯りにきらきらと光っている。

「私が馬鹿だったのに、ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」

「とりあえず謝るのも礼を言うのも保留だ」

柊木沢さんがハンドルに顎を乗せる。

「お前は黙って守られとけ。お姫様みたいにな」

「私、お姫様ですか？」

その言葉に瑕那ちゃんが涙を拭った。

「じゃあ、柊木沢さんが王子様ですか？」

「こいつは王子ってガラじゃないだろ。盗賊ってところだな」

「うん。護のほうがよっぽど王子様っぽいね」

僕は同意を示した。

瑕那ちゃんがお姫様で護が王子様、そして柊木沢さんが盗賊なら、

僕は一体何だろうか。

せめて観客くらいになればと思わなくもない。

「そろそろ着くぞ」

車が大通りを左折する。

東京駅付近も人気は疎らで、このあいだ訪れたときよりも幾分か寂れて見えた。

「盗賊でも、いいですよ」

そんな中、瑕那ちゃんがそつと呟いた。

柊木沢さんは聞こえていないのか、ただ煙草の吸殻を窓の外へと放り投げただけだった。

*

創世会のビルは、闇と合併してしまったかのような暗黒色だった。

「ここがそのペテン宗教の本部か」

護が忌々しそうにそれを見上げる。

道中、僕は簡単にこれまでの経緯を説明していた。

話が長くなりそうだったので、とりあえず僕たちは叶さんに雇われた何でも屋のようなものだということにしてある。

完全に納得しているわけでもなさそうだったけれど、些細な違いは大した意味を持たないだろう。

「よし、野郎共——好きな武器を取れよ！」

柊木沢さんはいつもにも増して楽しそうだった。

護は瑕那ちゃんを抱えていない右腕に警棒を握っている。

「アタシはこれと左腕だけで十分だ」

「ええー、こんなに持ってきたのに？」

その悲痛な叫びを護は真っ向から無視していた。

「カイ、この子を除いたらお前が一番丸腰なんだ。保険でもいいから、なんか持っとけ」

「サブマシンガンとかどうだ！？ただ引き金を引くだけでいいから楽だぞう！ダダダダーって！」

「……こいつ、キャラ変わってないか？」

「僕も護と同じ警棒でいいです」

「つまらん。大いにつまらん。せめて誰カリボルバーくらい持つてくれっての……」

唇を尖らせながらも、柊木沢さんは僕の方に向けて警棒を投げてよこした。

恐ろしく静かだった。

それまでちらほらと見えていた人影もない。

まるでここだけが、大型消音装置に守られているようだった。

「警備員もいないな」

柊木沢さんはガラス越しに目を細める。

「どうでもいいから早く入ろうぜ」

「おう。待つてろよ、俺が今この新型オートライフルで」

しかし半円型の自動ドアは護が手を触れた瞬間、自然と左右に開かれた。

「……へえ」

「どうやらお招きいただいてるみたいだね」

「扉を粉々にする手間が省けて良かったじゃねえか」

僕の言葉に護が肩を竦める。

対する柊木沢さんは口にこそ出さなかったものの、些か不満そうだった。

左右の肩に銃をぶら下げた柊木沢さんを筆頭に、護と瑕那ちゃん、その後ろに僕が続く。

薄暗いホールにも誰の姿もなかった。

しかし僕たちが入った瞬間、

「な、」

ガラガラ

激しい機械音がして、入り口には重厚なシャッターが下りていた。

「まったく、見事な手際だな」

「行きは良いよい—— 帰りは怖い、ってやつか？」

「まったくだ」

無駄にシャッターを蹴り飛ばしていた柊木沢さんは、頭上にある力

メラの一つに中指を突き立てた。

「それにしても、本当にアタシたちが来るのを予測してたとはな。これもその教祖って奴の力なのか？」

「多分ね」

僕は短く肯定する。

「じゃあ、行く先々に様々なトラップが、ってことか？」

「大歓迎じゃねえか」

柊木沢さんはいつの間にはめたのか、黒いフィンガーグラブの両手をぽきぽきと鳴らしている。

「片っ端からぶっ飛ばしてやるよ！」

「…… 血の気の多い奴だな」

意気揚々とエレベーターに向かう柊木沢さんの背中に、自分の事は棚に上げた護が呟いた。

「まあ何にせよ、あんまり時間は無いがな」

瑕那ちゃんは確実に弱っていた。

それが何によるものかは分からなかったけれど、衰弱のペースが異様に速い。

アウトサイダーズ

<傍観者>本部に居たときはまだ会話もできていたというのに、最早口を開く気力すら残っていないようだった。

「とりあえず、前に進むぞ」

硬い声で促すと、護は先を急いだ。

僕はその後ろ姿を追いかけてながら、確実にあの少年の視線を感じていた。

エレベーターは通常通りに作動した。

全員が乗り込んだ後、最上階のパネルを押して扉を閉める。
そしてそれは何の抵抗もなく緩やかな上昇を始める。

「あーどうしよー、こんな重装備で来たのに結局使いませんでした
ってなったら」

「それならそれでいいじゃねえか？それよりアタシが心配なのは、
頂上に着いたら警察がずらっと並んでるとか、狙撃手に狙い打たれ
るとかそういうことだ」

「そんなことになってこそ俺の出番だろうがっ！」
「何でそんなに楽しそうなんだ、お前は」

そんな二人の会話を、僕はエレベーターの後ろに寄りかかって聞い
ていた。

胸が鈍く痛む。

まるで鉛の塊りを飲み込んだような気分だった。
耳元で血脈が遠い潮騒のような音を立てて流れていく。

ふと半透明な鉄の壁に、“彼”の姿が映っていた。

『 気をつけたほうがいい 』

それは、

『 ——— 来るぞ 』

短い警告だった。

がく、ん

エレベーターは二十三階で唐突に止まった。

衝動で、柊木沢さんと護は前倒しに傾く。

それとタイミングを合わせるように、扉が開かれた。

「護、柊木沢さんっ」

転がり出た二人は素早く形勢を立て直した。

柊木沢さんは銃を構えつつ、護は瑕那ちゃんの頭部を庇いながら立ち上がる。

が、

「…… 何だお前ら」

暗がりの中に人集り^{だか}が出来ていた。

白い病院着を着込んだような彼らは、エレベーターの周りを取り囲むように隙間無く並んでいた。

虚ろで澀んだ瞳だった。

ぼんやりと浮かび上がった顔に表情はない。

誰もが唇を細やかに震わせて、何かを口走っている。

「異端者」「異端者」

「異端者」「異端だ」「異端者だ」

「異端は排除」「異端は排除」「異端は排除」

「異端」「異端」「異端」「異端」

「排除」「排除」

「排除」「排除」「異端排除」「異端」「異端」「排除」

その眩きはやがて輪唱のように僕たちを包み、
そして――

「排除排除異端排除――排除！」

人の波は唐突に襲い掛かってきた。

「――くそっ！」

柊木沢さんが退路を確保しようと、手当たり次第に銃身で殴りつける。

しかし、いくら掻き分けても人は次から次へと現れた。

そこにはかくるく三百人を超える数の人が、互いを気遣う様子も見せず、ただ柊木沢さんたちに向かってその両腕を伸ばしていた。

「っ、扉が、」

エレベーターが自動的に閉まっていく。

いくら“開”のボタンを押しても、まったく反応がなかった。

「柊木沢さん！護っ！」

どういいうわけか黒い人集りは、僕の方にだけ近づいて来ようとした。
かった。

『あいつが会いたがっているのは、お前だけのようだな』

“彼” の声がする。

でもそんなことでは意味がなかった。

瑕那ちゃんを連れて行かなければ、多分彼女は――

「―― カイ！」

死体集る蛆虫を思わせる人の山の中で、護が声を張り上げる。

「カイ、受け取れっ！」

護は左腕を思い切り振りかぶって、人々の頭上から僕に向けて瑕那ちゃんの体を投げつけた。

「っ――！」

飛来してきた体を正面から抱きとめる。

背骨は軋み、腕は悲鳴を上げ、喉は圧迫されたけれど、瑕那ちゃんに掛かる負担は緩和できた。

もはや二人が滑り込めるほどの隙間は残っていなかった。

僕は扉の間に両手をかけ、力を籠めて押し広げようとする。

「行けっ！」

柊木沢さんが叫んだ。

まるでゾンビのように徘徊する人々は、その矛先を僕たちに向けようとしていた。

あの少年にとって“異物”となる瑕那ちゃんを取り込んだからだろうか。

迫ってくる人の背中を、渦の中から這い出してきた護が蹴り飛ばす。

「早く行けっ！お前が――」

その先は扉の向こう側に消えた。

申し合わせたようにエレベーターが上昇を再開する。

銃声が、聞こえたような気がした。

*

「瑕那ちゃん、大丈夫？」

エレベーターの明かりの下、瑕那ちゃんは両足を投げ出したまま、ぴくりとも動かない。

「瑕那ちゃん、聞こえる？」

返事はなかった。

僕はしゃがみ込んでその口元に手を当てる。

確かに呼吸はしていたけれど、それは虫の息だった。

だらりと伸ばされた手首を掴む。やはり脈拍も弱く、そして頼りない。

僕は瑕那ちゃんの横に腰を落とした。

階下に残してきた二人の事を想う。

多分、彼らなら大丈夫だろう。

終木沢さんや護が何かに圧倒される姿なんて想像もできなかった。

問題は僕たちの方だ。

エレベーターは三十階を順調に通過し、四十階を昇り始めている。

最上階は五十五階。

これから僕はあの少年に会うことになるだろう。
そしてどうにか話をつけて瑕那ちゃんを元に戻してもらうか、それ
と同様の処置を施してもらうしかない。

それは、とてつもなく途方も無い話だと思った。

『 そう思ふのなら、俺と代われ 』

“ 彼 ” が境界線越しに手を差し伸べていた。

『 俺がその救世主気取りの奴を何とかしてやろう 』

一瞬だけ躊躇^{ためら}って、僕は首を振った。
それでは駄目なのだ。

“ 彼 ” のやり方では、根本的な問題が解決しない。
何故なら “ 彼 ” は瑕那ちゃんのことなど、どうでもいいと認識
していたからだ。

『 相変わらず頭の固い奴だな —— どうなっても知らんからな 』

そう言つと “ 彼 ” は、煙のように消えてしまった。

がく、ん

「 つ、
」

再びの衝撃。

電光板は四十九階を指している。

僕は立ち上がって幾つかのボタンを押してみた。

「まさか」

はっとして扉を見た。

しかしそれが開く気配はない。

そのかわり、動き出すこともなかった。

どれだけそこに停滞していたのだろう。

生憎、時間を確認できるものは持ち合わせていなかった。

瑕那ちゃんの口からひゅーひゅーと、細い呼吸の音が漏れていた。その額に手を翳してみる。

湿った素肌は、驚くほど冷たかった。

「せん、ばい？」

瑕那ちゃんが濁った視線をこちらに向ける。

そして弱々しい仕草で、僕の手を取った。

途端、

瑕那ちゃんの輪郭が歪む。

僕の内から掌を通して何かが注ぎ込まれるのを感じた。

これは僕の所業ではない、

恐らくは――

「先輩、私ね――結局、柊木沢さんに言えませんでした」

瑕那ちゃんは、不自然に血色の良くなった顔で残念そうに呟いた。

「あーあ、あんなにお洒落も頑張って、勉強もしたのにな」

「瑕那、ちゃん」

「でもね、不思議と後悔はないんですよ」

何を言おうとしているのだろうか。

目の前の瑕那ちゃんは、まるでいつもと変わらない。

それが、それこそが今は有り得ないくらい異質だった。

「私、ちよつとの間でしたけど、結構いろんなことがわかるようになってたんです。私の体のこととか、三七三さんのやってることとか。

あ、あといつもより体も軽かったんです。

本当は内緒にしてたんですけど、いつもどこか気だるくて、お腹に違和感がある感じだったんですよ。でもそれもなくって、私、ああ健康なんだな、って。本当に少しの間でしたけど私、どこか特別でした。だから、」

瑕那ちゃんは天井を仰ぐ。

まるで全ての物を愛しむような眼差しで。

「だから後悔とかはないです。楽しい人生でした。特にここ最近、先輩や三七三さんや柊木沢さんに出会えて、とても、とても楽しかったです。悪いことが全部帳消しになってしまうような、そんな日

々でした」

「どうして」

どうして今。

何故、僕に。

そんなことを言うのだろうか。

それではまるで。

これではまるで。

「先輩、私—— 幸せでしたよ？」

囁いて、

微笑んで、

そして僕の頬にそっと触れる。

「だから、もういいんです」

「—— 瑕那ちゃん」

「もう、いい んです よ。」

だらり、と。

伸ばされた瑕那ちゃんの腕が、だらりと力なく垂れた。

「瑕那、ちゃん？」

僕はその硬くなった体を揺すった。

エレベーターが再び動き出していた。

僕は“彼”を探す。

しかしその姿はどこにも見えない。

「さっきのは君だろう?」

僕は声にする必要の無い問いを口にしていた。

「君が、瑕那ちゃんに何かをしたんだろう?」

『最後の別れをさせてやろうと思ってな』

“彼”は僕の中から答えた。

反論を組み立てる前に浮上が止まり、目の前の扉が開いた。

そこはガラス張りの部屋だった。

小さな家がすっぽりと入ってしまうほどの広さ。

高い天井。どこまでも続く冷たい床。

そして一番奥には玉座のような椅子が一脚。

窓から注ぎ込む夜景の光の他に、それらを照らし出すものはなかった。

「ようこそ」

薄暗がりの中からあの少年と、そして見覚えのある女性が歩いてき

た。

例の体験会で最初の語り部を務めた女性だった。

あの時とは違い、ブルーグレーのスカートスーツと眼鏡を着用している。

「いつまでその中にいるのですか？どうぞ、お入りください」

両足に力が入らない。

僕は瑕那ちゃんの体を引きずるように持ち上げながら、冷え切ったガラスの鋭さを靴越しに感じた。

少年との距離は二十メートルほどだろうか。

目線は僕の方が高いというのに、壇上から見下ろされているような気分だった。

肩で支えていた瑕那ちゃんの体をゆつくりと床へ横たえた。

だらり、と抵抗の無い小さな体。

「それ も連れて来たんですね」

感情なく吐き捨てられた言葉。

少年が瑕那ちゃんに意識を割いていたのは、ほんの刹那のことだった。

「またお会いできると思っていましたよ」

僕に注がれる微笑みは対照的に、春の日差しを思わせる暖かさ。

それを横目で見ていた女性が、ほんの僅かに眉を顰めた。

「―― アカサキ」

「…… はい」

「あなたは先に出ていてください。ここからは彼とわたしだけの話ですから」

「それは、」

名を呼ばれた女性は少年に問いかけるような視線を投げかける。

しかし少しの間を置いた後、

「…… 分かりました。外で待たせていただきます」
一礼をまじえ呟くと、僕の横を足早に通り過ぎ、エレベーターの中に消えていった。

「さて、これでやっと二人きりになれましたね」

少年は誘うように手招いた。
それを、僕は拒絶する。

「まだ瑕那ちゃんが、ここにいます」

僕という言葉に少年は困ったように首を傾げる。
そして、瑕那ちゃんを真っ直ぐに指差した。

「だってそれ —— もう死んでいますから」

瑕那ちゃんは動かなかった。

僕も、動けなかった。

硬直。

瑕那ちゃんは、
瑕那ちゃんが —— 死んでいた。

まるで眠っているかのように安らかな表情だった。

「そんなことよりも、わたしはあなたに会いたかった」

いつのまにか少年が目の前まで迫っていた。
そして腕を広げる。

息子を受け入れる父親のように。

僕はその状況下でも、まだ動けずにいた。

眼球は凍りついたように瑕那ちゃんを視界に捕らえ続けている。

「わたしは、あなたの 中 が見たかった」

少年の腕が僕の背中に回される。

それは柔らかくて、温かった。

少しずつ、

少しずつ、少年が僕の中を覗き込む。

生温かい水が体の隅々に滲み渡っていくような感覚。

毛穴という毛穴が開かれ、過去から未来までも監視されているような錯覚。

それは何かを探している。

なにか。

それは――箱 を、探している。

体がびくりと抵抗を試みる。

けれど、全てがもう、遅い。

「ありましたね」

少年は嬉しそうに呟く。

いつの間にか僕は彼と同じ場所にいた。

ここは、多分——僕の中。

少年はその手の中にあの小さな箱を抱いている。

改めて見ると、それはずいぶんとボロボロになっていた。

ぴきぴき

ぴきぴき、と

亀裂の走る音がまるで胎動のよう。

——ドウシタノ？

いつかの声が聞こえてきた。

それは僕の中に響いているようだ。

しかし少年は気づかない。

少年は、その白い箱に夢中だった。

振って、触って、撫でて、齧って——それは本来の姿同様、まるで子供のようにだった。

アケラレテ シマウヨ？

カレハ、アレヲ アケヨウト シテイル

僕にはどうすることもできなかった。

胸が、痛い。

ただ、痛い。

「
」 ガ オワッテ

「
」 ガ ハジマル

少年の手が、箱の蓋に掛かる。

捻じ曲がる概念。

閉じられる精神。

湧き上がる感情。

祝詞のような言葉。

流れ行く幾千ものイメージ。

凶暴な闇。

誰かの叫ぶ声。

光。

光の渦。

光、
光、
光の渦。

『だから言った筈だ。代わっておけ、とな』

そして僕の意識は、

唐突に

強引に

“彼” によって

奪われ

た

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8519g/>

覚醒都市

2010年10月10日21時34分発行